目　次

柳の怪……三戸岡道夫……1
木枯らしの中の酒屋……山口健二……16
利狂人銭形控……大和禎人……30
「連載」小説　近藤富蔵（第二回）……金子正義……37
編集子のメモ……52

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

柳の怪

三戸岡道夫

〽夕暮れに
　流れ見わたす　大川の
　木の香にまじり　船唄の
　夜祭り恋し　深川あたり

風にのって、どこからか澄んだ木遣りの唄が聞えてくる。

夕焼けが華麗な扇のように大川の上にひろがり、真紅から紅花色へ、うす紫、藍色へと、晴れやかな変化を見せながら江戸の夕空は暮れていく。

常盤津のけいこ帰りのお袖はその大空の彩りを見上げながら、仙台堀川沿いを歩いていた。

常盤津のほかに、三味線、踊り、お茶、お花、お習字と、十六才の娘には盛り沢山の嫁入り準備のおけい事に通っていたが、しかし、どれにもあまり熱心ではなかった。いくらおけい事に精を出しても、春のかすみのように身体の内にもやもやしているものが、すっきりするわけではない。

深川へは江戸の材木商の大半が集っている。右手にひろがる川面は夕日を映してきらきら輝き、木場や堀川に蓄積されている材木からは、濃密な木の香が、樹木の生命力のあかしのように発散していた。

今日一日の仕事はもう終ったのであろう、ひろい貯木場には人影はなかった。だが、金色に輝く水面に、「川並み」と呼ばれる木遣り人夫がまだ一人、ひょい、ひょいと腰で調子をとりながら、浮かんだ丸太から丸太へと飛び移っているのが、黒い影絵のように見えた。

舟唄をうたいながら荷舟が大川を下っていく。

川に面して柳の大木が天を摩すように茂っていた。それは水神の柳と呼ばれている柳の巨木で、中天に拡った枝の茂みが凄いので、その下蔭は柳の葉照りで青い水底のように見えた。

そのときお袖は突然吸いつかれるように足をとめた。
その柳の蔭のうず高く積まれた材木の蔭に、一人の若者が休んでいたのである。
若者は材木を手鉤一丁で巧みにさばく川並みであったが、お袖の知らない顔だった。深川材木商小名木屋の一人娘のお袖は、家の商売柄、たいていの川並みの顔は見知っていた。渡り者らしい。
若者は十九か二十に見えた。
材木に腰掛けて煙草を吸っていた。
お袖が足を止めたのは、若者がはおっている絆天の色の強烈さに打たれたからだった。普通の川並みが着る絆天とはちがって、あざやかな朱色で、しかもその下には腹掛丼も股引きもない、褌一本という姿だった。
若者は髷の先をいなせにちょいと横にむけ、苦味走った横顔が、お袖のひいきの役者に似ている鮮やかな印象が、娘心をどきりとさせた。
若い獣のような眼が、色っぽく淫らなのがちょっと気にかかったが、その眼もとがふっとゆるんで、人なつっこい眼をお袖に向けたのである。
「お嬢さん、お吸いになりますかえ」
持っている煙管をさし出した。
お袖ははっと我に返って立ち去ろうとしたが、足の方は反対に若者の方に動いてしまい、気がついたときには材木の上に並んで腰をおろしてしまっていた。

若者は新しく煙草をつめ直し、口いっぱいに煙を吸いこむと、煙管を地面に捨て、身体をお袖の方にねじまげた。両手でお袖の顔をはさむようにすると、顔を近ずけ、煙草の煙をお袖の顔に、ふーっと吹きかけた。
お袖ははげしく、むせる。
若者は、う、ふ、ふ、ふ、と笑った。
お袖の身体はふるえた。しかしそれは興奮からというよりも、不安からだった。
深窓に育ったお袖には、まだ男女のことはよくわからない。絵草紙で見たり、けいこ事の友達から聞いたりはして、おおよその見当はついているのだが、実際の経験はない。
常盤津のおけいこの時は
　髪は乱れて
　閨の地獄に　落ちて……
などと平気で唄ってはいるのだが、これからその地獄が自分にも始まるのかもしれないと思うと、不安で胸がつぶれそうになる。
男の手はどんな工合に攻めてくるのだろうか。
それにわたしはどう反応すればいいのだろう。
だがそんなお袖の不安をよそに、若者の動きは具体的だった。
若者の片腕が背後からお袖を抱いたらしい。若者の身体の圧力がぐっと押しつけられてきたかと思うと、今までお袖の経験したことのない、恐ろしく、甘美な感じで肌がしびれてきた。
男の身体がこれほど熱いものだとは知らず、お袖は驚いた。
首筋に若者の息が当ると、お袖の全身に痙攣が走り、お袖の頭からは一切が消えた。
若者の顔がすばやくお袖の顔をおおうと、唇をしっかりと押えこんできた。強い煙草の味がお袖の口の中にひろがり、お袖は気を失ったように若者の胸に上半身を投げかけていた。
若者はもの慣れた手つきでお袖の帯を解くと、着物の前も迷わずにはだけた。そして果物の皮でもむくように、くるりとお袖の着物をはぎ取ると、白く、つややかなお袖の太股を、毛むくじゃらの両足ではさみつけた。素肌に当る脛毛のざらついた触感は、お袖の肌を戦慄させた。
若者が両肩をゆするようにして絆天を脱ぐと、お袖はその背中に
「あっ……」
と驚いた。
いちめんの刺青が彫られていた。
蜘蛛の刺青である。
巨大な鬼蜘蛛が若者の背中を抱くようにして、凄い青さで彫られていた。
だがその蜘蛛は、ただの蜘蛛ではなかった。蜘蛛の頭が、髪をふり乱した男の首という、奇怪な図柄。
首が人間で、胴体が蜘蛛。
男の首は髻を切ったざんばら髪で、眼と口とを大きく開いている。眼もとは怨みを含んだ凄い眼ざしで、顔は真青なので、それは生首のように見えた。かっと開いた唇だけが、血を吸ったように赤い。
それが背中いちめんの柳の枝の網模様の上に、八本の長い肢を奇怪な形にのばし、その先端は背中ばかりでなく、肩や横腹をこえて、胸や腹の方にまでも触手をのばしていたので、お袖までもが蜘蛛の肢に包まれているような錯覚におそわれたのである。
お袖はうつろな眼を地面に落した。
足許にはさっき若者が脱ぎすてた絆天が落ち、その上に柳の病葉が二、三枚、散っていた。見るともなしにその絆天の朱色のあざやかさに眼を奪われていると、その絆天の背にも、若者の背と同じ図柄の蜘蛛が染め抜かれているではないか。
頭が男の生首で、胴が鬼蜘蛛。
奇怪な巨大な蜘蛛が、若者の背と、絆天の背と、二匹いるのである。
「なんだか気が変になりそうだわ」
お袖の身体は蛇のように若者の身体にからんでいった。すると突然若者は狂ったように、はげしく身体を動かしはじめた。

遠くで材木が音をたてて崩れた。
お袖はその音を、若者の胸で、こだまのように聞いた。
……
いつか、夕もやがただよい始めていた。
深川の民家や川筋は、桔梗色の夕闇につつまれはじめ、灯が、ぽつり、ぽつり、川面に影を映しはじめていた。
二人はゆっくりと身体を起した。
空から降りそそぐように茂った柳の下蔭にも夕闇がせまり、枝先が二人の背にざわざわと触れた。
若者は地面から絆天を拾いあげると、お袖の方につき出し、
「これ、持っていきな」
「えっ、いいんですか」
「その代わり、おいらもおめえの長襦絆をもらっていくよ」
「わたしはお袖って言うの」
「おれの名前かい？」
「ええ」
「そんなもの、どうだって、いいじゃないか」
「だって、呼ぶとき困るもの」
「仇助って、人は言ってくれる」
「変った名前ね」
「そうかい」
「ちょっと呼んでみようかしら、仇助さーん……」
「ふ、ふ、ふ……」
「また逢える？」
「おいら流れ者さ。いつ、どこへ流れていくか、わかっちゃいねえよ」
「どこに泊っているの」
「なんて言ったかなあ、あの川っぷちの、川宿さ。そうだ、川波屋とか言ったかな」
夕風が涼しくなっていた。
さっきあれほど燃えていた夕焼空も、すっかり深い夜空に変色して、柳の梢には星が光っていた。
「じゃ、あばよ。逢えるときがあったらまた逢おう」
若者は肩にお袖の長襦絆をひっかけると、仙台堀川を大川に向って歩いていった。その後姿を見送りながらお袖も
「いそいで帰らないと、おっかさんに叱られる」
我に返ると、若者とは反対の方角にかけ出した。
柳の巨木の根もとには小さな祠が建っていた。地元の人々はそれを柳の水神と呼んでいる。
柳の水神の起源には一つの伝説があった。
いつの頃なのか定かではないが、ならず者がいた。若さを武器に、乱暴、悪事の限りをつくし、若い娘を次々と犯して、近所で恐れられていた。
そこで近々の人々が力をあわせて若者を捕え、柳の大木に縛りつけた。しかしその縛り方が、若者の手足を五寸釘でめった打ちして柳の幹に磔にするというやり方でそのむごたらしさに人々は眼をそむけ、若者は手足から血をたれ流し、三日三晩苦しみもがき、人々を呪って息が絶えたという。
それからしばらくして、この柳に近い川べりで、若い娘が水死するという惨事がたてつづけに起きた。柳の近くを若い娘が歩くと、水の底から誰かに呼びこまれて、水の中に引きこまれるという。それで若者の死をあわれんだ人々が集って、小さな祠を建てて祀ったのが柳の水神の由来であった。
その柳の水神の川べりを、先ほどから乳母のおまきは半狂乱になって、お袖を探していた。
「お嬢さま――」
「お袖さま――」
しかし返事はない。
常盤津のおけいからの帰り、柳の水神の近くまで来たとき、まるで神隠しにあったように、お袖が姿を消したのである。あまり晴れやかに彩られた夕焼空にちょっと気をとられていた一瞬の出来事であった。
お伴をしていたおまきはまっ青になった。大切なお嬢さまに、万が一のことがあったらどうしよう。おまきは仙台堀川のほとりを走りまわり、川の中まで覗いてみたのだが、お袖の姿はない。
だがそのとき柳の水神の方から歩いてくるお袖の姿が眼に入り
「まあ、お嬢さま…、いったい、どこに？」
「……」
「水神さまの方もくまなくお探ししたのに…、でも、まあ、よかった、ご無事で」
おまきは安堵のあまり泣きださんばかりになり、お袖を抱きかかえるようにして、家に帰った。
しかしその夜からおまきは高い熱を出して寝こんでしまった。
その日からお袖はすっかりあの若者のとりこになってしまったのである。
一夜あけるともうお袖の胸には、仇助と蜘蛛の刺青への願いが、突きあげるように起ってきた。
夕方になると、じっとしていられなかった。ふらふらと家を出ると、柳の水神へ行ってみた。
しかし仇助はいなかった。
しばらく昨日の材木に腰をおろして待ってみたが、仇助は来ない。昨日のことは嘘のようだった。でもあきらめきれずに、日が暮れるまで待ってみたが、やはり仇助は来ない。お袖はあきらめて家に帰った。

「へえ。お嬢さまのおっしゃることなら、なんでも、この権蔵、いたしやす。権蔵の身体はお嬢さまに差し上げたものですから」
「蜘蛛の刺青だよ」
「へえ」
「この絆天の蜘蛛と同じ蜘蛛」
「へえ」
「首が人間で、胴体は蜘蛛」
「へえ」
「それも若い男の生首で、蜘蛛は鬼蜘蛛」
「かしこまりました」

権蔵はその翌日から浅草の彫り師のところへ通うことになった。
深川にも彫り師は何人も居たが、寄怪な蜘蛛の刺青である、変なうわさが立ってもいけないと、遠い彫り師を選んだのである。
浅草観音さまの参道に近いせまい路地を横へ入ると、腰高障子に
（彫安）
と書いてある。ひっそりとしているので留守かと思ったが、中に入ると、土間に散らばった下駄や雪駄の数で、客のいることがわかった。

うす暗い四畳半の部屋が仕事場で、三人の客がいた。もろ肌ぬいだ彫り師は晒しの白木綿を胸高に巻き、一人の客にのしかかるように片膝をついて、針を刺している最中だった。
硯、筆、朱溶き皿、紅殻、下絵の綴じ込み、血や墨をふんだんに吸いこんだ布、そして針…、そんなものが雑然と彫り師のまわりに落花のように散らばっていた。
その中で
シュッ シュッ シュッ シュッ
すばやく肌を刺す針の音が、規則正しく、だが肉感的に伝わってくる。
針の鋭い痛みに堪える肌からふき出る汗、血の匂い、そして墨や朱、肌を消毒する焼酎の匂いなどがまざりあって、異様な熱気が部屋の中にこもっている。
仕事に熱中している彫り師は、権蔵をふりむきもしない。権蔵は端の方にちょこんと坐って順番を待つことにした。
一人の客が終ると彫り師はその全身を熱湯で拭いた。客はくるくると縞の着物を身につけると、鳶の者のような腰つきで帰っていった。彫り師は一服し、次の客にとり掛った。そして最後の客が終るまで一刻ほど、権蔵はそうして待っていた。
やっと権蔵の番になると、彫り師は下絵の綴じ込みをめくりながら

「さて、どれになさるかな。児雷也、金時、瀧夜叉姫、鐘馗、般若、どれもお好み次第。最近流行の国芳などもいいねえ」
絵柄の相談から始った。
「実は図柄はもう決っているんで」
「そうかい、どんな？」
「蜘蛛はどうかと思ってね」
持ってきた絆天を彫り師の前にひろげ
「これと同じ図柄を」
彫り師の顔色が急に変った。
「これは駄目だ、いけないよ。蜘蛛は蜘蛛でも、頭が男の生首。彫れません」
「なぜ」
「これは忌み絵といってね、彫りの世界では禁じ絵になっている。この図柄は人の生命をちぢめるという。だからおよしになった方がいい」
「でも、どうしても、これを彫らなきゃならないんで」
哀願するような権蔵の表情に、彫り師は
「なにか深いわけがありそうだ。よし、思いきって彫りましょう。でもその前に水神さまのお祓いを受けてからでないと、いけねえからな」
彫り師は翌日、仙台堀川の柳の水神の祠に詣でて祈った。
「さて、これでわっちの方の用意はできましたから、思いきって彫りましょう。ですが、お客人の方に何が起きても、それはわっちの知らないことですからな」
権蔵は褌一本の裸になり、疊二帖に敷かれた白木綿の上にうつぶせになった。やがて鋭い痛みが背中を走っていく。
刺青はもちろん一日ではできない。
その日から権蔵は月に四度か五度という割合で、まじめに浅草へ通った。
筋彫りが終ると、ぬき彫り、薄墨ぼかし、毛彫りと、次第に権蔵の背中は彫りすすみ、一日ごとに背中の蜘蛛は形をあらわしてきた。
ついに最後の朱を入れる段階がくる。水銀を含んだ朱銀は、刺青の針のなかでも最も痛いといわれるが、権蔵は熱っぽく顔を上気させながら、甘美な激痛に堪えた。唇を軽く開き、眉根を寄せた表情には恍惚としたものがあった。
こうして蜘蛛の刺青の完成が近ずくにつれ、権蔵は次第に仇助に似てくるように思われて、お袖はうれしかった。
そんなある日、浅草から帰ってくると権蔵が
「お嬢さま、これを捕えてまいりました。あんまりきれいだったので」
一匹の蜘蛛をさし出した。
柳の枝に蜘蛛の巣をからめとり、その真中に蜘蛛が一

匹とまっていた。
それは大きな女郎蜘蛛で、胴体の背には金色の筋が三本あざやかな縞で光り、腹にも金色の斑点があった。四方に威を張った八本の肢の先は黒いギザギザの鋭さを誇り

「どこにいたの、そんな大きな蜘蛛」
「水神の柳ですよ。その枝に巣を張って……」
お袖は水神の柳の魔のようなみどりのしたたりを思い出し、もしかしたらこの蜘蛛はあの仇助の化身かもしれないと空想した。
するとお袖にはにわかにこの女郎蜘蛛への愛着が湧いてきて、部屋で飼うことにした。

それからというものお袖は蜘蛛の飼育に異常な熱意を傾けるようになった。
権蔵が浅草へ出掛ける日には必ず
「今日も大きい蜘蛛とってきておくれよ」
とせがむ。
だからわざわざ権蔵は、帰り途水神の柳まで廻り途をして蜘蛛を捕り、また天気のいい日には二人で蜘蛛探しに出掛けることもあって、蜘蛛はまたたくまにふえていった。
蜘蛛を捕えて家に帰ると、柳の枝を柱と壁の隙間に突きさしておく。しばらく蜘蛛はおとなしく木の枝にとまっているが、夕方が近ずいてくると巣を張りはじめる。暮れ六ツの鐘が聞えてくると、それを合図のように蜘蛛は口から糸を吐きはじめ、お袖はそれを夜更けまであかずに眺めるのである。
餌は蟬や蝶で、権蔵が捕えてきた。蜘蛛の巣に投げてやると、蜘蛛は尻から出した糸で獲物をぐるぐる巻きに縛りあげ、巣の隅へ運ぶと、ゆっくり時間をかけて食べる。
こうしてお袖の部屋には蜘蛛が十匹、二十匹と、またたくまにふえて、まるで化け物屋敷のようになっていった。
蜘蛛は次々と新しい巣を張り、古い巣は破れて襤褸のように壁からぶら下り、時にはお袖の着物の上にも巣を張ったが、お袖はどれも取り除こうとはしなかった。
そうこうしているうちに、蜘蛛は次第にお袖に慣れて、時にはお袖の肩や髪の上を平気で這うようになった。
そうした奇怪な部屋のなかで、お袖はときどき胸を押しはだけ、小蜘蛛を乳房の上に這わせて遊んでいることがあった。
蜘蛛は甘い乳房の匂いをしたうように、もぞもぞと顔を押しつけて、ふくよかな肌の上を動きまわる。
お袖は更にもう一匹の小蜘蛛を這わせる。そしてもう一匹、もう一匹と、十匹ばかりの小蜘蛛を乳房の上に密

集させると、小蜘蛛は乳房の先端や、腋に近い柔らかな方にまで動きまわるので、お袖の身体は密のようにとろけてしまう。その時
チクリ
蜘蛛の鋭い歯が乳房の先を噛んだのである。
「あっ……」
お袖の全身に戦慄が走る。
一匹が噛むと、それに煽動されたかのように、他の蜘蛛もいっせいに乳房に襲いかかり
チク　チク　チク
チク　チク　チク
小さく、細かな痛みは、まるで麻薬のようにお袖を恍惚境にさそいこむのであった。その恍惚のなかでお袖は仇助の幻とたわむれる。たまらなくなってお袖は
「仇助さーん」
指先に思わず力が入る。
プチン
小さな音とともに、指先がどろりと濡れた。蜘蛛の一匹を押しつぶしてしまったのである。
とたんに小蜘蛛たちは乳房の外へ逃げ散り、潰された蜘蛛だけが体液をはみ出したまま、乳房に痣のようにへばりついた。その蜘蛛の体液が発散する生臭い匂いは、なぜかあの日の仇助を想い出させた。
夏が暑さを増していた。
富岡八幡宮の夏祭りに、いなせな若者たちが御輿をかつぎ、大川をはさんで花火が夜空を彩った。
しかしお袖はそうした世間の動きにも関心がなく、ひたすら蜘蛛の飼育に熱中し、いつしか蚊帳の中にも蜘蛛を飼いはじめていた。
それと知らず権蔵が蚊帳を掃除しようとすると
「さわってはいけないわ、いけないよ。飼っているんだもの」
お袖に金切声で叱られた。
蚊帳はみどり色の麻で、天井の四隅に赤い布が縫いつけられ、そこに吊り手がついている。蜘蛛はその赤布に糸をひっかけたり、ときにはお袖の蒲団にも巣を張っている。蚊帳の中には蟬や蝶の死骸が散乱し、その間を蜘蛛の群が駆けまわるのは、まるで蜘蛛地獄のように見えた。
そうした蚊帳のなかでお袖は汗にまみれながら、蜘蛛の巣づくりを眺め、蜘蛛を身体に這わせていた。
それはそろそろ権蔵の刺青が完成する頃であった。背中に残った針のほてりをたのしむように権蔵が浅草から帰ってきて
「お嬢さま、ただいま…」
だが返事がない。
蚊帳の中を覗いてみると、権蔵は背すじが冷えるよう

な場面を目撃して、息をのんだ。
蚊帳の中で裸のお袖が、おびただしい蜘蛛の海のなかで、死んだように横たわっていたのである。
蚊帳の中のすべての蜘蛛がびっしりとお袖の裸にとりつくさまは、まるで密に群る蟻のようだった。お袖の裸身はそのために、うす黒く見えた。肌にとりついた蜘蛛の群はじっと動かない。だが、よく見ると、静かに流れる油のように緩慢に動きまわっていた。
肌の匂いを求めて蜘蛛たちは、乳房に盛りこぼれんばかりに群り、たえず、もぞもぞと動くので、お袖は、
「う、う、うーっ……」
身もだえして、全身を蛇のように動かした。
蜘蛛は時々こまかな歯で丸い乳首を噛むらしく、その度に
「うっ……」
とお袖は胸をのけぞらせて、乳房を左右にふるわせた。
その時、一番大きな蜘蛛が蚊帳の天井から、すーっと糸をのばして降りてきた。胴の太い縞が金色に光る。
女郎蜘蛛はお袖の乳房の中央に正確に着陸した。そして八本の鋭い肢で乳房のふくらみを抱きかかえた。黒い胡麻のように群っていた蜘蛛の群はいっせいに逃げ散り、大きな一匹だけが乳房の先端に、がきっとしがみついている。
お袖は半ば意識を失った。腰だけが切なげに、ぴくぴく動いていた。
お袖が死んだのは、それから三日ばかりたった日であった。
そしてその日は、権蔵の刺青が完成した日でもあった。彫り師の予言は的中したのである。お袖は十六才の短い生命を終えた。文政十一年八月五日のことであった。
小名木屋幸兵衛夫婦は泣き泣き一人娘の亡骸を深川の妙光寺に葬った。そしてお袖が大切にしていた蜘蛛の絆天も、同時に妙光寺に納めたのである。
お袖の葬儀が終ると、その深夜、権蔵は仙台堀川に身を投げて死んだ。
さて、時は流れて、翌年の八月五日のことである。
小名木屋夫婦は妙光寺へ墓参りに出掛けた。お袖の一周忌を迎えたからである。
だがちょうどその時、妙光寺ではある一つの葬式が行われていた。だが幸兵衛夫婦が何気なくその方角に眼をやったとき、顔から血の気が引いた。
祭壇に蜘蛛の図柄の絆天が供えられているではないか。絆天の色は燃えるような朱色で、絵図は蜘蛛。それも頭は男の生首で、胴は鬼蜘蛛。お袖の絆天にまぎれもなかった。

幸兵衛夫婦は葬式の終るのを待ちかねて、新佛の両親に会うことにした。両親は両国で酒問屋を営む柏屋半助夫婦で、死んだのは一人娘のおきのであった。
「あの絆天は死んだ娘がどこかの古着屋で見つけてきたものでございます。あざやかな朱色が気に入りまして、それに蜘蛛の染め柄が珍らしいというので…、蜘蛛の柄なんて気味が悪いからおよしと言ったのですが、娘はどこがどう気に入りましたのか、その絆天に大変な執心で、片時も肌からはなしたことはありませんでした……。すると二、三ヵ月たった頃でしょうか、娘の身体の工合が悪くなったのでございます。医者に見せても、何の病なのかよくわからない。そのうち蜘蛛を飼うと気が晴れるとか申して、部屋いっぱいに蜘蛛を飼っておりましたが、まもなく娘は亡くなりました…、年は十六才…、かわいい一人娘でしたが…。絆天はあれほど気に入っていたものですので、娘といっしょにお寺へお納めするのが一番供養になるのではないかと思いまして、こうして持ってまいったのでございます」
半助夫婦は亡くなった娘をしのんで、そのように語った。
一般の風習として、佛が生前に大事にしていたものを寺に納めるというのは、珍らしいことではない。そして受けとった寺では三十五日の法会がすむと、それを売り払うことになっている。昨年のお袖の蜘蛛の絆天を、妙光寺ではそうした慣習に従って売り払ったのにちがいない。それがどういう経路を通ってか、柏屋の一人娘おきのの眼にとまったのである。
それにしてもなんと不思議な因縁ですねえと話しあいながら、二組の夫婦は寺を引きあげた。
だが、またしても次の年、小名木屋夫婦は妙光寺でその絆天に逢ったのである。
月日も同じ、八月五日。
幸兵衛夫婦が再びお袖の命日に墓参りに行くと、またもや、永代橋の質屋中津屋朝次郎の娘の葬式が行われている最中であった。娘の名前は、お島。享年十六才の娘ざかり。
そして三たび、そこに蜘蛛の絆天を見て、幸兵衛夫婦は愕然とした。蜘蛛の絆天はお島の亡骸とともに妙光寺へ納められたのである。
話しを聞くと、こうだった。
昨年妙光寺に納められた絆天は、三十五日の法会の終了後、再び古着屋へ売り払われたのが、いつか流れ流れて中津屋へ質入され、そのまま中津屋に保管されたのであった。
それが娘のお島の眼にとまった。
お島は朱色のその絆天がひどく気に入って、父親にねだって自分のものにしたのである。

ところが間もなくお島は病の床に伏すようになる。何の病気なのかわからない。医者にみせると、どうやら心労による衰弱らしいという。

その頃からお島は蜘蛛の飼育に興味を持ちはじめ、死んだときは、蚊帳の中は蜘蛛だらけ、お島は全身蜘蛛にとりつかれて死んでいたという。

「なにかの祟りでしょうか」

「とにかく只事ではありませんね。十六になったばかりの娘が三人、三年もつづけて同じ日に亡くなるなんて」

「それもみんなあの蜘蛛の絆天に心を奪われた娘ばかり……」

小名木屋幸兵衛は蒼ざめた顔で

「これ以上この絆天を、このままにしておくわけにはいきません」

「そうです。なんとかしなければ」

「このままですと、また来年、十六の娘が死ぬことになりましょう」

「どうです。小名木屋、柏屋、中津屋の三家で、あの絆天の法要を営んでは…」

「なるほど、それはよいお考えです」

こうして三組の夫婦は妙光寺の住職に因縁話を打ちあけ、蜘蛛の絆天の供養が行われたのであった。

供養は月おくれの盂蘭盆の日ときまった。

当日になると、妙光寺の本堂では供養の読経が念入りに行なわれ、夜に入って絆天を精霊流しすることにした。

日が暮れると人々は手に手に精霊舟を持って、寺の裏を流れる仙台堀川のほとりに集った。あたりはとっぷり暮れて、闇である。月もない。星もない。

遠くにちらちら深川の人家の灯が見えるほかは、夏の闇だけがたちこめていた。

雨雲が低くたれ、雨気を含んだ夜風が、ざわざわと、寺の裏庭や、川岸に茂る草の葉を不気味にゆすった。

その闇のなかで人々はこれから始まる精霊流しを、いくぶん高ぶった気持で待っていた。

本堂に陰々とひびく読経の声が止ったかと思うと、住職が裏庭に降りてきた。片手に燈明を持ち、闇のなかを歩いてくる。

その燈明の灯が赤い点のように動いて、近ずいてくるのを、人々は息を殺して見守っていた。

やがて住職が川岸につくと、再び読経が始まり、読経が最高潮に達したとき、最初の灯が住職の手によって精霊舟の燈籠に灯された。

赤く灯の入った燈籠は、川面の闇る金色に光らせて流れていった。第二、第三の燈籠にも灯が入り、それに続く。今まで闇だった川面には、たちまち灯の花が咲き輝き

「ああ、きれい」

人々も我先にと住職の手から灯をもらうと燈籠に点火した。

小名木屋、柏屋、中津屋の三夫婦も、ていねいな手つきで精霊舟を流した。

三つの燈籠には

お袖之霊
おきの之霊
お島之霊

という文字が灯に浮きあがって見える。

そして三つの精霊舟の舟底には、蜘蛛の絆天がしっかりと結びつけられていた。

なむあみだぶつ
なむあみだぶつ
なむあみだぶつ

蜘蛛の絆天は燈籠の灯に、ゆらゆら、ゆれながら、精霊舟に誘導されて、ゆっくり川下へと流れていく。

なむあみだぶつ
なむあみだぶつ
なむあみだぶつ

やがてほとんどの燈籠に灯が入って、いまが精霊流しのまっ最中。

切子燈籠、打掛燈籠、舟燈籠、花燈籠、絵燈籠、墓燈籠など、無数とも思われる精霊舟、花舟が一列に並んで川の中心を流れていく美しさは、まるで闇に流れる光の帯のようで、この世のものとは思えない。これこそ、この世と、あの世を結ぶ、縁の帯ではあるまいか。

なむあみだぶつ
なむあみだぶつ

……

だがその時である。黒々と天を摩す水神の柳の蔭に、一人の男がおどろに立って、じっと精霊舟の流れを見つめていた。

男の姿はいま川からあがってきたばかりのように、どっぷり濡れている。男は身動きもせず、憑かれたように

お袖之霊
おきの之霊
お島之霊

と書いた精霊舟を見つめている。そして水の中に、ひらひらする絆天を見ると

「ああ、流れていく…、流れていってしまう」

水のような声でそう言った。

それは仇助に似ているようにも思われたし、また権蔵のようにも思われた。しかし誰もその姿を見た者はいなかったから、それが誰なのかは、わからなかった。

精霊舟はどこまでも流れていく。

こうして深川の精霊流しの夜は更けていったのである。

木枯らしの中の酒屋

山口健二

「センセ、堅井さん、知ってるでしょ……死んだんですヨ」

お華さんは、Yさんの目の前に近よって、電話や電話帖、受取り書や、通い帖がばらばら散らかした風に投げ出されている机を、腰のあたりに当てて、ぐいと身体をそらして、いっそ有態に言えば、腹部をつき出して云った。Yさんには、それは好もしいポーズと言える。そう言う姿勢をとっているオンナのお腹をなでることは、ごく自然に出来るからである。多分彼女にしてみれば、飲み客に酒をこぼさない程度に満々と、又客によっては「半分だけ」なんて注文をつける飲み助からの緊張から解き放されたわずかなリラックスめいた気分のあらわれであるかも知れないが、オンナと言うものは複雑な心理状態を身体にあらわすものであるから、あるいはYさんのそう言う気分を誘発しようとしていると見ても全然見当はずれだとは言い切れない。現に一ケ月程度前に、かの女は、その姿勢で小姑カメが八十四才になって店の用には全くたたないながら、きまった時間がくると店に出たがるのをぐちったついでに言ったことでした。

「この分だと、あたしや、どうなるんだろ、センセ、あたしも、もうすぐ五十ヨ」

これは、Yさんの気分を充分挑発する言辞でありました。そこですかさずYさんは言ったのです。

「お華さん、五十、五十って言うなよ、五十なんて、オレから見りゃいたずらざかりって年だよ、オレは、五十から六十までの間、一番ナニの数が多かったんだぜ」

お華さんは、Yさんの言う〝ナニ〟の意味を、どうとったかわからないが、自分のポーズがYさんを刺戟した効果を見とどけたらしく、かの女へのお腹へのびて来たYさんの手をさける様に、ツと机から腰をはなして、金銭登録機の前へと移動した。俗に、年よりの早耳と言うことが言われる。カメは、その時、部屋の食卓の前に坐って、お貰い物のお煎餅をぼりぼりかじっていたが、〝ヨイショ〟と云うかけ声を発して店に下りて来て、嫁にともなくYさんにともなく、丁度そのなかごろに向いて放言したのであります。

「あたしが店に下りるのは、若いお客さんと話したいからよ。ねえセンセ」

そして、今度は正式にYさんの方に向って言いわけの口調で言った。

「こんな冗談でも言わなけりゃ、辛気臭いったら……」

これは、あきらかにお華さんに対する挑戦と云うものであって、今迄三十年来、Yさんのさいたま屋を材料にした小説めいたものの種になって来ている。

Yさんは、今夕、この店に入って来て、いつもの椅子に腰をおろすや、お華さんが口走ったことを思い出してかの女の方へ言った。何しろ、Yさんは、お華さんに態よく逃げられたという思いをしていたからであります。

「ママよ、さっきの堅井さんとか言った人の話、途中までだったよ」

「センセ堅井さん知らないかな……あのほら、ガッチリして……」

此処でかの女は、両手を肩の高さまであげて四角い形を描いてつづけた。

「海軍の軍人だって言ってた人よ」

Yさんの頭は、此処へ飲みに来る常連を次ぎ次ぎと追いかけていた。

「あのう……戦艦赤城に乗ってたちゅう人か？」

「そうよ、思い出した？死んだんだって、それも全然突然なのよ、うちでも飲んで出ていって、自分んちへ帰る途中、谷中の墓地ん中で倒れたんだって、うち以外でも何杯か飲む人らしいけど……」

Yさんにとっても、これはドキッとする話である。二三日前も、偶然Yさんは堅井さんと肩を並べて二十米程一諸に歩いたからである。その時の会話の端し切れさえ未だ記憶にある。Yさんは足と心の臓が弱っているので二十米一諸に歩くのさえ楽でなかった、Yさんは敬意をこめて言ったのです。

「あなたは元気だな、ボクはついて行けないから、どうぞお先きして下さい」

「そうですか……わたしだってもう此の頃は相当参っていますよ、大正の初めですからね……」

大正の初めとは、生れた年のことらしい。そうすればYさんより、そう大して先きに生れたわけではない。此処で会話はプツンと切れて、かれは酒に酔った風はみじんもなく、大股に、スタスタと云った足取りで歩き去ったのである。

大体、Yさんは、好き嫌いの気持ちが激しい。さいたま屋へ飲みに来る常連の中でも、坂下のミルク屋のおや

じには顔をそむけることにしている。かれは大ていコップ一杯をきゅっと音立てて呑み干し、そのコップに水道の水をなみなみついで、これも又一気に呑み干してザラッとワンコップ分の銭を金銭登録器のわきにならべて立ち去ります。これだけの行いならYさんの常日頃云うところの〝立ちのみ優等生〟ということになるのですが、この男が一杯の酒のあとに、水道の水を飲むのが曲者の証拠であります。かれは、酒の口中にのこる臭いを水道の水で消す必要があるらしい。かれが気をつかう相手は何者だろうか、ミルク屋が酒の臭いをただよわしていてはまずいと考えてのことであろうか。かれは一日に何度も同じ呑み方で四五回さいたま屋に出入りする。だからどうやらミルク屋と云う商売とは関係はなさそうだ。女房にうるさくとがめられるのをさけるためであろう。だからと云って、それだけでYさんはかれを嫌うわけではない。かれは一週間に一度ぐらい、〝立ち飲み優等生〟の飲み方からいつ脱するのであります。立てつづけに二杯ほど、ぐっと飲んで、三杯目は、ダンボール箱に腰をおろして、隣、近所の飲み助と議論を初めるのである。そう云う時は、多分女房不在なのであろう。その議論と云うのが、今朝の新聞とか、夕べの新聞に出ていた記事が話題である。まあそれは、それでもいい。ただかれは、相手を誰かれをえらばず、「お前はそう言うけれど……」とか「オ前らの考えは……」とかオマエ呼ばわりする。Yさんは、このミルク屋のおやじに、お前と呼ばれては、多分腹がたつだろうと思って、かれの言動には、一切関係しないでいる。もう一人、Yさんが心底から嫌いな常連がいる。かれは、自衛隊で少佐で大隊長だったと放言してから、Yさんは、かれを無視することにしている。年の頃、六十三、四だと言う。そして旧日本軍隊に十六才で特別に志願したから、軍隊のことは全部体験していると広言し、その上酒の上で話し相手になる男にコンコンと人生のことで意見をしたりする。Yさんは、七十三才、旧日本軍のポツダム中尉であり、当時の大隊長の少佐と同い年である。誰か外の客が、Yさんの四十五年前の、そんな身分のことを、この自衛隊上りに洩したらしい。その夕方、かれは引き上げる時にYさんの前に立って、酔っぱらいが親愛の心を示すためによくやる握手を求めて手を出したことがあった。Yさんの目には、かれの手は他の働く者たちとちがって、少しも節くれ立ってはいないが、何か不潔なぬるぬるした感じがあり、いっそいやらしい感じをかき立てた、Yさんは、素直に言った。

「キミと握手をする気はない。目下小生は全然別のことを考えふけっているところだ」

かれは、いさぎよく手を引っこめ、その手をポケットに仕舞い込んで、右肩を一寸そびやかして「フン」と言った。

こう云うヒト嫌いが、主カン的ではなかろうかとYさんは気にかかって、ある日、あるじの常夫君に

「オレはどう云うわけか、あのミルク屋のおやじと、自衛隊が大きらいなんだ」

と告白して、かれの意見を求めた。大体、熟練した酒屋のあるじが、客のことを、あれこれ他の客に言うことは商売上のご法度であろうことは、Yさんにも想像出来る。でも常夫君はミルク屋のおやじについては、言ったのです。

「あゝ、あれですか、近所でも鼻つまみ者らしいですよ」

そして、自衛隊上りについては、次のように批評した。

「酔わない時には、結構ヤサシイんですよ、酔うと一寸うるさいですがネ」

もうそれでYさんは、満足でありました。Yさんは、そこで決定的なことを申したのでございます。

「ありゃ六十三か四か知らないが、ボクが戦地にいた時、たしかにそんな子供の兵隊を見かけたヨ、可愛そうな感じだったナ。何で志願などしたのかボクには全くわからなかった。そう言う子供兵隊が、戦争のどこで役に立ったのやら……それでもなあ……ボクの居た島から、サイパンやレイテへ爆撃に行く呑龍は夜中に十機ぐらい編隊で出かけて、翌朝六、七機になってヨレヨレな恰好で帰って来るんだ。その呑龍の最後尾に、皮襷で機体に従横に身体をしばりつけて、一丁の二十ミリと覚しき機関砲を構えた兵隊がいたっけ、二十を余り出ていない若者たちだったが、みんな敗戦までにゃ、死んだんだろ、自衛隊のヤツ、志願したか、どこで戦争したんか知らねえが、生きて帰ってナマイキ言うな」

言っているうちに、酔ったせいもあって、Yさんは涙声になり、鼻をかんだ、Yさんは滅多に戦争の話を人様にしない。すれば泣けて仕方ないのであります。深い哀悼の気分をどうしようもないのでありましょう。

Yさんが、小姑カメと嫁のお華の、それとなしの丁丁発止のたたかいに顔そむけて、ちゅう、ちゅうと焼酎のトマトジュース割を吸い上げているので、折角〝若いお客〟と話をしたくて店におりて来たカメも、辛気臭くなって、机の上の帳面や、書きつけをそろえたり、ついでに、小縁のあたりに乱暴に履き捨てられている孫の靴などをそろえて、もう一度〝どっこいしょ〟と言って部屋へ上った。Yさんにしてみれば、カメが心の中で、〝ナンテ始末が悪いんだろ、ウチの嫁は〟と呟いているのが聞えて来る。

そのあとへ、お華さんが、もう一度来て、机の引き出しをあけ、封筒をとり出して言った。

「堅井さんのお葬式あすだって、うちのパパも行くん

ですってさ、それで堅井さんとおつき合いのあった人が、千円づつ出してくれたのよ。センセどう？中には余り話をしたことがないから五百円にしとくって人もいるけれど……」

「それはいいことだ、オレも千円出すからそこに加えてくれよ、そりゃいいことだ」

Yさんは、感激した声で言った。だが内心〝この次はオレの番かな〟と云う予感は、かくし切れない。お華さんは、新しく店に入って来る客の一人一人に〝あなたどう〟と当っている。お華さんの堅井さんの死をくやむ気持ちはそんなに強いのだろうか、それは堅井さんの人柄もあるのであろう。

かれは、静かな、しっかりした酒飲みで、自衛隊上りのように生半可な戦争話はしたことがない。かれが海軍の軍人で、戦艦赤城に乗っていたことは、どうした弾みか、立ち飲み連の知る所になり、さいたま屋の立ち飲み連の間の渾名は、いつの間にか〝艦長〟になっていた。自衛隊の自称少佐は渾名が〝自衛隊〟であった。Yさんは、〝自衛隊〟をしんから嫌いだから、その方へ顔をむけることさえしないことにしていたが、Yさんは割合、海軍には弱い。それは次の様なかれの戦争体験がもとになっていた。

昭和十八年二月、十六日であったか十八日であったか、何しろ四十五年も前のことだから記憶が朧ろになっているが、それは一寸調べて書こうと思えば出来ることだが、Yさんはそれも億劫になっている。かれは戦争と云う出来事については、思い出すことをおそれ、憚かっているのでございます。

その時Yさんは、八パイの輸送船団の中心になっているM連隊の連隊長以下が乗り込んだ辰羽丸と云う貨物船の船底に張られた板ばりの棚に横たわっていた。棚は、首をひねると、時おり、水面が見える高さであった。瀬戸内海を出て、紀伊半島の沖合あたりかなと見当をつけた時分、ドスン、ベリベリ、バリバリ、ダスンと、明らかに爆弾の音がひびき、貨物船の横腹を蹴った。

「駆逐艦が、潜水艦をめがけて爆雷ぶちこんでるんだ」

そばに並んで寝ていたYさんの中隊長の山本中尉が言った。この中隊長はYさんより四五才年下であるが、士官学校出であるから当時の軍隊では、出世が早い。Yさんは、廿七才半で、甲種合格という判定で一兵卒になったのだから、それから丸一年と少々たって、少尉という位をもらったのはいいが、早速、南の島へ行くらしい輸送船につみこまれては、これは、やっぱり不幸と言うことであろう。Yさんは、自分の中隊長の横顔をななめに眺めて〝この男ニキビがあるナ〟と思ったり、幼年学校と云うところから一生かけて将軍になる連中は、顔立ちの可愛いい、血統の正しいヤツがえらばれるが、旧制中学から士官学校に入るようなヤツには醜男が多いナと云った感想にひたっていたから、ヒヤッとさせられる爆雷の音を、メリケン国の潜水艦が発射した魚雷が、輸送船のわき腹にあたったのと感ちがいして、ガバと半身をおこした。丸窓からのぞかれる外は夜であった。

「駆逐艦が二ハイついているから、大丈夫だ」

山本中尉は言った。Yさんも戦場の経験はない。だが、Yさんには、この中隊長より、身の危険に敏感なところはある。案の状、輸送船団は知多半島のあたりの凸凹を利用して、湾内に逃げこんだ。そして翌日、湾を出て、本州の近海を走って行き、又また、伊豆半島沖のあたりで、駆逐艦がぐるぐると船団のまわりを、えらい速度、多分時速三十ノットと言った早さでまわってあるき、処処に爆雷を投げ込みました。このあり様を見た、Yさんは初めて、メリケン国の潜水艦が、こんなところまでもぐり込んでいることを知ったのです。何と迂闊なことであったことでしょう。そこで船団は、今度は、横浜の町が見える湾内にかけ込んだのです。横浜の町の灯がともる頃、辰羽丸に乗り込んでいた金線や星の数が肩や襟を飾っている連中は、小舟に乗って横浜へと最後の散索に出かけたのです。このことは、Yさんに悲痛な思いをあたえたことでした。横浜にはYさんの母親の弟が、小野と云う百姓上りの金持ちの家へむこ養子に行っており、そこの女の子供が年ごろだと言うので、テイコク大学を出て、陸軍少尉になったというのでYさんと一緒にしようと本気で考えていることをYさんは感ずいていたのでございます。横浜の夕方の灯を遠く眺めて、Yさんは悲痛な心持で輸送船辰羽丸の甲板の手すりに上半身をよりかからせて背のびするポーズでありました。軍隊と云う所で、一兵卒から、悲痛なことには大慨なれて来た筈のYさんの胸にも、この悲痛さは、凩のようにからだの中を吹きまくり、小舟に乗りかえて陸地へ向ったエライ人たちをうらみました。

輸送船団は翌日夕方、冬の霧と、薄暮のうすぐらさにまぎれて南の方へ向ったのでありました。海の波は冷たく光り、時速八ノットからせいぜい十ノット位に感ぜられる速度で、ぎしぎしぎりぎりと苦しげな音を立てながら、しかもジクザク形を造りながら進んでゆきました。ジクザク形と云うのは、多分潜水艦の魚雷の狙いをはぐらかす工夫であったのでしょう、Yさんには、この工夫は、とても幼稚に思われてなりませんでした。魚雷なんて早めに見つけて、むづかしい言葉で言えば、タンチして、身をかわせばいいじゃないか、でもこのオンボロ貨物船上りの輸送船では、ヒラリと身をかわすのは無理なんだろうナ。輸送船団は、お互いの足並みを考えてでもいるかのように調子をそろえてゆっくりゆっくり前進して行った。それでも辰羽丸の後尾にはスクリューでかき立てられた白い波がずっと尾を引いていたから、確実に前進しているにはちがいない。

右手左手に島があらわれて、やがて消えた。黒ぐろとした三角にとがった島は、Yさんの地理の知識では名はわからぬ。小笠原諸島を南の方へ越えたのであろう。冬のつめたさは、春先きの陽気にかわり、海の色も今までの冷たさをなくして来たようであった。駆逐艦は、船団のまわりを三十ノットに近いぞと思える速度でぐるぐる廻ったりして、頼もしいかぎりでありました。

そんなある日、あたりの天気は、すっかり夏にかわっていた。海は夏の陽にかがやくと云った調子にかわっていた。兵隊達も、船底から縄梯子を伝わって甲板に上り、のびのびと初夏の陽を浴びることに専念していた。うす暗い船底には、武器や戦争とは直接関係ない軍医の一団が輪をつくって持ち込んだ食物で無駄話に花を咲かせている模様で、一口に云うと輸送船辰羽丸は、いっとき戦争にゆく緊張した空気から遠く離れて、何かずい分貧乏な物見遊山をやっているゆるんだ気分に、いっ時つつまれていた。

その日であった。小隊長以上、艦橋の出張った甲板に集れと命令が飛んだ。これには、Yさんはギョッとして〝ただならぬことだぞ〟と直感していた。

案の条、船の煙突のわきにある上等な船室から五六名の星や線がめったやたらに多い将校が出て来て、集った少中尉を見おろして、その中の大尉の位の青白い秀才面をした男が一歩前にふみ出す姿勢で言った。

「本船は、漸く目的地に近づいて来た」

この大尉は、冬の一月末、M連隊の演習場の原っぱを、兵隊の一群から離れて、夏服のズボンのポケットに両手をつっこんで、これは、つめたい手をあたためるためであったが、トボトボとした足取りであるいていたYさんをつかまえて

「そこな少尉、その恰好は何のざまだ！」と絶叫した古参らしい大尉であった。〝いやなヤツだナ〟とYさんは、その時この秀才面をおぼえてしまった。この大尉に気合いを入れられたことは、その後、もう一度あった。それは少隊長相手に戦術研究会と称される会合で、島の形が印刷された紙に、連隊のいろんな隊の配置をかき込む作業であった。〝こんなもの……オレの様に戦争を専門に考えたことがない男が一生懸命やったって笑いものだ〟と甚だ卑下した心持ちで隣近所の少尉で利口そうな顔をした男の作った地図を、そのまま写して出したら、その古参大尉は言った。

「Y小尉、オマエは軍人の風上におけないヤツだ。ヒトの物をそっくり真似しとる……」

かれはYさんをにらんだ。Yさんは、その時も〝いやなヤツだナ〟とちらりと感じただけで黙っていた。古参大尉でもYさんよりは年下のように見えたからである。何しろ、Yさんは、二十七才半で兵隊になったのだから、その時は二十八才半であった。

かれは、言葉をつづけた。

「目的地は、トラック諸島である、昨日トラック島は、アメリカ海空軍の攻撃をうけて、可成りの損傷をうけた模様である。明日あたりから、この船団は、その海域に入る、一同、その覚悟で、一段と警戒を厳にし、ひとたび敵潜水艦、空軍の攻撃を受けんか、これを即座に撃退せんことを期せよ」

勇ましいような軍隊口調であるが、Yさんには、そらぞらしい演説であった。その日の昼すぎに、駆逐艦から大発が出て、辰羽丸の横腹につき連隊旗と、連隊長の黒林大佐が、それに乗りうつって駆逐艦にうつった。

M連隊の連隊旗は、何度か支那大陸の戦斗に加わった証拠に、まわり縁は何ケ所か切れ、ダラリとぶらさがった恰好であった。この旗がテンノーヘイカの象徴であるとして、連隊長の大佐は、その象徴を背おって、辰羽丸から駆逐艦へと〝逃げたナ〟とYさんは感じていた。こりゃ〝いよいよ只ごとじゃないぞ〟、Yさんは、大方の兵隊の気がつかないことを感じとって、内心〝オレも旗と一緒に逃げたいな〟とちらりと思っていた。駆逐艦はと見ていると、全速力で船団から離れてみるみる海の彼方へと、姿をくらました。

真夏のあつさの中で、南洋の昼は短かい。午後四時頃であったろうか。Yさんは、M歩兵連隊の中の歩兵砲の小隊長であった。歩兵砲と名づけられるものには、連隊砲と名づけられるやや大形の大砲、大隊砲と言われる極く小型の大砲。これらは、支那国を相手とする戦争では、結構支那家屋を破壊したり、人間を殺すのに役に立って来たようだ。それにもう一ツ速射砲と称される戦車を打つ大砲があった。この速射砲の能力は、ノモンハンでソ聯の戦車には、余り有効でなかったと云うことで、Yさんが兵隊になった頃には、九四式と称するもう一段、砲身の長い、徹甲弾も固さや着弾距離をのばした砲が、造られていた。戦争に出る時は、歩兵連隊にも、山砲とか野砲とか云う本式にでかい大砲の小隊や中隊が配属されることになろうが、辰羽丸がどんな砲をどこに積んでいたかYさんには、よそのことは知らない。かれの持たされた速射砲二門は船尾に、竹の下駄や、木の下駄をはかされて据えられていた。潜水艦をうったり、魚雷を途中で狙いうちするつもりである。

その日の夕ぐれ、Yさんも船底から這い出して船尾にいた。かれには先程、船の中央にいるエライ人の勇ましい言葉と、辰羽丸から逃げ出した大佐と、海の彼方に姿を消した駆逐艦のことが気にかかって、落着かない。

「おいみんな、海を見張ってろ。こうやって見ろ」

Yさんは、両手のひらで双眼鏡の形をつくり目に当てた。一寸した工夫であった。確かに南洋の夕陽の光を、海面の一点に集中することが出来そうであった。子供だましと申す程の工夫であった。その時でありました。遠

い空の雲のかげから数機の飛行機があらわれたのです。それは数秒にして船団に近づきました。

「わぁっ！日本の飛行機だ。オレたちを迎えに来たんだぞ」「ばんざあい」「バンザーイ：：」

兵隊たちの万歳も空しく、一番先頭の機が辰羽丸の右隣四五千米に進行していたO丸に爆弾を投じたらしく、O丸は船の真中のあたりに火の手が上った。Yさんはメリケン国の飛行機の数を六機と読んだ。六機で都合六ツの爆弾。それだけ落せば、ひとまず敵は立ち去るであろう。その時でありました。一機が辰羽丸の船腹上二〇〇米ぐらいの所を、羽撃いた様に飛行機の裏側を丸出しにして飛び去った。船橋のあたりで重機関銃がダダダダと鳴り、二三ケ所で軽機関銃もテケテケテケと鳴ったけれど何にもならなかった。その飛行機は、船尾すれすれに、爆弾を落して行ったのである。もう少し前に落ちたら、Yさんを初め小隊の兵員の大方は肉片を残しただけで、四散していたでしょう。船尾すれすれに海中で爆裂した弾丸の飛ばした水をYさんは頭からあびながら、船が前進することを止めたことを瞬間知った。スクリューがやられたのだ。右側のO丸は沈みかけている。左側のN丸にも火の柱が立っていた。〝これで弾は使い果したかな〟Yさんの頭は物すごい速さで回転していた。船底から縄梯子で、ぞくぞくと兵隊は甲板に飛び出して来た。決して生れつき沈着でも、大胆でもないYさんが、わりに

になり、そのわきにあった高級船室は消えて、黒煙と火炎の中に、煙突に張りついた数人の人形の裸形が見えたと思った。黒煙は、Yさんたちもつつみ、兵隊の一人びとりを識別出来なくなった。船は沈みかけている傾斜を足のうらに感じた。

「海へタイヒしろ、飛びこめ！！　大崎一等兵いるか、タマを持いて来い！」

Yさんは絶叫した。煙の中から大崎一等兵があらわれ、しっかりした日本語で言った。

「タマを持ちました」

かれの手には、速射砲の徹甲弾があった。

「それじゃない木の玉だ、木の玉だ」

Yさんは泳げない。海難を予想して砲には竹製の下駄をはかせ、更に浮力を確実にするために多量に木製の塊を用意して砲側に積んでいた。泳げないYさんは、この木塊を抱いて海に入ることを考えたのでございます。

長々と、Yさんの乗っていた辰羽丸が、メリケン国の艦上攻撃機にやられる状況までを書きました。これは彼が、堅井さんこと、〝艦長〟はすきで〝自衛隊〟をひどくきらう謂れを書きたかったのでございます。手取早く言うと、Yさんは、海に飛び込み、船の便所のドアらしい板にしがみつき、三時間も、エンダビー沖と云う所の大波にもまれていて、全く命に縁があったと申すより他に言い方を知りません。沈没のときに二千数百名の命を一気にうばい、海に浮んだ兵員の頭上に、メリケン飛行機は、超低空で飛びかい、ダダダダッと機関銃を何度もあびせたのですから、全く、その弾をのがれることだって、これはウンメイと言う言葉だけが当てはまります。

その挙句、Yさんは、南洋の海が、すっぽり闇につつまれてから、戦場掃除に駆けつけた、七〇〇頓ぐらいの日本の軍艦に拾われたのでございます。Yさんが将校であると言う理由で、拾われてから、その軍艦の艦長に敬礼をして何やら言葉にならぬ日本語を、精一杯叫んだときに、その艦長の大尉は、かれの前に燦然と立ってニコニコ笑っていたのでございます。その態度は、従容と言うべきでありましょう。あとで、この大尉の顔を思い浮べてみたら、かれは、大部赤い顔をしておりました。これはテッキリ酒を喇叭のみした赤さでありました。その後二十年もたってYさんは知ったのでありますが、このM連隊の兵員を、何拾名か拾ってくれた大尉もフイリッピンレイテ湾のなぐり込み海戦で、艦もろ共死んだのでございます。こう云う話は、たとえ酒の上でも人様に出来る話ではありません。Yさんが、赤城の〝艦長〟と云うあだ名の堅井さんに何やら言い知れぬ敬意を感じるのでございますが、Yさんは、どう見ても、堅井さんが艦長であったとは考えられないので、ある日、意地の悪い

この海空戦を眺めていることが出来たのは、かれは部下と称せられる三十名の兵員を抱え、二門の速射砲をあずけられた小隊長というものであったからでございましょうか。それともかれは独身で、命拾いの経験のない呑気な身柄であったためであろうか。兎に角、割合にいい姿勢で二門の火砲の間に立って、飛行機の落す弾を数えていた。その時でした。空をさがすと一機が辰羽丸の上空二〇〇〇米ぐらいの高さに飛んでいて、それが丁度ウンコを落すように握り拳程の黒いものを吐き出したのです。瞬間〝コリヤイカン〟とYさんは全身の神経系で感じました。辰羽丸は、スクリューをやられてじっと動かずにうずくまっている。握りこぶし程の黒いものは、みるみる炭団の大きさになった。かれはガバと甲板に平にへばりついたと同時であった。ゴアン・バン・ジャンと云う絶叫と同時に全身に火をあびた。かれは飛び起き五米程最船尾へ走った。だがそこには、海があるだけであった。兵隊達は小隊長のかれの動作に目を据えているものもある。分隊長のN軍曹は速射砲を海に向って発射しつづけている。その軍曹の発砲を助けて、演習の時の動作そのまま兵たちは、徹甲弾を運んだ。それは何かやっていなければ軍律にしばられた身体が、狂気のとりこになる。Nさんは、目の前に海をみて、うしろをふりむいた。浴びた火の雨のもとを知ろうと思ったのでしょう。瞬時のことでした。そびえていた煙突は裸

会話を交換したことでございました。

「艦長、あなたは赤城に乗っていたそうだが、赤城の艦長というのは、大佐ぐらいで、今生きていれば、九十才を超えてると思うんだがナ」

かれYさんのあたまに、昔、小川町の角にあった、廣瀬中佐と、杉野兵曹長の銅像が、チラリと走った。

「あなたは、日本が、戦争に敗けた時、兵曹長ドノではなかったかナ。兵曹長ドノは、強い海軍の軍人だったと、ボクは思うんだ」

堅井さんは、Nさんの勝手な想像を、まことに素直にうけ入れた。こう言う受け入れ方には、ウソの匂いも何もない。

「そうです、恐れ入りました」

でも、かれの〝艦長〟さんと云う仇名はすたれなかった。Yさんの〝センセ〟の様なものでありました。

堅井さんは、谷中銀座と称する商店街で買物をして、自家に帰る途中、さいたま屋に寄るらしい。だから谷中銀座で買った品物の一部を、お華さんにあげる。蛸とか、ザボンなんて高級品を惜し気もない。又お華さんは、そういう差入れをもらうことが好きである。近くの寺の法要専門の料理仕入店〝かま屋〟の一番番頭〝カマちゃん〟は折にふれて、シャケの頭とか、名も知れないマグロ大の魚の四半身とかを差入れる時があると、お華さんの気嫌がいい。そのカマちゃんもちかごろは血圧が高いとかで、ウーロン茶とか炭酸果汁飲料をなめなめ長い常連の座をつないでいる。

Yさんは、堅井さんを艦長から兵曹長ドノに格下げしたことをいたく気にして、堅井さんと店で言葉をかわすことは殆んどなかった。ただ、かれが死ぬ数日前、それは二三日前であったかもしれない。帰り途が同じ方向であったらしく、前に書いた様に、ほんの二三言、かわしたことがあっただけである。その折も焼酎の酔いも手伝ってヨロメイているYさんとは比べものにならない若者の足取りでスタスタと歩き去ったのであるが、その時、Yさんは、ちらりと、艦長も年をとったナと言う感じを、かれの頸すじのあたりに見つけていたのである。

今から数えると、もう拾年にもなろうか、やはり、今日のような年末の木枯しの冷たい日であった。〝Mが死んだんだって〟と言う風音がとどいた。だが誰もその為に千円づつでも出し合おうと言うものはいなかった。Nの死んだ時には焼香と言う儀式に加わった者も数名いた。Kの時にも、通夜とか、焼香に加わった者も何名かいた。こう言うことは、もののはずみで誰かが、一声力を入れて、通夜に行くョとか、焼香に行こうとか、いくらか包もうとか言うと、その声に和するものが何名か出て来るものだ。Yさんは、お華さんがせっせと、堅井さんと袖すり合った飲み仲間で、千円出しそうな客に「堅井さん、死んだんだって、千円ずつ出し合ってるのよ、アナタど

う……」と声をかけつづけている。Yさんが、「今度はオレの番か……」と思うのも尤もで、今さいたまやへ常連の顔で立ちよる客の中で、最年長のシマさんは七十五才であるけれど、さいたま屋歴は、未だ十年そこそこである。Yさんが七十二才でさいたまや歴三十数年、ノーさん、将軍、カマやんあたりが、年のことはわからぬがさいたま歴は、それぞれ三十年近い。他の常連は、此処のところ、にわかに常連にのし上った連中で、くろうとの写真屋あり、絵かきあり、運転手あり、鳶職あり、生活の生き様は、さまざまである、自衛隊などは、未だ常連と称するわけにはまいりません。将軍の例を引けば、かれは四十才を数年越えた頃であろうが、十代の頃、もうすでに、おしろいの顔にぬりたくり方も下手な十七八の女を女房のように引きつれて飲みに来ておりました。かれは、今、Yさんの家からさいたま屋へ来る途中の角の大泉石材店という墓石屋で、墓石専門の土建人夫をしておりますが、人間のやる職業の高級と思われるものをのぞいて、大概の経験して来た男で昔はピンと口髭を生やしておりましたので、〝オヒゲ〟とか〝将軍〟と言う仇名があります、ただ面と向ってはYさんをのぞいては、みなかれを〝サトウさん〟と敬称で呼んでいます。というのは、皆みな、かれの腕力をおそれる風があります。むかしかれが二十代のころ、死んだヤクザのオジキ株であった大野と一緒に交番襲撃を初め、何か止むにやまれぬ世の中の仕組みに対する不満を腕力にかけて晴らしていたのでございます。その頃、風呂ずきのYさんは、よく朝風呂で、この将軍と一緒になったことがございます。今日考えてみると、かれは豚箱から出ると、早速、朝風呂に身をキョメに来たのでしょう。かれが浴槽に入る前、しゃがんでマエを流している尻のあたりをながめて、その尻の割れ目の線や、腰のあたりの均整ぶりから、Yさんはつくづく男の裸の見ごとさを味わったことでした。どこにも一点として無駄がありませんでした。これでは喧嘩も滅法強いのも無理はない。

このさいたま屋の常連には、春と年の暮れと、二度、趣きをあたらしくした仲間だけでの集りがある。春は四月初め、谷中の墓地の花見の会であり、年の暮れは、忘年会と銘打っている。将軍は、一度も加わったことはない。これは、常連が、かれに一目おくためであり、かれの方でも、常連の月並みな話題にあきたらないのでございます。Yさんはこの会合の歴史を三十年に亘って経験して来ている。司会すると言おうか、主だって仲間に働きかけるのは、その人の働きであり、それをやり通さないと常連という肩がきが貰えない。三十年であるから、そういう人も次々と入れかわり、消え去って行った。中には、会費をピンハネたという悪名を負って消えた者もある。

Yさんは、毎回上座に据えられるので、自然に春、冬

とも会に連なることをならいとして来た。身体の調子が悪くて病院に入院している時でも、何かと口実をつくって、からだだけでもそう云う席へ運んだものでございます。これは、一種の意地と云った風なものでございます。

今年などは、Yさんはとても身体の衰えを自分で感じておりました。堅井さんが死んで間もなくのことでした。もうさいたま屋をつつむ夕陽の影も短かく、うすく、たちまち、巷は木枯に吹きぬけられる季節になっていました。

「センセ、今年は、忘年会を赤穂四十七士討入りの夜十二月十四日にきめました。出て下さい、センセが出ないと話にならない」

昨年から幹事に昇格した運転手君が言った。

「ウン、出ますよ、出ますとも……」

Yさんは、未だ一ケ月も先きのことなのに、景気をつける気分で、会費六千円也もその夜、お華さんにわたした。一ケ月近く先ではあったが、Yさんの見栄気分がそうさせた。

「お預りしとくわ」

お華さんは、金のことは、飲み込みが早い。毎日売り上げ金の集金に信用組合の係員が廻って来るから、一日でも金利になる。

それから半月、こう云うのをトタンの苦しみと申すのでございましょう。医者は肺気腫という名称をつけて、あれこれ抗生物質をYさんの血脈のの中に流しこみました。その中で、Yさんの病気の性質によく似合ったものがあったのでしょう。呼吸の苦しさもゆるみ、漸く他の人とまじわるとか短かい会話も出来るようになった所で、Yさんは、まっ先かけて、さいたま屋主人常夫君とお華さん宛に短かい葉がきを書きました。

〝前略、十二月十四日の忘年会には、ツイに出られません。前払いした六千円也の会費は、あなた方にあげます。集った連中にだ、一杯ぐらい余計飲ませてやって下さい、後略匆々。〟

Yさんの心中には、六千円出しっぱなしにしておけば、〝オイ一寸センセを見舞おうじゃないか〟なんて動議も持ち上って、一人、千円ずつに見込んでも十余名は見舞いに来てくれるだろう〟という目算もあったし、又この時機には、すぐ涙が出る程人恋しさもつのっていた。〟

今年は暮れも、正月もない、ただ一日廿四時間と云う時間があるだけだ。その何拾時間、何百時間、オレは、この先、意識があることやら〟

〝旅に病み、夢は枯野をかけめぐる〟なんて、芭蕉も意識がある間に口呟んだ句にちがいない。オレもこの際生れて初めてハイクと云うものを口呟んでみよう。

〝めでたいの、そらぞらしさや年あけぬ……春の陽

木枯が、悪かったのだ。Yさんの女房は口ぐせの様に言うのだった。

「いま、この町内でみっともないオトコが三人いるワヨ。一人は、向うの横町の病気の母親一人のところへころげ込んで来て、毎晩さいたま屋へ飲みにいく横道さん、あのヒトは白い布をまいた杖をついてるけど、身体障害者になって、その方の手当で飲んでるらしいワ、もう一人は、ホラ、裏のアバシリから出て来たオトコ、未だ四十一才のくせに、このごろ、あたま真白ヨ。もう一人はあんた、ヨタヨタしながら、これまた、さいたまゆきをやめないで……あんな冷たい店に、二時間も三時間も、何のために坐ってるの……」

女房は、Yさんの心中にある自然な自殺志向のうごめきには、気がついていない。勿論お華さんの太股のあたりにサッと手を出すアソビの微妙さなどには、気がついていまい。ただ歩く歩巾が普通人の五分の一ぐらいになって、まことに情けない歩きっぷりで杖を引いているYさんを〝世間態が悪いことだ〟と恥入っているのでございます。

でも、矢張り、十一月末の木枯らしが、どこからともなくYさんの襟のあたりから吹き込み、一夜のうちに、Yさんは息がつまり、ベッドに倒れこみ、だらしなくもかれはかすかに叫んだのです。

「オイ、病院へ行く、酸素が必要だ」

のぬくむりかそか遠くあり……それでなお生きんとするか苦しきを……〟

結局さい玉屋主人もお華さんも、常連のうちの一人もYさんを見舞ってくれる者はなかった。

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

～～～

利狂人銭形控

大和禎人

こどもたちのアニメ人気番組に「ルパン三世」という連続ものがあります。いっこうに国籍不明のところが面白く、登場人物の一人になんと（銭形警部）というのが登場していたり、五右衛門もバイプレーヤーとして現われたりします。そして、こどもたちはただわけもなく楽しんでいるようでございます。

さて、ここで銭形といえばかの投げ銭の平次親分を思い出すのが自ずから筋道でございましょう。

テレビドラマの連続もの「銭形平次捕物控」だなんて大層お古いことでございますな。こうした捕り物時代劇ドラマは「水戸黄門」同様に意外に視聴率が高く、他愛なく勧善懲悪の快に浸り、安心して見ていられるところが良いのでありました。この私にしても随分楽しんだものでございました。すでに扮した俳優さんも死んでいますし、ましてやその作者の野村胡堂先生の名前なぞは過去のまたその過去に覆んでしまった存在でありましょう。

実はその胡堂先生は銭形平次生みの親としての番物小説を書かれるほかに（あらえびす）の名でレコード収集家としても知られた方で、音楽評論家でもあったというお人のようでございました。昭和三十八年四月、八十二歳で亡くなっているそうですが、亡くなる直前には私財当時の一億を投じて学芸財団を設立、育英奨学金や学術研究の助成を計り、「武鑑」六百余のコレクションを東大史料編纂所に寄贈するなどの行ないのあった方と聞いております。

いたって学のない私どもにはわからないことばかりでございますが、郷里岩手の何村かには銭形記念図書館を建てたのはさらにそれ以前と聞いておりますが、ここにも蔵書約三千を寄贈されているとか、岡っ引の銭形平次の生みの親はただのおひとではなかったようですが……。なにはともあれ（銭形親分）にあやかる（銭形警部）なのでありましょうか。……。

ところで、はじめからこんなお話になりましたが、実はこの私が同じ岩手の出身でありまして、仕事は元警視庁警部の肩書きのあった人間なのです。いえ、退職に際しての処遇のそれで警部補どまりの、申さば現代の岡っ引きでございました。（銭形）は決して無縁ではないのでありました。ただし、「ルパン三世」のかの銭形警部は平次親分のような名岡っ引きとは異なる頓馬で、軽く（おっちゃん）呼ばれているそのキャラクターにむしろ似たピエロであったことを告白しておきましょう。しかもそのピエロぶりは悲しいかな、いまもまったく同じでありますけれど……。大阪府警の相次ぐ不祥の警察官犯罪に比べればなんとつましいことでありましょうか。

警察官あがりの再就職は大方、幹部を除いては例外もあるにせよ、金融機関あたりが相当のようで、ご他聞に洩れず私としたことも、いまはある証券会社に働いているのでございます。銀行でお仕着せの制服に身をかため、もとの警察官に紛う姿でフロアをうろうろして客に目を光らせ、あるいは後ろ手で組んで客を睥睨するかに直立不動の姿勢で立ちつくし、いざとなれば命を賭けても人様のお金を守ろうため、二つない命を失いかねないなんて真っ平なのでございます。これまでがそうであったからといって、同じように考えて採用されるのでは足元を見られた低給の第二の人生ですから、たまったものではありません。そう思っていまの会社をむしろ選んだのでございました。店頭のガードを職責の一部にしておりましても、ここならば出来心で飛び込んでくる不心得者も滅多にはいないはずです。もちろん当節流行の症候である財テクに目の色を変え、市況に一喜一憂する善男善女が店頭にあふれ賑わいますが、客筋は近頃とみに婦人方が多く占め、なにやら美人も多いようで、これに応対する店員も銀行窓口とは一味違う洗練された美しいＯＬ揃い、結構な職場になっております。

さて、さて、騒がしい一年でございましたな。インサイダー取引きとやら、リクルートとやら、まるで店頭では話題にもならなかった株が風に舞う木の葉のようにアチラ、コチラ大盤振る舞いにバラまかれ、上場とともに呆れる高値を呼んだという事件が世間を震かんいたしました。

なにせ売り買い往復で会社には最低でも手数料が入る商いとはケタが違いました。口を拭い右往左往する政治家たち、与党も野党も同罪に見受ける成行きでございました。

証券業界も多かれ少なかれ、揺れ動いたようでありました。インサイダー取引きに近いものは日常茶飯、横行するらしく、電話取引のウリ、カイで聞こえてくるもの

の聞き噛りでもザラにあるように思われます。

「実は本社の社屋落成移転にともないこれは祝儀の意味もございまして、ごくごくお得意さまに限る商品なんでございます……、近く一部上場は必至、ハイそうでございます、含み資産から申しましても、すでに関西方面では実績を注目されている会社でございます、ハイ、それはもうお任せ頂いて決してご損はありません、このお取引には○○の転換社債をプレミアムとしてご斡旋いたしますので、ぜひ」

甘いささやきです。欲目につけこみ売らんかなの押しまくりです。なにやら、なにかの話題にも酷似したところがあり、ハテとお思いになっても不思議ではありません。したたかなものなんです。しかも業界の取引上のタブーすれすれ、どうともとれる口舌は流石のものと言えましょう。クセものの「お薦め株」、法人や外人の利食い玉の「はめ込み」などすべて手数料稼ぎの銘柄が多いようです。

「それはどういうこと、転換社債は魅力だがね、その株の上場の方は大丈夫なの」

ここで電話の相手が関心を少しでも持てばシメたものなのです。また、たとえばA株を買っている顧客に、

「テコ入れ買いが入りますから、これが最後の投げ〔illegible〕のチャンスになります」

などと呼びかける手口もあります。投げを誘うのです。

その一方では営業マンには「A株はいまが底値圏、客にはめ込め」と尻をたたくのです。これで売りと買い両方の手数料がころげ込みます。その上A株を売却した顧客にはすぐB株へ乗り換えを勧め、ここでも手数料を稼ぐのです。「はめ込み」のノルマをかけられていますから、夜討ち朝がけのネバリで陥落させる成行きが見えるようでございます。

この業界での新採用がいま仮に十人あったといたしますと、欣々然と二年のち、三年のちなおも証券マンである歩留まりはせいぜい二、三人というところでしょうか。一方では会社のため手数料を多く稼ぐ営業マンは有能の評価をうけ三十代の課長はザラで、支店長に抜擢されるケースさえある業界なのです。

臨時職員の私たちにしても、決して安閑としてはいられるわけではありません。微々とした退職金も（持ってこい）のブッタクリで全部体よく会社に取り上げられました。勤め大事に思えばの弱みにつけこまれている実情なのです。お笑いください。もっともこれはいざとなれば換金可能の預金性商品ですから、クローズ期間過ぎて解約すれば丸っきり損はないはずでございますけれども……。

さて、この私は思いもかけぬことで、実はある日、永田町の国会議員会館に参り、これもまたある事務所の部屋内に足を踏み入れることがありました。事頭われては

ご迷惑のかかる筋でございますから、リクルート問題で騒がしいこの際、これは大事といまは気づくことでございました。

店頭の見張りを交代すると、外回りの仕事につきます。といって、私たちの仲間はセールスに出かけるのではありません。体の良い金銭受渡しのメッセンジャーに過ぎません。ときにはかなりの大金を任されますから、やはり物堅い前歴がもの言ったのでありましょう。例外はありましても私たちは大方が武道の有段者でもあるという、当節ではおかしな信用によるものでありましたろう。かくいう私でも柔道は五段でございますので、そんなことが取柄としてこの雇用に役立ったもののように思われます。

さて、そうしたことはさておき、いよいよその日のことを申し上げますが、これはあなたさまだけに申しあげる内容でございますから、ご内聞をぜひにお願いいたします、いえ、と、申しますのも下々の悩む筋合いでないと承知しながら、この件に限り店長の命で出かけておりましたから、成行きのいかになりますものやら、場合によっては検察の動きなど気懸かりになるのでございました……。

「小父さま、変よ、どうかなさって」

女子職員のP子が言いました。この娘はなんとなく私に好意を示してくれていました。さえない私の顔色を読みとっていたようでございます。窓口接客業務はエアコンが完備しているオフィスとはいえ、冷え込みますのでP子は赤いレッグウォーマーなど着用しておりました。それがまた愛くるしく良く似合い、この娘の何気ない色気にもなっておりました。（小父さん）は気に入りませんが、銭形警部の（おっちゃん）と呼ばれるのとは異なり、親愛がこめられていました。

「元気をお出しなさいな」

なにも知らないはずなのに、そう言ってくれる勘はなにによるものであったでしょうか。

「店長もなぜかしら、アタマかかえて青息吐息、お店の士気にかかわるわ」

「キミ、そんな心配するの」

呆れ顔して申したことでありました、……。

地下鉄「霞ヶ関」駅が会社からの便が良く、地上に出て外務省の前を通り、議事堂を右手に見ながら坂を上りました。この道順をハッキリ覚えているのは（銭形）魂でしょうか、そのくせ顧客を尋ねて、すぐ近くまで行きながら公衆電話を入れて聞くなど鈍で手数のかかる人間なのでございます。やはり（おっちゃん）なのですね。

「キミ、銭形上り、どうもそんな感じだなぁ、わし、山形なんじゃよ、キミのナマリでアッチだなと思ったよ、

「平次親分」の野村先生がアッチだからねぇ、図星じゃない、この仕事をしていると人づきあいが多いからわかるのさ、あんたのタイプはどう見たって警察だよ、そうじゃない？」

余計なことを、相手はそれを親しみのつもりで言っているのでした。はじめが（キミ）でしまいには（あんた）でした。しかもとうとうと言うか、ついにか私は「銭形」にされたのです。こういう場合の証券会社の使がおよそどういう種類の人間かを重々承知の上であったと思われます。この人が秘書でした。私を（キミ）、（あんた）と呼ぶにはまだ若い四十がらみ、世故にたけた人間らしく振舞う（嫌なヤツ）でした。クダケたつもりでいて、実はこちらを明らかに軽侮する無礼が覗いていました。決して愉快なものではありませんでした。

「で、預り証は、うん、じゃそれ貰おうか、用意しておいたよ、紙ペラ一枚が高くつくねぇ、ワッハハハ」

この笑いもなぜか理解に苦しむものでした。よくテレビ画面に登場する、政治家たちが意味もなく作り笑いをし、耳こすりをする、アレに似ていました。

たしかに紙ペラ一枚が証券業界の取引上の証憑書類なのでありました。保護預りという制度があるからです。紙ペラは支払う方も同じことで、小切手にチェックライターで0をいくつ並べているかの違いがあるだけでありました。こちらが持参しているものは「預り証」に過ぎません。

私に任されている受渡し（受け）は大方の場合はこうして紙ペラの交換で終わります。（渡し）となると私は店から渡されている（届出印鑑）の印影と相違ないかを確かめ、金銭を渡し自筆の受領証を受け取るという手順になるのでした。

さて、この私がこの時接触した秘書はどうやら同県人ということになりますが、肝腎の代議士さんまでがそうであったとは限らないことをお断わりしておかねばなりません。そしてリクルートの江副浩正さんではありませんが、その名前だけは言えません。プライバシーを侵したくないという以前にこれは職務上の秘密だからです。それになにより私は一介のメッセンジャーに過ぎないのです、この時の小切手の0の数がいくつ並んでいたか、取引銘柄が何であったかなぞまったく覚えがなくなっているのが正直なところです。

（小父さん、変よ、どうかなさって）

とP子が言いましたが、心に屈するものがあったことは否めないことでありました。リクルート疑惑の輪がひろがり、大臣が失脚したり、NTT会長が辞任に追い込まれたり、前官僚が傷つく泥沼の様相に呆れ、またそのほとんどのケースで秘書が悪モノにされ、ご本尊は舞台の袖に隠れるという図式をあまりにも多く見せつけられました。私に不快を与えたあの秘書の顔がしきりにチラ

ツキはじめていたのでした。

あのときP子のもらした（店長の青息吐息）は多分支店に重くノシかかっているノルマによるものであったでしょう。憂鬱の中味が違うのだと思います。

マル優廃止などで雪崩れ込んだ投資家は多いと思います。

しかし、（顧客とともに栄える）、（財産づくりに奉仕）といったスローガンをまともに信じていてはお人よしで株で儲けることはできないといまの私なら忠告する気になりそうです。

百人の中の九十五人は損をする。損をしない人があるとすればむしろ不思議という修羅場なのです。とても銭形ふぜいが容易に理解できる世界ではなさそうです。とんだ職場に紛れ込んだものと後悔したときはあとの祭りでした。

証券取引法は顧客を守るためにあるというより、むしろ証券会社がこの法に守られ、すれすれの取引をしても滅多なことではまず違法になるようなヘマをしないような仕組みに見受けます。

ですから、こんどのリ社疑惑はあまりにもひどいお話です。ボロ儲けをした人たちが誰だったかを考えるとき、なおのこと腹を立てないではすまされぬ出来事でした。しかもこの場合でも、証券会社は介在したはずで尻尾をつかまれてはいないのです。疑惑の渕の底知れぬ深さが思われます。

こうした業界に身をおき、ムードに溶け込めないやり切れなさをお察しください。正規の証券マンでもないものがそうしたドブ泥に足をとられて身動きできないありさまなのです。

P子の（小父さん）呼ばわりはまだしも、若い営業マンにまでそう呼ばれメッセンジャーをつとめなければならない悲哀に胸を押しつぶされそうな毎日がつづいていました。

「小父さん、あ、小父さま」

P子がなぜか今日は言い直しました。

「小父さま、内緒ばなしよ、良くって」

この娘はあまり化粧をしないのですが、この日は珍しく薄くそれを掃いていました。耳許へ寄ってささやかれたときにはシャネルらしい匂いが鼻をくすぐりました。

何事かと思いましたら真顔で結婚することになったと言うではありませんか。

「ないしょよ」

嘘のような馬鹿げたことに思われるかも知れないのですが、それを聞いた瞬間、電流に撃たれたように私はある腹を決めたのでした。

（会社を辞めよう）

と長く思案していたことへの決断でした。

甘い話になりましたが、これは色恋ではありません。すでにこの再就職の職場に三年もの月日を埋めていました。

P子の結婚予定は春四月だそうですが、私はもう来る年を迎えて、あの大発会に沸くシキタリには出会いたくないと思ったのでした。P子の辞める前に去りたいと思いついたのです。年金でなんとかやれるはずでした。

年甲斐もないこととお笑いいただいても結構でございます。「銭形」の時代には覚えたことのないロマンチックな感情を多少なりP子からあたえられたことにいまは満足を覚えるのです。これもあなたさまだけに申し上げるわけでございますけれど……、何分のご内聞をお願いいたします。妻子ある身のたわごとをどうかお聞き流しくださいまし……。

（目から離れれば心から離れる）ということばがあるようでございますが、P子は決して美人ではありませんでしたが、色白で愛嬌の良い娘でした。心ばえの優しさをもち、それをおおらかな心ばせで表現してくれ、私の心をどれだけ支えてくれましたことか、娘自身はいっこうに気づかないことにしても、忘れられるものではありません。

さて、さて「銭形控」とするこの一編の締め繰りには表題の解説が必要でありましょう。利狂人は（りくるうと）と訓んで頂きたいと思います。たまたま「新潮45」という雑誌に掲載された『日本に「綱紀粛正」はない』というジャーナリスト高野孟という方のエッセイからお借りしました。「利狂人」とはなんとも痛烈な諷刺ではありませんか。

そしてこの一文のサブタイトルには、

いまの日本に「綱紀」の意味を知っている人がどれほどいるか？　知らないことをやれるわけがない。

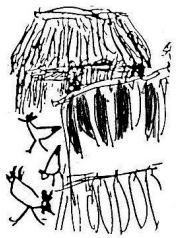
とあって、

竹下節も「綱紀粛正」できわまった。

と読めました。

NHKの大河ドラマはこの年「武田信玄」でありましたが、ドラマそのものの退屈に拘わらず各回エピローグで黒川紀章夫人の若尾文子さんのナレーション（今宵はここまでにいたしとうございます）は決め手としてせめての救いになっておりました。この年の流行語の金賞とか、この退屈な掌編もここまでにいたしとうございます。

（六三・一二・尽）



連載（小説）

近藤富蔵の生涯（二）

序章　羽倉簡堂七島巡察

一、南海に漂う

金子正義

（二）

神津島は伊豆七島のほぼ真中にあって、新島から南へ僅か五里であるが、冬季は風浪が激しく官船も近づけない。夏季は日和が良ければ、簡堂の乗る朝日丸なら順風にのって四時間程度で行ける筈である。

四月二十一日（五、一四）明け方の深い霧が晴れたが、風向きがよくないので夕日丸は残し、朝日丸を八挺櫓の挽船八艘で挽航して神津島に向った。波は高く外洋を見るのを諦めた簡堂は、船が着く迄中倉に横になって韓愈を読んでいた。随員の中には船酔を催す者も出始めたが船は午の下刻に神木の港に入った。

船端から見ると新島と同じく浜には白砂が輝き、山頂の円かな天上山が、南の秩父山を伴にしてゆったりと構えていた。山膚や裾に雪渓のように抗火石が見えるのは新島と海底で繋がっている同じ火山系だからであろう。

東側の多幸浜に天上山から崩れ落ちる抗火石の流砂は、新島の向山南側の山膚と全く同じだった。

前浜より上陸すると、天上山、高処山、秩父山が北から南へ並び立って、その山懐に村も北と南に別れていた。両村共、草葺の民家が石垣や椿の防風林に囲まれて点在している。港近くに江戸の辻番所程の島役所があって、村役人の名主、年寄、百姓代などが待っていた。礼儀正しい島の風習を表徴するように一人一人が土下座して挨拶するのには簡堂も閉口した。

遅い昼食後、島役人の松江保義から島事情の報告があった。

神津島は元禄年間の大火で村の大半が焼け、島役所の旧記録は総て焼失して古いことは不明だったが、新島と同じく享保の頃までは塩年貢を納め、扶持方米拾余石を給されていた。其の後に山畑弐拾壱町七反歩余りを拓い

い丸石の浜で大きな船は繋留できず、浜辺に曳き揚げて硬綱を張って繋いでおく。船の出入には大勢の船人夫や村人総出の仕事となる、日和見・風待ちは船ばかりでなく、この人集めにも拘ることだった。

夕刻、雨雲が拡がり松林の上に稲妻が走ったと思う裡に大雷雨となった。簡堂は経験豊かな船師の日和判断の確かさには、度々の事乍ら感服した。

雨脚の激しく大地を叩くのを見乍ら摂った夕餉に香の良い茸の吸物が出た。神津島で採った松野老と呼ぶ茸で古松の根方に出る。薄墨色で褶は白く茎は無いが径は一尺ばかりもある。其の侭焼いて醤油をつけると特に旨い。

四月二十五日（五、一八）簡堂は未明に起きて、天候を確かめに羽伏浦に出た。

銀白の浜にゆったりと昏い波が寄せ、遥か沖の紫雲に旭日が光芒を発し眸を射るようだった。羽伏浦南端神渡鼻の離れ島の深い繁みが未だ昏く黒々と盛り上っている。島人が神の島と畏敬して誰も渡る者が無い小島である。

聳え立つ松の大木が一層荘厳であった。

帰途、野雉を撃っていると黒根の物見台から法螺貝で風向きの良いのを知らせていた。島役所に戻ると式根島の日和山に官船の出航準備が出来た知らせの蜂火が上っていた。

正午頃、小舟で式根島へ行き碇を揚げて待っていた朝日丸に簡堂一行が乗り込むと直ぐ出港した。夕日丸は其の侭、泊港に残した。

式根の南端大房光の洞窟を眺め、神津島東沖の祇苗島を望見して南航すると風向きが変わり、潮流も激しくなって船は波に高下し、激しく揺れて船中の器物は悉く覆り転んだ。従者の中には眩暈して俯せたり蒼白になって反吐する者も出始め、簡堂もどうなるものかと危ぶみ始めたが、三宅島の雄山が見え始め程なく迎えの小舟に島役人が見え、数艘の挽船が近づいて綱を投げ合って官船を挽航して、申の下刻漸く伊ヶ谷に着いた。

船頭は船の大揺は当り前のことのように、

「マックロニナラヌウチ、チンダナア」

と笑っていた。

沖に朝日丸が見えた頃から集めていた大勢の人夫達が忽ち船を小石の浜にコロで運び上げ、浜の崖ぎわ迄舁ぎ揚げ張り綱を網のように張り渡して船体を保つと、火を焚いて船底の貝藻等を忙しげに剥ぎ落した。

簡堂一行は船着場の直ぐ上にある陣屋に入り、簡堂は島役人の笹本新兵衛宅に宿を取った。夜になると、村方地役人達が次々と伺候して、無事に伊ヶ谷に着いた祝辞を述べて帰った。

四月二十六日（五、一九）

陣屋の直ぐ近くの伊ヶ谷湾に臨む射撃場で射撃手を閲

して、陣屋で島役人、村役等から島の概要を聴いた。

島は五ヶ村で戸数二百六十戸、人数千八百十人、畑反別九拾四町歩であるが、岡穂、麦、芋等を作っても海気に害されて良くても半作なので貢租は免ぜられている。漁猟は秋より二月迄は浪が荒くて船を出せず、海底に岩礁が多いので浜で網も引けない、精々栄螺、海藻を取るくらいで絶えず飢えと、貧に苦しんでいる。昔は塩を焼いて四拾余石を賜ったが、享保の頃より塩貢租が廃され御扶持方米も拾四石となったので糊口をしのぐこともできぬ有様となった。

寛政九年より江戸鉄炮洲の島会所で、畑作物、海産物の他に、婦女子の紡ぐ生絹、山稼の直竹、薪、椎の実、椎茸まで買い上げて呉れるようになって漸く一息つけるようになった。だが、売り値に応じての運上金や、江戸値の上り下りで絶えず脅かされている。

笹本新兵衛は島の生活の苦しさを遠慮し乍ら告げたが、穏やかに頷いて聞き取って呉れる簡堂に緊張を解し、更に罪人配流の実情を述べた。

島人の生活の苦しさは、土地痩せ耕地狭少ばかりでなく、罪人の配流が多いので困窮は増すばかりである。今は百三十人程であるが、村々の五人組に預けると二戸に一人の割合で、新島の三軒に一人からすると負担は大きい。それに三宅は八丈送りが船を乗り替える仲継地であり、秋便の場合は翌年の春迄三宅滞在となる。其の間は流人小屋で養なわなければならない。この八丈流人は風待ち、春待ちの間に屢々島抜けなどの騒ぎを起し、三宅流人の荒び心を一層募らせるので困っている。と言った。

簡堂が文書、古文献を閲すると、成程訴訟問題が多く流人の犯罪記録、死亡などが多かった。簡堂が更に流人配置の状況を確かめると。

流人は伝馬町の牢を出るとき、武家・僧侶等は金一両、百姓・町人・無宿者まで鐚銭三貫文を渡され、身の回りの物、膏薬、煎薬、半紙二帖迄支給される、だが、御用船に乗るときから、名目をつけて取り上げられ、身寄りの有る者や、富める者は差し入や見届の品が許され、米は二十俵迄、銭は二十貫文、武家などは金二十両迄は許される。ところが此れにも目をつけられて、色々名目をつけては取り上げられ、島につく迄に見届の品や金銭も残り少なくなる。

「御代官上級役人の関知しないこととは言え、情無き仕儀です」

と笹本は嘆いて更に続けた。

三宅では、流人船が入ると、三宅配流の者は大林寺、八丈行きは善陽寺へ入れる。殆んど全員が半病人なので三日程は、狭い牢詰の疲れを休ませる、これは沼祓と言って罪穢れを祓って清める訳であるが、寝起き給水の世話人に、朝夕の賄料として七百文から三、四貫文の礼を払う。見届の品、金銭を持つ者は賄賂を与えて一汁でも

多く口に入れようと目の色を変えて狂奔し餓鬼道となる。

四日目にくじ引で村配りが決められると、各村の村役五人組世話役の後に流人共が、新着流人を迎えに打ち寄せ、郷土の宜みや見届け金品のある者を先に引き取って家割当とし、身寄り無く貧しい者は流人小屋に送られる。地獄の沙汰も金次第であった。

流人の衣食は一応割当五人組の家々廻り持ちで給されるが、島民自身が貧しく常に飢えているので、流人は国地での生業を活かしたり、船人足や山仕事で手当を受けて命をつなぐ、何の手仕事も出来ない者は朝夕家々の軒下に立って、勧進と唱えて食を求めて非人の有様となるが、到底躰がもたないので、田野、山林に忍んで盗み掘りをしたり、女子供を嚇して食物を強奪したり、果ては飲酒、賭博、喧嘩、傷害、女流人との乱交、と風俗の乱れは島人に悪影響を及ぼし、島役人一同の悩みである。

と島人の困窮や流人の非横を包み隠さず述べる笹本新兵衛に、簡堂は大島の藤井政や、新島の前田道英とは全く違う人物と、興味を覚えた。

七島の島役人は、北条氏支配の名称が残っていたり、島の大小に依って違いがあるが概ね島役人は、神職兼帯の取締役、地役人が代々世襲する。村には名主、年寄、組頭、百姓代等の村役人がいる。陣屋、島役所等の書記村役見習、大組頭、五人組頭、作方世話人、防禦方役、浜役、陣屋番等の下役迄を総称して地役人と云う島もある船舶航行については陸の支配とは別に水師（水主）以下、船頭、頭、船年寄、蔵役、立会役等の船役がある。これは船の大小で大船年寄、小船年寄のように区別して呼び、別に特別の権限を持つ官船船預り役、船主がある。

三宅島では、古来より神職、名主を兼ねる島代官が島中を取り仕切っていたが、寛政の初め笹本新兵衛の祖父が新畑開発の功によって島役人に選ばれた。同時に五村それぞれの村役人も島役人同格に扱かわれ、五村の寄合合議で重要なことを決めてきた。

そんな経緯があって当代新兵衛も、島の為に尽して人望があり、今は島全体を束ねているのであった。

今日も陣屋牢の女流人を自から訓戒する処であった。女流人の満海は島の男共を誘惑したり、流人仲間との男女問題で度々争い事を引き起して地役人を手古摺らせ、何度も陣屋牢に入れて罰しても改めなかった。

「宜しければ御代官にも、蔭より御覧くださりませ」

と言うので、簡堂は陣屋の櫓の蔭から検分した。

仕置場に曳摺り出された満海は、島の女と違って色白で女流人の定めの禿頭が却って若々しく見せ、迚も五十歳とは見えない、半袖単衣の荒縄帯に破れ股下で腰をベッタリ落して、横向きに頂垂れている姿には怪しい色気すら漂っていた。此れでは、重い俵を頭に乗せて船荷を運んだり、肩に天秤を担いで遠い畑に水を注ぎに何度も往還して、真黒に日焼した島の女が赤い扱きをちらつか

せたり、江戸風に歯を染め、眉を落して装うとも迚も男を狂わせる満海の魅力には及ばない。

満海は地役人の声高な叱責や、笹本新兵衛のことをわけての訓戒なぞ、何処吹く風かと平然と聞き流していた。

暫くして新兵衛は

「不手際な仕儀お目にかけて面目御座いません、概ね流人共は、あの様に強情で御座りまする」

と言った。

簡堂は、

「到底、威しても透しても利くものではなかろう、暫くは牢に繋いでおくが宜かろう」

と立ち上って、予告して集めてある伊ヶ谷村の流人の訓戒に大林寺に向ったが、気が重かった。

簡堂は本堂の縁に立って境内に坐っている三十人程の流人を見渡した、新島流人とは何処か違って檻褸を纏った獣の群が蹲っているように見えた。俯いて痩せた背首だけを見ての訓戒の言葉が、唯、型の如く流人達の上を風のように流れていくように思えて空しくなった。

陣屋に戻って茶を喫していると、伊ヶ谷の村中が騒がしくなった。何事かと訊くと、沖に鰹の大群が回遊したと云う知らせで、村中が伊ヶ谷の船着場に駆け集ると分った。陣屋の物見台から見ると屈強の男共が村中の舟を集めて、掛声も勇ましく沖に漕ぎ出して行った。

夕刻、鰹を船槽一杯に釣り上げて次々と漁船が戻ると浜は水揚げで大賑わいで、女子供や流人までが浜を走り回っていた。随員の小者が聞いた話では、伊ヶ谷だけでも千尾以上でこれから島中が鰹節造りに忙しくなるとのことだった。

夜になっても漁火が海上に星のように並んでいる、夜も鰹を釣り上げるのかと訊くと、漁火に飛び込む文鰩（飛魚）を獲るのだと言う。好奇心の旺盛な松本実甫は直ぐ小者の利吉を従えて浜に飛び出し、漁夫と一緒に舟に乗り、小半刻程で一尺程の飛魚を十数尾獲って帰った。

騒ぎは村中夜遅く迄続いていた。

江戸鉄炮洲の島会所で売捌く魚の干物の多くは、此の時期の新島、三宅島の漁獲に依るものであった。簡堂が江戸出帆の時に食べた臭味のあるが旨い干魚もそれであった。其の裡、笹本新兵衛が、その干魚と島産の藷焼酎を持って夜咄に来た。

毎年三月七日には巫女三人が后明神へ湯花を捧げて鰹漁の多いことを祈り、初鰹は后明神に真先に奉納する。

巫女三人が祈願するのは、島の言い伝えに、昔近江国の琵琶湖の漁夫が、年々漁が少くなるので、竜神に漁猟を多くして呉れれば女一人を与え仕ると誓った。翌日忽ち漁夥しく獲れて喜んで家に帰ったが、鬱々として顔色も冴えなかった。その妻が夫の蒼白な顔を不審に思って尋ね、其の訳を知って俱に憂い泣いていると、此れを知

った娘二人が、父と竜神の誓いならば此れに従う、とお互いに辞譲していると、大蛇が戸口を囲んだ、妹が白鳩となって近江の湖水から伊豆七島へ逃げると、大蛇も此れを追って海を渡った。白鳩は三宅島の三島明神に助けを求めた。明神は所持の三剣の一振を伊ヶ谷の后明神に授け、一剣を新島の差手の明神に与えて倶に扶けて大蛇を斬り仆し、頭を八丈島に拋げ、胴を新島に投げ、尾を大島に捨てた。其れより三宅島には蛇は生棲せず、八丈には蛇が多く人を刺し、新島には蛇が多いが人を刺さず、大島の蛇は人を害す。三宅の島人は三明神が大蛇を仆して呉れた感謝の祭祀を、白鳩にかかわる三人の女に因んで三人の巫女にさせるようになった。

簡堂は床に就いてから、此の伝説が大古より遠くは琉球、四国九州より、近くは紀伊、熊野、遠州、などからの漂流民が七島に流れ着き、苦労して島を拓いた物語りを子孫に語り継いで伝説となったのだろうと思った。

四月二十七日（五、二〇）　簡堂は早朝陣屋を出立して雄山の山裾が西海岸に迫る十町ばかりの山道を南へ行き、朱鷺の飛び交う繁みの城山に至った。島人は為朝の城址であると伝え懼れて付近の樹木の一枝一葉をも取らないので、タブなどの老木が鬱蒼と繁っていた。

七島は何処でも為朝の由来、古跡があるが定かでない、人が滅多に入らない城山の樹々の高みには郭公が鳴き、杜の奥には鶯が頻りに囀っていた。

銃猟を好む簡堂は人を警戒しない朱鷺を撃ち乍ら阿古村に入って昼食を摂り、再び林道を南に半里程行って、富賀神社に詣でた。島第一の神社で神輿庫などもある大社であったが、十一月の初酉の日の祭礼迄は拝殿より奥は入ることを厳禁されていた。

帰路は、錆ヶ浜より舟に乗って北に向い、今岬の下を航行すると、雄山の熔岩が海に流れ入って凝結した黒い大岩や、痘痕のように穴のあいた熔岩石が続いていた。城山の下に温泉の湧く湯の浜を見て暮れ方に伊ヶ谷に着いた。

四月二十八日（五月二一日）簡堂一行は此の日も早朝に陣屋を出立して伊豆村に向う。途中は雄山西麓の山道なので榛や篠竹が密生して頬白が盛んに囀っていた。

笹本新兵衛に依れば、山や森には野鳥が多く、磯鵯、目白、啄木、鶯等が賑かに囀り、緩やかな山腹の草地には野生馬や野牛が多いとのことだったが見えなかった。

伊豆村に入って先ず義倉を確かめる。此の島には蛇が生棲しない為か鼠が多く、畑の被害も多いので義倉も鼠害を蒙っていると予想したが、厳重な外囲いに白砂を敷しめた敷地内の三棟の倉庫は、鼠返しの工夫もされて堅固な錠も下されていた。柵内の番小屋には五村の若者が盗難防止に交替で詰めていた。

敷地内の別柵内に『御蔵納屋』と呼ばれる御蔵島の蔵も二棟あった。御蔵島は周囲が断崖絶壁なので国地よりの船は着けず、御蔵島の物資は三宅に揚げて此処へ納め日和を見ては小舟で運ぶのである。

三宅五ヶ村は険阻な山や深い森で境をなし、普段は往来も無くともすると反目し合う程なので、

「神着ノ殿バラ・伊豆上藪、伊ヶ谷ハ名所デ金ドコロ、阿古ハ頑固デ糞ドコロ、坪田ハハモチエーデ、ワカラナイ」

などと流人達が戯れ唄で村々の特色を揶揄している。

日頃は仲の悪い村人も、度々の飢饉や、山焼など事あるときは助け合い協力するので、義倉の番人役も良く勤め守っていた。

随員の岡義卿が足軽と内を改めると、米、麦、粟等三百俵が規則正しく積み納められてあった。

義倉の検閲後、村外れの樹木や山藤で昼でも暗い坂道を平岳の方へ登ると、石蕗が一面に茂る坦らな一角に出た。其の外縁の椎、楠などの大木繁みに薬師堂が在った。

九柱で三間四方程の小堂宇であるが、内陣に金銅の薬師如来立像が祀られてあった。蓮華座共に四、五尺程であろう。円やかな尊顔ゆったりとした容姿である。胎内に如来仏を蔵し堂宇の棟札に高麗国某の文字があったと云う、伝説に依れば昔、村浜に夜来の風浪で打ち寄せられた筏に、本尊、仏具を納めた堂宇が括りつけられてあった。村の雌牛が集って引揚げてきたとか、恐らく高麗の国に悪疫が流行した時、仏に祈願したが一向に効き目が無いので筏につけて海に流したのであろう。本土の名ある大寺に奉安しても相応しい程の如来像であるのに、南海の小島の小堂宇に寂寞として過されるのは惜しもの、と簡堂は嘆息して去った。

薬師堂を出て、紫陽花が咲き零れる山道を、眼下に大久保浜を見乍ら東へ十町程行くと神着村であった。

此処の島役人壬生兵部晴の出迎えを受け、その屋敷に休憩して昼食を摂った。三宅島の島役人は村ごとに居て、村役名主が就いているが、神着村は神職の壬生兵部晴が兼帯している。壬生家は三島明神の後裔で、伝説の大蛇を斬った剣があると言ったが、簡堂は、神代の剣が現存するのは訝しく、拝してから云々するのは却って不敬なので、畏れ多いからと拝するのを辞退した。

壬生兵部晴は残念相に

「然からば、近くの興済寺に流人英一蝶の壁絵が残って居りますれば、帰り路でもありますのでご覧なされては如何が宜しければ手前ご案内申し上げまする」

と言った。長谷川寿山も、それは一見に価すると言うので寄って見ると、寺の境内の観音堂の壁に風神、雷神が描かれてあった。

絵は良い絵具が得られなかったのか、処々剥脱し長い年月潮風を受けて変色していた。それでも長谷川寿山は、

「流石でご座います。手前ごときには到底及びません」と見入っていた。

壬生兵部晴に依れば、一蝶は本名多賀助之進、世相風刺のカルタ、『当世百人一首』が幕府の忌諱にふれ、元禄十一年（一六九八）三宅へ流罪となり、宝永六年（一七〇九）綱吉の死、家宜への将軍交代で赦されて帰国した。此の時の全国の特赦八千八百人、多くは生類憐愍令の罪人であったと云う。

一蝶は四十六歳で流されてより在島十一年間、生きる為に僅かの価で絵を描いた。其の多くは島人が江戸や他島の有福の者に売ったので三宅島には残り少なかった。

一蝶は流人の佗しさに身の回りを世話する島の女を、水汲女として二人の息子を得た、御赦免されると一緒に連れ帰ったが、水汲女は独り島に残されて淋しく生涯を終えたと云う。一蝶は子供を連れて帰国したが多くは母子共に置き去りになるのが、水汲女の哀しい定めである。

簡堂は、安永六酉年（一七七七）当時の伊豆支配代官江川太郎左衛門の『七島への申渡書』の条目に流人の水汲女の禁示の申渡があったが、当然のことと信じ、簡堂も代官就任時、此れを踏習して更に違背者有之は可為曲事者也、と厳しく申渡した。申渡書には

『……略、流人共水汲女差置　死亡又ハ御赦免等ニテモ子供は嶋ニ相残候　左候は愈夫食之損不定候間　流人共水汲女差置候儀堅ク停止ニ申付候　向後流人之女為召仕申間舗候事　但浮田一類ハ年久敷流人ニ候間此分ハ可為前々之通候事……下略』

申渡書では水汲女の生んだ子供が島の乏しい口糧を一層不足させるからとしてあるが、情ある流人が御赦免帰国のとき、取り残される水汲女と其の子供達の苛酷な運命を思って国地に連れ帰っても、風俗、言語の著しく異なる国地になじまず、却って苦労し生活困窮の果てに父親と同じように罪を犯す者も多い。此れを勘案しての水汲女の禁止の申渡は善き掟めなりと簡堂は信じて、その守らざる者の多いのを遺憾に思い島役人共の監督の不充分を嘆いていたが、今度の渡海巡察に依って新島、三宅の配流の苛酷な様子を現に見ると、不図一抹の疑念を抱くのであった。

亦、浮田一類は年久しき流人で国地へ戻ることの無い流人であるから問題はない、として従前の通りと認めているが、慶長十一年（一六〇六）八丈流罪となった宇喜田秀家親子に水汲女として我が娘を参らせたのは、八丈島地役人奥山縫之介を手初めとして、以後村方の有志が此れに習って流人の荒ぶる心を柔げ、悪徒騒動の防止とした。以後、他島に於ても此れを佳しとしたのであった。浮田一類のみに許して他は禁ずるのは片手落だった。

果して水汲女の厳禁は理に叶い、人情に適うものであろうか。簡堂は一蝶の風神、雷神を見上げ乍ら、一蝶が御赦免帰国してから天保の今日迄百余年の歳月が流れて

いる。連れ帰った長八郎と百松と云う一蝶の子の行末はどうなったであろうか、と想い深めていた。

興済寺を出て椿の杜を東に半里程行くと釜底浦に出た。待っていた舟で坪田村に行き砲撃用石室を視察した。近くの海蔵寺にも唐銅の観音像があると聞いたが、風向きが怪しくなったと舟の漕手が急がすので立ち寄らずに、急ぎ釜岬迄行くと南風が強くなり舟航は危険なので陸路をとり、一里の山路を越えて夜になって伊ヶ谷に帰った。

四月二十九日（五、二二）　昨日の風が尚続き海上が荒れているので伊ヶ谷に逗留して躰を休めていた。

午後、地役人が陣屋牢から女流人満海を曳摺出して戒告するのを、簾越しに検聞した。

地役人が

「今後、男共に操を売ったり女渡世の真似などせず、五人組預り宿の家業の手助けなどをして手仕事を身につけ、堅く暮せよ」

と戒めて解き許そうとすると、喜んで畏れ入るどころか、

「何に言ってンのよお役人さン、見届物の仰山ある坊主共が水汲女を抱いていて、無宿渡世の素寒貧の流人がアンマリ哀れだから慰めてやるのが何処が悪いのさア」

と平然と嘯く有様だった。

腹を立てた地役人が八丈島へ島替するぞ、と再び牢へ引立てた。

簡堂は、後で笹本新兵衛に、満海は島替する程のことも無かろう、阿古村へでも移した方が良かろうと伝えた。

四月三十日（五、二三）　一日中海は騒ぎ、潮風が砂を舞い上げて天に抜ける、漁夫は小屋に竜り、良く働く女共の姿も見えず、島全体が此の世のもので無いように荒寥としていた。簡堂も陶枕を借りて終日韓愈を読み続けていた。

夕刻、急に風も止んで沖合の雲間に没する日輪の残映が美しく波に漂っていた。

簡堂は篭居に飽きていたので従者を連れて海浜に出て火箭を数箭沖合に発して閃光を験したりして旅愁を慰めた。

閏四月一日（五、二四）　風向きが悪く、此の日も予定した御蔵島行きは見合せとなった。村の窮民に救恤米三五包を与え、御蔵島の分も「御蔵納屋」に納めさせた。

御蔵島は三宅より五里程南にある周囲一里程の小島であるが、小島に似合わぬ高山が其の侭島をなして、洋上にお椀を伏せた形である。周囲の海岸は断崖絶壁が切り立って船を寄せる処がない。三宅から小舟で春より夏の間に、風向き日和を見て往来し、冬は全く孤立する。

従って宝暦十三年（一七六三）迄は三宅に属していた。

産物は、黄楊、薪、椎の実、椎茸、海産物もきくらげ、鰹節ぐらいで、三宅島役所の記録に依れば、僅か二拾八軒の島民が、急な斜面の僅かに開けた北側の山麓に五町六畝ばかりの山畑を拓いて耕している、勿論飢を治めるに足らず、全島剥食疲骨の窮民である。

天の扶けか良質の黄楊が自生する。櫛、印章、義歯の材料として江戸へ移出し、売上の冥加金を払って食糧、生活物資を買っていた。

御蔵島で一尺四寸程に揃えた黄楊七、八百本を積んだ一艘の価が四百両程にもなるのであった。善良にし愚直な島民は、それ程高価となるのを知らず、長い間三宅の村役人、島会計、江戸の取引商人を益すばかりであった。正に三宅にとっては宝の島、蔵の島だったのである。

処が、正徳四年（一七一四）大奥の医師奥山交竹院が大奥絵島事件に類する罪で御蔵島流人となった。軈て交竹院は自分の見届品が三宅を通して来る度に、海没したり減量されたりして満足できないことから、御蔵島の黄楊の収益の裏面に気付き、御蔵島の鎮守鍵取明神の神官加藤蔵人と密かに調べ上げた。

三宅の地役人が、黄楊売上の中間の利益を私腹するばかりか、御蔵島の神官加藤蔵人の曽祖父加藤伊織が三宅役人の仲介の労を犒う為と、便宜の上から御蔵島黄楊伐採を許す神官の印を貸与して仕舞った。その貞享三年（一六八六）以降、御蔵の黄楊、薪は乱伐され、三宅役人が私腹を肥すばかりか、官位を得る為の資用にもこれを充て、果ては黄楊を担保に莫大な金を江戸商人より借りる程になっていた。

苦労して調べ上げた交竹院は、江戸在任中より親交のあった大奥の侍医桂川甫筑を通し、時の伊豆支配代官斉藤喜六郎を動かして、享保十四年（一七二九）七月に裁断を下した。

「御蔵島は爾今、三宅の支配より離れ、御蔵島の神官、名主、年寄の村役で治めること。亦、長い間の三宅の不正を贖う罪として三宅村役人一人を八丈へ追放する。尚、勝手に御蔵島の神官印を移譲した加藤伊織は不届であるが既に故人故罪不問」となったが、祖先の罪を自から負って加藤蔵人が八丈に去った。奥山交竹院は御蔵島分離後僅か一ヶ月の後五十六才で流人の侭没した。

御蔵島は三宅の支配は脱したが、洋上の孤島の自然の悪条件は変えようも無く、流人への見届物も、官給物資も、黄楊の見返り物資も三宅に揚げて「御蔵納屋」に留め、風向き、日和を見て小舟で運ぶことに変り無く、行政分離に執念を燃やして望みを達した者も、その恩恵を受ける間も無く死んだ。

だが、在島四十年、寛政八年（一七九六）七十一歳で島に没した不受不施派流人僧応智院日縁は、更に御蔵島を住み良くしようと、三宅の村役人が御蔵島の黄楊を江

戸で売り、冥加金を納めて食糧、衣料品を島に運んだ交易を、御蔵島の名主、村役の名に於てやるように教えた。

黄楊を鉄炮洲の島会所で売り代金は両替商に預け、其の利子を以って御蔵島の島民の衣料、米穀を購う工夫を加えたのである。其れに依って御蔵島の暮しは良くなり島民は其の恩恵を与えた日縁の遺徳を長く偲んでいた。

だが笹本新兵衛は、三宅と御蔵は新島と式根のように元々一つの島で、苦楽は同じである。御蔵の黄楊がいくら高く売れようが、見返り物資や食糧は、僅か百人程の島人に使い切れず、江戸の両替商の帳面に何百両預け金が溜ろうが猫に小判で使い道がない。それを三宅の千八百余の島人に分けてやるのが天道と云うものであろう。

国地で罪を犯して流された者への見届物などが風浪で流されたり、見届物送り状と違うからと言って素朴純情な島人を焚きつけて公儀へ訴え、有らぬ騒動を引き起したことなど、三宅の村役人一同濡衣を着せられたようなもので、今以って甚だ迷惑のこと、と嘆いた。

笹本新兵衛は島記録にある不受不施派の流人僧への江戸の信徒よりの見届送り状を簡堂に見せた。

送り状　写　（一人の僧への送り状）

一、米　四俵　但四斗入　一、醤油一樽　但五貫目入
一、春麦二俵　但　同入　一、味噌小樽二但六貫目入
一、大豆二斗　一、灯油一樽　但三升入
一、小豆三升　一、塩　一俵但一斗五升入
一、胡摩二升

〆　九品

見届物でも此れだけある上に、二十両、三十両と金を持つ流人僧は、家を買い水汲女を置いて暮す有様で、一方身寄の無い者や、無宿者は共に飢えて「勧進おたのみ申します」と哀れな声で家々の戸口に食を乞う。地獄の沙汰も金次第とは言え無惨なことである。

そればかりか、土地焼け、用水乏しき島では米一粒も産せず、僅かの扶持方米に粟、稗を入れての粥を食し、冬の荒天には山芋を掘り、草の根を葛にして飢を凌ぐ島の暮しの中に配流された破戒僧が国地と同じように飽食している上に、海運の困難の為に見届物が届かないのを島役人の不正とのみ非をあげるのは何事であろうか。

こうした複雑な訴訟問題が昔から絶えなかった御蔵島は、航行の難や食料の不足もあって、文政五年（一八二二）流人近藤啓次郎が名主殺害事件を引き起して断罪されて以後流人の配流は絶えて無かった。

近藤啓次郎は、松前奉行支配調役下役の近藤斧八の伜であるが、喧嘩賭博を繰返して素行悪く、傷害事件で文化十五年八丈流罪となったが、八丈でも粗暴の振舞多く食物のことで傷害事件を再びおこし、文政四年（一八二一）御蔵島へ島替となり、翌年名主と争って殺害に及び断罪されたのである。文政十年八丈流島の近藤富蔵とは元より別人である。

笹本新兵衛の慨嘆は尚も続いた。

天保九年の今は、黄楊の値低く、見返りの物資も入らず、狭い土地と食の不足で飢える者も多く、人口の増加を恐れて一戸の長男のみ嫁を娶り、子供は二人で止めている。従って一戸には嫁にも行けない娘や、一生独り身の男などの肉身二十人近くの大家族で暮している、生活は益々苦しく、子供の間引は日常のことである。

簡堂も各地の代官を経ているので、本土の農村でも間引の行なわれているのを知っている。将軍お膝元の江戸近郊の村々ですら、正保元年（一六四四）の郷村高帳にある戸口、人数が天保五年（一八三四）の約二百年後の郷村高帳の戸数人口と殆ど変化が無いのである。例えば上練馬村は四百八十戸、千八百人前後の侭なのである。

だが七島のそれはあまりにも原始的であった。特に御蔵島は残酷であった。娘が身篭と子荒し草を呑ませ、或いは海岸の崖から飛び下りたり、喬木の枝にぶら下って跳んだり、満水の飼葉桶を何度も持ち上げ下げしたり、納屋、牛小屋の横棒で下腹を圧迫したりである。それでも生れてくると濡れ紙を顔に乗せて息を止める。砂の中に生き埋めする無惨さであると云う。

簡堂はあまりにも惨酷な此の習俗を島に渡って具に見聞し良く諭して悪習を止めさせようと思った。

風待ちの一日、笹本新兵衛の尽きない話に聞き入っている裡に夕刻となった。朝早く独りで雄山登山に行った松本実甫が帰ってきた。性来の探険家なので伴も連れず紫陽花の一面に咲く緩やかな道を登って五合目に至り、其処からは道も無い急坂を這い登った。八合目以上は熔岩ばかりで、熔岩の裂け目に石を投げると、暫くしてから幽かに水の音を聞いたようだと言った。

火口原には幾つかの山頂があって、未だ糸のような煙をあげているのが、天保六年（一八三五）噴火の山であった。雄山は大昔から度々山焼があったが、明和の大爆発は物すごく、前々より雷鳴地震が頻りで島人は恐怖の日夜を重ねている裡に、夜半天地に響き渡る大音響で火山岩を噴き上げ、忽ち火の熔岩流が山の巽に流れ下り、坤の山麓にあった大きな新澪池からも火山岩が花火のように吹き上って海上に散乱した。

幸い阿古村より一里程離れていたので死者は無かった。だが、其の辺りは水の乏しい三宅島の中で僅かに真水の溜る大路池や新澪池があって、畑地もあったが悉く熔岩に埋り、山腹の椎、杉等の原生林も焼き倒され、焼けた大木が僅かに枯木のように立ち残った。七〇年余り経た天保の今日でも、其の枯れ木を貧民の薪の助けにしようとしても岩のように固く、一枝伐るのも一日がかりの有様で役立ずであるとの事だった。と実甫は疲れを忘れて見聞を語った。

閏四月二日（五、二五）　風向きが芳しくないので御蔵行きは止めていたが、随員達が早舟に馴れるように三宅島の南西二里程にある大野原島に行った。大海の真只中に百丈程の三つの大岩が鼎のように突き立った島であった。刀を立てたような岩を子安根、算盤玉を重ねた四角の塔のようなのを大根と言い、海老が足を張ったような岩を海老根と言った。遠くから見ると海中に大岩が三本突き立っているように見えるが近付くと、一つの小島で岩の間が洞窟となっていて舟が通れる。静かな洞内なので艫の響きが洞内に反響して鐘の音のように鳴り響いた。海鳥が驚いて飛び立ち、海獺が絹布を裂くような声を立てて這い廻って海中へ逃げ込んだりの別天地であった。

簡堂一行は大根に登って不思議な洋上の高みで昼食を摂った。長谷川寿山は弁当も開けず、三脚台を横たえ奇岩の写生に夢中だったが、風向きが怪しくなり帰途に就いた。舟夫達が艫を忙しく漕いで忽ち伊ヶ谷に戻った。

閏四月三日（五、二六）　朝は曇っていたが次第に天候は回復して、午後には四方の雲も消え洋上は遥か遠く迄晴れ渡り西北方に新島、利島の間を通して伊豆の山々が青く黛を引いたように見え、その上に富士が懸っていた。夕刻には赤い夕日を受けた富士は珊瑚のように映えて、神々しい程に美しい。簡堂は此れ迄の順調な巡察に満足し、南海の風浪も噂程に非ずと緊張を緩めて、明日は御蔵島に渡るぞと、其の準備を命じた。　続く。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

※同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

編集子のメモ

◎この第三十一号から表紙絵を「風神」に変えた。十号を限り、意欲の一新を期し、いっそうの努力を積もうとする決意も新たに、いよいよ風雲を呼ぼうする心意気をアピールしようとするものである。

◎本号は四人、四編に落ち着いた。第三十記念号に引きつづいて矢継ぎ早の、同人誌としては離れ業であったが、書き手に事欠かなかった。結社の底力に遺憾がない。

◎三戸岡道夫の「柳の怪」は前作「江戸妖草伝」につづく時代物ミステリー、氏の意図する中間小説として成功を収める作品。目下氏は某出版社の依頼をうけ、一方に長編をほぼ書き終えるという充実ぶりだ。

◎山口健二の「木枯らしの中の酒屋」はベットで書かれた作品。作者のそうした必死の執念にうたれずにはいられない。一杯飲み屋仲間の哀歓を描き、人生を描き、まさに鬼気さえ迫る出来栄え、これぞ文学の窮極を行く作品という感を与える。エンダビー沖の輸送船撃沈という運命から九死に一生を得たYさんのことは初めて自ら物語り、この部分のやや冗長は作者も自覚するところだが、書いて意義あるもの、家族の方に、また平和に慣れた人々に是非読んで貰いたいYさんの秘史として貴重な文字をなしている。

◎「小説近藤富蔵」の金子正義は悠々のペースで第二回。計らずも江戸期公務員世界を描き、中心人物の周辺から核心に迫ろうとし、丹念に資料を駆使し続けて止まない。

（お）

「まんじ」第三十一号

平成元年二月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一　東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本内
「作家群」（まんじ）編集部

☎〇三（二九一）六五五七　ますもと

郵便振替口座　東京二―一九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三―十一
☎（261・5743）

目　次

Gone are the days ……山根三枝子：1
老寿病院の小さな出来事……山口健二：17
万年筆……井上二三男：31
桃李庵のアルバム……大和禎人：35
〔連載〕
駆ける銀行（第一回）……三戸岡道夫：56
小説近藤富蔵の生涯（第三回）…金子正義：61
編集子のメモ……78

表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

Gone are the days

山根三枝子

朝子からの手紙

「まんじ三十号」の私の作品を楽しく読んで下さったそうでほんとに感謝です。つづきを読みたいと言って下さる程私を元気づけて下さる言葉はありません。あなた達の言葉に嘘やお世辞のないことは信じていいと思いますので。この作品は本当につたないものなのに喜んで読んで下さるということは即ちこんな私でも受入れていて下さるということでやはり私を幸せな思いで満たしてくれます。それで又書き続けるエネルギーが生み出されたことを感じるのです。

ただ、塾の生活を知らない人達にひと言、弁解のようなものをどうしても書いておきたいと思うのです。と言いますのはこの不完全な日記からおし計って昔の津田塾の姿を決めつけて欲しくないのです。ほんの一部分しか表現していないし又私は決して模範的な学生ではなくむしろ落ちこぼれに属していてあまり平均的な学生ではなかったように思われるからです。と同時に又この作品から五十年も昔の学生生活の或る面をくみとっても貰いたいのです。

昭和十四年に卒業して十五年秋に東京に出て来て結婚するまでは私は台北市の自宅で過ごしました。この一年半そこそこの間にも国の内部事情は一般の人達の知らぬ裡に目まぐるしく変化していたわけでした。日支事変が十年近くも続いた後であり翌年には第二次世界大戦に突入するという昭和十五年には戦時色も大へん濃くなっておりました。「紀元は二千六百年」などという国粋主義高揚のための歌が流行っていて歌のメロディーがあちこちから流れておりました。ただ一般の人達には戦局が如何なる状態かと云う真の情報はなくてたゞお米が配給制度になったり純綿品がなくなって来てスフと言う新しい・・せん維が使われるようになり日常生活の不自由さがじわりじわりと進んで来ておりました。そして反戦的な言葉やスパイ活動を助けるような言動は極度に慎しまねばなりませんでした。そんな時代で内台航路の船舶は次々と

軍需用に回わされていたため船腹不足となり台湾から内地に運び出す荷物の重量には可成りの制限がありました。それでお嫁に行くといっても布団や衣類や一寸した小物類は運べましたが重い書籍や沢山あったノートの類は運ぶことが出来ませんでした。五年の後にはあんな風に敗戦し又あんな風に沢山の人達が船に積まれて引揚げて来ることになるなんて全く誰も想像すら出来ないことでした。いつか又戦争が終った時には今迄通りの生活が戻って来て本もノートも写真なども手元に運ぶことが出来るものと信じ込んでいました。だから皆実家において来てその結果失われてしまいました。

私は学生時代の学びを大変貴重なものに思いノートは四年間のものすべてを同じ規格のルース・リーフ・ペーパーに整理して書き、ケースからはずして学科別にとじておきました。後日ゆっくり読み返して消化しなおしたかったからです。こういった材料が今残っていればもっと津田塾での本筋の学生生活を充分にそしてもっと意義深く書き表わせると思うのですが誠に残念です。講演会の内容や読書に関する感想などもあったのですから。今、手元にある大へん古びて半分破れた所もあるようなこの日記は意識して学業に関すること以外のみを書き綴ろうとしたことを今でもはっきり覚えている位です。ダブらせないためでした。実家を去る時にこれは家人に見られたくないと思ったので衣類の間にはさんで持って来ました。

ノートと同じルーズ・リーフ・ペーパーの裏表に書いたものを年度別にとじたもので嵩張るものではありませんでした。以来疎開も含めて昭和三十八年に現在の自家に落付く迄に九回も引越しがあったり又東京空襲では持物の半分以上は失ってしまったのにこの日記は私の身辺から離れることなく保存されて来たのです。別に意識的に大事にしていたわけでもなかったようですがラッキーだったと言えるのでしょう。私のヴァイオリンと同じ運命だったようです。

そして卒業して五十年以上も月日を経たきょう此頃になって読んでみると完全に忘れ去っていたものを新たに思い知らされたり、その時に気付かなかった事実の裏側に光をあてられたり、又他人の親切や好意を今頃になって発見して感謝したり、という具合でこんな乱雑な日記でも無いよりはましだと思うようになりました。

そして気付くことは意外に私はあの時代から精神的に成長していないということです。又人間ってものは二十才位になると根本的には一生変らないような一つのものに辿り着いているんだなということです。遊ぶことばっかりのような日記であることへの説明を一寸ばかり付け加えさせていただく次第です。

勉強に関することで僅かばかりながら記憶に残っていることと言ったら――。

あなた達（塾の友人）は覚えてますか、島原逸三先生の哲学概論を。プラトー・アリストテレス・カント・ベルグソンといった哲学者の学説を分かり易く説明して貰いましたね、私はプラトーの「リパブリック」が大へん納得のいく理論で気に入ったのを覚えてます。どの程度の講義で又どの位理解していたのか分かりませんが。国とか国家という言葉は小学生だって知ってますが内容を哲学的に考えると難しいものになってしまいます。最近は神道を宗教とする天皇家の存在する日本国の伝統的な体質とか、又異教や改宗を厳禁しているイスラム教の世界に関わる事件などで改めて国とは……と考えさせられました。試験にかわるリポート提出では私はベルグソンを選びました。「純粋持続」に就いて書いたように記憶しています。銕子さんがカントの哲学を小論文にまとめていたことに対して尊敬と驚きの気持をもちました。

東洋倫理では「家」ということを随分くわしく学びましたね。試験の時には「善とは何か」とか「自分とは？」等というような問題が出たこと覚えてますか。

早稲田大学から講師で来ていた吉川先生には万葉やら源氏物語からの抜粋を学びましたね。恋とか男女間のことを歌ったものなど、先生自身すっかり悦に入って講義していた顔がチョビひげと長めに刈ったガリガリ頭と共に思い出されます。私達、受信機の方は鈍くて先生にすっかり協調は出来なかったもののそれでも先生の気持に合わせて先生が笑えば皆もドッと笑ったりしましたね。牛島義友先生の心理学ではねずみやチンパンジーの外界からの刺激に対する反応をみる実験によって人間の学習課程を研究した結果の報告などありましたね。練習曲線というものなど面白いと思いました。又何んにも練習しない間に練習曲線が上昇することもあるということも面白いことだと思ったことがありました。夏休みの宿題では幼児の行動の継続的観察データを提出することがありました。どうやら其等は先生の論文に必要なデータにされたとかいうことでしたよ。

ミス・タムソンの英文学概論では English Prose and Poetry by Manly という大きくて立派な本を使いましたね。その本のお値段が高価であったことなども覚えてます。Geoffery Chaucer (1340-1400) の Canterbury Tales などで色んな人物が生き生きと出て来る様をタムソン先生がまんまるな目をしてとがった鼻、やせ気味のあごなどを動かせて大へん面白く説明してくれましたね。同じ本を使って西脇順三郎先生が英文学史、主にMidle English の詩や散文を講義してくれました。Thomas Carlyle(1795-1881) の Sartor Resartus も一部分だけでしたが学びましたね。あの本は英文学の宝庫のようなもので失ってしまったことは残念でした。西脇先生は当時未だ若さも残っていて素敵なおじさまに見え上級生の人達がチャームされちゃって一寸騒いでいたよ

うでした。

Shakespear の作品は "Julius Caesar" と "As You Like it" を原書で丁寧に読みましたが彼の作品の理解と鑑賞の力を与えられたと思います。読書の祝福を与えられたとでもいいましょうか。

未だ他にも色々な先生方が記憶に残っております。そして彼等が笑ったり真面目な顔付になったり或は又緊張した目付になったりというさまざまな表情がまぶたに浮んで来るのですが、もうすべての先生方はこの世から去って行かれました。丁度私達の青春の日々が立ち去ってしまっているのと同じように。そう思いませんか。

昭和十三年の日記には何が書いてあるでしょう。

一月一日

七時半に起床。寮に居残っている人達だけで九時頃お雑煮を祝う。塾長をはじめキャンパス内の先生宅に友人達と挨拶回りをした。十時から小講堂で始まった元旦の式に参列。午後自室で英文学史のノート整理。夕食後に北海道出身の江端さん、山北さんが私の室に遊びに来た。上級生なのでこんな時でもなければ遊びに来たりはしない。ヴァイオリンを一寸弾いてみてと頼まれて一寸だけひいてみせてあげた。山北さんにドレミファを教えてあげた。夜は居残りの上級生下級生みんなで日本間に集まって百人一首のカルタ取りをして遊んだ。小学生時代から歌を全部暗記していた私は強いほうだった。

一月二日

英文学史のノート整理をした。ヴァイオリンの練習一時間半。首がまわりにくくなる。"Under the Green wood trees" Thomas Hardy (1840 - 1928) 作を終りまで読む。かわいらしい小説。午後からは暖かな陽差しに誘われてお散歩に出る。温室に立ち寄って江端さんが百合とカーネーションを買った。いい香り。おじさんと三十分近くもお喋りをした。いつも黙々としてお花とだけ交際あっているような感じのおじさんの豊富な経験とか感情が分かって面白かった。

一月八日

蜂谷先生の所に今年初めてのレッスンに行き帰りに横浜にまわる。叔母宅に一泊して翌日午後に妙蓮寺の富川さんの家を訪れた。

富川家は朝子の父母の共通の友人宅で母から一度訪ねてごらんと言われていた。小学生の頃、母につれられて遊びに行ったりしていたので。御主人は元台北高校の英語の先生でありその時は駒沢大学の先生をしていた。その家の一人息子は旧制高校時代に背髄カリエスを患ってとうとう中途退学しどうにか健康を取戻してからは新制作派の佐藤敬という一寸した画家について好きな絵の勉強をしていた。売れるかどうかも分からない絵を画くことをやっていけるだけの資産を富川家は山口県の萩市に持っているんだということも聞いていた。家の真中にある広い洋式の居間の中央でストーブが暖かく燃えていて南に向いた窓ガラスの外に庭がひろがり、ずっと南に向かって傾斜していた。そして桃の木や梅の木其の他の果物のなる樹や珍らしい野菜などが栽培されていた。奥さんが庭を案内してくれて楽しそうに色々説明などしてくれたが朝子は充分に関心がもてなかった。其所の息子は和夫といって何かしら人をひく個性をもっていた。

彼は高等学校の時にフランス語で大学の法学部に進むというコースをとっていただけに仏語に又仏文学に親しんでいたようであった。それで朝子がおいとまする時に「風車小屋だより」というドーデ作の短編集の文庫本をプレゼントしてくれた。そして

「これ一寸いゝから読んでごらんなさい」

とほゝえみながら言った。僕はこれ一寸好きなんですよという言葉は出さなかったが彼のほほえみはそう語っていた。

朝子はすぐにではなく一年位もしてからそれを読んだ。そしてドーデの良さが分かった。「ああ、彼はドーデの作品と同じようなゆったりした雰囲気をもった人柄だな」と其の時思った。しかしその本の感想やお礼などはとうとう言わず仕舞だった。

彼の友人でもある義兄から聞いたのだが——。

彼は何年か後に佐藤敬の斡旋で自分の所に出入りしていたモデル嬢と結婚した。可愛らしい性質の持主で勿論その肉体美は抜群。何かしら香りをはなつような魅力を持っていたそうだ。彼女は聾唖者でありその為か一層無邪気な表情をしていたそうだ。ポーズのとりかたなどの指図もよく聞き分けることが出来なかったりでどんなにか羞恥と困惑に満ちたしぐさでその絵かきを悩殺したことであろうか。そしてあえて障害者と結婚した彼、現実の物体を見る時にその物体を越えた所に視線をおくような目付をしていた富川家の一人息子。好きとか嫌いとかいう人間的な思いを超越して、何故か忘れられぬ印象を朝子に残した人間であった。佐藤敬と佐藤美子(声楽家)の媒妁で挙げた結婚式の写真を義兄宅で見ることが出来る。佐藤夫妻は故人となっている。

なお富田家は戦時中に都会生活に見切りをつけて萩市に一家で引揚げた。朝子が新婚時代に彼からやすく売って貰った絵は——それは花の絵であったが——戦災で消失した。

一月十日

授業始まる。

プレイ・"Ulysses" の中で一寸した端役(suitor)として出演することになり練習のため放課後はふさがって忙しくなった。

一月十八日

寄宿舎の委員会で委員長に選挙されてしまった。副委員長にはアメちゃんこと浅田仁子さん。全く気が重い。大した仕事があるわけではないようだが学校の勉強の方だけでアクセクしているのに長のつく仕事は何んとなく荷になって気にかゝる。同学年の人達は私のことをよく分かっているので投票しなかったと思うが下級生の票が集まってしまったようだ。仕方なくなくアメちゃんと二人で委員長就任の挨拶に塾長先生を訪ねて報告をした。

二月十一日

午後七時半から寄宿舎のバーラーではじめての委員会を開く。主に卒業して行く人達のための送別会と記念品のプレゼントに関する相談。

二月十二日

アメちゃんと銀座の伊東屋に行き、プレゼントは塗り物のはがき入れにすることに決めて人数分を注文した。

三月四日 ― 十四日迄

定期試験。

毎晩十二時或いは一時位まで起きていて頑張った。私の勉強の進み具合はほんとに遅々としていて一苦労だ。勉学に対する適性があまりないように感じる。他の人達はどうなのかしら。でも私にはねばり強い意志があると思う。それで落伍しないのかも知れない。私は頭脳のよい人と結婚して自分の子供達にはもう少し切れ味のよい頭脳道具で勉強させたいものだ。体力的には私は頑張りがきいたのだが。小学四年生の時学校のプール（25×10M）を十周泳ぐことが出来たのは女子では全校生中私一人だけであったし女学校では海で遠泳をやったり又大へん苦しい思いをした長距離のウォーキング・レースでは全校九百人中十位以内に入ったりした。しかし短距離のものとなるといつもビリに近かった。

三月十四日

学友会の運動部の委員会があった。主に部の予算編成の為に色々と相談をした。そのあと服装に関する話合いをした。今までは自分勝手な服装で体育の授業に出ていたが新年度からは運動着を軽快なものに改めることにして皆がそれを着用したいということになった。美津濃にそれを注文しに行くことになり十八日に行くことも決めた。河瀬先生のところでとても大きな変った梨をごちそうになった。栗田さんも一緒だった。

昭和の初めの頃、日本国中では青年男女の結核罹病率が高く又そのために死亡する数も大変多かった。塾でも例外ではなく一般に健康状態は悪いようであった。やむなく中途退学する者の原因は主に結核でありその次がノイローゼであり又結婚する為に退学する者もあった。その上リピート（落第のこと）があってリピートと決まるとこっそり消えるように退学していた者もいたようだ。

それで我々の時代には入学時に百人余であった学生数も卒業時には大体七十人余となるのが通常であった。正にせまき出口となる卒業であった。塾側も学生の健康管理には特に力を入れるようになった。その目的のために卒業生の中から選考して中島孝子を米国のオレゴン大学に留学させ二年の勉学の後帰国してからは体育指導や健康管理の仕事にたずさわらせた。勿論校医との協力で。昭和十二年六月某日の朝日新聞には大きな顔写真入りで「オレゴンに咲いた大和なでしこ」という見出しで言葉のハンデにもかかわらずトップの成績で大学を卒業したという彼女の記事が出ていた。私達学生はそのことを誇りに思ったものであったが十二年秋からはその中島先生による体育指導が日常生活の中にも組込まれるようにして行われたのであった。

三月十五日

試験休みに入る。午前中本棚の整理整頓。昼食後皆で相談して寄宿舎での卒業生送別会の折に私達の学年はジェーン・エアからとった寸劇をしようということになった。素敵なラブシーンの辺りから会話の部分を拾い出して劇にすればいいのではないかということで。勿論英語でやるわけで日本語でするとごまかしがきかなくて、かえってむずかしいのだ。出演者はロッチスターとジェーンの二人だけで出来るし、それは選挙で決めた。ジェーンは何んとなくイメージが似ている増川さんに決まり、ロッチェスターは私に決った。やせていて背の高い私は何かというと男役に引っぱり出されてしまう。やっぱり一寸悪者っぽいような雰囲気が私にあるのかな。

試験が終りほんとにホッとする。この四月からは最高学年になるんだから試験を受けるのももうあと秋と春との二回だけで私達も卒業なんだ。陽もすっかり春めいてきている。午後、モン子と玉川上水のどてっぷちの道にお散歩に出た。桜も蕾がふくらんでいる。もう所々が緑色になって来た川辺の草の上にねころんでボソボソと三十分近くもとりとめのないことを喋りながら過ごす。それは主に学生生活の先が短くなってしまったことに対する惜別の思いや未来のことに関する期待や悩みのようなものであった。落ちている細い枯枝を拾ってモン子が耳をほじくってくれた。とっても気持がよかった。夜ヴァイオリンの練習をしてからジェーン・エアの脚本作りを試みた。

三月十六日（土）

朝食後ヴァイオリンの練習。十時のバスで増川さんと蜂谷先生の所へ。先頃からお話のあったヴァイオリンのおさらい会の件だが開催日は五月二十九日、場所は有楽町の保険協会講堂ということに決った由。その時に独奏する曲はローデの八番のコンセルト第一楽章と決まる。帰途おやつにとソーセージを買って帰る。夜は手紙書き。

三月十七日

江端さん達上級生に誘われて体操場に行ってローラースケートを生れてはじめてやってみた。床が木張りなので転んでも大して痛くないが木の接ぎ目などがあってなめらかさがないことが一寸不快だ。歩くことから始めるようにと教えて貰ったが成程そうすると割に早くどうにか滑ることが出来るようになった。とてもとても面白く楽しかった。

色々考えたがロッチェスターの役で芝居することはどうも負担が重すぎるような気がしてきたので井上さんに替ってくれるようにと頼んだら気軽に引受けてくれたので嬉しかった。そろそろ送別会の準備にとりかからねばならない。

三月十八日

午後、井上さんと送別会のことを相談していたら鏡子さんが室に来た。ボツボツ外出しなくてはならない時間になっていたので一緒に出かけることにする。オーバーコートを着て出たものだからあたたか過ぎて汗びっしょりになった。国分寺駅から更に田舎にはいり込んだ修道院のような寄宿舎と学校だけの生活をしているものだからつい非常識な服装で外出なんかしてしまう。世間の人達は春らしく軽ろやかに装っていたのに。銀座で井上さんに頼まれた肉饅やソーセージ等を買い木村屋で鏡子さんとお茶を飲んだ。山野楽器店に行って今度はじめるエチュードのDont（ピーター・エディション）を買った。五時半に神田のY・Wで中島先生に会うことになっていたので食堂で待っていたところ津田の二、三年先輩のピーちゃんと彼女の友達がはいって来た。勇しき女達って感じ、やはり職に就いてる人達は私達のようにボヤッとしてはいないな。彼女達に誘われて一緒に食事をした。すると又台北一高女出身のクラスメートの喜多島さんに出会わし又々驚いたことには一年先輩の吉田美恵子さんにも会う。彼女は日本女子大を中退していたと聞いていたが。

協議会を終えて出て来た中島先生と一緒になり、すぐに美津濃に行った。ブルーマ・ブラウス・ソックス等を運動部の委員会で決めた服装改革案に従って注文した。これまでは大体の人は高等女学校時代と同じモスリンでひだの沢山あるブルーマをはいていたが新年度からのブルーマーは紺サージで腰にぴったり合っていて太ももの辺りにはいくらかフレアをいれて裾をゴムでしめるようにしたものに決めた。ブラウスは白の綿ポプリンの開襟というごく普通の型であった。そしてバドミントンの道具も注文した。用事がすんでから本郷の森永に行き先生はやっと夕食にありつき私は苺のショートケーキを御馳走になった。寮に帰ったら九時半を過ぎていた。

三月十九日（土）

朝ヴァイオリンの練習をしてから蜂谷先生の所に行く。

帰途増川さんと映画「なき虫小僧」と「或る女」をみた。夜は送別会の準備のため模造紙に絵を画いた。中島先生の所にいってロッチェスターのはくズボンを借りてきた。

三月二十日

お化けハウスを作るのにわらが沢山要るというので青梅街道小川新田の方にある畳屋に伊藤さんと二人で自転車に乗って交渉に行く。午前中、リクに面した室の人達が数人自分達の部屋をあけ渡してくれたので其所に色々な趣好をこらして飾りつけがなされた。

テーマは大体次のようなもの。

「小平ニュース劇場」「動物園」

「あなた達の未来のハズ達のいる部屋」

「燈火管制中の部屋の中では」

「Forsaken Merman」（十九世紀の詩人Matthew Arnoldの詩の美しい情景を示すもので暗いブルーの照明を使った。）

リクでは一年生達がエネルギッシュにも壮大なお化けハウスを作ってくれた。すごくエキサイティングで、これ等は皆三階の住人である卒業生には極秘裡になされた。

三月二十一日

今夜はいよいよ寮での送別会。一日中ずうっと皆んなで飾りつけの仕上げにかゝる。

夕食はいつものパ！ティーの時と同じように御馳走があり塾長や他二、三人の先生にも出席していただいた。送る側、送られる側からの簡単な挨拶があり記念品贈呈を済ませてからは余興が始まった。影絵やコーラスそして素晴らしい出来映のジェン・エアの劇等も済み食卓や椅子を隅によせると食堂はダンスホールとなる。タンゴ・コンパルシータ、ジェラシー、ブルーヘヴン、ワルツ・メリーウィドウ等のレコードをかけて女同志で楽しく踊った。頃合をみて卒業生達をお化けハウスに案内したり個室の飾りつけを見て貰ったりした。悲鳴をあげたり笑い声が起ったりで夜中になるまで騒いだ。そして送別会はどうやら無事に済む。就寝は夜中の二時近くになってしまう。ベットに入ってからふとリクの藁に若しも火でもついたら大変だと急に心配になった。リクは反対側のウィングにあって私の室からは一寸離れているが安全を確かめに行こうと強く思った。それだのに立ち上がらないまま深い眠りに落込んでしまった。

三月二十二日

成績発表。

特に賞められもしないし又注意を受けたものもなかった。

大体成績表など全然なかったのに津田塾の学生は本当にコツコツ勉強したものであった。リピートが恐かったせいもあったであろう。塾の専任の先生方は老いも若き

もほとんどがミスであり亡き津田梅子の薫陶を受けた者達で教育に熱情を燃やしていてとても厳しかった。授業中などちぢみあがっていたように恐い先生もいた。外国人の女性教師は割に寛大であったが。そして英語に関する授業、つまり訳読、文法、演習、英作文、リーディング、発音学、言語学、等々、の授業はこれ等の厳しい先生方が受持った。一般教養の授業には早稲田や慶応其の他の私大からとても寛大な男性の講師の方々が来て、合併教室で百人位で講義を受けた。ディヴィジョンといって二十人位で受ける英会話の授業などと比べると気分的に楽でこういった授業は又息抜きの出来る時間でもあった。怠けたいと思ったり内職（英語の課目の勉強）したいと思う人達は教室の一番うしろに席をとった。そして中には持込みのお菓子をこっそり食べたり、ソーセージを食べたりする人もいた。いつか佐野さんが切って回してくれたソーセージは鉛筆のしんの味と手あかの臭いもついたようなものであった。鉛筆をけずったままナイフを拭かないでソーセージを切ったからであった。大つぶの白い甘納豆にペンで目鼻口を描き髪毛を抜いて短かく切り、ピンを使って丹念に納豆に植込んで毛を生やし安全ピンをのばして豆に差込み胴体のしんにした。それにチリ紙その他の紙などで着物を着せると、とても滑けいな人形が出来た。それを順ぐりに回わしていくと皆次々にクスクス笑い出した。講師は気付いたかどうか。人形巡回の途中で講師が一寸沈黙して一点を凝視した時朝子は一寸心臓が止まりそうにヒヤリとしたが別に気付いたのではなく又講義を続けていった。そして真面目な勉強家が後ろを振りむいてにらみつけた。

あの時にらんだ秀才は若死してしまった。

先日寮の委員会が皆にくじを引いて貰って新学年からのお部屋の割りふりを決めてあったがきょうはそのお部屋替えの引越し準備をした。

三月二十三日

午前中に卒業の礼拝式があり外部から中山昌樹牧師が来て下さって式が行なわれた。午後からは学友会の送別会が催された。"Enchanted Pictures"というオペレッタの様なものでスインギング・クラスの人達の合唱に合わせて次々と舞台に出て来て踊った。

スキー行

三月二十三日夜八時頃寄宿舎を出て奥日光にスキーに出かける。

参加者は鏡子、タッちゃん、井上さんに私の四人。鏡子さんだけ未だ外泊届が出してないので中野駅で下車して保証人のところに寄って届を書いて貰う。新宿で又降りてパン・ソーセージ・フィルム等を買い精養軒で夜食をとって上野駅に行った。小牛田行十一時四十五分の列

車に乗る。二時十三分宇都宮着。霧雨が降っている。待合室で夜中に寝ているのはよくないので駅前の宿屋に行って一寸寝させて貰い四時五分発の日光行に乗る。六時十五分に日光着。七時にバスが出るというのでパンとソーセージで朝食をとる。東照宮入口の綺麗な赤い橋の所まで散歩がてら歩いて行く。一面の朝霧の中に山が所々姿を現わしている景色は美しい。七時過ぎにバスは出た。途中でケーブルカーに乗り換え、降りてから又バスが出る迄には時間があるので中禅寺湖のほとりを散歩した。四人とも喉がかわいてとてもお茶が欲しくなったので Lake Side Hotel にはいって紅茶を飲んだ。又バスに乗って物すごく悪い道をガタビシ揺られながら四十分程進む。バスを降りて三十分以上歩き湯本温泉のそば迄行く。そこから又ゲレンデまで二十分位はスキーをはいて歩いて行く。途中で何処かの男の子の学生達がからかい半分に私達に悪口めいたことを大声でわめいた。皆でムッとしたが相手にもしなかった。ゲレンデに着いてリュックを山小屋において滑り始めた。登っては滑り登っては滑りしているうちにお昼近くなったので山小屋にはいりパンとソーセージを食べた。小屋でお汁粉があったので食べたが大へんおいしかった。さっきの悪がき共にひょんなことからソーセージとお菓子を分けてやることになり忽ち仲良しになる。午後から又楽しく滑ったり転んだりしているうちに霧雨が降り出して来たので帰途につく。一面に灰色に曇った空気の中で雪の上を歩き進む。あたりには人影もなく遠くのものは見えず物淋しい景色だ。湯本温泉からはスキーをぬいでかつぎバス停まで歩いて行く。相当ぬれてしまって一寸寒い。帰りのバスの又ゆれることゆれること。皆でキャアキャア悲鳴をあげる。ひどい時には天井に頭がぶつかりそうになる位。バスは文字通り曲がりくねった道をゆっくり走る。ほんとにヒャヒャしながらも疲労と強い眠気のためにコックリコックリと眠ったがその間中あちこちにぶつかり通しだった。ケーブルカーに乗ってからもすごい霧。真白な煙に包まれたようで、ずっと下の方で谷川のひびきがゴウゴウと鳴っているのが聞こえて来た。大急ぎでバスに乗り換えて六時二十五分発の東武電車に乗る。晩御飯は又パンとソーセージ。四人とも疲れ果ててぐうぐう眠り込むのだがさっきの悪がき共が何時の間にか又横に来ていて弁当を買えなかったのか「ねえ、何か頂戴よお、ビスケット？　おかし？　あーらだまってるのねー」などとうるさかったのでパンとソーセージを分けてやった。九時頃浅草着。地下鉄で神田へ。神田から省線で国分寺へ。電車の中でも四人とも何一つ喋ることなく眠ってしまった。十時半過寮に帰り舎監に挨拶し体をふいてすぐに寝た。

まるでくたびれ儲けみたいなスキー行だったと今日にしては思われるが四人でお互いの都合、時間や費用をや

りくりしてやっと計画が実現したことを思い出す。雪を知らないで育った朝子にとって雪の世界に入ることは非常に楽しい経験であった。そして一生の間ではその前年の志賀高原のスキー行とこの時のたった二度っきりのスキー体験となっており以後スキーに行くことは出来ないまま年をとってしまった。

三月二十五日

八時起床。朝食後に昨日着いていた母からの小包を開けた。春らしい銘せんの着物と羽織が出て来た。チョコレートも。姉のお古の袴を持っていたので早速着物姿で卒業式に出た。式は一時間位で終る。昼食後四人で散歩に出てフィルムを撮し切ってしまう。

朝子の年令の人達位までは通学するのに着物に袴姿という人もチラリホラリといたが以後戦中戦後となっていくに従って着物姿は消えてなくなったようだ。

朝子の姉は津田塾で学んでいたが途中で喘息が発病し寮に来るときっとひどいアレルギー症状を起こすので中途退学をしている。姉が作って貰ってあまり使うことのなかった袴を朝子が貰っていた。そして二、三回しか使わなかったがそれは戦時中衣料品が無くなってしまった時代に大学にいた弟の学生服の上着に作りかえられていた。

横浜の叔母の所には朝子と同じ年令のいとこがいて花嫁修業をしていた。よそ行きの綺麗な和服も次々と作って貰っていたようだった。それに引きかえ朝子はパーマもかけぬ断髪でいつも着たきり雀のようなセーターにスカートといった碌な服装をしていなかった。朝子は一向にかまわなくむしろ着物を着せられて箱入娘となっているいとこが気の毒に思われる位であった。しかし当時の女子の学生生活というものをよく知らなかった叔母は「あれじゃあ、朝子ちゃんがかわいそうじゃないの」とよく朝子の母親に一寸お門違いの忠告をしていたようであった。それだからというわけでもないのだが前年のクリスマスの頃には洋服やバッグを送ってくれたり年末だからと平常より二十円多く送金してくれたりしている。この年令になって朝子は母親があれこれ娘のためにしてくれたことがそしてその気持や、どんな状態であったのにそういうことをしてくれたのかということまで痛い程よく分かるのである。日記をみてはじめてあゝそうだったのかと全然覚えてもいず気にも止めていなかった昔々のことを発見して、感謝の思いをはせるのである。亡くなってしまっている母なので殊更に感じるのであろう。

何時か又別の折に朝子は自分とヴァイオリンのかかわりの話をしたいと思うのだが、朝子は東京に出して貰ったり上級の学校に行かせて貰って家に経済的負担をかけていることはしっかり心に受け止めていた。だから其上

高い月謝を払ってヴァイオリンを練習することは遠慮すべきかと思った。しかし筋約すればどうにか十円の月謝を浮かせることが出来ると思った時に朝子は着るものを最低限にしてその月謝分を浮かせようと思ったのである。だからセーターにスカート、それに夏はブラウス、靴も一、二足といったようにして暮らした。毎月当時十円もあればおしゃれなどしたいと思えばかなり出来たはずだったが、そういうことに金銭を使うことはしたくなかったのであった。

夕方五時過ぎのバスで福岡に帰省する鏡子を国分寺駅迄おくりがてら出かけた。風邪で寝ているモンちゃんのためにリンゴを買い、卒業生の谷さんのためにタクシーを頼みそれに乗せて貰って寮に帰る。夜はヴァイオリンの練習をしてから今度引越していく室の掃除等をすませ荷物を少し運んでから夜はその部屋で寝る。

三月二十六日

お茶の水駅で矢野さんと待合わせ美満津に行って根棒（club）とソックス、美津濃に行ってテニス・シューズを二百足注文して見積書を作って貰う。用事を済ませて神保町の古本屋を何んということなしに見て歩いた。そのあと二人で日比谷劇場で「未完成交響楽」と「モロッコ」を見た。未完成交響楽はあまりにも素敵だったので劇場を出た時にはどの方向に進むのか分からなくなった位であった。木村屋で夕食を食べモン子のためにシュークリームを買い大急ぎでタクシーに乗って上目黒のアメリカンスクールに行く。オペレッタを見る。観に来ている人達はほとんど外国人ばかりで私は疲れていて眠かったのでよく分からなかった。中島先生・河瀬先生・今井さん達と一緒に帰った。寮に着いたら十二時近かった。

三月二十七日

朝、起きるが早々、くず屋さんが来ているのでその辺の人達に手伝って貰って古新聞や其の他の屑を二階と三階から降ろして売った。一円八十銭也で売れた。それからお部屋替えを済ませた。鏡子さんは福岡に帰っていて不在なので鏡子さんの室の引越もしてあげた。スキーの手入れをした。それから東寮へ簡易引越し。（休暇中は東寮と西寮が交替で閉ざされた。それで居残り生達は身の回り品を持って休暇中はあいている方の寮に移るのであった。）中々忙しい。三時過ぎにやっと仕事が済み夕食時迄ひと寝いりした。夕食後六時頃から教師館に住んでいる中島先生の所に行きお汁粉を御馳走になる。それから Lovers' Lane でお手紙及び答案用紙を焼くのを手伝った。ポツポツ雨が落ちて来たので部屋に帰り夏みかんを食べてから河瀬先生も呼んで来てブリッヂをやり始めた。十一時半頃やめて寝た。中島先生の所に泊めて貰ふ。

中島先生は朝子の姉と大へん親しくしていたので姉が中退して台北に帰った後は朝子に大変親切にしてくれていた。

三月二十八日

八時半に目を覚まして中島先生と河瀬先生を起こしてあげた。それから三人で朝食。パンは焼きながら食べるので温くてとてもおいしかった。寮ではトーストしてすっかりさめたものばかり食べていたので。皿洗いを手伝って、から学校に電話をかけに行く。中島先生が今度予科のA組を受持つので学生達の名簿作りをするのを手伝いA・B・Cの順に名前を並べた。食事は学校で済ませ美津濃の人に会って色々な交渉をした。又中島先生の室に戻りピエル・ロティの作品を読み始めたが眠くなってしまい止めた。四時過ぎに先生は出かけるので寄宿舎に帰った。お風呂に入ったが着替える下着がない。大分長い間洗濯をしていない。モン子の所に借りに行ったがモン子の所も無いといって貸してくれない。結極下着無しですませる。夕食はスキ焼だった。

三月二十九日

ヘンリ八世のブレイ（メルドリイの tribute のための）切符を貰ったのがあったが河瀬先生に差上げた。（河瀬先生は姉の友達で当時は塾で助手のような仕事をしていた。後年塾長候補になったり国際大学婦人協会の会長をつとめたりしている。）最近外出が続いたので少し、はどめをかけた方がよいような気がしたので。午後洗濯をしてからモン子と国分寺に行きお菓子や果物を買ってくる。音楽について何か理論的なものが読みたくて「トルストイの音楽観」を読んだ。

三月三十日

起床八時過ぎ。消費組合に買物に行く。舎監に頼まれていたので帰りに学校に寄って寄宿舎あての郵便物をとって帰る。私の所には母と姉から為替と手紙が来ていた。昼食後友人達と鉄橋の方に散歩に行く。青々とした麦がもう五寸程の高さになっているのには驚かされた。空は晴れたり曇ったりで定めがない。青々とした草が所々に生えて来ていて春らしい。土手の上を一人の白人紳士と犬が散歩していた。夜バーラーに「新女苑」という雑誌がおいてあり「十字架を負う」という林連隊長未亡人の手記が載っているのを読んで涙をしぼられた。

三月三十一日

きょう一日でヴァイオリンの練習を三時間した。夕食は藤田先生に招かれて星野塾長宅に行きすき焼のごちそうになる。初めのうち何んだか恥ずかしくて皆、だまって食べていた。食事後、洋間の方に移り、twenty questions や単語のスペリングの尻取りあそびや、なぞなぞごっこ等をした。星野先生と藤田先生は子供心そのまゝの友情をもっていることがチラホラと見え一寸美しく思えた。藤田先生は勝気であまったれのところもあり、

どちらかと言えば我儘な性質のようだ。星野先生は年令も藤田先生よりは大分上で、おだやかで寛大、それでいてきびしい面がある。二人ともミスなので私達の微妙な感覚もキャッチ出来て同年令の世間一般のミセス達のように通じにくいような鈍感な所はみぢんも無い。永遠の若さが彼女達の中にあるようだ。九時前においとまして帰る。帰途川上下枝さんをアパートに訪問する。帰寮してしばらくしてから寝た。

夜中にフト目を覚ましレース織りのカーテンごしに星が美しく輝いているのが見えた。布団の上に起きあがり窓の方に首を近づけるとカーテンのすき間から更に広い範囲の空と星が見えた。雨と風の去ったあとの静かにすんだ空でピカピカしている星は何んてきれいなんだろう。胸が痛む位美しい。しかしすぐに布団にもぐり込んで眠りにおちいった。

四月一日

朝起きた途端何んとなく今日は面白いぞおっというような予感がした。朝食後玄関にある小鳥（カナリヤ）小屋の掃除を小林さんと一緒にした。一面しか空いていない箱の中、しかもたった一羽でとじ込められているのを見て自分がとじ込められているような圧迫感を味わった。

高橋やよいさんをうまくだまし、高橋さんは本気にして東寮の大林舎監をだまし、面白いことといったらなかった。エイプリル・フールは先ず先ずうまくいった。午前中は下級生の相馬さんの室で「泣虫小僧」を読む。学校の場面の子供の世界には一番興味をそそられたが先日見た映画の中では何故あの場面を入れなかったのであろうか。

午後台北一高女出身でこの四月から津田塾に入学する人が母親と兄の三人で下見にやって来た。台湾出身の大屋姉妹も呼んで来てパーラーで暫らく学校や寮についてのお話をし、そのあとキャンパス内の案内と説明などもしてあげた。

この時の後輩は山根敏子といって後日彼女のいとこに当る者と朝子は結婚することになるという運命の出会いであったが勿論その時点では考えも及ばないことであった。敏子は津田塾を卒業後、更に台北帝大の文政学部で学んだ。そして終戦を迎えた時に進駐軍の軍政部で働くことになり、語学の達者なことから日米間のさまざまな折衝にあたる職場に勤務した。大学の理農学部長であった父親は蔣介石に留用された為、一般の人達より内地送還がずっとおくれた。それで敏子も軍政部の仕事を続けていた。その実務の経験があったこともプラスしてか引揚後にそして女子にも外交官への門戸が開かれるようになった折に、女子ではじめて外交官試験に合格して女性外交官ナンバー・ワンになることが出来た。一寸新聞記事にもなったりした。昭和二十六年頃からニューヨーク

の国連で四年間働いて帰国の途についたが残念なことにアラスカの海岸近くで飛行機事故の為に昭和三十年の九月一日に死亡した。たしか三十四、五才位であったか。年輩者の人達の中には或いはこの新聞記事を覚えている人もいることかとも思う。かなり大きく扱ってくれていたので。

夕方頃矢野さん（京城出身）が私の室にフラリとやって来た。彼女は二、三日伊豆方面にある誰かの別荘に行って来たといって、ひとを羨しがらせるようなことを一ぱい言って引上げていった。そのあとモン子のお土産の苺を二人で少しずつ分けてミルクをかけて食べた。

人間ってホントに嫌だ。どうしてこんなに自分のことばかりに耽けるんだろうか。何故ひとのことを一生懸命に考えてやらないんだろうか。最も自己主義な私が以上の如きことをモン子とこぼし合った。

未完

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

～～～

此処老寿総合病院も、内科には、毎日九時から四ッの部屋に医者が、順番はどう云う風にきめられているのかYさんにはわからないが、つめかけて、その前に並べられた三列の長椅子には満員の客がいろんな姿勢で待っている。客は患者病人であるから、いろんな姿勢と云うのは、それぞれ自分に一番都合のいい形と云うことで、中には長々と横たわっているのもいる。看護婦が「何々さん」と医者のいる部屋から出て来て呼ぶけれども、その待合長椅子に居ない人がある。そう云う患者は、朝七時、病院があくと同時に診察券だけを受付の受付箱にほうり込んで順番を先き取りして家へ帰り、家事と云う仕事をしていて、九時になると出て来て診察を要領よくうけようとする者共であろう。患者一人の診察時間は、長い医者もいるが、短かい医者は二分ぐらいで済ませている。これでは一体病気のところ場所や、状態がわかるのであろうか。Yさんは心配でならない。

玄関の扉には、警察官家族健康診断所と書いた紙が張り出されているから、警察と云うところとも特別の結びつきがあるらしい。警察には「警察病院」と称する歴きとした病院もあるのにとYさんは世間におくれた浅い智識の中で思うのであります。

又、ここはK大学系統であると称している。世間に親会社・子会社と言う会社関係があるが、ここの病院とK大学医学部とのつながりは、それよりもずっと、ずっとうすい関係だと憶測出来る。Yさんが最初にかかった主治医と称される人はSi大学出であったし、M大学、U大学・Te大学などの出の医者のいることもYさんは知っている。K大学系統と名のるのは、何のためであろうか。K大学が医者の大学として有名であるためであろうか、〃世間とは、こんな具合に、勝手に独りよがりなものだなあ、そう云う勝手や独りよがりがなけりゃ、世間と云う所にゃ、生きていかれんのかも知れんな〃とYさんは、七十何年の自分の過去の勝手な独りよがりの生き様をいたわる思いにかられるのでございます。そうすると、あと何拾日何百日生きていられるかわからなくなったおのれの命を、今更にいとおしく、夕方などの暮れなずむ薄春の病室の中で、底知れない孤独感にさいなまれるのでございます。

かれが入っている六人こみの大衆部屋の患者の一人ひとりが、かれと似たりよったりの情感の中にいるのであろうとYさんは自分をなぐさめてみるのですが、そう云う折に、部屋をあたふたと云う足取りで出たり入ったりする男がおります。部屋々々の入口のドアには、入院している患者の氏名が、差込み式に表示されています。動けない患者は氏名のあたまの上に赤印が示されています。その男は、屋久座男となっています。ヤクは姓で座男は、名前でございましょう、Yさんは座男をどう読むのかわかりません。人の名前の中には、全く何と読むのかわからない場合があります。親は、矢張りその子にシアワセあれかしと願って名づけるのでしょうが、Yさんの頭では、かれの姓名はヤクザ・オトコと読めてしまうのでございます。Yさんは人に対して好き嫌いが激しいし、何時の頃からか、それは多分十代の中頃からであろうが、人相とか手相とか、骨相とか云う人間の形と、中味についての分類に興味を持って、その様なことで他人様を判断することが多い。ある本に、腹を露出することを好む者には、狂気あり、とあった。屋久氏は、シャツをちょいとまくり上げて、腹を露出し、そこを撫でていることが多い。これは、かれの病気が腹部の内臓にあるためでもあろうか、そして手が自然にその部位に行くのであろうか。

「何しろ、お湯のような重湯一杯しか呑ましてくれんのだからな」

かれはぼやいた。〃あんちゃん〃とかれが呼んで、もっぱら競馬の話をたたかわしている若い男で、これ又近頃の高職風の、どこかズボンのはき方にゆるみがあって、Yさんの人相学（?）から云うと小だらしがない男ということになる。だからYさんは、この二人には口をきかないことにしている。屋久氏はYさんと同室であるから、どうしても、かれの言動が耳に入り眼に入って来る。Yさんは、病人であるから神経が異常に働き易いが、この屋久氏のやること、言うことが一ッ一ッ、気になる。かれは足許の方に横たわっている身動きも、物も言えなくなっている老人にとても親切であり、見舞いに来る一族郎党と思える女たちに、いろいろ親し気に言い寄る。親切であると云うのは、身動きが出来ないから掛け布団を蹴って下半身を丸出しにすると、その布団をかけてやったり、女たちの面倒見に男の力を貸して寝がえりさせたり、食事のときには、ベッドの傾斜をころ合いよく、つくってやったりする。身動き出来ない、物も云えない病人は、見舞いのものを見て、只涙を流して声も立てずに泣くときがある。そんなときに、屋久氏は言うのである。

「なくなヨ、なくな。オトコじゃないか」

それは、とてもやさしく、思いやり深くきこえて来る。だが、かれはその反面、入口ドアの反対側にいる八十五才の老人に対しては、甚だあらあらしい。その老人が、朝七時頃から、電気髭剃器でぶるぶるびりびりと顔をなでている時に、かれは怒鳴ったのである。

「うるせえ！　おやじ！　朝っぱらからそんな音立てやがって、大体つらそって看護婦にでももてようって云うのか、いい年して、やめろ！」

これでは、足許の方向に寝ている老人に対するやさしさを、どう解釈すればいいのやら。それも腹がすいているためおこりっぽくなっているのだという考え方もあるが、Yさんの人相学（?）から云うと、いつもシャツをまくって腹を突き出しているし、重湯じゃ身体がもたね

えと云って、結構、夜になると、バナナや、速席ラーメンを、相棒の若い男と食っている。そう云う病院生活は、医者の云うことなど、〝糞食え〟と云うことであり、長年、医者によって病気を深められて来たと思っている近頃のYさんには、痛快にも感ぜられる節々もあるが、何しろ忙しく病室を出入りするし、相棒の若い男との、談話室というYさんらの大衆部屋の筋向いの部屋での夜の長話しが時に、一時二時になる。話の中味はいつも相かわらず、競馬である。かれらは馬券をその都度買うのではない。競馬新聞を買って来て予想の○×をつけて、遊ぶのである。現物買いではないから金はかからぬし、相当の競馬に対する知識を元手にしている遊びであるから、わけ有りの論義も交って二人の話はつきない。この屋久座男氏と若い小だらしないあんちゃんの長話しが、Yさんの病院での、いや此の世での最後になるであろうと思われる遊びを妨げるのでございます。

どうしてそんなことになったのか、そこらは病人の感覚のずれとでも云おうか、いや世の中だって、この様なことは、ほんの束の間の心のゆれ動きの中で出来上るものでございましょう。そしてどんどん出来事が変形して結婚とか夫婦とか云う関係で、長つづきしたり、短かいつながりで終ったり、その有様は、さま様でございましょう。そしてあるものは、ぐっと歪んで、事件という出来事になって、人々を悲しませたり、面白がらせて、でも精々五六拾年のことで、人の一代を三十年と見なす西欧の考え方も、拾年ひと昔と考えるこの国の人々にも、やがては忘れ去られてゆくことでございます。Yさんが差し当り、真面目に考えているこの奇怪な人間と云う生き物の過去の歴史は、せいぜい五千年位前まで逆のぼれるだけであり、それより前のことはもうツとした何ものかに遮ぎられて、見えませんし、五官に感じ難いばかりか、想像という働きでも頭の中に描くことはむずかしゅうございます。それが、五千年前どころか、二百五拾万年も五百万年も前に始まっていると、ガクモンというものがあかし立てしようとしております。Yさんにとっては、まことに歯がゆく、気が変になりそうなことでございます。何しろYさんは七十幾年、この世と云う所で、あれこれ生きてきて、結局「オレは何も知らない、何もわからない」とボソボソ呟くだけで、もう七十を越えていては、左様な疑問を解いてゆく努力を重ねる体力気力もございません。ただ起ったり消えたりする目の前の出来事を無気力に見おくっているだけでございます。そう云うかれが、何のはずみで伊々野幾代とそんな仲になってしまったのか？　それはYさんが同人誌に小説という名目で書いている〝オオバカ、ネタロウの易占術〟の中にあるように、かれ、が六十年前の子供の頃から興味を

持って、あれこれ読みあさった手相判断という遊びが、そもそもの切っ掛けであった様であります。

「キミの手相みてあげよう。尤も手相なんてその人の性格やウンメイの二十パーセント位しかわかるものじゃないがね」

ある日偶然、談話室の長椅子でYさんの隣に坐っている伊々野幾代にむかってかれは申し入れたのです。かの女は、ごしごしと手のひらを膝にこすりつけて、汗をふきとる仕種をしてYさんに、パッと手を出したのでございます。手相見と云うものは、この手の出し方からも、その人の性質を読みとろうとするものでございます。掌を開いて見せるときに、指が全部離れて、開きっぱなしにしている相手は、男女を問はず、開放的で、どちらかと云うと投げやりな心の持ち主であり、指をしっかりとつけて、不承不承手のひらを見せる相手は、用心深く、警戒心も旺盛であると見るのでございます。かの女は手を開きっぱなしにしてYさんの顔を見て笑っておりました。それは幾分Yさんを軽ろんじていると云う表情でございました。そしてかの女は言ったのです。

「右ですか、左ですか」

Yさんは、この種の質問は、毎度のことでありますから、落着いて云いました。

「両手をこう云う風に合せて下さい。そして今度は合せ方をこういう風に変えてみて下さい。どちらがやり易いですか」

このやり方は、昔から女は左、男は右と云う型通りの見方を変えた、浅野八郎氏の発案に或るもので、少しは、流行中の科学的な匂いがいたします。合せたとき、やり易い型で下になった手の方が、日常の運動に上になった方より余分に関係すると考えられるから、それで過去のその人の手の運動の傾向をうかがおうという考え方である。尤も浅野八郎氏は、手相という世界に統計という考え方を導入して、近頃の科学好みの傾向に合わせようとしているのであり、明治、大正、昭和に亘って低流となっている手相の見方に新風を吹き込んだと云えるでありましょう。そのかれも、Yさんと同じく、手相は、その人のウンメイの二十パーセント位しか物語っていないと、かれの著書の中に書いております。Yさんが伊々野幾代に言ったのは浅野八郎氏の受売りでございましょうか。

Yさんは、かれの右側に坐っている幾代の左手の肉の厚みを計るかに、手の平をもみもみしておりました。手相の方からは、この肉のもり上り方に、木星丘、土星丘、太陽丘、水星丘、第一、第二火星丘、月丘・金星丘、火星平原などと名づけて、その肉のもり上りの間を走っている筋を、大きいところで、指に近い方から、第二感情線・感情線・頭脳線・生命線と名づけ、縦に走る筋を運命線・健康線などと名づけて、その走り方、色・巾・深さなどにより、その人のウンメイを読みとるものとして

いるのですから、Yさんの幾代の手の平のいじり方が満更根據のないものであるとは云えません。もしかの女がYさんの手の平のいじり方に、普通の手相見の熱意からはずれたネツイを感じて警戒心めいた心の動きを示せば、Yさんの手相見としてのチシキは何時なん何時でも滔々と順序正しくかの女の前に展開されたでありましょう。大体、その時までのYさんの観測では、かの女は、独り身であり、三十才は越しているとは察せられたが、親離れが完全でないオンナと観ていたし、かの女の喉仏をはずれたところにある黒子は、人相のことを書いてある本の〝黒子の示す意味〟という章に〝好色である〟と言い切っている。

伊々野幾代は、Yさんの手の平のいじり方を、いやがるどころか、Yさんの右股の上におかれた手に力を入れて股を圧す様にさえ、感ぜられた。そこらは、Yさんの独りよがりも手伝っていたであろうが、その独りよがりが、手相を見るためにいじっていたかの女の手を、Yさん自身の袖の下にかくし込んだのでした。それはYさんの極く自然な、なだらかなねがいが秘んでいたのでございます。〝一体オレのモノは、若い時のように固く、もり上る力を残しているだろうか。その力が残っていれば、オレは病気に克つだろう〟

Yさんは、医者が名をつけた二つの病気を持っている。その一つについては、千代田区の医科歯科大学の医者が、カルテを見ながら感慨をこめて言ったのでございます。

「Yさん、あなたはこの病気で、もう八年になりますよ」

〝ひどい目に逢ったもんだ〟Yさんは心中思うのであります。が、この目の前の医者は、Yさんを最悪の状態から、頬にあいた穴をぬってふさいでくれたので、Yさんはありがたく思って盆暮年二度の挨拶を、行きつけの酒屋のさいたま屋から、砂糖とか、缶詰などをおくって来た。Yさんとしては、人並みなやり方だと思っているが、このごろは患者の方からのこれぐらいのことでさえ数少ないやり口なのであろうか、必ずはがきではあるが要領を得た礼状が来る。そもそも、Yさんのこの腔中の病気は、八年余前に、Yさんがもう六十五才という年になって、生きて来たことにホッと一息つく気分で、巷の歯医者で歯を入れて一寸おしゃれしようと思ったのが運の尽であったのでございます。その経緯は、Yさんが、八年前に、活字にした一種の随想集めいた本「虚仮の歌」の中に〝白い鬼〟と題をつけて小説風にかかれています。その鬼にされた口腔歯科医は、Yさんが、その大学病院と云う所の放射線科と云う科に、もっぱら通っている間に、Ya大学と云う新制大学の助教授になって行った。Yさんが舌の奥をバサリとかれに切られて、かれの指示で

放射線科におくり込まれた時に、かれは、その大学病院で講師と云う資格であったのでございます。その国立大学病院では、講師以下の医者は副手とか助手とかいう肩がきは、さすがに名刺に活字にすることは、憚られると見えて一様に文部教官、何のなにがしと名乗っている様でございます。

大体、Yさんの考え方によると、この所、放射線科と云うのは、甚だ萬能のように、どこの病院でも取り扱われておりますが、放射線が、医療と云う人間の働きに取り入れられてから未だ百年そこそこのように存ぜられるのでございます。内科とか外科とかいう科の中味が五千年、一万年に及ぶのに比べれば、その歴史は全く浅く、錯誤を繰り返している真最中と申してもよろしいのではないでしょうか。だから、Yさんによれば、かれの放射線性下顎部骨髄炎という病気も、医者のシコウサクゴの結果であり、医者によってもたらされた病気と云うことになるのでございます。

もう一つの病気も、そのみなもとを尋ねれば、何処までゆくのやら。六十の後半からの巷の医者が行なう成人病とか老人疾患の診断というところでは、陳旧性結核と名づけられているのでございますが、何しろ風邪と云うものに抵抗力がなく、この位はと思っていると、肺炎という老人にとって命とりのものにとりつかれて、老寿病院にころがり込むという次第でございました。今日から指をくってみると拾数年前、未だYさんが五十の後半位の年の頃、夜中に胸部、腹部に猛烈な痛みを感じ出して、倒れる感じで隣家の老人に助けられて救急車でかつぎ込まれたのが老寿病院でございました。その折、大衆部屋で同室した患者の中に、昔浅草の演芸場で、芝居をやっていた男がいて、既に七十才前後で、最早現役の役者ではなかったが、つきそいの妻女らしい女が妙に色っぽくて、同室の他の患者も、それぞれ下町特有の人間臭い連中で、Yさんの気に入っていた。そのためにYさんは、それから拾数年、この病院に出たり入ったりする羽目になって今日に及んでいるのでございます。

さて、Yさんの病気と、老寿病院のあらかたと、その病院とYさんの縁をながなが申し述べてまいりましたが、初めの頃に戻って、Yさんと幾代との間柄と、屋久座男やらあんちゃんが、どの様な具合に、その間柄に割り込んで、殆んど世の中では問題にもならない些細な出来事が起って消えて行ったかを書いてみたいと存ずるのでございます。

普通ですと、Yさんに手を袖の下に、股のあたりに持って行かれれば、瞬間的に、羞恥心からか、何ものかをおそれる感情から、すっと手を引くのが女の常のように思われるのですが、伊々野幾代は、その手に力を入れて

Yさんの股間を押したばかりでなく、一層深くかれの股間をさぐる指の動きを見せたのでございます。

七十才を三年も越しているYさんですが、ハッとしてギョッとして、そして、一、二秒の間に心を静めようとしながら言ったのです。

「キミのにさわらして……」

あたりに人はおりませんでした。昼間ではございましたが、丁度朝食後小一時間、点滴も初まろうと、律義な患者はそれぞれの部屋に引きあげて、談話室はYさんと伊々野幾代の二人だけでございました。時に廊下を看護婦が点滴や手当ての道具類を積んだ車をガラガラと押して通るだけでございました。屋久座男とあんちゃんは、昨夜の夜ふかしを朝方取り返そうと、これ又ベッドにすらうすらと横たわっているホンノわずかな時間でした。

かの女は、ちょっとモジモジしておりましたが、Yさんは、すかさず、すっと立ち上って、かの女の桃色のガウンの喉のあたりから手をさし込んで、乳房を摑んでおりました。これは江戸川柳の調子で言うと、

〃階下は空いていますかと二階へ声をかけ〃

という手法になるわけでございます。かの女は両腕を組む恰好で自分の胸の部分を庇うようでしたが、Yさんはかまわず、かの女の乳房の首を人指し指と中指の間にはさみつけ、クリクリといじり廻しました。Yさんの過去の経験は、その乳首は固くなって来ていることを教えました。これはもう川柳どころではありません。さすがのYさんもオンナに対するこのようなオコナイは、七、八年近くありませんでした。かれのこれまでのオンナに対する最後に当るオコナイは、三十年も前に、かれが未だI区で英語の先生をやっていた経歴がモノを言っております。何しろ、かれは、めしを食う手段として教員になったので、ホンノ子供の頃、それは正確に言うと七、八才のころから、その時分、父親がドイツと云う国へ、当時のことばで言えば、洋行しておった間、東京の祖父母の家に、一家そろって寄食していたことがあって、母親が、〃お父さんの様に、ゆくゆく外国へ行くのにいいように〃と当時祖父母の新宿区西大久保の裏手にあったジョン・デービスと名乗る外国人のところへ、英語を習いに通わされたことがあり、そんな子供の頃に育ち出した英語が、今度は日本敗戦を南方のトルック島で迎えて、米国軍が上陸した時に、日本軍の通弁として役に立ったという過去があって、その挙句の果ての英語のセンセであるから、その頃の中学校、高等学校の教員の中では、外国人なれをしている数少ない者の一人でございました。更にかれは、戦地から内地復員後、めしが食えなくて、二度とこんなことやるまいと心にきめていた通弁という職業を、ある三流土建会社の米国むけの工事の中で、小一年やらなければならなかったと云うこともございまして、学校と云う所で英語のセンセになっても、生徒に教

えるという意識に先立って、ツイ英語が日本語のかわりに口に登って来る癖をはらいのけることが出来ませんでした。その為に校長を初め、同僚英語教員や、父母兄と云う者たちの間に甚だ評判が悪く、又そう云うことを、せまい学校の中で、勢力争いに利用しようとする者があったりして、一見、Yさん孤立に苦しむかの様に見受けられることがございました。

その折、女子大学と云う所を出た英語のセンセがおりまして、Yさんが学校はティコク大学を出たと云うことが幾分はかの女の自尊する気分にも合ったのでしょうか、決して、好男子ではないYさんを贔屓してくれておりました。かの女は、どちらかと云えば美人の部類に入る顔立ち姿かたちでございました。Yさんは、もちろん十五年は、かの女より年上でございました。かの女は五十を出たばかりで、中学生が暴れ出して、手のつけられない頃さっさと教員を止めて、ヨーロッパを旅してあるいたりした時、Yさんにフランスから、ワインを送ってくれたりして、好意を持ちつづけていることを示してくれました。

そのかの女が、Yさんが驚く程突然、かれの家を訪ねてくれたのでございます。何しろ二十年ぶり近い。その上二十年前に、かの女は、Yさんの英語を高く買い、Yさんも、かの女の美人であることと、その頭の働きのよさを買っていた仲である。小一時間の話合いは、その中味を全く忘れてしまう程、Yさんは年を忘れて喋った。そして帰ると云うかの女を駅までおくろうと一緒に家を出たのであります。も早、夕方の風景に巷はくれかかっておりました。駅の入口に来た時、Yさんは、何にも迷はされずに、するりと言ったのです。

「Tさん、ボクと一寸つき合って……」

そしてYさんは、まことに何ごとにも迷はされずに、いわば無心という心で駅の入口を右に曲り、山手線にそって鶯谷駅の方へ一〇〇米程あるき、

「此処に寄ろう。鉱泉だけれども、温泉って駅のところに看板出てるんだよ……」

「Yセンセ、大丈夫?」

かの女は、Yさんの足許を心配して、そう言っただけで、これまた無心にかれの左うしろに添って歩く模様でございました。

その家、それは手っ取り早く言えば、今東京中、駅の近くに林のように森のように茂りはびこっているラブホテルの一種でありました。Yさんには何拾年か以前に一度入った覚えがありました。何の憚る気持もなく、Yさんは玄関の扉を開き土間に立っていました。右手の帳場と思える部屋から中年の女が出て来て、何の感情も示さずに、いらっしゃい、と言って先に立って突き当りの階段を上ってYさんとTさんの男女としての間柄を見ぬいている

しかもかれは、相棒のあんちゃんと談話室を夜の一時二時まで占領して、Yさんが伊々野幾代と二、三分にもみたない肉体の遊びを妨げる結果になるわけでございます。

屋久氏にかみつかれた老人は、初めの一、二週は、名前の上に赤い印がついていましたが、八十五才の年にもかかわらず。めしは三度三度ちゃんと平げて、Yさんの左隣りの八十八才のホームへ帰り度いとかすかに、相手をする看護婦にも聞えない程低く呟く老人が、別室へ移された日に退院した。退院はしたが、この老人も、もう永くはもつ筈がない。テンノーヘイカさえ、それから三日して一月六日朝に、その時まで、宮内庁と云う役所が何をどう発表しようと、Yさんはつくづくもう間もなく死ぬナと先を見る気持であったから、自分の呼吸の切迫に合せて果ない覚悟は、いよいよかれを落込ませ、その反動と云うことになろうか、伊々野幾代に対する肉体の遊びの欲望が、かっかとその度を激しくしてゆくありさまでございました。それは俗に、消える前に、燭の火が、パッと明るく燃えるさまに似ておりました。Yさんは、昼となく夜となく、機会をみつけて幾代のからだにさわることに執着するのでございました。そういうことで、〃俺は未だ生きてるぞ〃とYさんは自分に云いきかせ、幾代の方も入院の理由である喘息の発作が起きない限りは、自分の父親より二十才近く年上のYさんの愛撫に、安心と快感を感じるのでございました。そのようなおこないが、屋久座男や相棒のあんちゃんの目をのがれ通せないこともまた当然のことでございます。

屋久氏は、ある日Yさんに聞えよがしに、あんちゃんに言ったことでした。

「オイ、この老寿病院には、年寄りのチ漢がいるナ」

あんちゃんは相鎚をうって言いました。

「ウン、相当なもんだナ」

Yさんは、年齢と云う重しを活用して、聞えないふりをすることが辛うじて出来ましたが、内心ギョッとしながらこの二人をおそれ深く憎むこころになっておりました。病院と云うせまい建て物の中では、Yさんは思うままには伊々野幾代を愛撫することはかないません。患者同士の目も、付添いの目も、医者看護婦の目も、オトコとオンナの間柄には、特別神経がとがっているようにYさんには、思えて来るのでございました。いや世間と云う広い場所でも、オトコとオンナのことは、人々の好奇心の的であり、噂の種をそこかしに播き散らし、ブンガクと称するものも、そのことを語ってあきる所がありません。

しかし、とうとうYさんと伊々野幾代との間柄も、ホンノ些細な二つの出来事によって終りを告げることになったのでございます。

その二つの出来事のひとつは、Yさんと同室の屋久座男のベッドが一夜主がなく、看護婦や、あんちゃんが何

度か不審な顔つきでかれのベッドを確める風でありましたが、そのまま二日主がなく、どうやら見当がついたらしく、婦長という帽子に二本線の入ったきつい顔つきの女が、ドアに張り出されていた名札の列の中から、屋久座男というのを、ぐいと憎しみをこめて剝ぎとったことで患者らは、直感的にかれが逐走したにちがいないと思ったのでした。かれは誰にも、あの仲のよかったあんちゃんにも一言も言はずに、忽然と消えたのでございます。それればかりでなく、どこからともなく伝わって、談話室で話題になったことは、かれは検査という満一週間に亘る病院側のおこないの最中、〃明日おさめる〃をくり返して、入院のための保証金〇万円も会計に入れずに消えたのでございます。その上あんちゃんから湯わかし壺と茶道具一式を初め、足許の大きなテレビを無断借りしていた老人の机上からも時計など数点の品物を、さらに、毎日曜日に強制的に患者に体重を測らせるために廊下に出しっぱなしにしてある体重計も、かれの姿と一緒に消えておりました。屋久座男には、競馬以外に人のものをそっとぬすむと云う趣味もあったのでございます。

二ツ目の出来事は、これはもうこの物語に決定的な終りをつけさせるものでございました。いろんな人の目をぬすんで、行われたYさんと幾代の愛撫の遊びは、談話室からはみ出して、せまい病院の中で、洗濯室というところに快楽の隠れ場所を見つけておりました。

その日も、買物袋の中に洗濯物をつめた幾代のあとをYさんが追って、長い渡り廊下を二百米もヨロヨロと歩いて洗濯室に入ったのです。洗濯機は二基あって、片一方はあいている時が多い。快楽の最中に人が入って来る気配がすると二人は別々の洗濯機の前に立って洗濯に専念している恰好になるのでございます。どの様にくずれた顔になっていても、人の気配でキッと並な顔に戻すことが出来る幾代は、Yさんには底知れなくオンナのおそろしさを感じさせるのでございました。

その日は、かの女はパンティさえはいておらずにYさんの愛撫に

「コエが出そう・・・ウッウウ、アッ」

此処まで来たオンナの挑発には、Yさんは病気のことどころではなく、あたまの中が真青な空のように架空になった。かれは幾代をつきはなすようにして室のドアのノブを廻して廊下によろけ出した。薄れていく意識の空に、二つのことが小さなかすかな雲のように浮んで消えた。〃オンナに罪はない〃〃酸素ボンベがあるベッドに帰りつこう〃そしてかれは膝を打ってしゃがみこむ恰好で長い廊下の途中で倒れたのであった。

病院だから看護婦がみつけて、咄嗟に習い覚えていた人工呼吸を施し、電動呼吸機器も駆けつけたのだが、Yさんの心の臓は、はつたと動くことをとめたままであった。人間の死と云うことは、このように、前ぶれもなく

全く勝手放題におとずれるものでございます。そして、かれの死によって、この些細なオトコとオンナの出来事は、その次の日にはこの世の中からあとかたもなく消え去ったのでございます。

（一九八九・三・二十二）

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

万年筆

井上二三男

今日三月三十一日、夫は定年退職になる。

朝、則子は、夫のスーツに丁寧にブラシをかけ、靴も入念に磨いて揃えた。

「じゃあ、行ってきます」

と、夫は普段と変わりなく出て行ったが、三十五年の会社勤めの最後なのだからきっと感慨無量のものがあるだろうと、則子の方が感傷的になっている。そう思うと「じゃあ」と言った夫の言葉は、さりげないようだが万感がこもっていたようにも思える。

三十五年・・・長いなと思う。結婚してからはちょうど三十年である。いろいろなことがあったように思うし、旦々として今日に至ったようにも思う。

しかし、よくぞ耐えて来てくれたと思う。夫が体を壊して入退院を繰り返したのが十数年前、上の息子が大学受験、下の息子が中三という時期で、平穏だった家庭に大きなうねりのあるときだった。則子は夫にもしものことがあったらと一種の悲壮な気持ちで毎日を送った。夫は結局慢性の肝臓疾患を抱えた暮らしになってしまって、一時は定年まで勤務を続けられるかどうかと危惧されたときもあって、則子は新聞の折り込みの求職情報のパートの働き口に真剣な眼を注いだものであった。夫も節制に努め、幸い勤務は普通にすることができるようになった。会社もその辺のことを考慮してくれたものと見えて、夫は、飲む、打つというような接待業務の無い経理部門の担当が続いた。サラリーマンとしては会社の重要な部門で役について働くことが生き甲斐でもあるのだろう、同輩たちがその道を進むのを見ると夫は健康の為と割り切っているようなものの、時には顔に寂しそうな陰が浮かぶことがあった。

体調は必ずしも良いときばかりではないようであったが、いい加減なことができない夫は経理課長になって、ちょうど金利自由化、円高などの難しい経済情勢のなか

で会社の財務経理は大変のようであったが、むしろ生き生きとして明るさが則子にも伝わってくるように思えた。

「感謝、ありがたい」

病身でありながら打ち込める仕事を与えられ、どうやら定年を迎えることができることを夫は心から感謝しているようであった。

定年を間近にしての不安や悩みの事を他人から聞かされていたが、夫は淡々としていて、むしろ卒業を楽しく待つような様子でもあった。

今日は帰りが早い筈、則子は掃除にも念を入れた。

夫の部屋の机の上には経理関係やコンピュータ・システムなどの書類が積まれている。

このところ家に帰ってからも自分の部屋にこもることが多くなっていたが、二日程前の新聞の地方の経済欄に夫の会社の何やらのオンライン・システムの記事があって、責任者としての夫の談話が載っていた。昨日はそのシステムの起動式とか。夫はその式を取り仕切った筈である。会社の営みの中では個人の進退などは全く関係無いことなのだろうか。三十五年の勤務生活の最後まで打ち込んでいる夫に則子は何か心を動かされるものがあった。

この部屋には夫の性格、人格、行動が染み込んでいる。雑然とした中にも調和があって則子にもそれらを動かすことは出来ないのだ。何がどこに、どういうように置かれているか、夫の頭にはキチンと入っているのだ。職場での夫を見れば或は結婚しなかったかもしれない、ふと、そんなように思うことがあるほど、夫は、ときに厳しい面を見せることがある。生活を共にしてみれば夫のそんな一面も決してマイナスではなかった。

三十年間、楽しかったと思う。

「感謝、感謝」

夫の口まねをしながら、羽根はたきを使う。

玄関と居間に花を飾ろうと思っていたが、そう、夫の机の上にも飾ろう。

これからの生活を考えると不安もあるけれども、二人の子供はそれぞれ大学を出て、まだ結婚はしていないが独立している。仕送りの必要がなくなってほっとしたところである。また、二人とも男だから格別の心配はない。会社の配慮で夫には当面は会社の保健互助組織に嘱託の机が用意されるという。嘱託の給与は細いが自分達夫婦二人の生活である、年金と合わせれば何とかなるだろうと思う。

現役最後の夫をどう迎えるか。大袈裟なことは嫌いな夫のこと、さりげなく、心を込めてと思う。

夫が帰って来たとき、則子が買い物に出ていて留守だということがないようにしようと思う。それにしても、若いころの夫は残業が多かった。子供達に夕飯を済まさせ、自分は食事をせずに夫を待つことが多かった。夫の

退職は則子の待つことの卒業でもあるのかもしれない。

自分にも新たな生活が展開するのだと思う。

掃除を終え、小さな花瓶に花を差し、夫を待つばかりになった。

いつもより早いが、やはり、午後五時を少し過ぎた頃、夫はタクシーで帰ってきた。

門の外で車のドアを閉める重い音がしたので玄関に出てみると夫だった。大きな花束をぎこちなく抱え、左手には重そうな風呂敷包みを持って

「ただいま・・・花を頼む」

花束を則子に渡して、居間に入ると、夫は両腕を万歳をするときのように上に伸ばし

「いやア、終わった。終わった」

と大きな声を張り上げた。その声は難しい工作を作り上げた子供の喜びの声のようであった。

「本当に御苦労様でした」

玄関で言いそびれた言葉を則子は、大きな白磁の花瓶に花を差しながら言った。

「お花は会社の方から」

「ああ、みんなが見送ってくれてね。しかし、花束を貰うというのは参るね。キュンとしてね」

夫はきっと眼をくしゃくしゃにしたのではないかと則子は思った。

「これからは自分の好きなことをするぞ。毎日が日曜日でなくて、月月火水木金金だ」

ソファに腰を下ろしながら夫はスーツの上着を脱ぐ。則子はそれを受け取ってポケットから札入れ、手帳、名刺入れ、櫛、カード電卓、キーホルダー、ペンホルダーなどを出してテーブルの上に並べる。男のポケットの中味はかなりな重みだ。それぞれが職場の武器のように則子には思える。

と、則子は左の胸の内ポケットに金色の万年筆のクリップがのぞいているのを見て声を上げた。

「ま、ペリカン」

取り出してみると、円みを帯びた太めの黒い軸にペリカンの嘴に似た金色のクリップの上部の両側にのぞくペリカンの目が愛らしい。

夫の入院中、ちょうどその頃則子の友人のご主人が亡くなり、葬儀に出席したのだが、病気が夫のと同じであったと聞いて則子は相当なショックを受けたのであった。その帰り道、耐え難い気持ちの儘歩いていた則子が気がつくとそこは万年筆屋の店先であり、ふと見るとウインドの中にペリカンがあったのだった。

夫は道具に凝るたちで、持ち物にもかなり気を配って、気にいったものを長く使っていた。

婚約したとき、則子は夫に万年筆を贈ったが、当時、地方の小都市に過ぎないこの町の専門店には夫が探すペリカンは無く、流行り始めたカートリッジ式のパーカー

にしたのであった。そのペリカンがあった。則子は曳かれるように店に飛び込んだのであった。そのときの気持ちは何と言ったら良いのだろう。夫の病気に友人の夫の〝死〟の影を重ねて、切羽詰まった思いで、せめて好きなものをという夫への気持ちになっていたのかもしれない。

ペリカンを手にして則子の心にそのときの気持ちが急に沸き起こってきた。そして、今日を迎えた。

急に胸に込み上げるものがあって則子は、万年筆を握ったまま顔を伏せてクッ、クッと嗚咽をこらえた。

「則子どうした」

夫は突然の則子の様子に驚いて声を上げた。

「ううん」

則子は首を振って突き上げて来る感情を振り払い、顔を上げた。

万年筆一本にそんな思いを込めたなんて今思うと恥ずかしい。

「あたし、ばかね」

あっけにとられている夫に則子は努めて明るく言って、ペリカンを渡した。

奉 めめ KOK

九

桃李庵のアルバム

――父真人――

大和禎人

平成と元号の改まった二月四日、京王プラザホテル・南園、白梅の間というところに二世代の従兄妹・従兄弟があい会し、妹真澄、ならびに母系従姉妹の児玉松江の二人についてある賀寿の宴が催された。

集ったのは主賓のほか本家にあたる側として兄禎人夫婦、それに息子の史人。分家たる真澄の夫大和義准、その息真史、真樹、母の里方である佐藤の側は児玉松江の実弟佐藤正昭が代表出席し、都合七人という顔触れだった。若い人たちはすでにそれぞれに妻帯しているが、そうした連れ合いまではこの席に加わらず、いみじくも血の濃いものだけでの宴になった。真澄の方の息子二人が計画を進めてきた会合であった。

メンバーのうち肝心の長男真史はいま在勤中の福山から、医師という厳しい仕事がら担当患者の臨終を看取った上駆けつけるという余儀ない事情で、新幹線の車内電話で弟真樹を呼び出し何度か連絡があって、折角の宴の方が果ててから、ようやくロビーにつづくティーラウンヅに席をうつしたところへ来合わせるという慌ただしいハプニングもあったが、終始和やかな会合だった。

妹真澄の誕生した大正八年二月十日の大雪の朝のことは四歳の私にとって明瞭な記憶に残していて、すでに「大正っ子」少年編の冒頭にも書いたことだったが、その日から茫々の歳月が流れ去ったことがあらためて思われ、つかの間の大正と波乱に満ちた昭和の歴史が瞬時、映像おぼろな古いフィルムの流れのように脳裏をかすめ、二世の若者は別として、愛惜を伴いいまさらの懐旧が噴き出し、少なからぬ感傷のうずきを覚えたことであった。

……

思わずもこのような書き出しになったが、あたかも好し来し方をかえりみるきっかけにもなり、ようやく血縁

のことを書く踏ん切りの上で一つのペースを与えられたような気がした。すでに極小の短編として「母ひで」を書くことのあった私は「父真人」を書かねば対幅にならぬと前々から思わぬではなく、しかし母を書くのとは違っておとこの生きざまとなると複雑だからよほどの困難も感じていた躊躇が思わずもここでフッ切れたのだった。

さて、右のパーティーより前になるが、平成元年の一並びで一、一、一一、つまり一月十一日という奇しき日のこと、前記の義弟義惟から電話が入った。

「夕刊見た」

「いやァ、まだ、なにか？」

「なァーんだ、『黄河の水』の記事見なきゃァ」

という促しであった。あらためて見た「朝日」の夕刊には、

『新天皇陛下が本紙にご回答』

とあり、これが教えられた記事だった。

（カレーライスがお好き）、（背広は夏冬合わせ一〇着）、などの小見出しとともに、

新天皇陛下が日常生活に関する朝日新聞社の問い合わせに対し、文書でご回答を寄せられた。皇太子だった時期のお考えだが、愛読書や好物、最近ご覧になった映画など気さくに披露されている。

ところで、肝心なのは次のくだりである。

ー愛読書は。

「生物に関するもの。学習院初等科時代は日本児童文庫を愛読され、中でも日本の歴史、西洋の歴史はご印象が深かったようです。若宮さま方にもお勧めになりました。中等・高等科以後のご読書は鳥山喜一「黄河の水」、杉田玄白「蘭学事始」、宮崎市定「雍正帝」、小説では幸田露伴の「運命」など興味深くお読みになったと伺いました。

侍従が一々Q&Aという形式でまとめたというものだった。

ああ、なんと昭和初頭の「日本児童文庫」の出てくるのも世代感から云えば驚くことだったが、それにもまして鳥山喜一「黄河の水」とあるではないか。

この「黄河の水」初版こそは父真人が弥圓書房として出版業に手を染め、第二冊目として命運をかけ、後世に名著とされる好評を得ながら、資金の枯渇から廃業の苦境を招き、刀江書院に版権を譲渡するに至った経緯はやはりすでに「大正っ子」に書いたことだ。この譲渡で得た何がしかがわが家では貴重な米塩に換えられたことも、いまでこそ平静に語れることだ。そして、これを避けては父の像を描いたことにはならない。

折から昭和が逝き、ここに物語ろうとする時代はいよいよ遠く、風化を進めることになるはずである。風化以前にこれを少しでも写し、保存する作業は児孫のつとめでなければならないと強く思うのだった。

さて、そうした際にいみじくも二通のはがきがあって、タイムトンネルの扉を明ける貴重なキッカケ的役割を果たしてくれることになる・・・・。

奇跡のキーを与えるその二通は父の遺した数冊のアルバムの中から発見されたものだ。ただし、アルバムといっても、明治人の父は当然のことながら、かれ自身の面影を伝える写真は乏しくあまり残していない。したがって、残念ながらそのためのアルバムではない。

いまここに云うアルバムは「ポストアルバム」、つまりは「絵はがきアルバム」なのである。「絵はがきアルバム」とのみでは今日では耳慣れぬことになって、思い浮かばぬことになろうか。説明を少し加えておくとすれば、絵はがきなどをスクラップし保存するに便利な、今ならさしあたりポケットアルバムに相当すると云えよう。絵はがき類の四隅を差し込みページごとに四枚ほどを収めるものだ。ともあれ、まぎれなくそれは一種のアルバムなのである。

ほぼ十冊、部厚いもの、薄いもの、更紗表紙のものなどのその頃としてはかなり贅沢なものが含まれる。

当時の梨園の名優たち、菊五郎、吉右衛門、左団次、幸四郎、梅幸、仁左衛門、猿之助、中車、我童、秀調、宗十郎、松助、その他、と言っても多くは先代であることはもちろんとして、芝居好きだったから花柳、水谷の新派はもちろん、森律子らの帝劇女優、曽我廼家五九郎におよんでのプロマイドを多くこのアルバムに残しているのだ。

また生きた時代の折々に来朝しているバイオリニストのハイフェッツ、（相対性原理）のアインシュタイン、舞踊家アンナ・パルボナといった人々のプロフィルもあり、旅行先でもとめた絵はがきもかなり多い。可愛がってくれた大谷嘉兵衛翁につき従ってのものが大部分に思われる。横浜商工会議所会頭、かねて茶業組合中央会議所の会頭であり、多額納税の貴族院勅選議員であった翁は事業の茶業関係からも宇治その他全国の茶所にしばしば旅行したようで、その秘書役として余禄にあずかることが多かったのだ。さらには美術展、博物館、など美術趣味によるもの、博覧会、関東大震災などの絵はがき、第一次世界大戦ポスター絵はがきなど時事関係も含まれる。これらに加えて友人知己、ならびに自家の年賀状、書信などにもおよんでいるのだった。

後年、わが家改築に際し遺愛を絶つ不心得を冒し、おもに父の収集した蔵書を整理し、思い切った売却をして

いるが、このアルバムは残した。

「いただいてもよろしいのですよ、これはこれでまたお好きな方もありましょうから」

この時は駅近くの岡川という古書店で主は目の利く人だったが、そう言われた。しかし、私はこれらのアルバムには父が語りかけるような、たとえば歌舞伎俳優の演ずる舞台写真の一つ一つにしても幼いながら、焼き付けられている印象があり、時には父と一緒に眺めた覚えのあるものが多いからだった。多感な壮年期にあった父のそれらの舞台から得た感動を年歯もゆかぬ息子に語りかけずにはいられなかった熱っぽい心情を思えば、少なくとも私の一代はこれを保存すべきものという意識が働いたのだ。あるいは好事の人があってこれを買う人もあるかも知れないが、私にとってこそこのかけがえのないものを失いたくなかったのである。

「きょうは父さんまたお芝居だから遅いよ」

と母は嘆くようによく言ったものだ。

しかし、そうは言われていてもそうした父の帰宅する足音をいつまでも寝ないで私は待っていた幼年期の覚えがある。

歌舞伎を愛し、役者たちの口跡を真似、浄瑠璃を口ずさんだ父、

（お若えの、お待ちなせぇ）

（有王よ、俊寛だ、わしだ）

（知らざぁ、言って聞かせやしょう）

そうした声色が聞えるようだ。

父に伴ったものであったかどうか、先代吉右衛門の「俊寛」だけは私もナマの舞台を見た覚えがある。ご赦免船が俊寛一人を残して遠ざかるのを崖上にはいのぼり見送りつつ、失意落胆のあまり絶望の涙にくれる場面で吉右衛門が本当の涙をその頬に滂沱とはふり落とし、身も世もあらず悲嘆に崩折れる名演技に感動したことが思い出される。父の歌舞伎を愛したのはこの同じ感動であったはずだ。

歌舞伎に心酔した父はもちろん文楽人形浄瑠璃ファンでもあったから、呂太夫、若太夫、津太夫といった太夫の名前を私の耳底の記憶として刻み残している。就中、名人とうたわれ、後に豊竹山城少掾を襲名する古靱太夫の無類とされた心理描写の繊細克明に酔う幸せを父は享受したのだった。往時の文楽櫓下、古靱太夫という名は父にとって神に近いものという印象を刻まれている。この古靱太夫がやがて掾号を秩父宮家より贈られ、また人間国宝、文化功労者となるのだが、とりわけ人間国宝の指定は父の最晩年の昭和三十年のことだったから、まだ存命中でわがことのように喜んだ記憶が生々しい。

新派の花柳章太郎、水谷八重子となると喜章、良重のそれぞれ二代にわたり見ている。近頃、浅草公会堂のファイナーレ公演をもって惜しまれつつ解散し消え去った

「新国劇」も沢田正二郎、初瀬乙羽夫妻の時代から、島田正吾、辰巳柳太郎の二枚看板に支えられる後年まで、同じ劇団の小川虎之助という名脇役が染井住居のころ近く住んでいたり、劇団理事兵藤さんの家も近く、親しみをもってこの劇団の公演は私もしばしば見る機会があった。

「報恩寺の仇討」、「恩讐の彼方へ」、「王将」、「一本刀土俵入り」、「表彰式前後」など、とりわけ額田六福さんの演劇雑誌『舞台』から「表彰式前後」で登場した北条秀司さんという劇作家のものに関心深く、むしろ私の方が熱心であったかも知れない。

曽我廼家一派では五九郎よりも五郎、後の梧楼の方がはるかに上かも知れない。彼は自ら台本まで書いた喜劇人だった。五九郎の方は「ノンキな父さん」を演じたので、こどもの私はその舞台を見たものではないが、覚えのある喜劇俳優である。一世を風びした麻生豊による漫画の主人公が「ノンキな父さん」だった。

ともあれ、後年になり私もまた演劇に親しむことになったのはすべて父の影響によるものであったことは確かである。

いまでこそ外国人の来朝は知名と否を問わずひきも切らず、また邦人の海外進出も地球を覆うありさまを格別不思議としない時代を迎えているが、この往時では大変珍しく大騒ぎしたもののようだ。幼い私はよく父に伴い昼風呂に出かけたものだが、初風呂の一番客はまだ浴槽にのったままの蓋板をとり除き湯もみして入ったものだ。板子の一枚を漕ぐように父は扱いながら、

「アインシュタイン、アインシュタイン」

と唱えていた奇妙な光景が思い浮かぶのだ。よほど（相対性原理）は父の関心事であったに相違ない。このアインシュタイン氏の来朝は大正十一年のことだった。小学一年生だった私の耳朶には鮮明に聞える父の声だ。

またの日、こんどは「照る日曇る日」とその同じ板の一枚に書かれていて、父が同じように板子を漕ぎながらそれを唱えるのを聞いた。なんとなくその語呂の良さが気に入ったもののようだった。後に大仏次郎さんの大ファンになる遠い因をなしたが当時は知る由もない。だれが書いたが墨色が浮かんでいまも見えるようである。大仏さんのこの作品と吉川英治さんの「鳴門秘帖」が同時期の大正十五年の八月から昭和初頭にかけて新聞に連載された作品であることはいみじきことであり、銀座の夜店で買った大衆文学全集の端本で読み、後年の私をとらえることになる。大衆文学なぞと決して悔ることをすまい、これは長く心奥に抱きつづけているもののこの際の告白である。

父の仕えた大谷嘉兵衛という方は大をなされた人に相応しく大変に大柄で、見るからの偉丈夫であった。伊藤博文公に似た美髯を蓄え、きわめて威厳のあるお人だっ

た。

いまに言うリタイアをした父が出版業の創業に踏み切ってからのこと、

ある日、

大谷さんは私たちの当時の路地奥の陋屋を訪ねられるということがあり、招じ入れる余地もない手狭の上、出版物の山なす状態に門口の会話だけで、ひたすら恐懼した父や母がともに往還まで送りに出て、待たせてあった人力車上の人なるのを見送るということがあった。翁が慈しみの手を延べ私の頭を撫でられた記憶を残している。大谷さんはこの時、父の近況を尋ね激励をするためにわざわざ駕を枉げられたものであった。

この大谷さんの銅像が横浜の掃部山に建てられていたことは、東海道本線の車窓から望め、

「あれが大谷さんの銅像だ」

と教えられたことがある。それを言う父の改まった敬虔な語調は真摯な響き伝えるもので、いかに父がその人から蒙った恩顧が手厚いものであり、またその人が単なる富貴にとどまらず、人となりの偉大であったかを推し計れるのであった。とかく狷介の側面をもち、晩年ほどその度を強くして「市井の逸民」なぞと自称した父だから、意外なことと言える。

アルバムに残されたすべてが大谷さんに扈従した旅行先を記念する絵はがきばかりとは限らないであろうけれども、カメラを持ってスナップを撮ることを考えられなかった明治人が折々の旅の感銘を絵はがきを求めるという行為に託したものばかりだ。壮気に満ちた探訪の記録の多様をたどれるものであり、これも晩年は貧しく思うに任せぬ状態であったから、せめてもの救い与えてくれる。いまとなればこれらが得難く、今昔感を検証する貴重な資料になり得るものではないかと思うのである。

美術への関心を示す絵はがきは歌舞伎に対するものに匹敵する量を数える。「大正っ子」少年編に書いたことと重複するけれども、駒込上富士前町時代の住居では近隣に後の美校教授となれた彫金家の清水亀蔵さんがおられたり、日本画の勝田蕉琴さんの住いがあったり、また丸山晩霞さん、藤島武二さんなど少し離れていたけれども敬意をもってそれと父から教えられたものである。教えられて見るとただずまいで画家のそれと分かるのだが、みな名字だけの表札でただ「勝田」、「丸山」とのみあるだけなのだが、父は良く知っていた。

清水さんの家は私のところと同じ家主で、すぐ前の家であった。路地奥から木戸口へぬける通路に向けて清水さんの家には窓があり、通りながら大きな黒子を顔に持った清水さんの仕事にいそしむ姿をよく見かけた。タガネを使い大変細かい仕事をされているのであった。水銀ですっかり喉を潰されておられた時期があり、また、奈良へ出かけられて東大寺に参篭され、大仏さまの蓮華座

の細密な毛彫りの写生に取り組まれたため、もともと不自由なお足をすっかり長い端座で痛められてしまったという話など、こどもなりに大変なことだと思われたが、それらのことを大変感動的なこととして父は私に向って語り聞かせたものだった。

暑い季節に向ってであろう、あの清水さんの家の窓が開けられたままになっており、路地を通りながら中の様子を覗き、時には戯れ心で竹格子にブラ下がったこともあったようだが、仕事中の方と会話を交わしたこともあったりするように覚えている。芸術家の精進される姿をそうした垣間見から、それとなく厳しさにうたれたものだった。

清水さんは明治の彫金界重鎮、帝室技芸員・東京美術学校教授の海野勝珉さんの薫陶をうけ、また同じく美校教授狩野夏雄さんに師事した人である。お気の毒な跛足の障害を持たれながら、ひたむきな努力精進を積まれた方であった。やがて中村橋の方に引越をされていたこの隣人が報われて母校の教授に迎えられたとき、父はわがことのように喜び祝辞をおくったことだった。

後年の「大正っ子」少年編に綴られる私の（美校受験奮戦記）は全くの無暴、それは親も子もともにと言えることで、私に素質がないばかりか、経済的破綻のドン底にあった事情から授業料の滞納で中学校卒業を危ぶまれていた事情の中、息子の受験を認めたこともまたおよそ理解を超えることであった。

父の美術嗜好はアルバムの絵はがきに顕著である。

院展の溪仙、青邨。

文展の関雪、小虎、玉堂、不折、映丘、素明、契月。

光風会の晩霞、三郎助。

国画会の麦僊、紫峰、竹橋、華岳。

渉猟ということばがこの場合あて嵌まるのであろうか。

これらの画家は雅号を聞くだけでそのフルネームをたちどころに私は答えられる。みな父のお蔭である。しかく少年の私は父から同じ嗜好を植えつけられたものであった。

美術の関連として珍しいものに「大戦ポスター展」の絵はがきがある。痛手をき戦勝国の余裕というか、この場合の大戦は第一次のもので大正十年に開かれた展覧会の折のものである。英、米、仏、露、の連合国側の募兵や戦費公債の公募ポスターが多い。各国が危急を訴え、いかに平和を希求したか、その願いが切々の感動をもって迫るようであり、少年の私を魅了するに十分のものがあった。有名画家たちが多く彩管をふるい美術価値の高いものだ。このポスターについては別に「大戦ポスター集」として朝日新聞社から同年八月に刊行されたものがあり、中村不折さんの題字で出されていて、やはり桃李庵の架蔵に加えられいまも無事を得ている。

もうひとつ、落すことのできない絵はがきがあった。

それは大正十二年の関東大震災の折のものだ。ゴロゴロ崩壊している上野東照宮の石灯篭、飴のように曲がった鉄骨屋根を残した万世橋駅と焼け残った広瀬中佐銅像、炎上する帝国劇場付近、焼土と化した尾張町付近、etcだが、そうした中に焼け跡の水道で行水、という一枚があり、ふくよかな裸婦三人が写されたものがあった。後にこのため発売禁止に会ったというものである。父が声をひそめて話題にした覚えがある。私にはそれがなぜか少年の身には真っ直ぐ呑み込めない謎になった。間断ない空からの脅威、空襲に怯え飢餓にあえいださきの戦争が人災であったのに比べれば、こちらは天災だったという違いが明らかにここにあった。地震さえおさまってみれば、同じ焼土の中でもこんな風景があった。エロスとこれを目くじら立てた方がよほどおかしい。

この大震災のことは「大正っ子」少年編に詳しい文章を書いているので、ここでは点描にとどめたい。

相模湾海底を震源とし、十一時五十八分突如の強震であった。私は二学期の始業式から帰り遭遇した。余震回数六日午前六時までに千三十九回。

父は横浜から歩いて夕刻帰宅した。

本郷方面から大きな火の子が飛来したが、山の手は無事を得た。

四日に至り大和呆治伯父、父方甥の酒井九八郎の二人が交通途絶を冒し長野県より見舞に到着した。塩尻峠で東京の空が真っ赤に地獄の火のごとく望めたという。

大杉栄が憲兵大尉甘糟正彦らにより謀殺された。

当時の被支配民族により井戸に毒薬を投入する、あるいは蜂起暴動があるなぞの流言に怯え、故なく多く殺害された。

小学校の授業は九月は始業式の一日のみ、十月八日にいたりようやく再開された。

この年九月の「朝日新聞縮刷版」は東京の報道機関の壊滅の事情で「大阪朝日」の紙面で補い、ガリ版刷号外などを収録し発行された。いまは没すべからざる貴重な資料として前記絵はがきの一組とは別に桃李庵に所蔵を確保されている。

さて、さて、さらには賀状などに及ばねばならぬ。

西村淮園の野毛の山柄さんは狂歌、

子らが来て名をし残せと救うれば
雑煮の碗に残る小松菜

西村さんは漢詩をよくされた仁賀保成人さんとともに教養の人で父が横浜時代に交渉のあった方たちだ。

「国民文学」の歌人にして父とは仙台の旧制第二高等学校の同窓、半田良平さんの賀状には、

新しき年のはじめのあめつちに
生けらく思へばいのちはるかなり

また、

わがたづきかすかなれども言あげて
あらたなる年をことほぎまをす、

さらに、またこうもある、

わがいのち現しならめや初日子の
ひかりをあびて立つ年おもへば

大正五年、六年、七年のつづく三年の賀状だ。この時代は原作分ち書きである。まま写したが、さすがと思えるものだ。

半田良平さんは遺歌集となった「幸木」によって昭和二十三年度文学部門の芸術院賞に輝いた優れた歌人である。昭和二十年五月十九日、終戦を知らず亡くなられている。

若きらが親に先立ち去ぬる世を幾世積まば国は栄えむ

人ならば吾をさいなむ「運命」にをどりかかりて咽喉締めましを

サイパンに子息を失われた方の悲痛を叫びが聞える。

享年五十九歳はあまりにもお若い。この半田さんは私の誕生に際し、五月人形を祝って下さった。毎年これを飾るときに父の特長のある箱書きの文字に出会う。人形は「神功皇后と武内宿祢」である。

奈良大安寺の中村大来さんからは、例年美事な篆刻で飾られた賀状で、

「随地春風」

「紫気東来」

「紅日満窓」

などとあり、刻字の妙、文辞の巧みに感じ入る。父と大来さんとの交わりはどんなキッカケによるものかを私は知っていないが、かなり深い交際で次第に篆刻の雅趣に魅せられたもののようである。大来さんは漂泊の僧侶であったらしく、やがてしばらく消息を絶つことがあって、父が案じていたところ奈良からの音信があり、

奈良へ来て奈良の名所を見落とすな
奈良の名所に大安寺あり

と、南都七大寺の一寺に身を寄せている旨の便りがあったりしたものだった。

後年、私は奈良にその大安寺を訪ねる機会に恵まれ、いまは七大寺とは名ばかりの寂しい寺域に足を踏み入れ、堂宇滅びた片隅の納所に声をかけた。奥から中年の僧が出てきて応対してくれた。

「はい、そういう方がたしかに居られたようです、篆刻のことも伺っております」

心細い答えだった。さすらいの寄寓の身、いずこにその生を終られたものかを知らない。大来さんは無名であったが、その作品の刀勢はまことに雄渾で、桃李庵愛蔵印顆の中にもっとも多くいまに伝えられている。大来さんの作として他に残るものに父のフルネームの門札を刻字したものがある。伽羅木に陽刻され金箔を施したとい

う豪華なものである。筐底深く秘蔵されたままついに掲げることのなかったものだが、父の脳裏には他日を期して出版業の成功の暁、瀟洒な邸宅を構える夢を描いた哀しさのこもる遺品になった。

ついでながら篆刻によせる執心から、ついには知名の印人にも近づき中村蘭台さん門下の石川蘭八さんの作品などを所蔵に加えており、また伴う印材蒐集にも凝って未刻の鶏血石のものなどを残している。

さて、いよいよアルバムから発掘されたとくにわが家にとって貴重な古文書的価値をもつ前記した二枚のはがきにおよばねばならぬ。

それは父の出版業の創業におよぶ経緯を解くことに外ならない。

その一はまず西村真次さんからのものだ。処女出版の楽屋裏である。

啓上、蟲の原稿出来ましたから今日夕刻に拙宅へ願わくは来て下さい。画のこともこまごまとお願いしますから、なるべく御自身で。私は明日から旅に出ます。

牛込矢来人

西村真次

これは大正十三年八月十五日の消印のある速達便で懐かしくも壱銭五厘の郵便はがきに六銭の切手が貼られたものだ。当時は（はかき）と濁らず、逓信省発行・印刷局製造という文字が表面下端に見える。

西村さんは早稲田大学の教授として船の研究者だが、その人が趣味に生きて『蟲』の本をまとめられているのである。

はがきはその著者から原稿がまとまったから、取りにきてほしいという趣旨のものだ。（著者は史家であり、文士である上、博物学に熱心な人である。）、これは本の出された往時の書評に見える文字として拾えるものだが、はがきに見られる文辞はさすがと思えるものだ。簡にして要を得、自著を『蟲』と呼び、（牛込矢来の人）と称するあたり、気取りというより自らな風格を感じさせる。

ここで、（画のこともこまごまと）とあるのは織田一磨さんを指してのことだ。『鳴く蟲の観察』は画譜をかね、三色の口絵、挿画二十六を飾っている。

（鳴く蟲の全伝）であり、（鳴く蟲画譜）

（鳴く蟲の文学）、（鳴く蟲の科学）

というコメントはこの処女出版にあたり、書肆経営者として父が抱負をにじませたものになっているが、とくに「画譜」という特色が強調されている。

織田一磨さんはパンの会の会員、エッチングを得意とした版画家である。生涯、東京の風景を描きつづけて、「東京風景」、「画集銀座」、「画集新宿」を相次ぎ発

表され、当時脂の乗った画家だった。西村教授はその織田さんの挿画を指定されたのである。矢来八番地のお宅にその日伺って、おそらくは織田さんも同席され打合わせがあったものに違いない。前後のいきさつ、はがきの文面からそのように想像される。

教授の方はお目にかかることがなかったが、織田さんは幾度となく私の家を訪れられ、父とははなはだ意気投合したようすであった。ひどい吃音の持主であった織田さんの声が二階から下りてきて、それがおかしく私が転げるように笑ったものだから、母にたしなめられた覚えがある。二人とも声が高く話し好きであった。織田さんは画家にして文人でもあった。「北斉」、「浮世絵十八考」などの著作をこの時期にすでに出しておられる。そういうことでも話のウマが合ったものだったろう。

母は酒肴を運びながら

「父さん、話がくどい人だから、良いかげんにしないとねぇ、もう時間だって遅いんだから」

と愚痴っていた囁きが耳の底にいまも残っている。

織田さんは後に「武蔵野の記録」という本も出しておられるが、武蔵野の植物や昆虫のことはその採集におよび大変に詳しく、この本にもスケッチを多く挿入されている。ちかごろこの本は復刻版が出たので蔵書に加えることができた。しかし、『鳴く蟲の観察』のために描かれた挿画は細密、繊細、一層出色のものに思える。口絵として描かれた色彩画をふくめ原画はすべて大切に保存され無事である。

またの後日、織田さんは（文学散歩）の嚆矢となった野田宇太郎さんの「新東京文学散歩」の挿画を担当し、原色「歌舞伎座付近」ほか三葉を描かれている。うってつけの仕事だった。織田さんがあの十五年戦争を経て無事であり、良い仕事をされていることを知り喜んだことだった。この本の初版は昭和二十六年六月の刊である。いまは消えてしまった日本読書新聞の発行である。

私は右の本の刊行を機とした第一回の（東京文学遺跡巡り）に同年十月十日の日曜日に参加し、著者の署名ばかりか、伝通院横の幸田露伴さんの旧居では幸田文子さんの署名など頂いている。これも織田一磨さんとのご縁の導きと言えるかも知れない。

織田さんは昭和三十一年、三月八日吉祥寺の自宅で亡くなられた。享年七十三歳。奇しきことには父は同じ年六月九日の他界で、織田さんは明治十五年の生れ、十六年の父より数ヶ月の年長であった。

平成と世変りした元年の一月二十九日、ＮＨＫの日曜美術館は「描かれた東京・織田一磨」をたまたま放映した。私のこの「父真人」を出版業始末を中心に書こうとするキッカケは計らずもこのように幾重にも重なった。なにかの因縁であろうか。

さて、暦をふたたび大正十三年にたち帰ることにしたい。その十一月、父はいよいよ大抱負をもって、いまに云う脱サラ宣言の挨拶状を出している。アルバムに発掘された二つ目のはがきである。

秋深くなりました。御機嫌如何で御座いますか。今度余て望みの出版業を、「弥圓書房」という名で創めることになりました。どうぞ行末永く御愛顧下さいませ。別便で初出版「鳴く蟲の観察」一冊御座右へ呈上致しましたので、おひまに御覧下さいませ。右は御家庭殊にお子様方の趣味涵養読本としてお薦め申して好いものと信じます。お序での節御知合の方に御紹介下されますならば誠に有難い幸せに存じます。

大正十三年歳次甲子十一月

東京市本郷区駒込上富士町参番地

大和真人

実はこれに先だって四月横浜の方の職を辞した挨拶状のはがきもあるのだが、ここでは割愛した。ただそれには（なにか柄に合った商売がして見たくなり）とあり、いずれ御挨拶を申し上げる機がありましょう、とかなり勿体をつけたものになっている。客気多い壮年期を思わせるものだ。この年の父は四十一歳である。関東大震災は日本の社会に計らざる大きな転機をもたらした。あの大戦の終結を境に戦前と戦後が区別されるのに似ている。やはり震災前、震災後ということばが存在した。わが家にとってもその震災後という事情の訪れを迎えていたのだった。

この時期をたどる手がかりを父はアルバム以外にも残していた。筐底に深く蔵われていた小さな手帳がそれである。

「市井の一書肆」、「大和書房主　大和真人」などの文字がこの小さな手帳の裏見返しに墨書されている。だが、表見返しにはなぜか「弥圓書房攻め大和書房」という文字も発見される。「市井の一書肆」は生涯市井人を任じ、逸民を称し晩年を不本意にその通りに終るのだが、ここでは気取り加減が察せられそれが微笑ましさを誘う。「弥圓」はヤエンはヤマトを漢字に充てたというものだったが、「弥圓」は（野猿）に通じるという悪態をいう人があって気にしているということがあったので、そのためかとも思われる。とかく他人の好事に対してはそういう口のききかたしかできない人はいるものである。

ところで、手帳の中身の記事に次の記録を発見する。

大正十三年歳次甲子八月十五日

午後、『鳴く蟲の観察』原稿

受取

西村さんの速達をうけると、ただちに矢来の宅に出かけていることがわかる。初出版へむけて踊るような父の

鼓動を伝えている。

書名はすでに『鳴く蟲の観察』とここでは確定しているが、著者の意向によるものであったろう。手帳には父の方であらかじめ仮題を「昆蟲の生活」として依頼の交渉をしていたことがわかる。そして、西村さんへは影山千万樹君紹介とあり、七月五日往訪の記録がある。これから判断して西村さんの場合は雑誌に発表したり、あらまし書きためた原稿があって、それに手を加えられたものであったろう。

ついでながら、このメモに拾える将来へかけて刊行を目論見として書き止めているものを写すと、このようである。

藤原咲平「日本気象学」（十二年六月二十日午前十時）
灰野庄平「日本演劇史」
石田収蔵「最新人類学」
鷹司信輔「日本鳥類学」
田中豊蔵「日本絵画論（日本絵画史）」（十二年七月八日午後一時）
窪田通治「徳川時代文学史」
斉藤勇「英文学史」
柳田国男「日本の土俗と伝説」（岡村千秋君紹介）
木村泰賢「印度仏教史」（木村雄山君紹介）
柳宗悦「宗教新論」（柳楢喬君ノ弟）
杉森孝次郎「倫理学原論」（影山千万樹君紹介）
野々村戒三「基督教史」（影山千万樹君紹介）（甲子・六・二七）
杉森孝次郎「倫理学原論」（影山千万樹君紹介）

ここで気づくのだが、父はすでに前年の、つまり震災前から行動を起していることだ。カッコ内は著者をそれぞれ訪ねているデータであり、甲子が十三年である。

一介無名の出版書肆の主がたとえ紹介者があっても、またかりに一度は会ってくれることがあっても、おいそれとは原稿依頼に応諾が得られるはずもない。

庶民の足もいまのようではない。頼るとすれば四輪、救助網のついた、二本ポール、手動ブレーキといった往時の市街路面電車に乗る以外に方法はない。円太郎と呼ぶ乗合自動車や中型の木造六十六人乗りボギー電車の登場は震災後である。おそらく足を棒にして一日一件の訪問がやっとだったろう。盛夏に、または残暑の中を汗を絞りながら市電を乗り継ぎ、江戸川から矢来へ西村さんの宅まで出かけることは容易ではなかったはずだ。そう言えば（矢来町）行という直通の電車があったことを私もいまは思い出すのだが、神明町車庫始発ではなかったかと思う。しかし、いまに云う不忍通りが大塚を経て護国寺まで開通したのはやはり震災後のように思う。

さて、市井の一書肆の目論見はさらに泉のように滾々として涌き出て止まない。

小泉信三「日本経済史」（堀川淳一郎君紹介）

高橋誠一郎「日本経済学史」（堀川淳一郎君紹介）
永井潜「最新生理衛生学」（清水亀蔵君紹介）
後藤朝太郎「文字学」（原安民君紹介）
金田一京助「言語学」（岡村千秋君紹介）

紹介者のお名前はあらためて懐かしさを呼び戻す私にも記憶のあるものだが、父とはどういう関係の方かまでそのすべてを知っていない。

また、ここで言う（君）は必ずしも同輩の知友とは限らないもののようだ。清水亀蔵さん、そして原安民さんの場合からそう思える。原さんは私の幼な友達原菊枝さんのお父さんである。やはり「大正っ子」少年編に書いたことだが、私が買ってもらったばかりの学童服を有刺鉄線でカギ裂きしたとき、菊枝さんは慣れない手つきで繕いをしてくれた人である。その時は結局見つかってしまい、ひどく叱られたものだが、忘れられない恩義を蒙った覚えが鮮明である。原さんの家にはよく遊びに行ったものだった。珍しい日清、日露の戦争錦絵がお父さんの蒐集らしく沢山あり、見せてもらったものだった。そうしてみるとその原さんのお父さんは父よりお年上に思われる。銅像などを鋳造する工場の経営者であった。

さてはさらには伊木寿一さんの紹介をも頂いて、

黒板勝美、大類伸、村川堅固

といった錚々たる大家の名をあげ記している。

伊木寿一さんは創業時の陋屋の家主東宮さんの女婿であられた。当時東京帝国大学史料編纂所におられ、古文書学の方で知られた学者であった。後にご縁あって私がその講義を親しく受けることになろうとはまだ露知らないことであった。

若山牧水（喜志子君紹介）

この場合は女流歌人の牧水夫人が父と同郷という縁故によるものだ。後に疎開中、篠の井線村井の駅頭に「若山喜志子歌碑」の建設があり、父も発起に名を連ねることがあった。村井は塩尻と松本の中間駅である。いまは松本市に編入されているが、東筑摩郡芳川村村井町一一四番地が父の出生地であり、成育地である。

そして、喜志子歌碑は云う

ふるさとの信濃を遠み秋草のりんどうの花はつむによしなし

さらにこれは戦後昭和三十六年の建碑だが、公民館わきのものでは、作者七十五歳頃の詠で、

四ケ村せんげいも流れてゐるづらかみなみ原長者屋敷は夢のまたゆめ

とある。後者に云う四ケ村は村井、平田、野溝、小屋を指し、（せんげ）は堰（用水路）のことである。みなみ原、長者屋敷は昔豪族が居館を置いたあたり一帯を云い、（ゐるづらか）は方言をたくみに採り入れたものだ。父に生あってこの歌の心に触れるなら、「望郷」の想いを誘われずにはいられない歌詞である。

ちなみに長野県東筑地方はひとりこの若山喜志子さんばかりではなく吉江喬松、太田水穂、窪田空穂、木下尚江ら文学者や歌人を生んだ土地柄であることを没却できない。そうした風土に根ざした文人指向が父になかったとは言い切れないようだ。

右の後者の方の喜志子歌碑の詠に出てくる（せんげ）と呼ぶ用水路の開鑿は中村貞一なる人が昭和七年に実現させたものだったが、父とは同年の友人ということでその彰功碑建設の企てが戦後に発起された折、たまたま疎開中で選文、祭文、祝辞の起草にあたり、文藻の才を奮い立たせ熱心に行ったということがある。いずれも自分は表面に立たず陰の骨折りであったが、その草稿が残っている。この上水道の松本市移管に際し代償として戦後喜志子歌碑を傍らにする公民館が建設されたという経緯があったのだった。

もう一つの碑のこともここに加えて書いておこう。それは山村湖四郎さんとおっしゃる方のものだ。

書きとめておきたい。

幼くて聞きし田川の瀬の音を古里遠く帰りきて聞く

この山村さんは年少の友である。長い東京住いの上晩年を帰郷されている。喜志子さんらの「創作」社の同人であり、やがて歌誌「朝霧」を主宰した方であった。碑に刻まれるこの歌も父の涙するに相違ないものだ。田川はさきの上水道の取水源をなし、村の家並みの東を流れている。そしてここから鉢伏山を仰ぐことができ、午伏寺、欠ノ湯などを指呼することができる。父方の父祖の墳墓はこれらを望むところに静もっている。ここで記しておこう。

さて、まだまだ続くメモの方を没にするわけにはいかない。

斉藤　勇「英国の童話と童謡」
木村謹治「独逸の童話と童謡」

以下、仏蘭西、北欧、南欧、露西亜、支那という区分で、それぞれの「童話と童謡」

そして、

少年の日本史
少年の西洋史
少年の東洋史

と、羅列されている。

思えば『黄河の水』は右の少年シリーズの第一冊として登場したものであることがわかる。

さきの創業にあたっての挨拶状に（御家庭殊にお子様方の趣味涵養読本）としている書肆の意図する抱負がここに浮んで見える。

少年の日本史としては

「法隆寺・正倉院」中村孝也

と見える。

少年の西洋史には、
「ピラミッド」
という仮題をあげている。
書信による執筆依頼の交渉もあって、発信の日を記録し、斜線して（今に返なし）としているものもかなりある。無名書肆の悲しさである。中村孝也博士などはその一人である。当時からお宅は本郷森川であったようで、後年、いみじくもその講義を私は拝聴し、さらに勤めの関係では講演依頼の使としてお宅をお訪ねすることになった。戦争激化の最中のことで演題は時節柄の戦意高揚を狙いとした「楠公精神の真髄」といったものであった。そうしたこととよりも、謝礼の金一封に添えて物質不足の折から接待の南京豆を大変喜ばれたため、土産として若干をお待たせした覚えがあり、奇妙な印象を刻んでいる。食料の逼迫した時代だから先生にとっては金一封よりも失礼ながら南京豆の方が重かったのではないかと思えた。遙けき昔、一顧にも値しなかった（市井の一書肆）の息子が私であることなぞ夢ご存知のないことであった。

（家のはじめ　大正四年乙卯八月二十九日）
そして、
大正十五年　九月　五日　弥圓書房新築上棟
同　年十一月　五日　家屋ほぼ竣成外囲い取れて街路に接す
同　年十一月二十四日　ひのとみ大安、新居へ移転

最後の新居移転についてはとくにいまはあまり見かけない（日めくり暦）の同日の一枚をソックリを記念して、ご丁寧なことにペタリと貼られている。
これはわが家の住いに関する記録だ。やはり同じメモに発見される。とくに最初の一行がまったく思いがけない記事だった。（家のはじめ）とあるのは父がはじめて一戸を構えたことを指すものだ。大正乙卯はその九月に私は誕生しているのだから、夫婦はそれまで他に寄寓していたことになるし、母は臨月に近いそんな時期になってはじめて所帯らしいもの持ったという事情が明らかな記事だからである。
この家が（市井の一書肆）創業の家となった。陋屋と呼び来った、まさにそのもののような家であった。上下六畳二間に台所、やや広くとった土間のある玄関、それに猫額の庭といった構えで、瓦斯灯、釣瓶井戸といった風情で、台所にはもはや見かけぬ天井引窓があった。家賃の如何程であったかを私は知らない。瓦斯灯のマントルと呼んで発光体を使いはじめに焼くのが珍しかった。天井を鼠が走り回り、鼬のす早く走る姿も見られ、鳶もゆるりと輪を描いて舞い、庭はもぐらが耕すこともあるといった、のんびりした大正時代典型の借家だった。それにしても電灯のいまだ引かれていない家はそのころとしても珍らしいのかも知れない。
（やや、広くとった土間）と書いたが、それは文字通り本当に土だけの、凹凸のカルデラ状を呈する体のものだった。
しかし、その土間が東京印刷から運ばれてきた『鳴く蟲の観察』を積むのに役立った。多分は戸板かなにかを敷いた上に積んだものだと思う、と言うよりそうする外ないという事情であったはずだ。そう書いてみるとまさにそうであったことが思い出される。湿気がくる前に本がハケれば良いがと夫婦が気遣っていた日が明瞭な記憶になっている。こどもなりの心馳せで私までもが心配したものであった。もちろん屋内も本の山で、親子四人小さくなって寝たように思う。
しかし、いよいよ、賽は投ぜられルビコン河を渡らねばぬという言い知れぬ興奮の虜になってこどもの私さえなかなか眠れなかった。
『鳴く蟲の観察』の刊行は大正十三年十一月のことであった。
刊行後は各紙が書評にとりあげてくれ、しかもおおむね好評だった。
読売新聞、大阪毎日新聞、国民新聞、サンデー毎日、昆蟲世界、中学世界などがそれだ。
それというのも西村先生のネームバリューに負うという部分が多かったのであったろう。
著者は史家であり、文士である上、博物学にも熱心な人である。わけても鳴く蟲の研究には最も趣味を有し研究ここに年あり。本書「昆蟲の音楽」「秋の蟲」「夏の蟲」の三章から成り、あらゆる鳴く蟲を記載して洩らすなし。愛蟲家の切に一読あらむ事を薦む。
これは国民新聞のものだ。短いものを一つだけ写した。文語体に時代が感じられる。評者を明記するものとしてはサンデー毎日の尾関岩二氏、中学世界の白石実三氏などがあった。
売り捌き取次は東京堂と栗田出版だった。
一冊は八掛半、三冊以上八掛、十冊以上七・八掛というメモがある。定価壱圓八拾銭の本だ。
新型四六判・上質コットン紙・表紙クロース製函入・三色版口絵・コロタイプ図版六・挿画二十六という体裁である。
さきの創業の挨拶状に知れるように父は知友知己にかなりの冊数を贈呈している。各地の図書館への寄贈も多かったようだ。
「父さんったら、人が良いから、みんなタダで送ってしまうんだから、どうなることかしらね」
と母が私に向ってそれとない心配を愚痴にしたのが耳底に残っている。
まったく商才などなく、算盤をもったこともない父だ

った。母の心配は杞憂とは言えないものであった。出版業界に伍して取引をすすめていく上に、電話の普及しない当時とはいえ、その架設のないハンディだけでも不利は明らかであった。

新居移転のことはさておき、ここでは先後を正して書房の第二弾『黄河の水』の刊行についていよいよデータを追わねばならない。

大正十四年歳次乙丑七月二十四日

午後一時、『黄河の水』原稿受取

同　八月　五日

午後四時～五時　右原稿を東京印刷へ託す

当時の鳥山喜一さんは新潟高等学校教授であった。この本の著者による「はしがき」の一部を写しておきたい。

（前略）

この書の出版者の大和君と、著者の私とは、高等学校以来の旧友です。其の大和君が新に一書肆を開いたので、昔なじみに、何か支那史の通俗のものをと要求された。私は前申す通りの考えをもって居ましたが、かういふ著述に適任だかどうかといふことには、惑ひなきを得ません。しかし、思ひ切って筆を染めて見たのです。

（中略）

私は小学校の上級生ならば、容易く会得の出来る程度の文章と、叙述の方法を採りました。然し歴史の通俗化ー殊に少年の読み得る程度までのーといふことを、逸話や伝説の寄木細工として、能事了れりとするやうなものとは、まったく別な道に進みました。

かくいへばとて、伝説や逸話を私は決して斥けは致しません。時にはやゝ誇張したる形に於いてさへ、私はこれを利用もしたでせう。・・

（後略）

委曲を尽くされた（はしがき）である。

いま、昭和十六年発行の第二高等学校の名簿の黄はんだものが一冊私の手元に残されており、その頁を繰って見ると、

明治四十一年第一部文科の卒業として

鳥山喜一　文　京城帝国大学教授　京城府同上法文学部内

と見え、

一方に父のほうは一年後の同四十二年第一部英法科卒業として

大和真人　法　ー　東京市豊島区駒込六丁目八三三

と訓を誤まられヤマトの「ヤ」の部に見える。

ちなみにさきに同学の友人として書くことのあった歌人の半田良平さんの方は同期第一部文科にその名前を発

見できる。

この名簿の名前下に文、法とあるのは学位である。鳥山さんと半田さんは文、父は法である。農家の次男であった父は法科だから遊学を許されたのだ。しかも、かなりの晩学でもあったことが名簿でわかる。

ところで、父はよほどつむじ曲がりで「学士会」の会員にはついになっていない。したがって「学士会員名簿」にはその名を欠いているのだ。家主の東宮さんの家に私が遊びに行っているとき、そのことが話題になった。

「なに、会員になる、ならないは自由なのだ」

と父の恬然として言うのを聞いた。

『黄河の水』の初版は大正十五年一月に発行された。

四六版・総布表紙・本文二百六十頁・挿画九十七図・年表・地図十二図・索引付

という体裁で定価は二円八十銭であった。

私は小学四年生でその三月、在学中ただ一度の優等賞をもらった。成績もいまもって信じられないくらいの全甲を記録した。こんなことを書くのは家運がどれだけこどもの勉学上に影響するものかを言いたいためである。その後の成績不振を弁護するためではない。

東宮家の家作が取り壊され、新築されることになった。清水亀蔵さんの転居を機にそれはすすめられた。上棟その他その家に入るまでの三行ばかりの記事にそのことについての期待が行間に読み取れる。

弥圓書房新築上棟

だが、これは僭称を免れないものだった。

（だれさんが施主やら）

という蔭の囁きがあった。毎日掃除に現場へ足を入れ、またあれこれ注文も家主にするというありさまに母や私までハラハラしたものだ。

まだ引越以前のある日、母がひどく怒って手荒く外出の身繕いをするようすに、私がなにか慰めを言おうとするのも無視され、結局は家を飛び出していくのを見送るといういきさつが起った。せっかく創業した仕事上のことで父と母とはしだいに諍うことが多くなっていたのだ。私はことの成行きを悲しんだが、どうしようもないのであった。母の行く先は私にもわかっていたが、帰宅した父にはそれが言えなかった。父にも見当のついていることだった。

佐藤岳翁、と本の寄贈記録のメモの中には初手にいつも記されている。岳翁はもちろん岳父を指すものだ。岳翁なぞと父はこうした表現が好きであった。

母方の祖父であるその佐藤直の家は駒込神明町で、本郷駒込の富士神社が近く、わが家からは駈けて二〇〇米ぐらいのところにあった。近間だからとかく父娘双方の間に行き来があったものだ。東京薬学専門学校教授の職を居眠りするまで勤め、いまは罷役の身（おクマさん）という田舎丸出しで気に入らない下婢との二人暮しであ

った。

佐藤の祖父は安政三年の生まれで、東京開成学校に学び、後に学制改革により帝国大学となる以前の勉学をした人であった。母は祖父の任地の関係で生誕地は福岡、成育地は岡山という転変を繰り返し、名古屋で高等女学校を卒えたのだった。そうした家庭事情と勉学上の都合から曽祖母と暮し、乳母に育てられたという時期もあり、我儘も多分にある人だった。しかし、祖父の生きている間はつねに庇護をうけ、どれほどか私の家の苦しい時期を支えられたか知れないのである。わが家がドン底に喘いでいた昭和五年にこの祖父は亡くなっている。

新たに移転した家は階下二間に台所、二階は三間で、八、六、三と広く、私の勉強部屋はその三畳を与えられた。物干しがあっても、敷地一杯、まったく庭のないという風情のない家であった。

すでに書房は斜陽に瀕しており、この家には二年とは住まないで終った。

同じ家主の借家で家賃の安い裏手に移った。私はその家に移ってから中学校に入学し、四つ違いの妹真澄もそれなりおくれで高等女学校に入学した。二人の在学中は父の長い徒食が続いており、もっとも貧しく苦しい生活が続いた。すでに父は『黄河の水』の版権まで刀江書院に譲ってしまっていた。紙型で再版した刀江書院は定価を下げ、好評の重版をその後も続けたのは皮肉と言わねばならない。

母は二人姉妹であったが、長女の母ひでの方が父に嫁し、妹のふじが佐藤の家を継ぎ婿を迎えていた。依怙地な父はその婿とついに解けぬ不仲に終っている。

「早稲田大学のねえ、ちと問題ではないかな」

暗に大学の左傾を非難するかに父の書肆の初刊をけなした人である。もちろんそれだけではない。官途に終始したこの叔父と市井に生きようとした二人はついに相容れぬ宿命を負うていた。

父はそのため祖父の葬儀にも顔を出さないかたくなを通している。気まずい思いをしたものであった。

だが、冒頭に書いたように従兄弟同志は昭和を終った今日なんのわだかまりもない会合をしている。ほっとする思いだ。芽出度しと言うべきだろう。

つい先頃、友人Kからこんな電話があった。

「おい、お父さんを書けよ、いまのうち書かないと書けなくなるぞ、ボクはあのお父さんを尊敬していた、君の父さんは怪物だった。おれはそう思って尊敬しているんだ、とにかく怪物だった」

あいかわらずの酔余の電話であった。（怪物）は二度ほど繰り返えされた。かれ一流、他意なく口をついて出たものだったが、苦笑を禁じ得なかった。

岩波書店に挑むかの構想を夢に描き、商才なく資力尽きる戦いをあえてした父を私もまた（怪物）と呼ばざる得ないようだ。

「あの本は鳥山さんの名著ですよ」

はるか後年、東洋史でお世話になった青山公亮教授の言われるのを聞いた。私は雀躍する思いで父に伝えた。

「ほう、そう言ってくれたかね」

まだ、父は存命中で、はなはだ感慨深げそうに言ったものであった。鳥山さんは富山大学長を最後に、その頃は某私大の文学部長であった。

ところで、右に同じKは先年、九十三歳の生涯を了えた母の葬儀後にこんな手紙を私にくれた。

（略）

お父様と云い、お母様といい、僕には大変なつかしいお人でした。

駒込のお家へお伺いした時代を想い浮かべます。

お母様はいつも優しく僕に接してくれました。三日に一度位お邪魔出来たのも、そんなお母様に甘えていたのだと思います。出来た人でした。

お父様にも僕はいつも頭が上らぬ程そんけいしていました。

板橋にうつられて、お目にかかりませんでしたが、お父様は寝たっきりになってしまわれて、お隣りの部屋からお声がして

「Kさんですか、久し振りですネ、私は見苦しい姿だからお会いしませんが、何卒ゆっくりしていって下さい」

と言うお言葉を頂き感激しました。襖越しのお声です。

お互に苦しい戦後間もない時代でした。お父様は優しい立派な方でした。

ご令息、真澄様にもよろしく。

とあった。

（平成元・三・尽）

駆けろ銀行（一）

三戸岡道夫

（一）

「南の国を攻め取ってやる」

早馬徹はいつも口癖のように、そう言っていた。言うというよりも、豪語に近い。

南の国といっても、いわゆる（国）ではない。朝日銀行の本部建物の、南側のスペースのことである。早馬の部屋は本部ビルの、北側にあったからである。

同じビルでも、その南側と北側とでは、大いに条件が違う。南側は明るく、暖かい。北側は陰気で寒い。同じビルの中で仕事をするなら、南側がいいにきまっている。

しかし早馬徹が南側のスペースを征服したがっているのは、北国の民族が、陽光まぶしい南国の地を憧れるような、単なる自然環境への憧憬を言っているのではない。南側の部屋には、早馬徹が目下（敵）と見看している審査部が、陣取っているからであった。

朝日銀行の本部が入っているパレスサイドビルディングは、東京駅の前、丸の内の中央部に位置を占め、東西にやや長い、長方形をしていた。だから、南側の広い壁面には、たえず陽光が燦々と降り注ぎ、オフィスビルとしては絶好の条件を備えている。

その三階。

南と北に二分して、南側をすべて審査部が占領し、早馬徹の所管する業務推進部は北側にある。

（審査部、審査部と、威張りくさって、部屋まで南の一等地を独占している。今に見ておれ）

というのが、業務推進部長をつとめる、早馬徹の思いなのであった。

そして中でも一番環境のよい東南の隅には、審査部担当の染井常務取締役の部屋が陣取っていた。ビル全体が、どこへ行っても、狭い狭いと、ひしめくように机と椅子を並べて仕事をしているのに、染井常務だけは、南と東に窓が開けた広い部屋を、一人でゆったりと占領している。

（いつかは俺が必ずあの部屋へ入ってやる）

早馬業務推進部長は、時々、北の部屋から、その東南の方角に、鋭い視線を向けるのであった。

丸の内界隈は銀杏が多い。銀杏が美しい。

銀杏の巨木が、そこに蝟集するビル群を取り囲み、ビルの直線的な形と色とが、その緑に絶妙に調和して、日本第一の風格のある、オフィス街を作り上げている。

とりわけ早馬部長は、春の、芽吹きはじめた、若葉になる寸前の、うす緑の新芽が、露のしずくのように枝々に着いたころの、美しさが一番気に入っていた。それは新緑というにはまだ早く、遠くから眺めると、あたかもうす緑色にかすんだベールを、ビルの谷間に張りめぐらしたかのような、さわやかさを感ずる。

その丸の内オフィス街に、いま、昭和四十一年の春が若々しく、息ずいている。

早馬部長は椅子に坐ったままで首を廻すと、窓の外の春を見た。

ビルの北側の日蔭は、南側と比較すると、銀杏の若芽の発育も、いくぶん遅いようだった。だが、それでも、枝々はいっせいに芽吹いて、日蔭の銀杏は、日蔭なりに、朝もやのようなグリーンのベールを、さわやかに張りめぐらしていた。

朝日銀行にとって残念なことに、このパレス・サイド・ビルディングは、自分のものではなかった。借りビルである。十八階ビルの、一階から六階までを借りている。

（いつかは自分のビルを持ってやる）

という熱い思いが、早馬部長の胸の底にはある。

（しかし審査部が銀行を牛耳っているのでは、とても自前のビルなど覚束無いだろう）

早馬部長は窓の外から眼を室内に戻すと

（どれ、今日も、一交渉、行ってくるとしようか）

鼻筋の通った精悍な眉根のあたりに、ふっと、決意のような翳がよぎる。

椅子から立ち上ると、廊下に出て、南にむかって歩きはじめた。目指すは、染井常務の部屋である。

染井常務は書類の決裁が早いので、有名である。稟議書や申請書を、一見しただけで、イエスかノーかを、たちどころに判断し、即座に決裁印を押していく。

決裁が早いということは、それだけ判断が早く出来るということで、頭脳明晰の証である。たしかにその点染井常務は、朝日銀行の重役陣の中ではピカ一であり、残念ながら早馬部長もその点は認めざるをえない。その名前からして、染井聖明という大仰な名前で、まるで自分を聖徳太子かなにかの、生れかわりのように思っている節がある。

しかし、早馬部長は心の中で
（だが、俺は決してお前の存在を、容認しないぞ）
と、いつも自分に言いきかせている。
染井常務の机の上は、だからいつ行っても、未決裁の書類など皆無であり、机の上はすっきりと片付いている。
今日も早馬部長が入っていくと、すっきりした机を前に、手持無沙汰げにタバコをくゆらし、窓の外の銀杏の新芽に見入っていた。日当りのよい南側の銀杏は、さすがに発育が早く、緑の色が一まわり濃い。
「また、来ましたよ」
早馬部長は染井常務を正面から見る位置に腰を下した。
「枠の話なら、ダメだよ」
染井常務は椅子から立ち上ろうともせず、デスクに坐ったままで、そう言った。そうした態度をとることによって、来室した早馬に、まともに対応する意思のないことを示しているのである。
「いいという返事が貰えるまでは、何回でも来ますよ」
「何回来ても、枠は駄目だ」
早馬部長が枠の掛合いにこの部屋を訪れるのは、これで五回目である。
「どうしてです」
「前回も説明した筈だ」
「ええ、聞きました。でも、よく理由がわかりません」
早馬部長はここで引き下ってはならないと、頑張った。
枠とは、朝日銀行の貸出の枠のことである。その貸出の枠は、貸出の審査を担当している、審査部が握っている。早馬部長の言い分は、その貸出枠の配分権の一部を、業務推進部へ引渡せ、という要求である。
「お前のところへやると、枠を無駄使いする」
「しませんよ」
「する」
「しません」
「お前のところへ渡せば、ゴミに金を貸すから、当行の資金運用の内容を悪化させる」
だから、駄目だということらしい。しかし、それは表面の理由にすぎないと、早馬部長は思っている。本当の理由は、別のところにある。
一口に言って貸出枠とは、朝日銀行が、どこまで金を貸していいのか、その限度のことである。だから貸出枠には、銀行全体の枠と、各支店ごとの枠との、両方がある。
銀行は預金を集め、その預金をファンドにして金を貸し、その利鞘で儲ける商売であるが、しかし客から借入れ希望があるからといって、無制限に貸出すわけにはいかない、一定の限界がある。限界は預金量である。
もし、預金量を超して金を貸したとなると、資金が不足する。不足すれば、その金を、コールなどの短期資金市場から借りて、埋めねばならない。しかし短期資金市

場の金は金利が高い。貸せば貸すほど、逆鞘になり、赤字となる。
したがって、どこの銀行でも、一応の貸出の目途を預金量に置いているわけで、朝日銀行もその例外ではない。朝日銀行はそれを貸出枠と、昔から呼んでいる。
朝日銀行は日本全国に、二百五十ばかりの支店を持っている。貸出を現実に行うのは、客との窓口になるその支店であるから、銀行全体の貸出を枠内に納めようとすれば、それぞれの支店の貸出にも枠をはめておかねばならない。そのために、各支店ごとに、この支店はいくらまで貸してよい、という貸出枠がそれぞれ決められている。
その決定権を持っているのが審査部であり、その総本山が、染井常務取締役というわけなのであった。
だから、どの支店の支店長たちも、審査部の方ばかり見て、仕事をしている。客から金を貸してくれと申込まれても、貸出枠がなくては、金を貸すわけにはいかない。審査部のご気嫌を損じたら、枠が貰えない、客に金が貸せられない、商売が出来ないのである。
壇家の宗徒が総本山に足を向けて寝られないように、審査部には足を向けられない。染井常務のご気嫌ばかり、ちり、ちり、と気にして、いつのまにか
（染井天皇）
というような言葉が、支店長たちの間で使われ始めていた。
それに反して早馬部長が率いる業務推進部ときたら、一円の貸出枠もない。餌のない所へは誰も寄りつかない。だから、いくら預金を集めろと号令をかけても、支店長たちは真剣にこちらへ、顔を向けない。支店長たちを業務推進部の方に向けさせるには、貸出枠の一部を早馬部長が握るしかないのである。
そのために早馬は、いま、枠の総本山に殴りこみをかけているのである。
しかし、総本山は難攻不落である。
かって今までそんな挑戦を仕掛けた者はいないし、落した者もいない。だから、せっせと染井常務の部屋に通う早馬部長の姿を見て、人々は
（あいつは、馬鹿か）
（勝てるわけがないよ）
と冷笑している。
が、一方、早馬部長の背後には
（ぜひ、勝ってくれ）
と願っている、大勢の行員たちがいるのも事実である。
審査部からあまり枠の貰えない支店長や、貸付の担当者である。主とし、あまり大口の取引先のない、中小規模の支店の連中である。
早馬部長の担当する業務推進部とは、一口に言えば、預金を集めるセクションである。が、大会社の預金は、

貸金を担当している審査部が管理しているから、勢い、業務推進部の担当する預金者というのは、中小企業とか、零細企業、個人客ということになる。すなわち審査部が馬鹿にしている、審査部が相手にしない、客である。

したがって染井常務が

（ゴミに金を貸すから、駄目だ）

と言ったのは、そうした中小企業や、個人への、細かい貸金のことである。

自分の担当の客をゴミと言われ、早馬部長はカッときた。

「ゴミも、朝日銀行の大切なお客ですよ」

「……」

染井常務はタバコを、すぱ、すぱ、やっているだけで、返事をしない。早馬を無視している。相手にしない、というポーズをとっている。

そのポーズに対抗するように、早馬部長もぐっと肩を怒らせて

「そうした中小企業や、個人の客が、今後の朝日銀行には大事なんですよ」

「ふん」

染井常務は鼻先で笑った。

「君には少しも、貸出のことが、わかっていない」

―つづく―

連載（小説）

近藤富蔵の生涯（三）

序章　羽倉簡堂七島巡察

一、南海に漂う

金子正義

（三）

簡堂は、今度の伊豆諸島巡察を拝命してから読んだ、豆州富南、秋山文蔵が寛政三年（一七九一）に著わした『伊豆国海島誌』に『御蔵島ハ三宅ヨリ又南ニアリ　大洋ニ近キ故潮汐甚迅疾浪高クシテ舟ノ出入危シ……』とあったが然程とは思わなかった。だが現地の風浪に熟れた船頭達が

「御蔵島は周囲が切り立つ断崖で大船の入る港なんぞありませんぞ、岩間すら無く島舟でさえ近寄るのが仲々困難でさァ」

と口を揃えて言うので、四反帆五挺櫓の島船に分乗して行くことにした。選り抜きの船頭船夫を揃えて、特に三宅の島役人笹本新兵衛が総指揮案内となり、新島の前田道英も神官筑後として同行する程慎重にした。

閏四月四日（五・二七）　卯の下刻雲があったが風は良の微風であった。簡堂の乗る先頭船には手代中山誠一郎、近習石内安左衛門と利吉他二名の小者、笹本新兵衛前田筑後の八人で、船頭、頭、船夫二名を合わせて十二人。第二船には島民救恤の穀類、衣料等を積み、手代岡義郷随員大内利観に、船頭以下四名の船夫で六人。第三船は随員松本実甫、従者の時尾来章、金井修に絵師長谷川寿山の四名と船頭以下四名の船夫で八人であった。

三宅の伊ヶ谷に留まる朝日丸には普請役北村亮三郎、本岐道平、随員五十嵐豊裕が残り、式根泊港に繋留してある夕日丸には手代竹田重之、随員山下由豫　山下為民等が残っていた。

船は順次伊ヶ谷を出て、六双根大鼻の奇岩を遠く見乍ら今崎の岬を過ぎ、二日前航行した三本岳への船道より分れて南東に進み、富賀神社の在る間鼻の沖に出た。

其の頃より風が坤となり潮の流れも悪くなったので、

船ごとに纜を繋ぎ倶に扶け合って進んだ、船夫も良く漕ぎ暮れ近くには、黒潮の彼方一里程に椀を伏せたような御蔵の島影が見えてきた。ところが、急に裂帛の風が吹きつけ、忽ち暴風が天空に吼え始めて各船は激しく揺れ、苫を捲き上げられる船もあれば纜を断ち切られて離れる船も出る有様となり、遂に各船吹き流されて散り散りとなり、相互に存亡すら分らなくなった。

簡堂の船は御蔵島をめざして船夫が懸命に漕いだが、吹き流されるばかりで遂には島影も見えなくなった。疲れ果てた船夫達は海中に振り落されないように船端に縋っているのがやっとであった。

暗くなって一刻風が息んで、暫くすると乾の風が吹き始めた。

「風が変ったぞう、帆を張れ」

と押し流される黒潮から脱出しようと大声で叫ぶ船頭に励まされ、船夫達が急いで檣を立てようと焦ったが、狭く暗い船上で旨く立たない、己む無く棹の先に帆を張ったが、強くなった風に忽ち吹き飛ばされてしまった。

山なす風浪が次々と寄せて苫を失なった船の胴の間まで当り崩れ、海水は滝のように船底に流れこんだ、船夫達は懸命に手桶で汲っては棄てたが、後から後からと打ち注ぐ波浪で浸水は増すばかりであった。

此の儘では船は転覆せずとも沈没するばかりであった。

簡堂始め乗船の者は残らず、有り合せの用具を使って排水に努めたが、いくら棄ててもきり無く遂には全員疲れ果てて動きがとれなくなった。

流石の船頭も施す術も無く、髻を切ってお題目を唱え始め、他の船夫達も此れに倣って狂乱のようにお題目を繰り返すばかりだった。

簡堂も死を覚悟したが、自分の生命は少しも惜しくないが幕臣が任を果さず溺死したとは幕府の恥である。大任を果して其の終始を上申する迄は助け給え、と日光の東照大権現に黙禱を捧げ続けていた。

一同の祈願を神仏が哀んで聞き届けられたのか、夜半を過ぎてから風は少し治った。船頭達は危期を脱して気力を取り戻し、余力を絞って海水を汲み出しているうちに空が白んできた。

閏四月五日（五・二八）　漂う船上から明けの空を見回していた船頭が

「おう、あれは西山でねいか、お役人様・笹本様」

と、びしょ濡れの儘胴の間に蹲っている笹本新兵衛を呼んだ。其の大声に一同も船頭の指さす方角を見渡すと、二里程南西に朝霧を透して大きな島影が見えた、何んと風浪に押し流されて一夜のうちに御蔵島を越して八丈の近く迄漂流していたのであった。

笹本新兵衛は簡堂に此の儘八丈に渡るべきかどうかを伺ったが、元より他船の安否も判らぬ有様で、代官とし

公式の渡島は憚ることと考え、三宅へ引揚げようと言った。幸い風は巽に変ったので帆を上げ櫂を取り直して船脚を早めた。

暫くすると太陽が航行する左舷前方に上がり、昨日の大時化は嘘のように海は凪ぎ、船は順調に三宅への航路に入って昼近くになった。八丈から十四、五里引き返した辺りで覆った船に人が縋って漂っているのを発見した近寄って大縄を投げて助け上げると、岡義郷等の第二船であった。全員六名を収容できたが誰もが口も利けない程であった。其の内甚しく弱まった船夫の信吉が苫の下で目を瞠いたまま死んだ。

日が傾いた申の下刻、漸く三宅島の東側辺りに達すると、遭難を案じて沖に出ていた島舟が漕ぎ寄って、船に曳綱をつけて伊ケ谷へ曳航した。

夜に入ってから灯火を辿って第三船が漸く帰った。先着の船の者は簡堂始め悉く疲れて休んでいたので、北村亮三郎、本岐道平達が迎えに走った。

破船から蹌踉として陸に上ったのは、長谷川寿山と従者の金井修の二人だけで、船頭の松之助の他には船夫すら荒波に消えていた。余りの痛ましさに北村亮三郎は言葉も出ず、戸板で三人を陣屋に運び込むと直ぐ、笹本宅に泊っている簡堂に第三船が戻ったことだけを報告した。

閏四月六日（五・二九）　良く晴れた朝であった。目覚の早い簡堂でも流石に疲れて小半刻程遅く起きたところへ、陣屋から北村亮三郎と長谷川寿山が来て、第三船の遭難の模様と松本実甫、時尾来章の死と船夫等の犠牲を報告した。

「何に、実甫寒緑がカア！」

簡堂は瞠目して息を呑んだ。怪奇な程古めかしい容貌で、仁王尊のような頑強な体軀でも、七回も船が転覆し二度も遠くへ流され乍ら覆船に泳ぎ着いたが、三度目には遂に荒浪に呑まれて消えたと云う。儒学に精しく鎗をよくし、酒を好んで興じては文天祥の正気の歌を吟じた。簡堂の耳朶には式根・利島・神津の廻島の船中詩を吟じた朗々たる声が残っている。悼ましい哉未だ五十二歳である。それに共に波間に消えた時尾来章は、松本実甫を師と仰いで国元から出府したばかりの会津の若武者だった。嗚呼、惜しい哉。

何度も覆った船を起しては漕ぎ、溺れかかる金井修や寿山を助けて、疲れ果てて次々と沈んだ三人の船夫達は合戦で斃れた武士にも比すべき健気な者達であった。

簡常の胸中にはさまざまの想いが去来して、忘我の有様であったが、我に還ると、惨事を報告して平伏の儘の長谷川寿山の痛ましい姿が目の前にあった。

「おうおう、寿山よ、助かったか、それにしても船頭一人しか残らなかった破船で良く帰れたな。」

と生き残った自分をも含めて天佑神助を強く感じた。

随行絵師は簡堂の七島巡察ばかりでなく、古くは源平の合戦より元寇の役、元亀天正の戦国の武士共の手柄を描き、泰平の世には紀行、探検、公事、祭礼に至る迄、生々と自然人物を描き伝える重要な報道の担い手であるのだ。長谷川寿山は幕府裕筆、長谷川善次郎の子息で通称晋吉、十歳で渡辺華山の門に入って画を学び、早くから才能を発揮していた。簡堂の伊豆諸島巡察には華山が随行を希望したが、幕閣では華山を画家としてより尚歯会の洋学者として警戒し、七島へ随行し漂流に托して外国へ渡航を企てる、と疑って許さなかった。已む無く華山は弟子の長谷川寿山を随行させたのだった。若し寿山が溺死すれば師に代って海外へ密行したと疑われるところであった。現に、簡堂が任を果して帰国した翌年、天保十年五月、蛮社の獄で渡辺華山が高野長英等と共に囚われたとき、簡堂の伊豆諸島巡察に随行した本岐道平親応も疑われて捕えられた。

簡堂の七島巡察を命じた幕閣の意図は、度々の外国船の渡来に対応する海防強化の下見聞にあった。処が、海洋の危険を惧れて随行する士が集まらず、進んで参加した者の中には本岐道平親応のように、海外に目を向け密かに彼の地に渡らんとした者がいたのであった。

渡辺華山の師であり、羽倉簡堂と親交を重ねていた儒学者、松崎慊堂は『慊堂日暦』の五月十五日に『……渡辺華山、大草奉行のために逮えらる。十四日の事。藤軒来り告げ。愕然たり。蓋し諳厄利亜の事を以って誣いられたるなり。……』

と驚き憂いで、五月十八日には『…逮えられし党に本岐某（昨年羽倉に従って海に入者）・旗本臣一人・医者一人、十四日に同じく逮えらる。その謀は、水戸商某の大船を借り、その党と無人島に赴き、諳厄利亜船を招いて彼の国に入らんとするもの……』

と推察し乍ら、その疑いは密告者による讒言である、として愛弟子の為に赦免運動に尽力したが、幕閣は尚歯会の蘭学者グループの開明論を前々より危ぶみ、幕政批判を苦々しく思っていたところへ、モリソン号事件以来、高野長英は『夢物語』で渡辺華山は『慎機論』等で幕府の対外政策を難じたので弾圧を加えたものであった。単に鎖国の国禁を破って密航を謀ったなどの罪状でないので仲々赦されず、漸く国もと蟄居となった華山は自害し、終身禁錮となった長英は、獄牢の焼亡による解放ちを機に逃亡し、後日捕吏に囲まれて自刃した。本岐道平は幕臣なので赦されたが自宅謹慎中病没した。慊堂は其等に前後して、弘化元年七三歳で没している。慊堂は肥後の生れで幼小の頃より義侠心に富み、十五歳で江戸に出た後、昌平黌で朱子学を究め、林述斎の私塾でも薫陶を受け、推されて遠州掛川藩の教授となり乍ら生来権勢を嫌い、十年で辞して江戸渋谷広尾の羽沢に隠棲し私塾、石経山房を開いて経書の校訂、講述門下の育成に努めてい

た。近藤富蔵が獄台の変をおこした中目黒鎗ヶ崎の近藤重蔵抱屋敷とは、荏原台地を挟んで半里程であった、亦、近藤重蔵とは同年生れの昌平黌の学友であった。鎗ヶ崎獄台の変で嫡子富蔵は八丈流罪、重蔵は江州大溝藩にお預け禁錮となったとき、友誼によって遺児熊蔵を引き取って育てた。後に羽倉簡堂の内弟子となった近藤重三郎守信である。

此れ等は未だ簡堂の思い及ばないことで、今は唯、多くの人命を失なった哀しみと、南の海の厳しさを思い知って打ち沈んでいた。

昼近く前田道英が一先ず新島へ早船で帰る為に挨拶に来た。簡堂は、御蔵島行きですら遭難したので、八丈行きも遅れると予想して、せめて式根の泊港に繋留してある夕日丸だけでも先航させようと思い。本岐道平を呼んで、前田道英の船で共に新島に行き、泊港の竹田重之等と図って八丈へ先発するように命じた。

午後、八挺櫓の早船で新島に帰る前田、本岐等を見送った簡堂は、気分を転換しようと、伊ヶ谷湾を臨む射撃へ行って北村亮三郎と銃を撃った。弾丸は快よく的に当って鬱憤も霽れた。雄山を仰ぎ山腹を見渡すと、山裾から煙が這い上って小さく焔がちらついている。山火事かと北村亮三郎を顧みると、

「あれは島人が笹藪を焚いて焼畑を拓いているようです、島人は荒蕪の寸土をもよく耕して居ります。

と、南海の火山島の厳しい自然条件の中で、波高き海に漁り或いは固き溶岩の山膚を拓く島人に感嘆していた。

簡堂も心博れて

「良し、一度や二度の海難に屈せず此ん度は朝日丸で八丈島へ渡るぞ。」

と意を鞏くして自らを励ますように言った。

閏四月七日（五・三〇）　簡堂は随員や島役人に八丈島渡航を伝えて準備を命じたが、生憎天候が悪くなって夕刻には激しい雨となった。

簡堂は終日部屋に篭って、台閣と勘定奉行への報告文を書き、犠牲者の遺家族へも情況を詳しく記した書状を認めて船便に托した。

閏四月八日（五・三一）　夜来の雨は昼近く息んだが乾の風が吹き始め外洋が騒しいので出帆は延期となった。

簡堂は北村亮三郎と伊ヶ谷の湾内より付近の海浜を見に行った。昨日からの大雨で山から流れ落ちる雨水が、海に臨む崖に溢れて滝のように海浜に落ちている。海面より吹きつける強風が波濤と共に岩壁に当っては、滝水を中空に散らし、崖の落口で首を刎るように滝水を捲き飛ばしていた。

閏四月九日（六・一）　天候は回復し風は艮の微風で

あったが、満を持して出帆は明日となり陣屋では準備や人の出入で慌しかった。昼過ぎに静かになった陣屋の前を阿古に移る流人共が村役人に追い立てられて行った。

格子窓から簡堂が見ると、中に垢に塗れた半袖単衣に素足に草鞋の満海の姿が見えた。

満海は後家人の妻女であり乍ら度々の賭博場出入で捕えられ島送りとなった。夫や子供もいたであろうに何故か縁を切られている。赦免のときもあろうが破れた肩に穴のあいた風呂敷包を背向う後姿が哀れであった。

閏四月十日（六・二）　早朝から大勢の人夫達が集って、崖ぎわから海へ朝日丸を昇ぎ降ろし、船具や積荷を搬入して漸く大洋に出たのは正午近かった。

凪モヨリの海を緩やかに船は進んで大野原島の東に達した。風は殆ど息んで船は微速であったが此の辺は数日前に島舟で来たので、簡堂は安んじていたが船は東に流され始めた。舵櫓の船頭や船夫達が懸命に操船したが、強まった潮流に抗しきれず魔神に曳かれるように東へ東へと船は辷っていった。黄昏頃には三本岳も見えなくなった。船師の山下平治が舵艫に登り夕陽に祈念して苫を焼いて海中に投げた。船頭以下の船人達も船師に合せて祈念していると、何んと船板の割れ目から海水が漏れ始めた。船夫達は驚き慌てて船板を押し当て打ち付ける間にも海水は滝のように船艙にまで流れ込んだ。

十日余りも伊ケ谷の浜に揚げて日に曝した為に船腹が輝割れしていたのだった。船夫達は夜通手押ポンプで排水に没頭して船は潮に流される儘であった。

閏四月十一日（六・三）　赫々と太陽が昇って空一面紅に拡まっていったが、風が無く帆は全く垂れて動かない、幸い船腹の輝は漸く塞っていた。

排水に力を出し尽した船夫達は艫や舳先の板張りに死んだように眠っている。

船師と船頭は舳先の甲板で天測器や磁石針を使って海図を見ていたが、

「どうやら三宅島の艮へ十五里ばかり押し流されたようで御座ります。房総安房の白浜にも大島の波浮の港にも二十里ばかりでしょうか。」

と船師の山下平治は平然と微笑すら浮かべて簡堂に告げた。潮の流れは遅くなったようだが風が無い上に垂れ下った帆は大分破れていた。その上どうしたことか錨の大縄が切れてる。そんな状態で八丈島へ渡れるであろうか、と簡堂は不安になったが、船頭始め起き出した船夫達も海上が穏かなので、却って上機嫌に冗談を遣り合い乍ら、甲板の船具を取り片付ける者や帆布を繕う者、飯の炊出を始める者とそれぞれ平常のように忙しく動いていて、停止したような船は波任せであった。

昼近く右舷東側の洋上が碧く盛り上って騒しく白波を

飛ばす海渦が見えた、幅五十間もある流となって北に動いている。船夫達は鯖の群れが鰯の大群を逐っているんだ、と言ったが見慣れているのか別段騒ぎもせず仕事を続けていた。簡堂等には珍しいので舷側に寄って眺めると何程碧い鯖の渦きの遙か前方に鰯の大群が重なり動いて、海面が黒く盛り上っている。大きな筏が流れ行くようだ。

未の刻頃になって雲が涌き立ち漸く巽の風が起った、山下船師が、

「御代官様、巽風に乗って波浮に入り、船を直した方が宜しいかと存じますが如何でしょうか」

と許しを得てから舵を廻らせて大島へ向った。追手に帆を上げたので船脚も疾く、夕刻波浮港外に達した、官船の入港と知って曳舟が寄ってきて初更には港に入った。

閏四月十二日（六・四）　港に繋留された朝日丸に船大工や人夫達が乗り込んで修理を始めたのは昼過ぎてからであった。簡堂は漾碧堂に前夜から休んでいた。夕刻駆け付けた藤井政等の島役人の見舞を受け、島役人達の遭難経験談によって簡堂は二度の海難の訳を知った。

四月四日の御蔵島行きの海難は百石にも足りない船だったので、暴風雨に遭遇して一溜りもなかったのだ。八丈行きの官船が七百五十石の大船であり乍ら、大島へ押し返されたのは気紛ぐれの風と潮流であった。それも名にし負う八丈近くの黒瀬川の急潮でなく黒潮であった。

三宅島の南方で風が息んでナライの風待中潮に流され、船腹の輝割れ浸水騒ぎで排水に気を取られている裡に、黒潮に入り込んだのだった。

黒潮は遙か遠く呂宋国の辺りより北上して、高砂の島の東の海で、対馬に向う親潮と分かれ、琉球より奄美大島の南西の島々を洗い、薩摩の沖より四国土佐足摺岬の沖を走って、紀伊の潮の岬より熊野灘を通り、八丈と三宅島の間を房総沖に向って流れ、東北に向って消える。

其の海流の幅六十余里（二五〇粁）水深九町（千米）で、特に中心の流れの速さは一刻に一里半（海秒一米）で、その幅は八里余（三十米）深さは三町余（三百米）であると伝えられていた。

簡堂は不幸中の幸と云うべきか、黒潮の中心に流されず、巽の風が起って波浮の港に入ることが出来たのだった。

閏四月十三日（六・五）　朝のうちは風向きも良かったが、港の口が浪高く、船を曳き出すことが出来ないので一行は船と宿に分れて休養を摂っていた。

閏四月十四日（六・六）　終日外洋は浪高く夕刻より雨となった。夜に入って元町の衛府より使番が江戸よりの通信を持って来た。中に簡堂留守宅からの便りや岡義郷の子息、成省よりの文もあった。

後刻、岡義郷が夜分を憚り乍らも簡堂の部屋に来て、成省の文を見せ、連日父義郷の夢を見るので安否を気遣っていると書かれてあり、御蔵島遭難の日時と丁度合致するので奇異な念にうたれた、と言った。

簡堂も亦、不可思議なことよ、と命を失なった松本実甫達を悼み乍ら、助かった我が身や岡義郷達の僥倖を神仏の加護と心中密かに感謝した。

閏四月十五日（六・七）　夜明けの頃は微雨であったが、次第に晴れ上がって、港の岸辺に鰯をとる鷦が盛んに飛び回るようになった。

簡堂は天候も回復し船の修理も済んでいるので、山下船師に出港を尋ねると、

「風向きが芳しくありませんのう……模様を見て下午からでも出てみますか。」

と船師は余り良い返事ではなかったが、代官の気を察して、昼食後出帆となった。

二里程南下すると、太陽のまわりに虹のような暈がかった。

「颶母だぞう！　荒れてくるぞう張り綱を締め、船具を艙口に入れろ！」

船頭の松之助が大声で叫んだ、船夫達は機敏に動いて船首の表下から棕櫚縄を出して苫に掛けたり檣と小柱とを結び繋いだりして颶風に備えた。

頓て巽の微風が止んだかと思うと、真南から煽き立てるような突風が吹き寄せて膨れ上った海面が舳先を持ち上げて過ぎ去り、忽ち大波の腹を辷って船は浪間に落ちる、何度も何度も強風に襲われ度に船は山のような浪に乗り上げ、また突き落された。風は西に変わり、南に戻り、その都度海上は暴れ馬が狂奔するように騒ぎ立って、艫も舳先も神輿を昇ぐように揺さ振れていた。

狂暴な風浪に一日中叩かれ乍ら船は、落着いた船頭の舵取りと巧みな船夫達の操船で喘ぎ喘ぎ進んでいる裡に夜となって、さしもの風も弱まり午夜頃には、艮の微風と変って、波も低くなり漸く危機を脱した。簡堂が船室から出て船楼に登って見ると、真黒な海が魔神でも棲むかのように無気味に澱り、空には寂しそうな月が懸り、秋風のように涼しく爽やかな風が吹き渡って帆を脹ませていった。

閏四月十六日（六・八）　船室に臥せていた簡堂は夜具にくるまった儘、宙に浮いて曳かれいくような悪夢で目覚めた。船室の小窓から見ると船は波を切るように走っていた。表上に出ると船頭の松之助が

「寅の刻頃から北風が激しくなり出して我がもの（八丈島）へ墓地でさァ」

と赤銅色の顔に皺を寄せて微笑んだ。

帆は毬のように脹れて舳先を押し上げ、海を割るよう

に進んでいく。快い船脚に忽ち利島・新島・神津島を過ぎ、三宅の沖を走って大野原島の三本岳を左舷に見て、御蔵島を遠く東に望み乍ら更に南に八里程走ると、真西に遠く帆かけ船のような靄難波島が望見された。更に南へ十里程走ると八丈島の西山が、駿河の富士と同じよう天に宙しているよう見えてきた。だが潮流が濃墨色となって川の流れのように疾くなった。大海中の河と謂う最難所の黒瀬川にかかったのであった。

黒瀬川については、林子平も天明五年刊行の「三国通覧図説」で『三倉島ヨリ八丈島ヘ渡ル洋中ニ黒瀬川ト云テ急流ノ瀬アリ舟人ノ難所トスル処也……』と触れ、

延宝三年（一六七五）伊豆代官伊奈兵右衛門忠易の小笠原探検に、天文地理学者として参加した島谷市左衛門等の記録に、黒瀬川の難所が無いのを疑問に思って、

『黒瀬川ハ三倉島ト八丈島トノ中間ニアリ幅二十餘町有テ東西百里ニ渡リタル大急流ノ黒潮ナリ、此瀬ヲ乗切コト大ニ心得アルコトト聞及ヘリ然レトモ夏秋ハ此瀬ノ流レ穏カ也冬春ハ大急流ナリト云リ　島谷家ノ者トモ無人島（小笠原島）ヘ渡リシハ閏四月初旬ニ下田ヲ出帆シ同年ノ六月下旬同所ノ帰帆スルトキハ此瀬ノ穏カナル時筋故、此瀬ノ難所ヲ不見シテ乗過シト思ハル……』

と推測し乍ら黒瀬川を説明している。

亦、八丈樫立村の御船預り服部九左衛門の廻船安乗録等には『八丈富士ノ裏側乾ノ方向大越鼻崎沖合ニ、冬春ノ間卯辰ヨリ進ミ来リ又申酉ノ方ヨリ進テ東エ趨ル行潮甚タ駛疾ニシテ如滝　舟行相値則瞬息之間漂流如箭　方言ニ黒潮又山潮、黒瀬川トモ云、一文字ニハ船ヲ乗切ガタシ。」

とあった。簡堂が今は延宝三年の小笠原探検と同じ時期なので黒瀬も難なく越すであろうと、船頭松之助に訊くと、

「さようで、夏と秋に二度程凪の日がありまして、潮の流れも月に三日程は緩みます。そんな日は未明から海は凪、空には一片の雲も無い絶好の日和となりますが、此の難所は天竺の流砂川の真水が流れて来るので黒瀬川と言われるくらいで、邪念や怨霊を消さないと渡れません」

と言って船夫達と舳の板張で祈念し、竹の茶筒を海中に投げ、天竺の仏神に安全を祈り、虎政の霊に無事を頼んで祈願した。

鎮西八郎為朝の寵愛した童子虎政が、此の難所の海入水した後、その怨霊が八丈へ渡る船を防害して沈めるようになった、と伝えられているのだった。

船夫達の祈願と心死の操船で黒瀬の急潮を乗り切り、八丈島の樹木が弁別できる辺りまで近づいたが、風向きが急変して一進一退して近づけず、島でも蜂火を上げて合図しているが、海岸は浪が高く曳舟を出すことができなかった。そのうち西に傾いた太陽が朱に映えると、東

南にまた颶母が出て風も巽となった、船は忽ち強風に押し返されて八丈から遠く離れた。

夜に入ると風は北、西、東と激しく変って、その度に船は八丈に吹き流されたり、押し返されたりしていた。

その風濤の激しさに七百五十石積みの官船も山なす高潮に押し上げられ、天に宙するかと思えば忽ち奈落の底に曳き落され、浮き上ったかと思うと左右に揺れて横転しそうになる。船体は絶えず軋み鳴って麻縄で確かと結び繋いである積荷も悉く揺れ動いて、いくつかは真暗な海に陥ちて消えた。

簡堂は船の動揺が激しく船室に横になることも出来ず立っては倒されるので真暗な船室に坐って、動揺に身を支える為に煙管を船床に押し立てて中心をとっていた。

処が、船室には八丈の砲台を強化する為に積み込んできた、三十匁大筒や三・五匁の小銃が十挺程船壁に結わえてあった。絶えざる船の大揺れに縄が緩み、一際大きな揺れ返しで大筒が転げ落ちて簡堂の躰に当った。転げ倒れた拍子に握った煙管が口腔に突っ込み前歯を二本折り、上顎も傷付いた。

簡堂は何んたる醜態と晒を口に含んで出血を止め、大筒を抑え縋ってひたすら夜明けを待っていた。

閏四月十七日（六・九）　東の空が白む頃、船は八丈島の西十五、六里にあった。間も無く雨となり、風向きも潮流も悪く、一先ず大島へ引き返そうと帆を低くして走り、正午頃闇難波を通り三本岳に向ったが、海も空も昼でも冥く、方位を定めるのも困難であった。

夜になると風雨は益々強く、海は荒れ狂い浪の上に浪が重なる有様で檣の竿は傾き撓み、帆桁は浪を被って潮水を抄い上げては海水を船内へ叩き飛ばした。そのうち荒浪が舵の取付口に寄せて閂板を打ち壊した。船夫達は波に攫われないように麻縄で船柱と腰帯を繋いで艫に集り、風雨を冒して応理修理に大童となった。

簡堂の船室も屋根が毀損して隙間から海水が雨垂れのように漏れて船床に溜り始めた。近習の石内と小者の利吉が夜通し排水に努めていた。

閏四月十八日（六・一〇）　夜が明けると、朝日丸は大島の東南十五里程の辺りを漂っていた。四月十一日の漂流と同じ辺であったが、風が真南なのでそれを受けて十里程行くと房総の洲崎の沖合に達した。洋上には難破した船の積荷や船板などが夥しく漂っていた。梱包の印などから上方の運送船が難破したのだろう、と船夫達は痛ましげに見渡していた。

昼過ぎに三崎港に入ると、土地の漁夫達が小舟を寄せて大鯛などを見舞に持ってきた。

「昨日は豪い暴風雨で転覆した船が多かったに、良くも助かったもんだ」

と胴の間で船夫達を慰め、傷んだ船内の有様を見て帰った。船師の山下平治が港役人に遭難寄港の届と、船大工や人夫等の至急手配を頼みに漁夫の舟に便乗して行き船頭松之助以下全員で傷んだ個所の修理や、船具、積荷の崩れ直しに忙しかった。

船室には船酔の中山誠一郎と小者の利吉が倒れて臥せていたが、夕刻になって利吉の容態が急変したので、医師の手当を受けさせようと小舟で港に移し、番小屋で医師を待つ間に息を引き取った。

簡堂は随員と共に遺体を港近くの光念寺に運んで処置を頼んだ。住職の懇な読経の後も簡堂は通夜の供養に座ってその死を悼んだ。

利吉は子飼の忠僕で未だ三十前の若さだった。江戸の簡堂の屋敷には正月結婚したばかりの新妻が小間使いをして帰りを待っている。幾度もの遭難の船酔続きで躰が弱っていたのを秘めて、船室の浸水を夜を徹して掻い出して精根尽きたのだ、と簡堂は瞑目祈念し乍ら心中密かに悔いていた。

元々四月十五日、風向きが芳しくないと山下平治が言うのに、荏苒と日を送るのに耐えられず出帆を命じた己れが悪かったのだ。

確かに大島を出ると颶母となって風浪に相当揉まれたが、翌日は北風を受けて幕地に八丈に向い、島々の沖を次々と走り行く速さに快哉を叫んでいたが、海上には嵐を予知して一隻の漁舟すらなかったのだ。

八丈の西山を始めて見て喜び乍らも、舷側から見る険悪な潮の流れに不安を覚えたが、経験豊かな船人達である、必ず乗切るものと信じた。確かに朝日丸は黒瀬の急流を越えて八丈の岸迄行った。だが風向きの急変と高波の為に八丈からの曳舟が出ず接岸できなかったのだ。

船舶の航行は唯、荒天を冒して潮流を越える船ばかりでなく、出船入船を支える港湾の準備や　船人夫達の動員に至る迄の総ての条件が調わなければ駄目なのだ、今後は決して無理な出帆をしてはならぬと肝に銘じていた。

閏四月十九日（六・一一）　通夜明けの朝風が心地よく、相模灘を越して箱根山の向うに富士山がよく見え、山頂の雪が美しい。簡堂は利吉の仮埋葬を済ませて、港の朝日丸の修理の状況を見に行った。船大工や人夫が機敏に働いていて、統領が夕刻には終了すると言った。

午後から南風が強くなって波浪が港内に迄寄せて、船が揺れ動いて鐘か鼓を叩くような音が船腹に響き始めた。忽ち統領の指図で纜が二重に張られて船の揺れは止った。

簡堂はそうした作業の振張に安心して光念寺に戻り、久々に入浴して、皮膚に溜って垢を落した。

閏四月二十日（六・一二）　夜来の南風が益々強く、辰の後刻頃には雨も降り出した、荒海に揉れ通しだった

船人には却って良い休養になる、と簡堂も光念寺の一室で、台閣や勘定奉行への報告文や、浦賀奉行や留守宅等への書信を認めていた。

午後、雨が歇んだので港の様子を見に出ると、村人達が藁人形を小舟に縛って、太鼓や鐘を叩いて囃子たてて行く、尋ねると疫病を逐い払う祭りだと言った。近頃夷国より渡来の疫病や疱瘡が流行し始めた為であった。

岸に繋留された朝日丸は修理も完了して出船を待つばかりであった。気力を取り戻した簡堂は、今度こそは八丈に渡ろうと、船に居る随員や船夫を励まして一先宿泊所の光念寺に戻った。

閏四月二十一日（六・一三）　風向きも良く向辰に朝日丸は港役人達に見送られて出帆した。右舷艫寄りに見える江之島が、朝日丸を励ます軍船のように力強く屹っていた、追手満帆で船脚は早く先航の船を追い抜き下午には大島の波浮港に達した。最初の航行の時よりも早く五時間、四、三ノットで走航した。簡堂は満足して漾碧堂に入って緩っくりと休んだ。

閏四月二十二日（六・一四）　全て順調で辰の刻には波浮港を出て順風に恵まれ新島に達した。今度は航行の安全を第一として式根の野伏湾に船を回航し、簡堂も船泊りをしたが、湾には藪蚊が多く船倉の梱包の内から蚊帳を探し出して吊って休んだ。

閏四月二十三日（六・一五）　風を待ち日和見していたが、微風が出たので午後出帆した。慎重に島伝いに航行するように三宅を目指したが、五里程行くと風が止んで夕闇が迫ってきた。辺りの海は浅く、波頭が方形で稠密な灘のように動いている、夜になると空は墨を流したようになり、海面潮波が夜光虫の光りか稲妻のように輝いて不気味であった。

閏四月二十四日（六・一六）　夜が明けると意外や船は神津島の南一里半程にあった。神木の港に寄ろうと艫舵を回わしていると雨が降り出したが、巳の刻頃、官船に気付いた島から八挺櫓の挽船が数艘寄ってきて、曳綱を投げ結んで神木の港に挽航した。

簡堂一行は島役人松江守義の出迎えを受けて島役所に入り、簡堂は松江宅に宿泊した。

閏四月二十五日（六・一七）　神の島の名の通り諸事折目正しく悠然としている島人情なので、松江保義が前回巡行出来なかった処へご案内仕ると、昼食後、神木港より西南一里半程にある恩馳島に島舟で渡った。島と言うより岩礁より突き出た四十余りの岩根の群れで、その内最大な島を恩馳島と名づけ、筍岩、鳥帽子岩などの奇

岩があり、三宅島の南にある大野原島と同じく多くの海獺が群れ棲んでいた。油気強い体液や糞が油脂となって岩を被って滑り易すく歩行が困難である、簡堂は釘づけの靴を穿いて島に上がり、従者の銃訓練にもなろうと暫く海獺を撃った、海獺は絹を裂くような鳴声をあげて逃げ惑い、海中に潜り洞内に隠れた。子のいる親海獺であろうか、悲しげな鳴声をあげて逃げ去らないのもいた。

打ち興じている裡に薄日が西に傾き始め、風も出てきたので帆を傾けて神木に帰った。夜は雨となった。

閏四月二十六日（六・一八）　朝は梅雨の細雨であった。霽れるのを待っている裡に正午近くになった。風向きも芳しくないので出港は中止となった。

三、四羽の大鴉が屋根で喧噪ぐので見ると、一丈程の青大将がいたが意外の素早さで茨を潜って消えた。島人は鼠を捕って呉れる青大将は神の召使いとして妄りに殺さないので、何処の家にも一、二匹棲んでいると云う。

閏四月二十七日（六・一九）　梅雨に入っている所為か晴れても風向きが悪く出港は見合わせ、午後から天上山に登った。

前回は火口原近くの射撃場迄登っているので、今度は水の涸れた神津沢をお登りなされ、と松江保義が先に立った。

晴れ上って暑くなった砂や石の川床の道を、十町程登って左に曲り藪道に入った。道は狭く険しい登りで、前の者の踵が後の者の頭や肩に当る。一行は喘ぎ喘ぎ登って観音堂で一息入れ、更に藪を潜って百歩程登ると藪が尽き、眼下に峰々が見える崖ぎわに出た。涼しい山風で汗を拭い山頂への曲り坂道を巡ぐり曲って漸く山頂の火口原に達した。

火口原は、展開されて白砂の原や盆栽のように背丈の低い松や椎、躑躅などの灌木林となっていて、その中央に聳えるのが天上山だった。人を怖れない野牛が灌木林の辺りに群れをなしていた。火口原の北際に池があり、中央に石積の祠があって銅製の不動尊が祀ってある。

池の東際は険しい抗火石の絶壁となり、谷の向うには白砂の山が連なっている、雪が積み重なって出来たような抗火石の山で、山腹の横皺が蝉の腹か櫛を立て並べたようなので櫛が峯の名がある。

簡堂は展望の利く平らな岩から望遠鏡を組み立てて遥か遠く南西を見ると十里程に岩礁が見える。松江保義が「あれは銭洲と云う岩の群れる難所で、誤って運送船が行くと岩礁に乗り上げて帰れなくなります」

と言った、南東に望遠鏡を向けると、洋上に三つの山が鼎のように立っているのが見えた。それが八丈の西山と東山と小島であった。長谷川寿山も望遠鏡を覗き、四方を展望して勝れた景色を描き取っている裡に、八丈の

山に雲がかかり、天上山にも煙のように山霧が沸き立つて幕を引いたように見えなくなった。

火口原を下りようと不動池の西に戻ると海獺の鳴き声が聞えて来た。山頂と恩馳島とは二里程も離れているのに、その声は耳元で聞くようで不気味であった。

下りは登りの苦労は嘘のように楽で、申の刻には宿舎に帰った。夕食に螺貝が出た。松江保義が、

「螺貝は暑気当りを癒し、山歩きの疲れを取るには最もよく、神津島の産は良質なので船で江戸の島会所に送って良き値で引き取られて居ります」

と皿にうず高く盛られた玉のように光る螺貝を勧めた。簡堂が味わうと少々臭味があったが歯ごたえがあって旨かった。

閏四月二十八日（六・二〇）　風待ちで出港せず、簡堂は歩いて物忌奈命神社に詣でて風向きの好転を祈って帰った。

閏四月二十九日（六・二一）　山下船師が、神木港の磯に繋泊し続けていては船体に悪いから、式根に移そうと言うので、午後未の刻に錨を上げて暮れ近く野伏湾の入口に達した、折悪しく雨が降り出し風向きも逆となって難航となった。船頭が錨を前に投げて纜で曳き船が錨の沈んだ処まで進むと、また錨を上げて前方に投げ纜で曳く、船を少しずつ進めて狭い湾の入口を通って、漸く野伏港に船を繋いだ。纜を二本増して波浪に備え終る頃には南西の風が益々強くなった。

五月一日（六・二二）　久々に良く晴れた朝であった。新島の前田道英が簡堂を迎えに島船で来た。序に一緒に湾の入口を扼す日和山に登った。野伏港に繋泊する船は必ずこの山にある方位を刻んだ平旦な石を基準に日和見、風向きを見るのである。同行した船師の山下平治や船頭の松之助は、

「どうも、梅雨の気紛れ天気で直ぐ雨ですなァ、風も思わしくありませんなァ」

と暗い顔だった。

山を下りて潮穿岩に行くと恰度満潮時で扁平な岩は全く潮に没して跡形もなく、前に見た多くの奇岩も形を変えて新奇な景観となっていた。

新島の島役所に入ると、顔見知りの島役人達が、御蔵島行きでの遭難を悔み、簡堂の無事を祝って呉れた。

だが話の模様で、変事を知った新島では代官の安否より前田道英の消息を案じていたのを知って、島人の道英を尊敬することの大なるを思い簡堂は心打たれた。

五月二日（六・二三）　朝、風浪で浜に打ち上げられた海亀を漁人が捕えて持って来る、甲の径が一尺六寸で、

重さは七百斤であった。

海は終日荒れ、夜通し風雨が続いていた。

五月三日（六・二四）　雨は止んで風も良であるので小舟で式根島の野伏湾に行き、出港準備を完了している朝日丸に乗り込んだ。午の上刻に船は大海に乗り出した。

暮近く三本岳の東に達したが、風向きが急変して船は一進一退の状態となった。一ヶ月前の遭難の時と同じ進路で再び難航であったが、今度は七百五十石の官船である、何んとか乗り切ろうと舟人も努め、三宅島の伊豆岬辺りの篝火台でも蜂火を上げて合図していたが、波浪で曳舟は出せず寄ることは出来ない。進路を転じて式根に戻ろうと風と争っているうちに夜となった。

五月四日（六・二五）　夜が明けると船は新島の南の早島の東三里程にあった。見慣れた新島本島の丹後山か朝霧を透して見える。帆を傾けて早島を過ぎ前浜の黒根に寄ろうとしたが風向きも潮流も悪く押し返される。式根の泊港か野伏港に入ろうとしたが海峡の流れが早く不可能であった。早島と地内島の間を錨地を求めて三度も行きつ戻りつしていると、黒根から早舟で水先案内の舵取名人新島の荘介が乗り込んで、巧みな舵取り指図で地内島の北大和田に碇を下すことが出来た。

五月五日（六・二七）　暁の頃風も雨も止んだ。朝日丸は荘介の水先案内で式根の野伏に向い、簡堂は島船で本島の島役所に向った。

荘介は新島の漁夫で近くの海は自分の家の庭のように良く知り、操船、舵取の名人と言われている。日常は酒を好んで我が儘であるが、どんな嵐でも頼まれると危険を物とせず船を操り、幾晩でも眠らずに舵を取った。前田道英に人柄を見込まれて重宝がられている男だった。

前田道英は早朝から十三社神社の端午の節会に行っていた、午後妻女は簡堂に菖蒲湯を勧めて呉れた。思いもよらぬ待遇に感激した簡堂は、遙かに宮中の端午の節会を想い乍ら菖蒲の薫りを嗅ぎ、緩っくりと入浴していた。

未の刻頃には風も止み、戻って来た道英が、

「端午の前後には艮の風が吹くのが例でご座います、島人は此れを菖蒲の北風と呼んで順風を喜びます。」

と言い、黒根の裏の日山に夕陽を見に行こうと言った。

日山は小さいが眺めは良く、島船の出るときは家族の者などは日山に登って見送るので、

「日山に登ってあなたの船みれば、波は静かで舟舵は早い」

と俚謡にあると、道英が言った。夕陽は未だ西の水平線の上にあって棚引く雲を紅に染め、空も海も黄金に照り輝いていた。

帰途、島の婦女子が村の神社に詣るのを見た。紅の紬

の鉢巻をしている古風な眺めであった。

五月六日（六・二七）　道英の言の通りの順風となった。簡堂が小舟で式根の野伏港の朝日丸に乗り込むと、船は午の下刻に大海に出た。順風満帆で初更には三本岳を過ぎ、真北に変った風に船は走るように早く南に進んでいった。

五月七日（六・二八）　夜が明けると風は止んでいた。船は御蔵島より十五里程南に来ているので、霧が消えれば西山が見えます、と船頭松之助が言ったが、辰の後刻頃に風が真東に変り、潮流と逆らって船足が遅くなった。一丈余りの大鮫が船側に現われ、波間に銀星のように耀く肌を覗かせて暫くは船に跟いていたが、いつか消えた。午後には風向きがいよいよ悪く、舵を転じて北へ走って、夜の三つ半頃、御蔵島の西南に達したが、風が止み船は膠でつけたように動かなくなった。暗い霧が海面に立ち罩めて視界は断たれ、無気味な闇となった。

近習の石内が、舷側に人影が見えると怖れるので、簡堂が船室から出て見たが、幻と見えて跡形もなかった。

五月八日（六・二九）　東雲に薄日が上って一刻程たつと艮の風が出た。八丈から引き離された十五里を取り戻せるぞ、と船夫達が小躍りしたのも束の間、直ぐ風向きが変って雨となり、逆風に無理した舵櫓が毀れた。船夫達が濡れ鼠となって修理している間にも、船は風と潮に押されて西へ十五里程流された。夜半に乾の風となって再び八丈へ向った。斯うして潮流と風に翻弄されて八丈島を前にして船は何度も行きつ戻りつの有様であった。

簡堂は雨漏りの始めた船室に笠を冠って坐っていた。

五月九日（六・三〇）　夜が明けると船は八丈島の北八里にあった。八丈富士も東の三原山も薄墨色に見えた。船上の誰もが歓声をあげ肩を叩き合っている間に、風は忽ち真西に変った。船夫が急いで帆を降し潮流に乗って八丈島に達しようとしたが、西風はいよいよ厳しくなり波頭は山のように起伏して船は上下に激しく揺れ、檣も動揺して安定せず、船が転覆しそうになるので帆を上げて安定を保つと、西風を受けた船は東へ疾走し出した。

船夫達は帆を傾け、舵を操り風と潮流に必死にたたかい続けた。そのうち簡堂は、ゴロゴロと船が海底の岩石に当るような響きを感じた。船頭の松之助が、

「おう、蟒蛇が鳴き出したぞオ、左か、右か！」

と叫んだ、舵の左に鳴き声を聞けば吉、右に聞けば凶だと八丈通いの船人達に言われていた、誰もが風浪の中で耳を澄し、船端に耳を当てたりした。

「おう、左だア、もう大丈夫だぞオ。頑張れ。」

と松之助の潮辛声が明るく響いた。

簡堂は、秋山文蔵の『伊豆国海島誌』の一節に、

『……濤ハ風ニツル、トイヘトモ無風シテ浪立チ海底車ノ轟々タル響テ夥シキコト也、是ハ遠方ノ風ノ余勢又潮急ニシテ烈シク湧キ来ル時海底ノ巨岩ニ触レ白浪起ル、車軸の響ハ水底ノ大石ヲ浪ニテコロバス響也……』

とあるのを思い出した。船が海底の岩を擦るのでなく潮流が岩石を転すのであった。

夜となって操船は危険なので帆を下げ、取舵一杯にした儘、流れに任せて朝を待った。

五月十日（七・一）　夜が明けると船は大海の真只中で、どちらを向いても島影一つ見えない。船師の山下平治と船頭松之助の観測では八丈島の東三十二里である。辰の下刻頃風は止んで雨となった、松之助は船内の飲料水が乏しくなっていたので雨水を集めて置けと命じていた。漂流に備えてのことか、と簡堂が訊くと、

「船乗りの心得と言うものでご座いまする」

と松之助は微笑んで

「此の辺りは先月四日に漂流した処で、あのときア島船でしたが、今度は官船、大船でさア、滅多に漂流なんざアするもんじゃご座いません」

と簡堂よりも船夫達を励ますように言った。

申の上刻、北東に雲の柱が立った。船夫達は竜巻きだと言った。暫くすると東風が強くなった、艫の吹貫旗が真直ぐ西に流れた、船は帆を拡げて再び八丈へ向った。

舳先が勢いよく潮を切り、舷側に泡沫を飛ばして波が走り去る快速であった。

暮れ近く梅雨の霧が厚く張って何にも見えないが、船脚が速いから八丈に近づいたであろうと簡堂が訊くと、

「恐らく我がものは七、八里だと思います」

と松之助が言った。八丈の船人は八丈島を「我がもの」八丈小島を「小もの」と言って島名を言わない。古くから島名を言うと船は八丈に着船できないと戒められていた。

そのうち、船足が疾いので船底が暗礁に触れると大変だぞ、と船夫達が雄叫びをかけ合い乍ら、急いで帆を低く引き下げて速力を落した。

それでも初更には八丈島の西山を夜空に仰ぐ直ぐ下に達した。だが崖ばかりで入江が無く投錨できないので舵を転じて岩壁に接する危険を防ぎ乍ら北に向い、八丈の北端を回り西側に出て漸く荷浦に碇を下した。

簡堂は船室で手足を伸ばし、今日は浪も荒く雨もあったが風向きも潮も順調で難なく八丈島に着いた。今迄何度も危険に晒されたのが夢のようだ、何にか人知の及び難い不可思議な力が働いているようだ、それは今度の渡海ばかりでなく、人の世のことも同じだ、いくら齷齪と努めても成るようにしか成らない、尽人事而待天命、と云うものだ、と思う裡いつか睡りに陥ちた。　続く。

編集子のメモ

●平成元年第二号をお届けする。はやくも夏季号である。六人六作、コスタントに同人大方が努力を継続していることは素晴らしいことだ。

○三戸岡道夫が新たな連載を始めた。別に書き下ろしの長編四六〇枚ほどを完結しているのだから、マグマのほど測り知れず、金子正義の連載作品とは本誌の双壁をなし、「まんじ」砦の堅固を誇るに足る頼もしさである。

●山根三枝子は「Gone are the days」の続稿を書いた。十五年戦争の空の下に、奇蹟とも思われる恵まれた女子学生の生活がここにある。その語り口も幸せに満ち読むものを楽しくしてくれる。私学だからこそ、そして別学の女子教育の中にこそ、守られたという伝統の灯し火であろうか。奇蹟とするのはそういう意味である。

○山口健二と大和禎人は三十二号のこれまで欠かさず作品を寄せてきた。とくに山口は病臥の中、並でない努力を続けている。その気迫は作品を通して如実にうけとれる。

●郵送料をはじめ消費税との付き合いが本誌の場合もこの号から始まる。俗っぽいことで恐れ入るけれども記しておきたい。

（お）

「まんじ」第三十二号

平成元年五月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

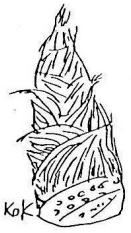
〒一〇一東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本内
「作家群」
（まんじ）編集部
☎〇三（二九一）六五五七　ますもと

郵便振替口座　東京二―一九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三―十一
☎（二六一）五七四三）

目　次

春の名残りをいかにとかせん……山口健二：1
ミニカメレオン伝……大和禎人：13
〔連載〕
小説近藤富蔵の生涯（第四回）：金子正義：22
駆ける銀行（第二回）……三戸岡道夫：34
編集子のメモ……42
表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義



春の名残りをいかにとかせん

山口健二

題名にえらんだ文句は、赤穂藩主浅野内匠頭の辞世の下の句であると記憶する。前の五七五の文句は忘れた。忘れたままであたしにはいいのだ。又あたしはこれが本当に内匠頭の辞世のうたの下の句であるかどうか、その様な辞世をかれが本当によんだかどうか、あたしには所謂ガクモン的な確証は何もない。ただ不図、頭に浮んだこの文句の「春」を「夏」にし「秋」にし「冬」にしてもあたしの此処数年のこころ残りを歌の調子でうたっていると言うことが出来る。まことに死を前にして、心残りというものは、誰にでもこの様になやましく、からみついて来るものであろうか。昨日も、一ケ月前に同室した患者であり、もりもりと食慾が盛んで、病院で出る三食では不充分らしく、せがれや娘に「あれ買って来い」「何買って来い」としつこくせがんで、娘の方は女心で父親のねがいを三度に一度はかなえてくれるが、むすこの方は、手きびしく、

「あんたは、そう云うものは食ってはいけない病気なんだ、医者の言うことを聞きなさい」

とつっぱねる。そばで聞いているあたしには〝随分つれないせがれだナ〟と思えるのでありました。その時分、あたしの部屋には、六人の患者がおりました。患者は病気がありますし、長く病院にいると、みなみな少し常人とはちがったところがチラホラ表に出て来るものでございます。その中でも、この老人は特別生命にかじりついた強さを示しておりました。食事を三度三度きれいに片づけるばかりでなく、見舞いに来た家族の者どもに金の話を必ずやるのでございます。それも、どこかピントがずれて、例えば「病院に来る前の日、枕許においた十七万円を誰かが持って行った」とか「あの時の三千円の買物のおつりはどうした？」とか云った調子で、これに対

して、老人の言い分がまちがっていると云うことを話してきかすのであるが、この老人のあたまには通じない模様で、同じことを何度もくり返す。そばで、そんなやりとりを聞かされているあたしは、最早この世の金のことには縁もつながりも切れて仕舞っているので、この老人の執念には何とも云われない不快な思いをさせられるのでありました。殊にかれの姓はあたしと同じで、看護婦が呼びまちがえたりするので、いよいよやり切れない。

入院した時には、かれの名前は、赤い色の板にかかれていました。これはどこの病院でもそうでしょうが、ベッドから離れては行動出来ない患者と云うことでございます。かれはもりもりめしを食って、二週間もすると、看護婦が〝あぶないから駄目よ、そのために便器でとってるんでしょう〟と言うのだが、真夜中近く、看護婦の目をぬすむように、かれはからだをいろいろねじって、物につかまりながら、ついに立ち上って、それからドアや壁に手をそえながら歩き初めたのです。そう云うかれの姿が、廊下のうす暗い電灯の光を背にしてあたしの目の前二・三間の闇の中に黒々と動いているところは、何か奇怪な生物がうごめいているかの様であり、この世の命にあきらめを持ちかけているあたしをさへ、矢張りゾッとした恐怖におとし入れるのでございました。これは人間が、どうしても生きてみせるぞと、自分に与えられた生命の限界に、全身で手むかっている執念の物凄さをあらわしておりました。かれは年は八十五でありあたしの部屋で二番目の年寄りでありました。そのかれが、ついに退院と云うことをやってのけたのでございます。こう云う年寄りの命については、医者だって見通しはついているのでございましょうが、患者の願いの通りしてやることも、かれらの肩をほぐらかせてくれるのでございましょう。老人は、あたしがグヅグヅと自己診断にふけっているうちに、きっぱりと退院したのでございます。

あたしも、この老人の執念に刺戟され、その上、四ケ月を越える入院は、厚生省とか、都とかいう所できめた社会政策の方針に反するらしく、主治医と称する医者も、退院をすすめる気配に対して、〝えいッ！〟とばかりに見切りをつけて、その老人が退院してから半月後、ひと冬を越した四月の半ばのある日に、思い切って退院したのでございます。

だが、退院したらしたで、足が云うことを聞いてくれる間は、行きつけの酒屋、さいたま屋にたどりつき、一日のうち二時間ぐらいは、昔からのその酒屋の定連の顔をながめ、かれらの背後にある生活の影を思いめぐらして自分の命がもっていると云う感じを味っていたが、今度は、そう云う最後の生き甲斐めいた日にちの過し方も長くつづけることが出来なかった。二週間後のある日、

矢張り春の風がどこからともなく、頸のあたりから胸・腹へとしのび込み、突然かつと燃える高熱を発した。あたしはもともと熱に弱い。三十七度を越すと、頭がぼんやりして来て、物を食う気がなくなる。三十八度を越すと、うわ言がひどくなって、一寸目には、呆け症状が急に激しくなったかの外観を示す。三十七度台で家人は大凡そ見当をつける様だ。その夜も、自家の体温計が三十八度六分を示した。土曜日であった。土曜、日曜など病院に医者がいなくなる時にあたしは発病するクセがある。そして家人をあたふたさせる悪いクセでございます。折角、〝春の名残りを〟と弱った足を漕ぐように前後して、ヨロヨロと巷を歩いてみることも、またまた出来なく、やりおさめになって、夕闇せまる中を、これ又行きつけの老寿病院にころがり込んだのでございます。手頼りなさそうな若い当直医が、さっさと入院を宣告いたしました。死体処理にも似た冷酷さでございます。

× × ×

入院すると、きまった手続きにも似た検査が続きます。大小便・喀痰の検査につづいて、血液検査・レントゲン胸部・腹部撮影・心電図・これらは通り越さなければならない検査であるらしい、それに必要なりと医者が考えるとCTAとか胃部・腸部にバリューム薬液を流しこんでやる検査が加わる。あたしの様な毎度出はいりしている患者でも同然であります。あたしは、〝こんなこと前からのカルテにかいてあることだから改めてする必要はなかろ。多分、病院側の健康保険機関に対する請求金額加算の手段なんだろと勘繰って仕舞うのでございます。それを器用にやってのけないと一人前の医者として病院側に通用しないんじゃないかナ。これはあたしらしいひねくれた考え方と申すべきでしょうか。

ただ驚いたことには、入院の翌日レントゲン撮りに行けと言う。それはまあいいとしても、エレベーターに乗って五階から一階に下り、歩いて一人で行けと云う。あたしを歩けるからだと精神状態の患者と認めているらしい。本人のあたしが〝車椅子に乗って行き度い〟と思う程足がよわっているのに、あの若い医者はあたしを歩ける患者と認めたにちがいない。いや、この病院の五階には、車椅子は一台だけで、その一台が使用中ということであろうか。兎にかくあたしは不平満々という顔つきで、これ又今日大平元年の世の中の、どこでもお目にかかることがなかろうと思える手動式運転手付きのエレヴエーターの前に立っていました。案の状、一台の車椅子が看護婦におされて近づいて来ました。〝どんな患者かな？オレより重いのかナ〟と乗っている人を見てギョッとしました。それはまぎれもなく、あたしより半月早く退院

したあたしと姓を同じくしていたあの老人でございました。

かれと一緒にレントゲン室の前で待たされているうちに、あたしはかれをシゲシゲと見た。あれ程生命力というか生への執着が強く見えたあの老人も、今度は少し青ざめ、無表情になっていました。かれの番は、あたしの前で、かれは車椅子のままレントゲン室へつれこまれた。ドアが締められるので、かれが身体のどの部分を撮られるのか想像するほかいたし方ないのであるが、あたしは心中、自分の場合も含めて、〝今更レントゲンでもあるまい。たとえ異状がとり出されたって、所詮はなおしようもない年令のものなんだ。それよりききめのあるのは人間の手がふれる触診と云うものなんだゾ。近頃は医者にそのことが忘れられて、いたづらに医療保険金査定の点数だけがあたまにあるんだナ。見えすいているゾ〟と呟いているのでございます。

あたしは胸部と腹部を立ったままで正面・横と四五枚、型の通りとられ、帰りに又々例の老人とエレヴエーターが一緒になりました。かれは、あたしを見ることもなく、じっと目を据えたままでありました。後ろを押している看護婦は見知ったひとであったから、あたしに向って職業的な微笑をおくって来ました。それとなく目をつけていると、あたしの六人用大衆部屋の隣りの二人部屋へつれこまれ、そこで前々日患者が死亡して空いたばかりのベッドに運びこまれたのでございます。この二人部屋は看護婦部屋に近く、看護し易いと云う建て前なのでしょうが、実は死人の出易い重態患者の病室で、差額ベッドになっております。同姓であると云うこだわりと、かれの性癖に軽い憎しみを持っていたあたしは、便所へ行く度にかれの病室の前を通るので、それとなく横目で、半ばあいているドア越しに、かれのベッドをちらり盗みみるのでございました。その次の日、案の状ドアの外にドカリと何と云う名称かあたしは知りませんが、人工呼吸を電動化した四角い器具が据えられ、二三十秒おきにボカンドカンと不吉な音を立てておりました。談話室に、見覚えのあるかれのせがれ、かれの老妻、娘、それから見なれない顔ぶれも加わって、七、八名の者たちがつめかけて来たのは、その日の昼過ぎでございました。向うもあたしを見覚えている筈、あたしはせがれに話しかけました。

「未だ意識ははっきりしてるんでしょう」

かれが退院する前の、あの盛んな食いっぷりと、金についてのせがれとのやりとりを覚えているあたしは、こう云う直かな問い方も、それ程失礼には思えないのでした。

「いやもうわからないんです、誰がどれやら、どれが

誰やら……ボクも五十を越しての失業者で困ったものですよ。ボクはこれでも身体障害者なんです。肋骨が三本ないんです、職安歩いても相手にしてくれません」

父親の容態を聞いているあたしの問いに、この返事は少々余計なことが多過ぎるとあたしには聞えるのでございます。〝キミの事を聞いてるんじゃないよ、キミのおやじさんのことを聞いてるんだ。キミが自分が失業者だって今オレに言ったって仕方あるまい。だがこの男、自分のことを言いたいんだナ。そばにいる老母や妹の手前を考えてのことかナ。あたまの中にや父親が死んだあと残してゆくモノ、その配分のことなんかがチラチラしてるんかもしれんナ〟あたしは心中に思ってみるのであった。それとなく観察すると、あの老人の死を本当に悲しんでいる顔は見当らない。二ケ月ばかり同室した間に四五回しか見舞いに来たことがなかったかれの老妻も、よろこんでいるとは言えませんが、今逝こうとしている自分の夫との別れをそれ程悲しんでいるとは受けとれなかった。〝夫婦って言ったってこんなものなんだろうナ〟病気のせいもあって物事を悪い方に考え易くなっているあたしは、そんな風にも思ってみるのでございました。

かれ等は、今晩病院にとまる者を誰にしようとか、病院の近くに泊る宿屋はあるかと云う話に移って行った。

普通の人なら、あのような呼吸補助器が持ちこまれたり、痰抽出の器具が運びこまれると　半日位でその人の命は終るのであるが、かれは、三日たっても未だその器具が動いていたのでございます。集った人たちも、朝方になると、どこからともなく病院の談話室に集ってくる。談話室は喫煙室でもあるから、漸く喫煙する気力をとり戻したあたしは、かれらと何度も顔を合せることになる。

「血圧は、どのくらいあるんですか」

その老人の部屋の前を通るたびに、かれのベッドをちらりと見て、血圧計をベッドの端においている看護婦を見たので、あたしはせがれにきいた。

「五十位ですな」

かれはあっさり言った。あたしは所謂低血圧で、上が百にならない時もあるが、五十と云うのは、どの様な生命状態なのかあたしにはわからないが、まだ血圧の継続があるあの老人の生命力に、あらためて驚きを覚えるのでございました。

でも、かれはそれから三日後の朝方、とうとう完全に息をひきとった。同姓の老人の死に会うと、あたしはいよいよ落ち込んで、談話室にいる時も、しゃがみ込んで他の人と話しをする気にならなくなっていった。その翌日、談話室の向いにある重患用の部屋から、あたしの知らぬうちに老婆の方のベッドが空いた。その老婆もあたしと同姓でありました。朧ろな記憶をたどると、あの老

人が死んだ日の夕方、その談話室の向いの部屋にも二、三の人が出入りしていた様でありました。病院では医者看護婦は勿論、雑役、掃除人夫にいたるまで、病人の死については、口にしないことにしているらしい。一種の箝口令が行きわたっているらしい。この部屋が、前の老人のいた部屋と同様の二人部屋で、重い患者専用の差額ベッドになっていることも、あたしは知っております。

この様に、あたしと同姓の者が相ついで目の前で逝くと云うことは、いよいよあたしを切羽つまらせると申しましょうか、生死の境をたずねる心にするものでございます。

折柄、あたしのベッドに、友人大和禎人の十一冊目の短篇小説集〝烏川の畔〟が届けられました。簡単に友人と書きましたが、なかなかあたしには、この友人と云う言葉を形容して上につける詞が見つからないのでございます。何故見つからないか。善友、悪友、親友、心友とか畏友とかいろんなことばはありますが、あたしの心をゆきとどいて言い表わす言葉がございません。

かれは、あたしが今から三十何年前、いや四十年程前に、とにかく、めしを食うということに追い立てられて、ある中学校の英語の教員になった時、かれは其処で、教頭と云う役職におりました。これは世間的に申しますと上役という次第になります。だが、あたしの心の中には上役という意識よりは、背くらべするという気分が先に出て来るようでございました。それと申しますのも、かれとあたしは、かれが数ケ月先にこの世に生れた同年齢だったためでしょうか。かれは社会科という学科を、教頭職のかたわら担当しておりました。あたしはひそかに、生徒たちがかれの授業をどんな風にうけとっているかを聞いてみたこともありました。その應えは、あたしの予期に反して次のようなものでした。

「面白いよ、いろんな歴史の話してくれるもん」

あたしは〝つまんないよ〟ということえを期待していたのでした。そんな心からか、あたしはそれとなくかれの身のまわりや経歴を盗みよみしようとしておりました。ある日のことでした。かれは一冊のうすでの本を、あたしの席のある職員室の隅まで持って来て言いました。

「これ読んでみません？」

それは、かれが仲間たちとやっていた「浮標」でした。〝小説書いてるんか〟あたしの心中の呟きは、かれに対する敬意を含んではおりませんでした。いや、あたしのこころは、めしを食うと云うことにひたすら傾いていて、中学校の教員をやりながら、予備校などと云うところに出入りするあわただしさでございました。その時分の予備校の教員は、大体大学のセンセたちの内職かせぎで、肩書きがないあたしの姓名の上に学校側が〝某大学講師

〟とつけくれました。生徒がある日意地悪のつもりできました。

「センセ某大学って何処ですか」

あたしのこたえが振るっていました。

「なんだキミ、某大学しらんのか、中国だよ、支那だよ」

そしてあたしは少しも憶せず英作文という授業をすすめておりました。そう云うあわただしさの中で、ブンガクを思う余裕がなかったのでございます。

それから二年程して、かれの父上の死去と云うことがありまして、上役であるかれの住居へ弔問焼香に型の通り行きました。だが、このことを機会に、あたしはかれのご先考があたしの亡父と同じ年、明治十六年生れであることを知りました。わたしの父はあたしがおくれにおくれて二十七才で一兵卒にとられ、二月の雪がしきりとふりしきる中に、昔、戦争の流れをかり立て、いきおいづける歌づくりの中にうたわれた〝歓呼の声におくられて……〟とか〝いざ行けつわ者日本男子〟などと云う巷の歌声におくられて、聯隊のあった松本へと発って行くのを、何とも複雑な顔つきで見送ってくれて、それから一ケ月後に、卒然として死んでゆきましたので、自分の親不孝をせめる気持も手伝ってか、この年になると、しきりと亡父を偲ぶ思いが深くなってゆく感がございますが、このあたしの亡父が、大和氏のご先考と旧制第二高等学校で同じ年月を過していると云うことがわかってきたのでございます。あたしの亡父は、栃木県の地主の末子でありましたが、勉強が好きで、母親や教師の期待をうけて中学校、高等学校、東京帝国大学とすすみ、医師になって、長野という巷に住みそこで死にました。大和氏のご先考も長野県の農家の出らしく、同じく東京帝国大学を出て、同窓の中には康沢俊樹氏のように大臣という社会的地位を得た者、又歌人モノ書きとして知られた半田良平氏らとも二高時代を過していました。その様な耀やかしげな学生時代を過しながら、晩年、〝市井の逸民〟を自称して、せがれ大和氏と同居して何故音もなく逝かれたのか。あたしにとっては、長い疑問であり、掘りおこし度い人間の折りなす姿でありました。それはとうとう大和氏が、同人誌〈作家群卍〉に〝桃李庵アルバムー父真人ー〟を書いたので余すところがなくなりました。かれには先に〝母ひで〟と題した佳作がありましたが、これでかれは作品のかたちで、父母を語りおえております。あたしはある日ある年、かれの家を訪ねて、この母上にお目にかかることがありました。既に齢九十に垂んとしておられたかに記憶しておりますが、聡明でしっかりした口調で大和氏に申されたことを思い出します。

「もうお前の貧乏時代のモノ語りは沢山だよ」

この母君は九十数才で逝かれたと記憶します。あたしの亡母とどちらが先であったか、只今記憶が明らかでありませんが、あたしの母らくも九十三才で逝きました。あたしは、だがまだ父母をしっかりと客観してとらえる力がございません。あたしは後年、この大和氏のあとを追う気分で〈作家群卍〉の同人の一人になり、同誌の事実上の宰領者・編集者である大和氏が、同誌三十号の巻末後記に「三十号を通じて作品を欠かさなかったのは、大和、山口そして金子、三戸岡もほとんど作品の休載のない活動をした云々」とあたしのヨロメイた歩みを引き立ててくれております。この同人誌〈作家群卍〉の同人の中から何名も商業ベースに乗って行った人たちがおります。近く翌七月にも三戸岡氏の〝降格を命ず〟という作品が巷の書店に現われようとしています。たとえ商業ベースに乗らなくても、あたしの目には、既成作家をぐっとしのぐ程ものの書ける人が、何名もおり、それらの人々は、同人として集り、又いろんな故あって去って行きました。それは丁度、この世の生と死との有様にも似通ったところがございます。

かりそめめいた学校教頭と、同年齢のヒラ教員の間が、あたしの方からだけとは云い切れない歩みよりによって、今日のようになってゆくあり様も、人間の生きざまの風景の一コマと感ぜられるのでございます。もちろん、大和氏も学校の長と云うものになり、あたしも晩年、と申しては少々変になりますが、五十才の半ば過ぎに、六十才の勧奨退職までそのような立場を経験することがありました。後年、かれにあたしは聞きました。

「あなたよく長い間教員の職業に我慢出来ましたね」

かれは答えました。

「私だって我慢のしつづけでしたヨ。仕方ない……」

かれの教頭歴は、日本一長いもので、かれの著作〝思いのままに〟の中にあきらかでありますが、正に今度おくってくれた〝烏川の畔〟の中の〝被爆者健康手帳〟の主人公軽部庄作の口の端にのぼれば、勲章が、それだけで貰えると云うものでございます。

又、この本の表題になっている〝烏川の畔〟は、かれが一夜同人たちと群馬に旅して、小栗上野介の碑石に触発されて一ケ月ばかりの短時日で書き上げた作品でありますが、今もあたしのベッドの枕頭にあり、やり切れない病人のあたしのあたまを鋭く刺戟しています。かれはこの作品のモチーフは、「海燕」の一九八八年八月号に掲載されてる井伏鱒二氏の「普門院の和尚さん」と同じであって、かれのものの方が八七年三月に〈作家群卍〉にのせてあるが素材とした底本は明らかに同じである。とあたしに知らせてくれました。井伏氏と底本を同じく

しているというかれの告白は、あたしを改めてかれを見上げる気持ちにさせるのでございます。と申しますのは、あたしは井伏氏の作品は、「山椒魚」から始まって、大てい読みあさる程の傾倒ぶりで、最初にあたしが自分の書いたものを本にした時、ひどく井伏氏が昭和二十三年に河出書房から出している「詩と随筆」の真似をしているのでございます。たとえば井伏氏の漢詩の翻訳に刺戟されて、あたしもいくつかの漢詩の翻訳をやってこのあたしの本「勲章と詩集」にのせているのでございます。そのうちのひとつを此処に出してみたい。別にうまくやったと思ってのことではありません。あたしのこの本の中味を〝井伏鱒二に似ている〟と云ってくれた人もあって、思い出の気持が深いからでございます。原詩は、陶淵明の「子を責む」であります。上の欄が原詩、下の方があたしの日本語でございます。

白髪両びんに被り　しらがあたまに
肌膚復た実たず　しわだらけ
五男ありと雖も　五人の子供はあるけれど
総て紙筆を好まず　いつもこいつも出来悪く

阿舒は已に二八なるに　舒太郎すでに十六で
懶惰ことさらに匹なし　天下一品怠け者
阿宜は行くゆく学に志ざせども　宜二は高校に入ったけれど
而も文術を愛さず　机についたの見たことない
雍端は年十三なるに　雍端双児は十三になって
六と七を識らず　未だに九九が出来ない始末
通子は九齢に垂んとして　通チン間もなく九才なのに
ただ梨と栗とを求む　かあちゃんお菓子と、おねだりばかり
天運苟に此の如し　これがおやじの運命ならば
且く杯中の物をすすめん　ままよ一ペイ呑もうじゃねえか

漢学と云う畑のセンセには、お叱りを頂くこと必定であるが、子を責めて一杯のんじゃう作者の気持は、わかる感じでございました。

× × ×

さて、そのように落ち込んだ病状にあるあたしのあたまの中は、自分の命の限界のことで一杯になり、せめて切羽つまった状態——たとえば切腹などに立ち至った先

人のこころをかいたものを読んでみようと云う気分になるようでございます。そう云い時に、大和氏の〝烏川の畔〟は、その表題の通り、小栗上野介斬殺を主軸とした話で、主人公の、道山和尚が既に当時、貴族院議員になっていた斬殺者原保太郎と発止と対決するあたりに鬼気を覚えさせるものがありました。又その本の中の〝弥兵衛初夢〟は赤穂藩浅野家の史料を背景に、堀部弥兵衛老人が大石内蔵助らと細川家にあずけられてから切腹の前日までのお互いの睦み様を活写した本格歴史小説であり、あたまの中がまとまらない病態にあるくせに、この次の〈作家群卍〉には切腹の心境を掘るモノを自分も書いてみたいと秘かに思はせられるのでございました。

もちろん・老耄の果てに病を得て、死を目の前にしてあれこれ心を動かしているあたしと、江戸時代に武家の極刑として〝仰せつけられる〟切腹を予定された赤穂家臣四十六名の心懐とは、それは結びつけようもない程遠くかけ離れたものでございましょうが、此の現世との別れを目前にしているという点では共通するところがあります。そこであたしは、かれらのうち十数名が、辞世という按配で残していると伝えられる詩歌をよんでみるのでございます。注意してよむと、科学と云うものが到達した死の観念に近い考えをにじませているものと、〈死出の山路〉とか〈旅路〉とか、来生とのつながりを宗教的に観念したものと二種類になります。大石内蔵助の〝絶命詞〟と称せられる漢詞の中に斯様な一句があります。〝一朝夕作塵〟。又木村岡右衛門の〝絶命詞〟の終句は〝散作暁天草木ノ風〟となっております。又早水藤左衛門の辞世は次のようにうたっております。

〝地水火風　空のうちより出でし身の　たどらで帰るもとの往家に〟

前句はカガク的観念であり、後句は宗教的観念を含んでいるかに存ぜられます。だがこれらの人々の詩歌には等しくこの世との別れを矢張り惜しみ悲しむ情があふれております。その情念を、彼等は、藩主内匠頭の仇をうつという、当時大平の中に廃れ切っていた武士の〝義〟と云う考えが、おさえこんだのでございます。あたしには、この、現世との別れを惜しみ悲しむ心をおさえこむキッカケがない。キッカケというものは、ある場合には、切った腹の中から内臓をつかみ出して相手に投げつけると云う様な、激しい怒りの情の場合もございましょうし、ある場合には、もうこの生き身を此の世にとどめておけないという絶望的なコイの思いと云うこともございましょう。又もう凡ては終ったと考える諦観の場合もあって、様々にブンガクがそのあとづけをしつづけると云うことになりましょうか。

もう可成り以前になりますが、あたしは、クリスチャンであるM・Yさんからクリストのことを学んで、心の安らぎを得ようとしたことがございます。M・Yさんも大和氏の編集する〈作家群卍〉同人の一人で、かの女には、最近号に〝Gone are the days〟と題する爽やかにして健やかな自伝風の作品があります。かの女の津田塾大学時代の暮し方を骨子にしたもので、あたしの泥んこの青年時代と比べると、自ずとかの女の前に膝まづき度い願いにかられます。それはコイという情念に通じるものがございます。

あたしは敗戦後、内地に復員して来て、職がなく、からからにかわいた生命感のまま巷を右往左往していて、縁あってある仏教系統の私立中学校、高等学校の英語の教員になりました。そこの職員の主立った者たちが坊主であったこと、それから台東区谷中に住み、坊主が彼岸には自家用車で往来したりソッと妾をかこうことを目撃しますので、遂に仏教を訪ねると云うことがございませんでした。だが昨今のように死を目前にしては、何かひと飛びに、現世をあきらめるキッカケを、しきりと求め探る気持になっております。大和禎人氏の〝烏川の畔〟や赤穂浪士切腹前の暮しを描いた〝弥兵衛初夢〟を印象深く読んだり、M・Yさんにキリストの教えを尋ねたりしたのも、みなみなその様な気持に発するものでございましょう。見るもの聞くことのひとつ一つが、あたらしくあたらしく、頭脳につきささり四散するのでございます。

そんなあたしを一コの生物としか認めていないと思われるあたしの主治医と称される人が、ある日さっと姿を消し、その次の日の回診のときに、ベッドから見上げたあたしの目をおどろかし、からだを固くさせる体の女の医者が立っていたのでございます。あたしは元もと女医がきらいで、患者に嫌われた相手もそれとなく以心伝心という具合にそれを感じとるようでございます。何故女医を嫌うかと云うと、大低の女流は、男との競争にうち勝って、其処まで来たと云う一種の誇りが、歩くときの足どりや、肩つきのあたりにちらついているものでございます。ところがこの女医にはそれがございませんでした。それは、寝ているあたしの目に、かの女の歩く足どりも見えませんし、あるく際の肩のあたりのちらつきもわからなかったためでございましょうか。いやいや、かの女は、こう言ってあたしのベッドのシートの空いているところにぐっと腰を入れて、しかも髪を片手でかき上げながらニコッと笑って腰かけたのでございます。

「あなた××さん？私この前のセンセにかわって診ますから……」

あたしは、瞬間的に〝アッ！このヒトだ。このヒトにオレの死の介錯してホシイ！〟と心中叫んだのでござい

ます。

それから三日程したある日体温と脈をとりに来た看護婦がまことにさり気なく云ったのです。

「××さん、今度の女のセンセ魅力的でしょう。××さんの病気だって治るんじゃない？」

これには、本当にハッとしました。この女医にあたしの死の介錯を頼みたいと云うことは、あたしの心中のことで、そうでなくとも口腔が痛くて、物を言うのもつらいあたしが、そのような心中のことを口にした覚えは全くありませんし、ほかの人に、それとなくわかるような仕種が、歩くことも覚束ないあたしに出来る筈はございません。ただあたしは何かをとりとめもなく原稿紙にかきちらすことで気を粉らわすと云うことをやっています。そういう噂は、何時の間にか、看護婦・医者の間にも、患者の状態のひとつとして観察されていたのかも知れません。戦争中に、まともな紙もないときに、切れ端の紙に絵筆を使って、辛うじて絵をかき度い願いを凌いでいたというある絵かきの話が、あたしの心にしみ残っていたのでございます。

その日もメモ帖にあたしは自分の心に漂う影を書こうとしておりました。その時、あたしの目のとどかない頭の方からツトその女医が回診に入って来て、いつもの様に、あたしのベッドシートに深く腰を入れて言いました。

「書けたの？」

「ええッ……」

あたしはうろたえながらメモ帖をなげ出し、胸のあたりを思いっきり広げておりました。あたしがうろたえたのはかの女の姿を思い浮べながら次のことばのつづきを探していたからでございます。

〝医師が、世の中で云うキレイで魅力があると云うことは、患者に生きる気力をあたえ……」

（一九八九・六・二十六）

社告

「まんじ」季刊発行のための内規
作家群同人

～～～

はないが、それはしばらくおくとして、かれらとは旧制中学校の同窓でやはり優等生だったカメレオンくん、きみの果なく口惜しい人生について主として物語りたい。きみよ、許せ。

きみのあだ名はたしか英語の教師がつけたものだったように覚えている。

エンジンというあだ名の英国紳士然とした先生だった。（然とした）という表現では軽みに聞えるかもしれないがビァホールで一人静かにジョッキーを傾け、英字新聞を読み耽るといった洒脱をそなえ、

「きょうは常に勝たせたいですね」

また、

「宮崎くんの記録は今日はどうかな、五十八秒をまた出せるかどうか」

当時の横綱常ノ花の全勝を願い、水泳界のホープ宮崎康二選手の記録を話題にするかと思うと、讃岐の殿さまという家柄の出で伯爵、貴族院議長であったわたしたちの母校の校長の家系が深く御三家の水戸徳川氏にかかわりがあり、とくにその生母は大老井伊直弼公の息女（弥千代姫）であることなど、この先生の口から漏れたエピソードであった。余話が豊富で楽しい先生であった。いま思うと、この先生にかぎらず当時の教師たちはふところの深い人が多かったようだ。余話を授業のマクラにする余裕があった。そして、それは教師の実力を物語り、教科書をはなれたところで生徒たちの情操の上に少なからぬ影響を与えるという性質のものであった。

「山田くん、きみはカメレオンのようだね、いったい鉛筆を何本削れば気がすむのかね」

少しく興奮ぎみに顔を赤らめ先生は叱責されたのだ。きみが鉛筆削りに専念していて何本目かの、さらに一本をとりあげ、どう思ったものかその芯を舌なめずりした瞬間が捉えられたのだった。余話を終えて授業に入っているのにそうした作業を続けていたきみがよほど無神経なものとして先生をいらだたせていたようであった。教える側の熱意に水をさされたとき教師が腹をたてるのはむしろ当然だった。この先生の英語の訳読は小泉八雲の〔KWAIDAN〕の「耳なし芳一」など圧巻の趣があり、尊敬するに足る先生であった。

きみのあだ名の誕生を見たこれが決定的瞬間だった。生徒が教師にあだ名をつけるのはありふれているが、この場合は教師が生徒にあだ名をつけた、しかも、きみのそれからの生涯、きわめて短かった一生を通してかわらぬ愛称になろうとはまさに（いとおかし）と云うべきいきさつだった。

北区滝野川の平塚神社、源義家ゆかりで俗にいう白旗神社のわきを通り、いまのJR京浜東北線「上中里」駅へ出て陸橋を渡り降りたところに尾久へ抜ける地下道があった。大操車場の地下を荒川へ抜ける近道だった。

カメレオンくんの率いる一隊はよくここを通りぬけたものである。

金米糖の志水、奴さん（やっこ凧）の大輪、加地（どういうわけか、かれだけあだ名を思い浮かばない）、それにときにはゴリラの大久保といった連中がつき従う様子がうかがえた。尾久駅前からとある路地を通りぬけやはり同じグループのクマムシの鬼島の家に立ち寄り、そこで、ときには夏のさかりになんと百人一首を戦い、まさに戦いというに相応しいプロ級の手あわせを演じ、それから荒川へ泳ぎに行ったものだった。

「小台の渡し」を渡った向こうは荒川放水路の土手まで、ヨシキリの囀ずる背の高い葦の間を縫いメダカの泳ぐ水溜りを飛び越えたりして、高圧鉄塔の下を行くほどに蟹採りに夢中になったいっそう幼い日もある土手に達し、駆けて上ると放水路の展望がひらけ、江北橋のたもと近く、土手を下りると「江北プール」があった。

なんのことはない水溜り同然であってもプールに縁遠い世代だから仕方がなかった。入場料のなにがしであったものか、いっこうに覚えにないが、ヨシズ囲いに青天井といった仮設のプールだった。ここに近い荒川遊園地のプールや大塚護国寺にあった室内プールなぞやはり同じメンバーで出かけているが、はるかにこちらは安上りで一日いてもかまわないとあって重宝したのであった。

渡し賃三銭のほかわずかな小遣いで足りたように思う。

「小台の渡しここにありき」という趣の表示がいまは同名の橋のたもとにあり、往時、渡しの桟橋横にあった川魚料理の店が廃墟同然の姿を曝して名残りをとどめ、かさあげされた堤防の高さに傾いた二階建ての軒を接し、辛うじてそれと発見できる現状であった。

（渡し）に代った小台橋をわたしたちは建設中の情景として記憶に止めている。

江北橋までバス路線が入り、かつての芦原にはビル建築が建ち並び、昔の面影はどこにも見るすべもなかった。

橋の上に立つと、脚下の眺めは墨田川を曳船が鈍い速度で遡航するというあまり変らぬ風景が見え、流れの色も何気ない表情で昔とさほど変っていない。だが、（渡し）のあった頃の荒川は墨田川と呼ばれるような変化があり、放水路の方を荒川と呼ぶような推移がある。明らかな隔世の感をいまや否定できないのである。なぜとなく老残の心境が川風に運ばれフト忍び寄る気配だ。すべてのものが泡沫のように時の流れにまかせ消え去ってしまっていた。

橋の上のこうした思いが回想につながっていった。

プールではさすがのきみカメレオンくんはクマムシの鬼島におよばないまでもかなりの泳者ぶりであった。加

地がこれに次いだが、志水、大久保、大輪の三人はサッパリ駄目で、ある日、大久保が目ざましく抜き手を切って泳ぐ姿があり、あっけにとられて見守ったことだったが、実は溺れそうになって夢中の犬掻きであったなど笑えない一幕もあった。

いささか余談になるが、東京五輪の水泳競技で「第一のコォース、○○くん」「レインナンバーワン○○……」というプールサイドコールで有名になった「多治見ぶし」の多治見義長くんは水戸市助役を最後に昭和五十七年五月に亡くなった。後年、同窓同期というスジで消息を伝えられ、「今日の問題」という新聞コラムの（第一のコォース）という記事のコピーが手に入った。

どこでどうしてというより、いつかれが水連の仕事にタッチしていて、そうした舞台に脚光を浴びることになったものか、人生の流離、転変を思わざるを得ない消息となった。昭和二十六年の日米水上から東京五輪までということだから、古橋、橋爪で沸いた戦後水泳界の黄金時代がかれの背景に浮かび、少年の日の面貌が思い出された。一年生のときはたしかに在籍していて、わたしはその隣ぐらいの席であった。やんちゃ坊主、豪傑という印象が強い。だが、かれはまもなく姿を消した。それが単なる転校であったか、「蛇は寸にして」という体の不羈による退学かなにかであったかも知れないが、いっさい不明である。

わがカメレオンくんと多治見くんはいっこうにつながらないが、前畑秀子、鶴田義行、清川正二といった選手のオリンピックでの活躍に血を沸かし、エンジン先生が宮崎康二という少年選手のことを話題にしたこの時代は「水泳日本」の意気がすこぶるあがった時代だった。

「江北プール」に少年が（泳ぎへの夢）を馳せたとしても無理からぬことであった。だいいち学校にプールの普及を見ない時代のことだった。

さきの多治見くんにしても同じように少年の日の夢をプールサイドに精一杯賭けて、喉をつぶして退くまでコールに励んだものかも知れない。

ともあれ、わたしたちグループの友情を育んだものとして「江北プール」の存在を抜きにしては語れない。

「江北プール」の実態はすでにふれた通り荒川放水路本流から取り残された一種の河跡潮で、（水溜りにヨシズ）という風景のものだった。つまり、わたしたちの友情は水溜りに根を下すあんばいに、恵まれた家庭の同級生たちが霞ヶ浦に設けられていた学校の臨海施設に参加する一方、あたかも野育ちのもの同士のスクラムを組む傾向にあった。

三年生で途中編入のカメレオンくんはいわば外様であったが、たちまち頭角をあらわし学年席次もつねに五番前後にランクされ、すでに一種の風運児となっていた。

譜代の優等生を脅やかす存在だった。そうしたかれの身辺に立ちのぼる野党的ムードに魅かれでもするように、いつか周辺に郎党的グループが出来上がっていたのだ。それが前記のメンバーである。

（水溜り）の友情は単に泳ぎに止まるものではなく、野球チームをつくり軟々式野球に熱中し、スコアブックに記録される打率を競い、今日ならなんとも奇妙に聞えそうなことだが、百人一首のカルタ取りに夢中になった。正月の遊びとして始めたことが、わたしたちを虜にし、真夏にもそれが続いたのだから異常だった。（むすめふさほせ）といった一枚札だけではなく、いまにこの時代の強記は暗記カードを使ったりしたものだから、記憶から消えないものになっている。ほとんどプロ？の腕前を身につけていたものだ。

カルタ会場をメンバーの家を持ち回りするうち、当然かれカメレオンくんの雑司が谷の家庭を覗くこともあった。

「オイ、これはぜったい内緒にしておけよ、こうすればメーターが上らないから電気代が安くなる、助かるんだ、教えてやるよ」

驚くべきことをかれは説明した。回路の盲点を利用した盗電の方法なのだ。そのころの電気メーターはヒューズの入った安全器がメーターより前に取り付けられていたものだ。安全器のフタをあけてヒューズをとりつけた四つ足のウケ金具のところで外線側にヒッカケのカギ手を工夫したコードを掛け、メーターを通さずあとは二股ソケットを使って直接屋内配線に導くのだ。

「きみもやれよ、電気代が助かる」

かれは家計を助ける孝行息子の道を教えてくれたのだった。

かれの家がわたしのところと同様に貧しさにあえいでいた事情はその折、わたしたちのために部屋を提供して、狭い隣室にかたまっていた家族の様子と、とくにかれの父親なる人が当時の世上多かった失業中かなにかで表情を失った暗い顔色に気づいていた。

いまは時効を通り越して夢まぼろしの昔話だが、わたしもまたかれの伝授してくれた（家計を助ける）、同じ方法を実行した仲間だ。かれカメレオンくんのこの（盗電）による親孝行の妙案はかれ独自のものであったかどうか、その後間もなく電力会社の方でそうした配電盤回路の欠陥に気付きメーターを通してから安全器に配線する様式に改められた。さらにブレーカーに変った今日では想像もつかぬ「親孝行図式」ということになる。きみの英知に舌を巻くことはあっても名誉を傷つけることはないだろう。

家貧しくして孝子出ずのイメージはなにか翳りを思わせるものがあるが、かれはあくまで明るく濶達であった。

優等生としてわたしに思い浮ぶ名前は前記した伊能大四郎、井上忠厚のほかに鈴本良吉、中田章、今川敏秀といったところを五指に数えて良いように思う。かれらはシノギを削って席次を争ったと思われるみな俊秀だった。戦死した鈴本がどちらかといえば与党を作っていたが、概してかれらは孤立的だった。かれカメレオンはまさしくそういう意味でも異風を持ち込んできた転校生だった。それにかれは右の五人のだれとも親しくしたという形跡がなく、つねに独歩したものである。

きわめて最近になって、優等生にまつわるエピソードとしてある面白い話を聞いた。

それはわたしたちの夏休みに課された宿題帳を伊能くんの場合は二冊を用意してあり、かれに近づき教えてもらおうとする仲間には適当にアナの空いたものを貸し与えていたというのだ。勲三等の伊能くんである。この話は大変興味のもてるものだ。なるほどとほくそ笑みたいわたしである。

カメレオンくんはその点では面倒見が良かった。苦手な代数、三角なぞ大いに助けられたが、かれのものからほどほどに遠慮し、割引き手加減したかたちで写させてもらったように思う。

かれは君臨を快とするかのようにすべてのことにリードをむさぼった。だれにも負けたくない、つねに貪欲に勝者の立場を保とうとすることでは、明けっ放しの幼児性の持主だった。スコアブックのトップバッターでありつづけ、百人一首の常勝将軍を保ち、運動神経も抜群で相撲などでも横綱のタイトルを誇ったものである。長胴短足のかれは重心の低い利点をもち、強靱な腰に恵まれていた。その腰にのせられ宙に浮き、足を跳ねあげているわたしの不様な負けっぷりの動かしがたい写真がいまもアルバムに残っている。しかもデーターを見ると、卒業後、二年を経た母校夏休みの校庭のものだ。かれの率いるグループが顔をそろえ、健在の姿を見せている。（いま一度寄らしめよ）という母校への愛着を示すスナップになっている。昔の中等学校の五年制という学校生活の絆はそれだけ深いものがあった証しだろう。

「オイ直木三十五の「南国太平記」を読んだか、（全身がコブになった）なんて描写がある、スゴイぞ」

かれは当然早熟で、ある日突然こんなことを言った。

また、「メッチェン」という言葉も好きでしばしば口にのぼった。だが、いまごろとは違って、昔のことだからそれ以上露骨な会話を展開したわけではない。

ハウプトマンの「ソァーナの異教徒」を話題にもちこみ、人間性開放の叫びへの共鳴を口にしたきみはわれわれの舌を巻くほどの大人だった。

かれの話題にした直木の文章はよほどのちになって、わたしも「南国太平記」を手に入れ、問題の描写を探した覚えがあるが、とくにさしたるエロを感じなかった。ハウプトマンの方は岩波文庫の★二つが原典だった。

四年生、五年生へかけての普通なら受験をひかえた大切な時期に思い出の大方が重なるのだから、呑気千万と言われても仕方がない。それというのもかれらにはさしあたり高みを目差すの受験のアテがないという事情が共通していたからだ。こころのどこかに絶えず咎める気持を持ち合せながらわたしもまたそうした点ではどうにもならない事情を背負って諦めていた一人だった。

時事新報の「作文」入選というトピックは卒業直前のことだった。たしか「国旗」について愛国心を喚起するテーマであったように思う。きみの得意を思うべきであった。それとしても、きみは率いる与党に呼びかけて文集を作ろうと言い出した。稚気満々のお山の大将ぶりに閉口しながら、みなそれに従ったのだから素直だった。

さて、かれはいつか東京市の雇員採用試験を受け合格していて、あっという間もあらばこその社会人への変身を遂げ、電気局に就職した。と、同時に白門と呼ぶ大学の予科に入学した。着流しに角帽という珍スタイルで、しかし、当人としては得意顔で濶歩したものだ。

かれに追随し、一番近い関係にあった加地も同じ門を潜ったが、こちらは蛇腹の丸帽という正しいスタイルをしていた。角帽なぞというものをまったく大学生が彼らなくなった今日では、かれのいでたちは漫画の「フクちゃん」に近い印象を刻んで、稚気をそのまま、不意の訪れを迎えに出て見て、ある日わたしもこの愛すべき姿を目撃したことだった。唖然とした思いがまざまざと浮ぶようだ。

いまの東京都交通局がかれの就職した市制時代の電気局であった。かれの雇員という肩書きは正規職員である。役所の実態として昔もいまも同じようで、立派な髭を生やしていても傭員はざらの職域だから、かれの身分は多少は胸を張れるものであったはずだ。

当時の燻ぶれた木造庁舎にかれを訪れると、その身分上も、若さからも、かれはかなりのモテかたをしていたものらしく、日頃に言う「メッチェン」に囲まれた得意顔にアテられた覚えがある。

これはあくまでかれの切なる親切であったと信じたいが、勧められ浪人中の志水とわたしは間もなくかれを真似て同じ雇員試験を受け、恥をかく結末に終っている。

ところで、ここで市電の大罷業にかれは出会う。なぜかストライキではなく公共事業のためか罷業と云い、ノロノロ運転などのサボタージュを怠業と呼んだものだ。非現業のかれもそうした事態に狩り出されて車掌業務に従ったものだ。

「あすは駒込系統の乗務だから、上富士前あたりでまっててくれ、オレがタダで乗せてやるからな、こいよ」

かれは大張り切りだった。志水とわたしが駒込住いとあって乗せてもらった。いつ通過するものかも明確でない市街電車を待ち、一方は待たせたところが、芽出たいことであった。

車掌カバンを下げ、チンチンという発車合図をする。さすが、運転は無経験では任されないが、張り切る気持は無理でない。こどもの夢の実現だった。ポールでも架線を外れたらどうするつもりだったか。茶気満々氏の大活躍する場面が見られた。

「純喫茶店時代」というべきものの栄えがあった。神保町すずらん通りに平行する、一つ橋寄りの道筋に新天地と呼ぶ一角が出現し、さらにその奥に平行する一筋まで発展していた。しもた屋を急改造したような粗末な店まで立ち並ぶあんばいに盛りを見て、恋に憧がれる学生たちが昼に夜に通いつめる風俗が流行を見た。

かれカメレオンならびに加地もここの常連であった。「チェリー」という店の名が記憶に鮮明である。わたしもたまには誘われ出かけているからだ。

男女交際のオープンでない時代であった。それらの店には（純喫茶）という名に相応しい清潔な「メッチェン」が働いていたものだった。きみは社会人となったためというより前から辺幅を気にする方であった。マフラーなぞの好みにはじまり、頭髪、背広とすべてに先鞭をつけている。エバクリームという脱毛剤がそのころあって、プールに出かけた場合なぞに使用していたようだ。このクリームのことはきみの伊達を語る上の瑣末だが落せない。クリームでまだらな毛ずね、もっこフンドシのコントラストの奇妙が瞼に浮かぶ。「江北プール」に出かけた仲間はすべてもっこまたはせいぜい黒の水泳フンドシで、（かっこいい）パンツなぞはなかった。

わがカメレオンくんは「メッチェン」を追いもとめて三十八度の熱を冒しても新天地通いを止めなかったというエピソードを記録する。

ここで気づくことはかれのこうした高熱の異常である。徐々にかれの肉体を侵しはじめていたものを自らは気づいていたことであったかどうか。卒業の直後高尾山にグループで出かけた折なぞ、かれは馬返しに辿りつけず油汗をかいてしゃがみ込んだ事実が思いあたる。そうしたかれが徴兵検査では丙種であった。すべてにエリートでなければならなかったかれのことだから、この一事にどれほどか傷つけられ、屈辱を味わったことか、察するに余りがある。

かれはやがて白門の法科の学業を卒えると、当時の高文試験も受けたようだが、他方、三菱重工業の採用試験にも合格して名古屋に赴任した。

だが、かれはこの地で早すぎる、あまりにも短かい生

涯を終えることになる。戦時産業として飛行機製造部門を担う会社勤めが過酷であったことも想像されるが、それ以前に胸を侵されていたのだ。一つの強烈な個性が自分との別れを迎えた。加地、鬼島は軍務に従って外地にあり、わたしは九州の勤めにあった。かれの客死は日米開戦にむけて重苦しく急迫を告げる昭和十六年の年明け、一月十六日のことであった。無念を思いやられる。

山男、シボレー、神武天皇の靴なぞ、それぞれいわれをもって多彩に、みなかれの異彩を放った個性に与えられたニックネームだったが、カメレオンはとくに表看板として普及した。

カメレオンにまつわるこんな挿話がある。

（舌長し）

という、こともあろうに通知表の通信欄に担任が所見を書いたという話だ。

「どう思う、酷いと思わないか」

かれにもっとも近い加地がそれをそっとかれから打ち明けられていたというものだ。鉛筆の先をなめてニックネームされた過去の日のことは偶然ではなく、かれはいくぶん長めの舌をもっていたことは事実だ。口角泡の多弁を振るうときそれは明白であったし、得意科目の英語の発音などにはかえって利点になるという特色になっていた。だが、ことさら、（舌長し）はどういうつもりであったろう。饒舌を揶揄したものであったろうか。（神武天皇の靴）にイメージされるような異様の靴を履いて転校してきたこの田舎者の優等生は教師の側から見れば決して愛すべきものでなく、むしろ外様視されたものであったのかも知れないのだ。

けだし環境に応じかれが人生を彩った生き様を象徴するかに（カメレオン）のニックネームは巧みである。精一杯生きたかれには皮肉でなくうってつけのものになったようだ。優等生のきみよ許せ。

優等生をかれ以外の五人ほどをさきにあげたが、鈴本の戦死のほか、一高、東大に進み医家を継承し、血液学の権威となった中田章は四十八歳で逝き、今川は消息が明らかでない。勲三等の伊能、井上は戦争をくぐり生き抜けた。人生万事は「塞翁が馬」という感慨が深い。誰かあって将来同窓の「蓋棺録」記すことがあるとすれば、かれらは整理上の「ア」行だ。大いに目立つことだろう。麗々しくも勲章を胸に飾って、いまや同窓会長である伊能の写真が会誌の巻頭にあるのを見て、わたしはわがカメレオンくんを思い出したのだった。

（元・六・三〇）

連載（小説）

近藤富蔵の生涯（四）

序章　羽倉簡堂七島巡察

二、八丈女護島

金子正義

（一）

五月十一日（七・二）　夜が明けると荷浦の岩壁の間に碇泊している朝日丸に、曳舟が群がり寄って曳綱を繋ぎ、一里程南の八重根港へ曳航した。

船着場に入ると待ち構えていた船人足達が忽ち渡し板を掛け渡し、簡堂一行が上陸すると直ぐ掛声も勇しく行李や積荷を担ぎ出して崖上の番所へ運び始めた。

簡堂は逞しい半裸の男共が忙しく動き回り乍らあげる叫び声が、異国人のようなので興味深かった。

船着場を上って道路に出ると、夕日丸で先に八丈に着いていた本岐道平等が島役人と共に簡堂を迎え、無事の到着を祝う挨拶を述べた。

「今日は風向きも潮流も順調であったので、無事に八重根港に入ったが、聞きしに勝る黒瀬の大難航であった」

と答え乍ら、すさまじい難航の苦しみを思い返して命の助かったことを心底から嬉しく思い、遙けきも来つるものかなと思いを深めて

『柳営秘鑑伊豆七嶋之図』に「江戸ヨリ大島エ三十六里　利島エ四十里　新島エ四十七里　神津島エ五十六里　三宅島エ六十一里　御蔵島エ六十六里　八丈島エ一百五十四里」としるされてあるのを思いおこし、始めて見る緑豊かな島を見渡して、此れが島も通わぬ流人島かとその穏やかな様子を意外に思った。

簡堂一行は一先港番所で昼食を摂ってから大賀郷大里の島役所に向った、役所は三原山山麓に在って室町幕府の昔に置かれた陣屋が、其の儘北条支配より徳川当代迄続いているのであった。構えは玉垣石を廻らして広く、門を入ると庭に一丈余りの熊竹蘭があって、白い花の花蕊が鮮やかな紅を点じていた。南の裏手には義倉が並び其の続きに、桂樹の林に囲まれた射撃場があって、ずっ

と三原山麓に続く蘇鉄の樹海となっていた。辺りには杜鵑、鶯　などの野鳥が入り混って啼く他は何の物音も無い静けさだった。

色鮮やかに紫陽花が咲いている表面玄関前には、島取締役人の高橋長左衛門を始めとする陣屋役人が首を長くして待っていた。

七島の支配代官が八丈迄巡航することは滅多にないので、役人達の誰もが緊張し切っている様子だった。

陣屋の島役所で諸役人から一通りの挨拶を受け、灯が点ってから次々と伺向する大賀郷名主の菊池武豊を始めとする各村の名主、村役人達を客間で謁見した。

昨夜のうちに朝日丸が荷浦に碇を下した知らせが、直ぐ五ケ村に届いて、村々の主だった役人達が朝から大賀郷に詰め掛けていたのだった。

夕食の席にも一同が揃って臨み無事の上陸を祝う酒宴となった。簡堂は席の乱れる前に退席して寝室に入った。のべられてある褥につくと海原とは違った寝心地良さで忽ち深い睡りに入った。

此れより一ケ月、六月十日（七・三〇）神湊港から江戸へ向けて出帆する迄、簡堂は女護島の王者になったような心地で過すのであった。

五月十二日（七・三）　簡堂は鳥の囀りで目を覚ました。入り混って啼く野鳥の中に一際大きく歌うように鴉が鳴いている。国地と違って鴉まで伸びやかで此処は浮世を離れた別天地のように思えた。

だが朝から、なんと云う蒸し暑さなのか凝っとしていても汗が滲み出る。着替をしようと従者に船から運んだ行李を開けさせると、衣類は黴で色が変わり花が咲いたようだった。陣屋の娘が帷を用意して呉れたので着替えると大分涼しくなった。

小者達は汗塗れになって、海水を冠った書類や武具などを行李から出して、焚火で乾かしたり日に干したりして湿気を抜くのに忙しく動き廻っていたが、簡堂は早昼食を摂り北村、本岐等と陣屋の直ぐ近くの優婆夷宝明神社に詣でた。祭神は事代主命の妃八十重姫（優婆夷姫）と、その子許志伎命で、八丈本島、小島、青ガ島を含めての総鎮守であり、八丈最古の神社であった。

神官奥山遠江守が厨子を開いて祭神を拝させて呉れた。優婆夷姫は古風な木彫坐像で紙の衣を着け、何の飾り気も無いが敬々しかった。厨子の傍らに銅板に刻んだ束帯姿に右手に笏を持つ男神坐像が許志伎命であった。木像神の膝裏には、「旦那　宗麟」と陰刻があると言う。

境内に接する奥山宅で休憩すると神官は、書庫から明徳年間（一三九〇～九四）の銘のある古鉦や、神社に伝わる古文書等も出して見せ乍ら、家系由来を語った。

室町幕府関東管領下にて、神奈川の領主として八丈島を支配したのは奥山氏であった。中でも奥山宗麟は六十

有余年の長きにわたった。戦国争乱の時代となり伊豆国は北条氏の支配するところとなり八丈もその治下に入り、永正七年（一五一〇）に八丈は奥山、三浦、北条三氏が代官として支配するようになった。以後天正十八年（一五一八）豊臣秀吉による北条氏の滅亡に及ぶまで、北条五代の八丈代官として奥山氏の他に長戸路、水野、中村由井等が交々に引き継いでいった。

徳川家康の入府より暫くの間は奥山縫之助忠久が代官として支配していたが、慶長七年（一六〇二）嶋奉行となり、慶長十三年忠久の死により嫡子弥九郎忠頼が嶋奉行となった。以後寛文十年（一六七〇）新たに伊豆国代官職がおかれ伊奈兵右衛門が初代代官となる迄、八丈嶋奉行には豊島、谷、の名が見える。尚伊豆国代官羽倉外記簡堂に至る迄、伊豆代官は直接渡海支配せず、手代が代って巡島し、八丈には五ケ村を束ねる島取締役人を置き、各村の名主以下の村役人は地役人と称されていたが、正徳三年（一七一三）神職の神主船舶の船師、官船の船預り役と並ぶ役名となった。

尚八丈島神祇職は、奥山、長戸路、菊池氏等の一族の長が神官と地代官とを兼帯していた。八丈年代記によれば、当代神官奥山遠江守は文化四年（一八〇七）任官の十五代奥山忠昌である。奥山氏家系には、人皇三十代敏達天皇四代の孫、井出左大臣橘諸兄公十四代の後裔、掃部介盛仲の玄孫奥山新左衛門正忠長男、奥山八郎五郎忠茂を元祖として十四代奥山大和忠政の後を継いでいる。

奥山宅を辞して島の名家の茫々たる昔に思いを馳せ乍ら大賀郷の村を抜けて楊梅原にある宇喜田秀家の墓に向った、村の南一面の水田は稲が青々と伸び、ちらほらと晩手の稲を植えつけている菅笠被りの農婦の姿も見える。歌っている詞は少しも解らないが、琉球の言葉に似ているようだ、黒潮の流れから太古より琉球の言語風俗が入っているのであろう。

秀家の墓は二重の石垣の中にあった。明暦元年（一六五五）に没して、天保九年まで百八十四年の歳月を経た五輪の墓塔は苔むし、墓と同じ古さの桜は幹も枝も木苔に被れていた。

豊臣秀吉の下で多くの軍功をたて五大老の一人となり、備前美作両州の太守四拾七万四千石従三位中納言、兼備前守となった宇喜田秀家であったが、関ケ原に敗れて八丈流罪となり、名も流人名浮田八郎、共に流された嫡男待従秀高は流人名高郷孫九郎、次男和泉守秀継は小平次とされ、従者は男女十名のみだった。

慶長十一年（一六〇六）四月配流より四十九年の流罪の儘で八十二才で没した、法名尊光院殿秀月久福居士、嫡男秀高は、既に慶安元年（一六四八）に五十八才で病死し、次男小平治は父秀家の没後三年、明暦三年に六十才で死去した。

曽て戦国の雄将南海に囚えられて五十年、その憂憤は

いかばかりか、と簡堂は想いを駈せたが、辞世の歌が、

「綿帽子こわらば落ちんはげ頭さぞ寒からん西の山風」

と聞いて、既に興亡名誉を度外視して悠々閑居する白翁の翁となっていたのであろうと安堵の思いだった。

五月十三日（七・四）　昨日の朝と同じように野鳥の啼音で目覚めたが、転々とところを移して鳴く鳥と違って天から雨の降るように蟬が鳴くのに気付いた。それも国地の夏蟬よりも塩辛い音で愁々と鳴いている。

曇天で涼しかったので朝から次々と訴訟を聴き、行政裁決を下すなどで忙しかった。

先の伊豆諸島支配代官柑本兵五郎が、文政十年（一八二七）閏六月に廻島以来十一年振りの支配代官の巡察と云うので、通常島役人が裁決していたこと迄も、簡堂の来島を待って裁下を得ようと待っていたのだ。

簡堂は、随行の北村義卿、本岐道平等諸役人に手別けさせて、先ず記録文書を閲して年貢、義倉を検査し、午後から多くの訴状、伺状を見て一々裁決した。其の中には、末吉村鎮守の石垣の修覆や、宗福寺本堂の修繕願のように一々支配代官の許可を必要とする迄も無いものや、五ケ村の名主、地役人の肩衣、羽織の着用許可の願状のように地役人取締役人で許可すれば宜いもの迄あった。

亦、名主役の家督相続願と、名主褒賞上申もあった。末吉村の名主沖山市十郎は寛政八年より本年天保九年迄の四十年間名主を勤めて、悴岡右衛問と共に村人を良く導き粟、芋等の農耕をすすめ、亦奥州伊達郡金原田村の養蚕に熟練していた百姓八郎が流されて来たので改良されている養蚕法を八郎に依て村人に伝受させ、良質の糸を作り、八丈紬の貢物とは別に八丈端物の機織を島の女にすすめて、これを江戸商人と商議して利潤を得させ、村人の生活の豊楽の基をつくった。斯うした市十郎の功を羽倉代官の廻島に際し褒賞されたいとの上申であった。

併せて此れを機に悴岡右衛門に名主役、及び家督を譲る願いであった。

八丈の伝統風俗習慣を知るに興味あること、と簡堂は快く聴きとどけた。

斯うした願いの中に簡堂が重視した「島百姓の国地への出百姓願い」があった。

本土に伝わる八丈の風説は伊豆諸島第一の大島で、地は肥沃、稲麦よく実のり、蕃薯、鹹草佳く、島人は勤勉、特に女は容姿優雅で佳く機織をなして男への情敦く、古来より男が流れ着けば止めて帰さぬ女護島と云われているが、実は米麦は全島人口を養うに足らなかった。

安永二年（一七七四）の八丈嶋大概帳に依れば、田畑反別弐百廿町三反壱畝拾六歩で内、田五拾七町九反六畝八歩、畑百六拾弐町三反五畝八歩とあるが、風浪塩害、旱、秋の暴風雨で収獲少なく、米は粒は大きいが味は淡白で豆州の下米程度であった。従って島民五千を養うこ

とが出来ず、年具は黄八丈で村ごとの戸数に応じ一軒一反の割合で貢納していた。

従って、十年ごとにあると云う大飢饉となると、何百人もが餓死した。

大飢饉は前年の旱魃、大風、潮害等で田畑枯れ、秋より翌年の端境期までに凡てのものを食い尽して二、三月頃にはたばたと仆れるのであった。古代はおいて徳川入府以来の飢饉を八丈年代記で見ると、

「慶長四年己亥大風吹耕作悉失ル、百姓大勢牛喰ヱ出ル、里牛ノ分ハ皆喰ツクシ百姓餓死スル処、、、西山エ入テ牛ヲ取リ百姓ニ喰セ助ク」

と牛を喰い尽して餓死を免かれたことを記してあるが、

「正保二年乙酉七月廿六日大風吹耕作悉ク損亡ス、末吉村ニテ牛喰山ヘ出ル、同三年丙戌六月より病病ハヤリ島、小島ニテ人数百八十人余死」

と飢饉に続く疫病で多くの島民が死亡し八年後には、

「承応二年癸巳七月廿三日大風吹耕作悉損失ス、」

と大兇作を記録している、飢饉は大風や潮害ばかりでなく、異常に繁殖した鼠害に依ることも屢だった。

「元祿五壬申年　小嶋去々年より出来の鼠次第に多成り耕作不残喰尽　粟稗一円取不申、草木迄喰倒百姓及難儀少々餓死人有リ」

「元祿六癸酉年小嶋鼠弥強荒候而百姓喰物無之、依餓死仕ニ正月中百余人八丈嶋之引取之然所ニ夏中雨不降旱強耕作難仕付就中矢崎原根田原一円不仕付八丈嶋ニも依飢饉右小嶋人難助亦小嶋へ還ル其内余多小嶋にて餓死ス」

その他、虫害、津浪、旱、と限りが無いので簡堂が見た島役所の主な記録によると、

元祿十四年（一七〇一）前年の大風と潮害で、人口三千六百六拾四人中五百四拾参人が餓死した。

正徳元年（一七一一）九百九拾壱人死亡

明和五年（一七六八）明和三年より六年までの飢饉続きで全島千五百人死亡、中之郷だけでも七百三拾三人全滅に近い。

文化七年（一八〇九）四百余人餓死

文政三年（一八二〇）干魃で数百人の餓死を覚悟した処、遠州船が暴風雨で漂着、積荷の米八百俵、油四拾樽を頒けて難を免がれた僥倖もあった。

天保三年（一八三二）の大飢饉にも天の助けか、仙台石巻の船が年貢米千八百俵、大豆等を積んで漂着した。七ケ村にこれを割賦して餓死を救ったが、続く凶作で、天保五年には餓死者八百人を出している。

難破船、漂着船は毎度のことで此れによって飢饉が救わる訳では無く、漂着、海没の船舶と、その積荷の取得分配は妄りにすることは出来なかった。正徳元卯年の幕府郷村　浦々高礼に従って厳正に処置するのであった。

従って、海難打ち揚げ積荷を天与の助けと喜ぶ処か、島方にとっては其の救助や後始末が大変なのである。浦々高礼に示す条々のうち、一、二をあげると、

一、公儀の船ハ不及申、諸廻船とも、逢難風時は助船を出し、船破損せざる様、成丈け可入精事、

一、船破損の時は、其所近き浦の者どせ入精、荷物船具等可取上、其場所の荷物の内、浮荷物は廿分一、沈下物は十分一、川船は浮荷物は三十分一、沈荷物は廿分一、取上候者へ可遣事

一、沖にて荷物刎るときは、着船湊に於て、其処の代官下代、庄屋出合、遂穿鑿、船に相残る荷物船具等の分、証文可出事

附　船頭浦々の者と申合、盗之、刎捨たる由偽申すに於ては、後日に聞と云とも、船頭ハ勿論申合る輩悉く可被行死罪事

島々では自島の船の遭難も度々あるので、この幕府の郷村掟を厳正に守った、奥山家に残る「八丈島日記」には、漂着船舶より取揚げた積荷等の量、状態、価格等を詳細に記録し、定めた通りの取分を除いた払下げ代金の支払いをも刻明に記載してある。

例えば

○寛政十一己未年十月廿五日小島漂着、摂津国入部郡神戸浦又兵衛船、設楽八三郎様当分御預所摂津国村々去未年御年貢江戸御廻米

本欠米　千三百九十七石四斗

此俵　二千七百九十四俵四斗　但五斗入

御城米　千三百七十石之内

此俵　二千七百四十俵

一、無難米　四十二俵

此石　二十一石　金一両ニ付元直段米一石

斗七升

此代金十七両二分　但御吟味ニ付米一石二斗二升再御吟味ニ付米一石二斗替

内金ニ分永三十七文七分

金二分永百七十六文九分　御吟味増再応御吟味増

是者去十月廿五日乗組并嶋人足一同艀ヲ以両度陸上郷蔵へ入相囲置候分

一、濡米十九俵　此石九石五斗

此蒸立石七石九斗二升　合

外米一石五斗七升七合　汐腐乱俵　掛場　蒸立減

此代金一両ニ付元直段　米五石五斗一升

御吟味ニ付五石五斗カへ

再御吟味ニ付五石五斗カへ

内永十四文七分　御吟味増

永五文二分　再御吟味増

内永百四十四文一分　沈米ヲ揚候ニ付十分一島方
へ被下度分
残金　一両一歩永四十六文四分
是ハ八丈島小島役入并乗組之者共一同立会破船之
場所へ罷越水練達者ヲ撰、海底岩間等ヨリ追々ニ
掛揚ケ蒸立、前同様郷蔵へ相囲置候分
合米　二十八石九斗二升三合
此代金十八両三分永百九十文五分　御払代
内永百四十四文一分　沈米掛揚島方へ十分一被
下分
差引残金十八両三分永四十六文四分　全上納可仕分
外
米一石五斗七升七合　汐腐乱俵掛揚蒸立減
米千三百三十九石五斗　海中へ捨リ
欠米　二十七石四斗　此俵五十四俵四斗全海中捨リ

の如き具合であった。勿論支払代金は時代により多少の違いはあるが八丈紬一反を以って一両と代えている。従って難破船よりの陸揚米で飢饉を免かれたとしても其の補償が村々への割賦となって生計を苦しめるのであった。

そこで、明和の大飢饉後、生計成り難き百姓を本土に移すことになった訳であった。此れは八丈ばかりでなく七島の百姓からも希望を募った。前回は文政元戊寅（一八一八）七月に常州筑波郡へ四十一名が移った。

今年、天保九年の八丈割当は五十人であった、秋船と来春早々の船で常州真壁郡関本村へ移ることになって、既に家族ぐるみの申し出があった。三根村の角次郎一家と源之丞一家。中之郷からは伝次郎一家。樫立村は文助一家と津右衛門一家で、末吉村は暮向きが良いので申し出は無かった。

今度は羽倉御代官の渡島があったので、直接の裁下で早々に出立の用意をするように、移住一家に下知状申し渡し下され度いとのことであった。

簡堂は、故郷を去る百姓一家の心情を忖度して、あれこれ思い致していると、いつか夕暮となって陣屋の裏手の杜で法師蟬が鳴き出した。

五月十四日（七・五）　早朝、南東の風が強く、石燕の大群が風の間を麻の実を撒くように旋回していた。

辰の後刻より役所の奥庭の義倉の裏にある射撃場で銃の射手を検閲し、大賀卿流人六十四人中、浮田一族十人と、五人組預けの他の小屋常住者十五人程を中庭に集めて訓戒する、いずれも神妙である。島役人に村人の貧しい者へ給するよう米五十五包を渡した。

午後、樫立村の名主奥山義左衛門慶助から呂宋漂流譚を聴取した、手代中山誠一郎、本岐道平が美濃紙数十枚に記録した。

奥山慶助は文政十一年（一八二八）西方の海に漂流し呂宋島マニラに達し、清国広東に送られ、逝江省乍浦より清国船に便乗して長崎に帰った。その漂流の顛末や西南方面の知識等に簡堂は痛く感動した。

慶助に留まらず、各村にも安房房総は元より紀伊より西方へ漂流した村人が一人や二人は居た。亦、逆に夷人の八丈漂着も度々あった。中でも宝暦四年（一七五四）十二月、清国の逝江省の船が難破して八丈に漂着し、大賀郷の役人菊地正武が此れを援けて長楽寺に七十一名を収容し、元気の回復をまって帰国させたことがあった。

大賀郷陣屋には、その清国人高山輝の熟達した筆勢の書付が残っていた。高山輝は救助の謝礼として寺に山門を寄進した。

八丈島第一の古刹長楽寺は明の漂着僧との仏縁が深い。開基は観応元年（一三五〇）神奈川の領主奥山氏が、大和国の広瀬郡の僧勢遍阿闍梨を招いて、大岡郷楊梅ケ原に観音堂を開き、真言宗放光山大善寺と称していたが、明徳三年（一三九二）四代道山が十月十三日に遷化し無住となるところ、十一月四日八重根前崎浦に明船漂着し、助かった僧宗閑を八丈支配代官奥山伊賀が大善寺観音堂に住まわせ五代とした。以後島の女と交わって儲けた子が寺を伝え、十三代は紀州高野の僧長誉深春が継いで寺名を長楽寺と改めていた。深春に子なく再び無住となるところ、天文十六年（一五四七）二月十五日八重根表へ七十名程が乗っている明船が漂着した。大賀郷の戸長菊地武蔵の指揮で救出し長楽寺に収容したが、大海漂流の飢渇困憊で次々と息絶え、唯、沙門一人が残った。明僧宗感である。菊地武蔵は大里ケ原に観音堂を建立し改めて宗感を住持として海雲山相伝院長楽寺と号し、宗感を開祖し代々血脈か或いは高野より住持を迎え、天保の時代は十一代大誠和尚であった。亦、宗派は六代長円が下田の海善に修行して真言宗を浄土宗に改めている。

五月十五日（七・六）より四日程は霖雨であった、日によっては朝から風雨であったり、夜は歇んで疾る雲の間に月が顔を出したりしたが、梅雨の急変する八丈の天候を危ぶんで簡堂は陣屋で古文献を見たり、有能な農耕人を呼んで八丈物産の説明を聴いたり、亦木綿の種子を与えたりした。島役所には後北条の時代貢納の八丈紬に捺印した古印があった、石柏の材で、一面には小篆の書体で「東壁謹封」、他面には八分の書体で「竜泉美紀」と精密に陽刻してある、仲々のものであった。その中に「遙管古女国」の古印があったので、島役人の乞いで書を数枚書き古印を捺して怡しんだ。

だが多くは此れから巡察する五ケ村の概要を知る為に島役人の説明をうけ乍ら文書を見たり、今後の調査を指示したりして過した。特に『柳営秘鑑』と、島文書にも記す安永三年代官江川太郎左衛門差出の「八丈嶋大概帳

」との相違を糺し、今度の羽倉外記廻嶋に依る「八丈嶋大概帳」の厳正な記述を求め、各村よく実情を調査して報告せよと命じた。

後に簡堂が帰国してから差出された天保十一庚子年八丈大概帳は、克く簡堂の求めに応じて詳細であった。

因に三例を比較すると

○「柳営秘鑑」　享保年中之記録

大賀郷　人四百人余
三根村　人三百八拾人余
末吉村　人弐百九拾人余
中之郷　人六百七拾人余
樫立村　人五百人余
合　弐千弐百四拾余
別に　小嶋二ヶ村三百六拾壱人
青ヶ嶋　弐百三拾八人

○「江川代官差出八丈嶋大概帳」　安永三甲午年

八丈嶋
惣人数　四千七百七拾人　内男弐千弐百五拾弐人
女弐千五百拾八人
外　浮田流人　五拾弐人牛六百四拾七疋
流　人　百五人
内弐拾壱人島出生流人子供
別に　小嶋　四百弐拾三人　内男百九拾五人
女六百五拾四人
流人三拾六人　男三拾四　女弐
合計　六千九百九拾弐人

尚、天保十二辛丑八丈小嶋青ヶ嶋を含めての惣人別が報告され　惣人別　七千五百四拾六人
外浮田　拾壱名
在命流人弐百三拾弐人

此れに依って『柳営秘鑑』を享保十一年（一七二六）とすれば天保十一年（一八四〇）百拾四年で五千三百余人の人口増と言うことが分る。

八丈は七島第一の大島と言えども東西二里半、南北四里、周囲十里余りの火山島である、他島と違って川があり稲麦を作ると云っても到底足りず、八丈黄紬を貢納して見返りに御扶持方米を給されて僅かに糊口を凌ぐ有様で、どうして斯のように増加したのであろうか。

江戸では脚気が風土病となる程に、米飯主食となっている本土では気付もしなかった甘藷が、島嶼では飢饉のときには餓死を救い、日常の食糧不足を補って人口増加の源泉となっていることを、簡堂は知ったのであった。

享保十七年近江以西の大飢饉のとき、多くの餓死者が出たが、薩摩藩を食いつないだ者が生き延びたのを知った吉宗が、関東以北では栽培できなかった甘藷を青木昆陽に命じて、小石川養生所で試植させ、享保二十年その栽培法を『蕃藷考』に板行して諸国に頒った。此の年伊豆大島では早速救荒作物として栽培を始め、後次第に島伝いに栽培されていったが、八丈には文化八年（一八一一）新島で破船逗留中の大賀郷名主菊地秀右衛門が、薩摩の漂流民宇平から種芋を貰って帰り、八丈赤サツを作り、更に文政五年（一八二二）秀右衛門の伜菊地小源太が新島から改良されたハンス種の甘藷を持ち帰り、改良工夫を年ごとに加え天保年間には常食となるようになった。勿論、甘藷が伝わる前迄は、自然薯、里芋などを食していたが、救荒食物となる程の量ではなかった。

簡堂が巡察した天保九年の八丈では八丈薩摩が常食となり、稲作も改良され一日一食ぐらいは麦飯も食べられるようになっていたが、寛政の頃の食生活は惨めであった。寛政八年（一七九六）代官三河口太忠の伊豆七島巡島に従行した小寺応斉の『伊豆日記』には、

「此島もとより五穀とぼしくして、鹹草（かんそう）といふ物を、常の食とするゆへに、大かたは、やせおとろひたるが、ほそきうでにちからこぶいだきて、ひきあぐるぞ、あはれなる。さて鹹草は四季ともに有て、葉は常の食とする。根は三年をまちて、とりてくふとぞ。凡十人の食に、麦三四合を煮たゝらかし、湯の如くなりたる中へ、あした草をさはにきざみ入れ、潮水あるはゑんばいといふ物をうち入てくふ。此ゑんばいといふは、かつを、むろあぢ、鮫、さゝ魚など、いろいろの魚のかしら、はらわたなど

を潮水につけ、たくはひおきたるなり。それをみそにも醤油にもおとらぬうまきものとする。かの十人に三四合ばかりのむぎなれば、たゞ鹹草のみにて、麦は有かなきかに見ゆる。是を雑水といふ。島人のつねの食にて、飯はたえてくふ事なし。こゝろみにこひて、あぢはひ見るに、えもしれぬにほひして、ふた口とのんとをとほらず。かかるものだに、あくまでにはなく、やくな・はまあした・あざみなどいふ物、又、海の藻いろいろ取て、潮水をもて煮て食とす。又、へんごとて、根は芋の如くなるものを、山より取来て、よく煮て、うすに入、つきてもちの如し、ちひさくまろめて、口へなげこみ、丸のみにする。もし歯にあつれば、からく、ゑぐきにたえすとぞ、……下略」

同じく従行した太田彦助も『廻島雑話』を筆録していて、薩摩芋が貧民の常食になっていると記している。

「一　貧民の常食、左の如し

あした草

三ツ葉・芹に似て、其香少しくあり、根は大根に似、皮を去り湯煮にして用ゆ。又其色黄にして薩摩芋の如く、味苦し。根は蒔て三年にして食となる。糞養なくして自ら繁茂し、色白く、頗、小米桜に似たり。

薩摩芋

我郷と同じ。苗蒔て其葉茂る時は葉を取て外に植ゆ。根さして芋となる。出来かた至て大く、中には一つ壱貫目を過るもありと云。

里芋

又我郷と同じ。郡内いもと云は、至て大く、余りにたくひなく覚ゆるまゝに、其一をとりためし見るに、金さし壱尺三寸五分にして、弐百九十目あり。十一月比までをけば、猶根を張ると云。

土民、常に飽すて是を食する事なく、此三品、根をはりて七八月の間は大に食し、島中、此食に乏しきは春三月にて。十二月までは少しながらも貯へし。三品不生の間の凌かたき、甚急迫なりといふ。

一　正月といへとも、雑煮も食せす。富たる者は糯、京升にて七八升を煮て、備へ。まひ玉なとを拵へ、年神に献す。残りし餅は油にてあけ、節を拝する人来る時、茶の最に出す。或は濁酒を造りて振舞人もありと云う、富人さへ如此。況や貧民にをひてをや。貧民、米を食する事、年に三日、正月元日・年越・大晦日なり。」

此うした慢性的飢餓状態で骨と皮ばかりのように痩せ衰え、十年ごとに何百人もが餓死すると云うのに、生き残った者が八十、九十と長寿を保っているのはどうしたことであろうか、簡堂は不思議に思ったが、小寺応斉は斯う書いている。

「先、常に疎食し、又、見聞事すくなければ、よろつの事につけて欲すくなく、おごる事を知らず、金銀銭の通用なければ、むさぼるこゝろうすく、とにもかくにも心を労する事まれなれば、生涯、無事にあかしくらす。おのつから仙境のおもむき有て、養生の道にかなうなるべし。されとも、婦人おほき島なれば、女色に耽る事ははなはたしと聞が、常に疎食する故に、食毒なく、又、心を労すること少き故に、色欲の害も薄にや。飲食・男女の欲をほしいまゝにして、夫が上に、心を労するものの、天寿を保つ者はあらし。飲食・男女の大欲も、常に心を労するほどの、そんはなきなるべし。八丈島にわたり、とりわき養生のことわりを、おもひしるに似たり。

だが、斯のように無欲になって命ばかり長らえるのが幸いである訳がない、粗食故に色欲も無く、漸く呼吸する程度の仙人生活が幸福な筈が無い、少くとも草根木皮を醤る餓鬼道の苦しみを無くさなければならない。

年々幕府は救荒に意を尽し、義倉の充実、救荒助成米穀を船便ごとに必ず積み送って島民救恤に充てるなどの努力をし、島名主など心ある者は私財を放擲って窮民を扶けていた。三根村の船名主高橋政之助、名主高橋長左衛門等は、島役人手当等を出し合った三千両を江戸の両替商に預け、その運用利子配当を米穀にかえて八丈へ回漕し、全て島民の救恤に当てていた。斯うした為政者の支えに依って長寿の島となったのであろう。

そうして亦、古来より八丈女護島と称される通り、島の女はよく働き男を扶けた、特に機織りに精を出し貢物の黄八丈の他にも端物袖を商人船に託して米穀と替えるようになったからでもあった。

続く。

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。

同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。

雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。

年齢、職業を超えた同志の集団です。

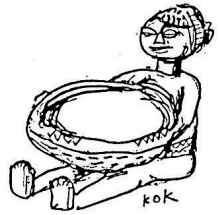
あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からせっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。

維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。

※同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。



駆けろ銀行 (二)

三戸岡道夫

早馬は、五七五七七の文言を、朗詠するように声高にうたいあげて

「この和歌は、染井常務が作ったんですってね」

「そうだ、うまく出来ているだろう」

銀行における貸出の原則を、五七五七七の和歌の形式に、覚えやすくまとめたものである。

銀行の貸出業務の鉄則として、銀行員ならば誰しもが心得ていなくてはならない事柄に、貸出の四原則というものがある。銀行概論などの実務書を開けば、どこにでも載っている。それは貸出には、収益性と、安全性、それに流動性と、危険分散、この四つの原則が必要だというのである。

銀行は商売で金を貸しているのだから、まず儲かる貸出でなくてはならない。当然である。これが収益性。次に、確実に返済される貸金でなくてはならない。安全性である。

(一) つづき

染井常務から

「君には少しも、貸出のことが、わかっていない」

と言われると、鸚鵡返しに早馬は

「いえ、わかっていますよ」

と、反論した。少しでも染井常務に負けまいとする気概が、その顔に張りつめている。

「本当かな」

「儲からぬ、返らぬ金は…の、和歌でしょう」

「そうだ。よく知っているな」

染井常務は満足そうな表情を浮かべる。

「朝日銀行で貸付を担当している者なら、知らない者はいませんよ。

儲からぬ　返らぬ金は　貸すなかれ

時々返させ　危険分散……」

三番目が、貸出金の流動性で、一人の人に一度貸したら、いつまでも貸し放しで、固定してしまった貸出はよくない。貸したり、返済されたり、また別の人に貸したりと、動いているのがよい。

最後の危険分散とは、どんなにいい取引先だからといって、一つの先に全部の資金を貸してしまうのはよくない。もし、その貸出先が倒れたら、貸金が全部駄目になってしまうからである。多くの客に分散して貸し、一つの貸出先が倒産しても、被害が最小限ですむように、危険を分散して貸す必要がある、というわけである。

貸出業務に新米の者でも、それがすぐ覚えられるようにと、ある時、染井常務が貸出業務研修会の席上で、和歌の形にして黒板に書いて講義したところ、それが好評で、そのまま今日まで、語りつがれて来ているのであった。

しかし、早馬は心の中では

(こんなもの、もう古い)

と、思っている。

(教科書に書いてあることを、ただ、五七五七七に、置きかえたにすぎない。時代は変っている。いま貸出に必要なのは、こんな古くさい四原則ではない。もっと、その先にあるもの。言ってみれば、貸出の戦略性だな)

だが、そのことを、いま口にするのを、早馬は控えている。せっかく染井常務がいい気持になっているのに、枠の交渉に来たこの場で、その議論を展開するのは、染井常務の感情をいたずらに刺戟するだけで、得策でないと、判断したからである。

だが、染井常務の方は、そうした早馬の心の中を知ってか、知らずか、ますます得意然とした顔を早馬の方に向けて

「この四原則にかなう貸出といえば、一流企業に対する貸出だ。一流企業といえば、大企業だな」

早馬の口許が、ぴく、ぴく、と痙攣し、

(そんなこと、ありませんよ)

その唇は反論したがっているのだが、早馬は必死に自分の唇の動きを押えている。

染井常務はつづける。

「その一流大企業を選ぶには、基準を統一しておくことが必要だ。だから、それを審査部が統一し、貸出枠で統制しているのだ」

染井常務はそう言うと、

(わかったら、もう、帰れ)

といわんばかりの表情を、早馬の方に投げてよこした。それに対して早馬は、救いあげるような眼で染井常務を見返すと、

(たしかに、これまでの朝日銀行はそうやって、金を貸してきた。これからも、まだ暫くは、そうした状態は許されるだろう。しかし、世の中は変化している。いつ

までも、そんなやり方は通用しない）

しかし、今は議論に勝つことではない、枠を如何にして分捕るかだ、今日は一応これくらいで切り上げた方がよさそうだと、早馬はソファーから立ち上り、

「どうもお邪魔しました。また、来ます」

「ああ、いつでも、来るがいい。だが、来ても、枠は駄目だよ。枠は、銀行経営の基本にかかわる問題だからな」

部屋を出る。

早馬の中で

（枠は銀行経営の基本にかかわる問題だ）

と、染井常務の最後の言葉が、尾を引いていた。

（たしかに、そうだ）

染井常務が言ったのは、枠は経営の問題だから、経営に当る者、すなわち染井常務などの重役陣が取扱う問題で、早馬などの部長クラスの人間が嘴を入れるべきではない——という意味で言ったのであろうが、その言葉に触発されて、早馬は別の角度から、枠の経営戦略性に気づいたのであった。

今まで早馬は、枠を、経営上の問題として考えたことはなかった。枠を握った方が、銀行の商売がしやすい、銀行の中で権力が握れる、その程度の認識でしかなかったが、考えてみると

（枠には、それ以上の力がある）

のだった。

早馬は、常々、銀行の大衆化ということを考えていた。現在の朝日銀行は、大衆化とはほど遠いところで商売をしているのだが、いつまでこの路線でやっていけるか、疑問に思う。染井常務の言うように、たしかに朝日銀行は、たくさんの一流大企業に金を貸している。だが、それは、どれも程度の浅い、お付きあい程度の取引でしかない。腰の入った取引ではない。

だから、もともと財閥系銀行でない、庶民銀行の性格を持つ朝日銀行は、そうした底の浅い大企業取引よりも、中小企業や個人を相手とした、大衆化営業路線に切りかえるべきだと、早馬は考えているのである。しかし、この考えには、今の朝日銀行の重役連中は、誰も賛成しないであろう。

朝日銀行が大企業路線を進むか、それとも大衆化路線を歩むのか、この撰択は経営上の大問題である。それなのに、誰もこの問題を口にしない。問題にしようと、しない。だから、取締役会とか、常務会へ、正面から議論として提出したのでは、通らない。だがその時、

（貸出枠を巧妙に使ってやれば、事実上その大衆化路線が促進できるのだ）

と、早馬は、まるで霊感にでも打たれたように、実感したのである。

貸出枠を実際に運用するに当って、大企業よりも、中小企業、個人に多く振りむけていけば、自然に中小企業や個人向けの貸出が多くなり、経営を、大衆化に向けられるのだ。議論をするよりも、実際にやることだ。

考えてみれば、こんな事は、頭の中では解っていたことである。解っていたのに、いま、はじめて早馬は

（なるほど。枠は戦術ではない、経営戦略なのだ）

眼がさめたように、実感したのである。解っていることと、実感することとは、こうも違うものかと、早馬は自分でも驚いた。

（そのためには、何が何でも、枠をわが手で握らなくてはならない）

貸出枠の戦略性に気ずいた早馬は、始めて自分が模索していたものが、はっきり摑めたように思った。

（二）

早馬徹が財務省から朝日銀行に来たのは、六年前の、昭和三十五年であった。頭取の松風清之介に従って、財務省から天下って来たのである。

朝日銀行は、戦前の、八つの銀行が合併して出来た銀行であった。東京、大阪、名古屋、横浜、神戸、京都、福岡、仙台と、八つの大都市に本店を置いた、主として個人を相手に貯蓄を目的とした銀行が、終戦間際に、国民の貯蓄をいっそう強化するために、国の指導の下に大合併が行われ、都市銀行としてスタートしたものであった。朝日のように勢よく発展してほしいとの願いをこめて、名前も朝日銀行となった。

合併銀行を纏めていくのには、監督官庁の力が必要だということで、初代頭取は財務省から派遣され、爾来、歴代頭取は財務省出身者で占められるという慣習が、定着してしまっていた。

初代頭取は小柳津光義、二代目頭取は福原敬、三代目は満岡慎之介、そして現在の松風頭取は四代目に当る。

しかし、初代から三代目までと、四代目とでは、その任務が違った。最初の三人は、要は合併銀行の纏め役である。種々雑多な銀行が合併したのであるから、まず必要なのはその融和である。したがって、最初の三人は商売よりも、主として取り纏めに専念した。要は銀行の頂点に、君臨していればよかったのである。

ところが、合併銀行もようやくにして軌道に乗りはじめると、いつまでも、取り纏めだけではすまない。松風頭取の時代になると、いよいよ本格的に都市銀行としての商売が要請される段階になってきたのである。

商売をするには、手足となって働いてくれる人間が必要である。となると、これまでの頭取が財務省から連れてきたような、管理型の人間では駄目である。

（商売人でないといかん）

と、そういう観点から、松風頭取が白羽の矢を立てた

のが、早馬徹だったのである。

松風頭取が早馬を選んだのは、その行動力と、商売人としての素質にあるといってよかった。

松風は財務省で、一時、人事関係を担当していたから、昔から早馬のことはよく知っていた。

とにかく官僚として異質なのである。理論武装しながら、時には責任回避にも充分配慮し、じりじりと慇懃無礼に仕事を進めていく官僚特有のタイプとは、程遠い。自分の思ったことを、ずけずけ言って憚らず、議論よりもすぐに行動に移してしまう。財務省の仕事には、民間企業のような商売はないのだけれども、その仕事のこなし方の中に、商売人の片鱗が溢れるようにきらめいている。

（こいつは役人よりも、商売人向きだ。民間の企業に廻ったら、大成功するだろう）

かねてから松風はそんなふうな眼で見ていたから、自分が朝日銀行行きが決ったとき、躊躇なく早馬を指名したのであった。

その時、早馬は財務局財務課の課長補佐だったが、松風からの話を直ちに承諾した。それは早馬自身も自分の天分に気づき、いつまでも課長補佐あたりでくすぶっているよりも、民間銀行の方が、商売人としての素質が活かされ、今後の人生が雄大に展開できるだろうと、思ったからであった。

財務省の中で早馬は、課長補佐というポストまで登ってきたけれども、私大卒業という学歴の早馬には限界があった。官僚は東大卒でないと、エリート・コースを進めない。キャリア組に入れない。そう言った意味において私大出身の早馬には、財務省という世界は先が閉されていた。

加えて早馬の特異性は、官界を泳ぎ抜くのに有利ではない。だから、よくいって課長どまり、下手をすれば万年課長補佐の塩漬けである。そう冷静に自分の将来を読んだとき、血の気の多い早馬には、とてもたまらなかったのであろう。

松風頭取が財務省から連れてきたのは、早馬徹一人ではなかった。

他に、もう二人いた。千家修之丞と、小林一夫である。この三人はそれぞれタイプが違っていた。手足として使うには、いろいろなタイプが必要だからである。

早馬徹はその名前の通り、気象が激しく、悍馬である。行動が早い。商売人である。これからの朝日銀行に必要な商売をやらせるのは、この早馬である。そういう意味において、松風頭取は最も早馬に期待している。

これに反して、まるで能役者のような名前を持った千家修之丞は、血統のよい名馬であった。生れは由緒正しい神官の家系である。その面影が、色白のふくよかで端

正な顔だちと、おっとりした物静かな性格に現われていた。卒業した大学も京都大学と、その意味においても、私学出身の早馬とは対象的である。千家へは、企画などの、内部的な仕事を期待しているのであろう。

小林一夫は徹底した実務家であった。実務のベテラン。そうした意味においても、これもまた、早馬や千家と違っている。

こうして松風頭取は、企画は千家、商売は早馬、管理は小林という、三頭立ての馬車を御して、朝日銀行へ乗りこんできていた。

そうした三人の中で、当然、早馬徹の特異性が当初から朝日銀行の中で注目を集めた。

来た当初、この三人は、まず朝日銀行の概要を頭の中に入れてもらう必要があるというので、見習いのために、審査部、業務部、経理部、外国部などの主要各部を、一カ月ぐらいずつ廻った。

最初の配属は審査部だった。課長の横に机を三つ並べ、三人は窓を背にして、一応神妙に座った。

「まず、当行の全貌を知るには、規律、通達類に眼を通して勉強していただくのがよろしいでしょう」

そう企画課長の鶴崎が言い、三人のデスクの上に、規程集、通達集などを、うず高く積んだ。

千家と小林の二人は、それを手にとると、神妙に、一頁、一頁、眼を通していたが、早馬は違っていた。早馬は山と積まれた規程、通達集に、ちらっと横目をくれただけで、以後は手にしようともしなかった。そして、二日たっても、三日たっても、その態度は変わらなかった。

そのきわ立った対照に、審査部の人間たちは驚きの眼を早馬に投げかけて

（早馬という奴は、変った奴だ）

という噂が、またたくまに本部の中に拡ってしまった。

しかし、これは早馬の本旨であると同時に、半分は作戦でもあった。

（この殿んだ銀行の中に新しい動きを注入するのには、変った動きを起さなければならない。それには、まず、それをやるこの俺が、変った人間だということを知らせておくことだ）

そうした意図のスタンド・プレイでもあった。

（変った奴だから、何か変ったことをやるにちがいない）

そうした事前の、心理作戦である。前哨戦と言ってもいい。

だから、早馬はじっとしていない。

タバコをすぱすぱ、のみながら、千家や小林の方を軽蔑した眼つきで眺めていたかと思うと、つと立ち上り、部屋の外へ出ていったきり、どこへ行ったのか、三時間も、四時間も、帰ってこないことがあった。やっと帰ってきたかと思うと、片手に大きな書類袋を抱えている。

中から何やら取り出し、千家や小林の方に見せながら、熱心に喋っている。興が乗ってくると、隣近所に座っている若い男子行員などに、誰かまわずに声をかけて

「な、な、そうだろう。君も、そう思うだろう」

などと話の中に引きこみ、話を延々とつづけている。

ある日、見かねた鶴崎企画課長が

「早馬さんは、規程、通達はお読みにならないのですか」

と、催促とも、注意ともつかぬ言い方で、言った。きっと上の方、すなわち、部長か次長から注意されたのであろう。

「こんなもの読んだって、屁の役にも立たないよ」

早馬は規程集の方など見向きもしないで言った。

「規程、通達なんて、要は脱け殻だ。本当のことなんて、わかりやしない。もっと生きたこと、世の中のことを、朝日銀行の連中は知らなきゃ駄目だ」

早馬の眼は、にわかに爛々と輝き出した。これまでは新参者の身と、多少の遠慮はしていたのだが、うまい工合に企画課長にものを申すチャンスが摑まえられたとばかりに

「こんなものばかり読んでいるから、朝日銀行はちっとも大きくなれないのだ」

そして顔を千家の方に向けると

「な、そうだろう、千家」

相槌を求めた。しかし、温厚な千家はあまり旗幟を鮮明にせず

「うん、まあ、そうだなあ」

早馬の言葉を肯定しながらも、曖昧に返事をした。

鶴崎課長もさすがに、いくぶん、むっとした顔になって

「では、何を読めば、いいんですか」

そう切り返すと

「これさ」

早馬は書類袋から引出したものを、わし摑みにして鶴崎課長の眼の前に突き出し

「こういうものを読まないと、駄目だ」

それは早馬が財務省に行ってひそかに持ってきた、極秘資料のコピーであった。

「こういうものを読んで企画をしなくては、課長さん、あなた、企画課長としての責任が果たせませんよ。朝日銀行は、転落するばかりだ。どんどん落っこちて、都市銀行のドン尻になってしまう」

それは、現在都市銀行ナンバーワンの位置にある、太洋銀行の、最近でき上ったばかりの長期経営計画書であった。

「ね、読んでごらんなさい。敵はこうした見事な戦略を立てて、毎日、毎日、仕事をしているんですよ。それなのに朝日銀行ときたら、あれをしてはいけない、これをしてはいかんと、そんな規程、通達しかない。何をやるべし、というものが何もない。これで戦争が出来ますか」

いったん言い出したら、早馬は止まらない。千家は横で、はら、はらしながら

「まあ、早馬君、そう急に言ったって…、どこの銀行にもそれぞれの歴史があるのだし、お家の事情というものがある」

「そのお家の事情を我々は変えに来たのじゃないのか」

そんな一幕があって以来、早馬が規程、通達を読まないことが、事実上公認された形になったのであった。

その代わりに早馬は、せっせと財務省に足を運び、公式のルートでは手に入らない資料、たとえば都市銀行が対外的に発表していない極秘の係数、長期経営計画書、あるいは財務省が行った都市銀行定期検査の講評内容などを、財務省時代のコネを使ってコピーしては運んできた。そして、それを鶴崎課長に見せたり、また若い男子行員を自分の周囲に集めては

「ほら、この通り、貸出は単に金利がもらえて、返済が確実であればいいというようなものではない。メリットが必要だな。融資効果だ」

朝日銀行の行員たちには、メリットという言葉はまだ聞き慣れない言葉であった。

「ひらたく言えば、おまけ、だな。朝日銀行の貸出には、それがない。おまけ、が沢山あるか、ないかで、儲かり方がちがうんだ」

また

「貸出には、もっと大局的な融資戦略が必要だ。他の銀行の融資作戦を見てみろ」

などと、まるで維新の志士のような口調で、まくしたてるのであった。

審査部での研修が終ると、業務部、経理部、外国部と、見習いの部署は変っていったが、しかし審査部で見せた早馬の態度は変らなかった。

だが、それと同時に早馬は、朝日銀行の中で働く人間を、じっと、穴のあくほど、観察しつづけたのである。そして、その結果得た結論は、朝日銀行の人間は、純朴で、よく働く。それなのに、なんとなく力強さ、逞ましさがない。だから、よく働くわりには、業績が挙っていない。

それは、一に幹部に問題があるからだと、早馬は思った。朝日銀行の幹部には、経営能力のある奴がいない。まるで、江戸時代の天下泰平に慣れた家老のような、重役ばかりである。だから、斗う組織体制が組み上っていないし、また経営戦略というものが、まったくない。

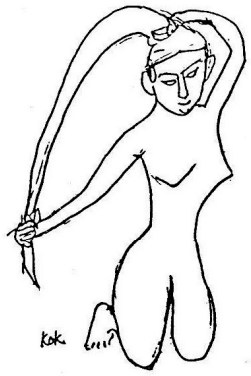
(それをやるのが、この俺だ)

と、思ってはいるものの

(それには、人間がいない、人物がいない)

だが、そのうち、早馬の眼に
（しかし、若い連中には、いい人間がいる）
と、その鋭い眼に、若い行員たちの姿が次第に映り出してきたのであった。
（課長までの人間は駄目だが、それ以下の若い人間の中には、いい人材がいる）
若い人間とは、朝日銀行がスタートして以来、朝日銀行として新しく採用した、大学卒の人間たちであった。すなわち、合併前から居た人間、でない人間である。
（彼等を鍛えれば、きっと物になる）

つづく



編集子のメモ

○この第三十三号は秋季号である。季節を先取りする感があっても、二十四季節の移ろい具合は間違いなく正直で、輪廻に対し従順である。唐突に「秋季」を冠する号を迎えたのではない。だが、秋の声を聞くときわけても粛然とした気持を覚えるのはなぜであろうか。

○四人が頑張って四作はちと淋しい。とくに病床にあり、回診のためにこんどの作品で新たに登場する女医さんに介錯を頼もうかという心境にあり、（春のなごりをいかにとかせん）という作品をよせてくれた山口健二の凄じいまでの気迫の前に書けないなどとは言ってはいられないという思いがする。

○三戸岡道夫が書き下ろし長編「降格を命ず」をもってデビューを飾った。朝日、毎日、日経の広告によりお気付きの方も多いかと思う。ご本人の心意気をもって維持会員のみなさまには一本を寄贈申しあげている。どうかひろくご吹聴のほどをお願い申し上げたい。

○愛書家のみなさんに好評を頂き大和禎人の「烏川の畔」は限定出版のため売切れが近い。越前和紙を見返しに、銀色の表紙箔捺しなど贅沢な本に仕上げられ、人気を頂いている。おん礼を申し上げる。

（お）

「まんじ」第三十三号

平成元年八月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本内
「作家群」
（まんじ）編集部
☎〇三（二九一）六五五七　ますもと
郵便振替口座　東京二―九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三―十一
☎（二六一）一五七四三

目　次

語りたくない・でも・語らねば・・・・山口健二・・1
浪々好日（続）・・・・・・・・井上二三男・・14
GONE ARE THE DAYS・・・・・・山根三枝子・・19
噴火島の聖者・・・・・・・・・大和禎人・・33
働き手・・・・・・・・・・・・柴田富佐子・・44
〔連載〕
支店長の妻たち（第一回）・・・・三戸岡道夫・・52
近藤富蔵の生涯（第五回）・・・・金子正義・・61
編集子のメモ・・・・・・・・・・・・・・・・・69
表紙・岸田幸雄　カット・小久保勝義

語りたくない、でも、語らねば……

其の(一)

山口健二

山路は、老いと年相当の病いで、行きつけの老寿病院のベッドに横たわっている。

近頃、しきりと四十年から五十年前のことが、呆けがかって来た頭につきささる様に、切れ切れに思い出され、そして、つながりもなく四散して消えてゆく。それは、かすかに残った命の勝手な振舞いであろう。

遣る瀬ないと云う日本語がある。かれの知っている英語では、ミゼラブルとか時によってはドレアリーとかデスコンソレートと云った言葉になるのであろうが、何れも、このヤルセナイと云う言葉程切実にかれの胸の中を表わしてくれることばはない。

山路は、血液の中に酸素が常人の半分程しかないので、酸素ボンベを使って鼻から酸素を補給しないと苦しい。静かに横たわっていれば、呼吸もととのい、身体も楽であるが、寝たままでは、歩くことを忘れてしまう。かれは十五才の時に、三ケ月病気で寝たことがあり、歩くことを忘れて歩けなくなった覚えがある。この病院でも、ボンベから酸素の補給をうける程の病人は、大方そのまま歩く力もなくなり死んでゆく。山路は、〝何くそ！〟とおのれに鞭うつ気持で立ち上り、ヨロヨロとよろけるところを壁や手摺りで支えながら便所へ行く。そして、その帰りに、隣りの談話室と云う所でひと息き入れる。呼吸が苦しいから〝ふうッふうッ〟と息をととのえようとする。そこは、見舞人と患者との面会室であり、喫煙室にもなっている。患者の中にも、医者にしつこく言われても煙草を止められない者も何人かいる。山路には、医者も、看護婦も〝煙草を止めなさい〟とは言わなくなっている。先がないのだからと考えてのことであろうか。その部屋は、患者同志の虚しい談話交際の部屋でもある。

長いこと病院に入っていると、皆少しづつ世間での生活と云う戸締りがゆるんで、あとは持って生れた性質がナマで出て来たり、年齢の積み重なりから来る社交的な

法螺やウソが多くなる。そういう交際は、どこが悪いんですか？」と云う問いかけから始まって変転してゆくのだが、山路にとって淋しいナと感じることは、戦争の体験を語る者が全くなくなって来たことだ。たまにあっても、その話の中味は、誇張であり法螺であることがすぐ分る。今日まで四十五年、いやいや、昭和の一桁代の中国との争い事を勘定に入れると五十年を越えている。そういう戦場を体験して来た者は皆みな死んでしまったのであろうか。そんな筈はない。山路だって未だ年は七十四である。この病院では中ぐらいの年だ。それなのに戦争を、戦場を山路がなる程と分るぐらいに語る者が絶えてないのはどうしたことであろうか。NHKのテレビドラマの中で、ある老人と孫娘との会話で次のように言わせている。

「おじいちゃん、センソーに行ったの？」

「ウン、行ったよ。戦争っていいことじゃないけれど、その時分は若かったからな、若くて元気だったからその若くてたのしいことと戦場での辛いことが一緒になってしまって、こうなっちゃ、若くて楽しかったことの方が浮びあがって思い出せるな。戦争っていいことじゃないけどナ」

戦争っていいことじゃないけれどとこの老人に二度も言わせている作者の意図のようなものは感ぜられるけれど、山路にとっては、かれもまたその時分は若かった。この老人の孫娘に対することばは、生ぬるくて、この老人の横面を平手で思いっ切り張り飛ばしたいあせりを感じさせられる。山路には若さから来る楽しかったことなどひとかけらもないのだ。いい事、わるい事なんて言い草でおさまるものじゃないゾ！今日世界中で平和だの、国際化だの言われている一方、あちこちで相手を殺傷する人間同士のたたかいが行われているじゃないか。国家とか民族同士の憎しみや争いや殺し合いは、これはどうしようもないものなのだろうか。

山路は、十七、八の頃、浅草、本所、新宿あたりの木賃宿を転々と泊り歩いていたことがある。理由は、本人は一応世の中の裏側を見たり、知りたいと考えていたらしいが、今ふり返ってみるとゾッとする程危険な犯罪の崖っぷちを、足許もあやしく歩いていたことになる。その一軒の木賃宿で、夏であった。十燭かせいぜい二十燭ぐらいの裸電灯を消すと、天井のどこからともなく、サリサリと音立てて南京虫が降って来る。一泊二十銭である。この南京虫の襲撃を防ぐために、矢鱈に蚊遣線香を布団のまわりで焚く。十七、八才では酒に溺れるには無理がある。その夜は、屋台酒に酔って線香を蹴って寝込んだらしい。濛々とせまい三畳敷の部屋に立ちこめた煙にむせて目が覚めた。足許の方の蚊遣りが布団の足許を焦げあげて来ていた。

〃シマッタ！〃

飛び上って起きた山路は、布団の足許の火のもとをふみつけて共同手洗場に走り、樋に水を汲んで来て二杯、三杯、布団も畳もどっぷりと水に浸る程かけた。そのまま かれは、身の廻りの持ち物を小脇にして、階段を駆けおり、その木賃宿から逃げ出したのである。夜あけ方であったから誰にも気づかれずに、かれは表に逃げ出せた。犯人は自分の犯行のあとを見ようと必ず現場に足を運ぶものだと玄人筋では言われているが、山路は二度とその木賃宿に足を運ぶことはなかった。それから六十年近い。このことはかれの可成り長い人生の中でのいくつかの危険に瀕した思い出の中の一つとして、今も目の前にありありと思い浮べることが出来る。

この火事で逃げ出した木賃宿について、山路には、これ又頭の隅にこびりついて離れない風景がある。それは、その宿屋の階下の奥の六畳ばかりの部屋に、髪ふり乱した鬼の様な顔になった母親が三人の子供、小学校四、五年ぐらいの年頃の子をかしらにして四人で住みついていたことである。亭主は勿論、鬼の様な顔になった女を恐れて、どこかへ逃げ去ったのであろう。山路は少年の好奇心にかられて宿の女主人に、この一家のことを聞いたことがあった。

「震災だよ。あれでうち焼かれて、此処に住みついちゃったのヨ。子供は……学校なんかにゃ行っちゃいないさ。どうやってお金つくるんかネ。うちの部屋代チャンと入れてるよ。旦那？……もといたがネ、今はどうなってるんやら……」

震災とは大正十二年九月一日の地震と火災のことを云う。それから山路の放浪期までほぼ十年たっている。三人の子供をつくった相手の男が一人であるとは考えられない。そう思ってみると子供の顔つきは、三人共小鬼のようではあるが、それぞれ似通ったところが全くない。震災は、東京の下町を中心にして起きた不幸な惨憺たる出来事ではあったが、それは、あくまでも、日本の一地区での出来事で、戦争の様に、日本の隅々まで総まくりに不しあわせと、人間個人の希みと計画を根こそぎ狂わせたものは無い。四十余年後の今日でも様ざまな足あとを深く、色濃く残している。世は上げて日本国の経済大国への甦りに酔い、国際化とか平和とか云う流行語の中に押し流されているようであるが、山路には、今日の毎日の出来事をオソレを持ってながめる気が先立って、只昭和テンノーの時代から、平成という時代に移ったという一語で片づけるわけには行かないのである。かれのとるに足りない戦争経験から祖国日本へ復員と云うかたちで帰ってからの四十余年、七十才を数年越えたかれの生命の大部分は、ただ生きることだけにつぎ込まれて、あわただしい空ッぽの年月であったと云う印象だけを残して去った。

勿論、今日、むかし木賃宿のあった所など訪ねる術も

ない。戦争でまっ平になるまで焼き払われた東京には、ニョキニョキと高層建築が建ち並び、全くムカシは跡かたもない。これが個人や家と云うものの跡かたであれば、四五十年、七八十年なら、墓という型でのこされることもあろう。でもその墓場さえ、山路はおのれの住いの近くにある都営谷中霊園と称される一群の墓場に、その歴史と言おうか時の流れのすさまじさ、無情冷酷さを目のあたりに見て来ている。

かれは三十代の若い頃、よく酒の酔いにまかせて、この墓石の群れの間に、深夜一時二時頃、倒れるように横たわって、轟々と吹きまくり、頭上の木立の枝をゆすり、ゆるがせている風に鬼哭を聞いたことがある。高橋お伝の遺物石大の墓石から、川上音二郎、牧野富太郎、朝倉文夫、鳩山一郎、横山大観、長谷川一夫ら明治大正昭和にかけての有名無名人をとりまぜた様々な墓石のあつまりは、鬼哭にあふれて、ゆれ動く趣であったが、一夜あければ、それらは音もなく静まり立ち並んでいるだけである。山路の頭を仮初めにかすめ去った感慨もむなしい。人間が最後にかける墓場、墓石にして、あるものは何十年となく訪れるものもなく石はくずれ、墓場掃除人さえかえりみない有様になっているものもある。たかだか六十余年前のかれの一夜の出来事の舞台であった木賃宿のあとなど、一陣の風に吹き払われて消え去った。

山路のとるに足りない戦場というのは、かれはその時、マーシャル群島、トラック島、春島にいた。

その島々が今日どうなっているのか、かれは知らない。何組か、かってその島にいて飢えと生死を一緒にした者たちで、又その島で戦死、病死した兵の遺族の者たちの何拾名、何百名かは、戦後その島をおとずれている。山路は数度誘われたこともあったが、ひとつには暮しに忙しく、ひとつには、生き残って帰って来た心苦しさが手伝って、何度もその島をおとずれて山路をもさってくれた山路と同じ中隊本部の書記の役をやっていた下士官がくれた一葉の海だけが写されている写真をながめてみるだけであった。山路には、ながくながく、この戦場から遠ざかろうとする心の動きが続いたのだ。三十年ぐらいは、そのことを口から語ることがなかった。それは、かれに、思い出すのも恥じ入るような卑怯未練な行動があったわけではない。むしろ外見からだけすれば、一人の愚直とも思われる程日本国の勝利を信じて、上陸して来るアメリカ国の兵士との白兵戦をさえ考えることさえあったのだ。

〃ドスン、バスン〃と落下して来ると摺り鉢形の大穴をあけるB29の投下する爆弾は、山路たちがもぐり潜む洞窟の近くにたて続けに落され、空では陸上の日本兵が、〃あれがB29か〃と振りあおぎ眺めてその図体の大きさ

にあきれていた。そのB29めがけて、日本の戦闘機は丁度蝶のようにヒラヒラと舞い上り、急降下しながら爆雷をおとしていた。地上からは、南国の空に開いたうつくし気な花を見る思いさえした。

その頃は、日本国では、テレビは未だ商業ベースには乗ってはいなかったが、元をたずねれば、浜松高等工業から早稲田大学に移っていた高柳教授が、既に原型を完成しており、日本国航空隊は、空中戦を地上から観察、観測するために秘かに使っていることを、山路は耳ガクモンでぼんやり乍ら知っていた。戦う者たちには残酷なことであるが、空中白兵戦を、空中に花を見る思いなぞとは、まこと瞬間に地上兵の脳裏を横ぎるあだし心とも云うべきであった。戦争、戦場を〃恰好いい〃と妄想する子供たちや一部の若者の思いと似通っていると言えようか。時代劇などで、悪人共をバサリバサリと切って倒す主人公を、殺陣師という者の存在を忘れて、小気味よくみる大人の心情にも通ずるものであろうか。

しかし、この様なアメリカ国の飛行機の飛来をむかえうつ戦闘行動は、昭和十九年をもって終った。山路たち陸軍の地上兵は、これはいよいよ、アメリカ軍の上陸作戦にそなえて、最後の戦力を温存しているのだなと考えて、頷くより仕方なかった。

山路たち地上の陸軍は、島に上陸すると一番に岩盤をくりぬいて洞窟の中に、米や鑵詰を、山路のような下級将校には、その量を測り知ることは出来なかったが、思う存分食っても二日分位は貯蔵されていたようである。それは日本国が降服してから解放された食料から推し測ったのである。そこへゆくと航空隊は、さまざまな鑵詰類をふんだんに持っていた。だが山路らにはそれを羨むという気持は露程もなかった。何しろかれらは、ひと度、この島から飛び立つと、そこに死が確実に待っていることが決っているのであった。比島レイテへのアメリカ軍上陸作戦のときも、硫黄島、沖縄島への上陸のときも、山路のいたトラック島の穴だらけの飛行場から、当時、山路たちが〃呑龍〃と呼んでいた双発爆撃機が、それも修理に修理を加えたとって置きのものが、真夜中過ぎの闇に乗じて飛び立って行った。それは援護爆撃とでもいうのであろうか、十機と数えられたのが、その翌朝白みかかった空によろめきながら、それでも編隊を組んで、五六機になって帰って来るのを、山路たち地上の兵士は絶望的な思いで、仰ぎ見た。出てゆく時に呑龍の最後尾に皮襷で十文字に己れの体を固定して機関砲を構えた若い兵士はそのまま敵の中に死んで行ったのだ。

昭和十八年二月、かれらは壮大な防衛設備がほどこされているとと考えていた第四艦隊基地であったトラック島に急襲をかけて来た。第四艦隊の主力は、このことを事前に察知したのであろうか。寸前に四散するかたちで正面からの衝突をかわした。いや逃げたのである。だが基

地に残っていた巡洋艦夕張を初め、十数隻の駆逐艦、海防艦、その他の艦船は、この敵の襲撃の中に失われている。丁度その頃、山路たちを運ぶ辰羽丸を旗船とする輸送船団は、エンダビー島沖合に近づきつつあったのだ。

上級将校たちは、トラック諸島を英米合同の海空軍が襲って、第四艦隊基地は八分通り破壊されたことを無線の連絡で知っていたのであろう。

トラック諸島と云うのは、もとドイツ国の主宰領土であったのを、第一次世界大戦で連合国にあった日本国がこれを委任統治領としていた。今日ではアメリカ主宰の許で自治領となっているのであろうが山路は詳しくは何も知らない。春夏秋冬の四ツやや大きい島や、日、月火水金等曜日を冠した中等度の島を軸に、全部で二百数十に及ぶ島と環礁で成立っていた。米英側は、この島には海底トンネルで連絡され、巨大な防衛施設があるものと想定して、攻撃、上陸する犠牲の大きさを回避して、比島・沖縄へと飛石的に日本国へせまる策を採ったのであるのだが、陽動作戦的にトラック島を海空より攻撃することは、昭和十八年の二月の攻撃以後も続けられた。

山路たちはこの島に近づく途中でアメリカ国の艦載攻撃機にやられて、四ハイは、撃沈され、サイパンに辛うじて逃げおおせることが出来たものもあった。この時旗船辰羽丸に乗せられていた山路は生れて初めての戦闘という修羅場で、手も足も出ない敗戦と、命拾いと云うことを体験させられたのだ。ことの顛末は、敗戦後三十数年はかれは人に語ったことはなかった。命を拾って日本国へ帰って来たと云う心の負い目がかれの骨身に染みていたのであろう。かれは中学校の英語の教員をやっていた頃一度だけ教材とのつながりで、自分が沈みかけた船の船尾から南太平洋の海に飛びこんだ体験を、黒板に図解しながら生徒に話したことがあったが、途中で、自分の声に涙がまじって来るのを感じて不充分な話で終ったことがあった。若い頃の山路は、放浪期をふくめて、何度も命をかける行いを平然とやってのける無暴さがあった。それは見方によっては命知らずの勇敢さとも見られるのだが、若い頃の命知らずと云うものは、本当に命を拾うと云う体験がなく、自分の命が終ることを考えても見たことのない独り身の気安さが、大きく手伝っていることが多い。

日本国が長い間の支那国とのいざこざのあと、ツイに米英仏オランダ相手に戦闘に入ることになる直前、それは所謂〝学徒動員〟に三年程先立つ頃、学校出の若者を大量に徴兵した際に、山路も同じように松本にあった連隊に入れられ、一年後、これも山路と同じ筋で浜松にあった士官候補生養成所を出て、見習士官、少尉となって、山路より三ヶ月早く先発隊として南洋トラック島春島の守備にあたった男たちの中に土屋正雄が居た。敗戦後三十数年、この土屋の中隊長であった馬場平大尉が急死した。未だ六十そこそこであった。土屋正雄には、松本連隊の出陣から敗戦までを、〝陣中日誌〟という形で書きつづけた覚えがきがある。命あって内地に帰りついたかれは、この正確な日誌を基にして〝松本連隊〟を書こうとする希みを持って書き初めていた様である。そこえ昔の中隊長馬場平大尉の死に会い、かれは遺族のために、〝鎮魂馬場平追慕集成〟と云う本を作った。山路も老後モノ書きの仲間に入って小説めいたものを同人誌作家群卍にかきちらし、仲間には自作の小説集を拾冊の余も出す者もあり、商業ベースに乗る者もあったが、ざっと見て、土屋正雄の〝鎮魂馬場平追慕集〟は出色の出来栄えであると思わないわけにはいかない。

もう既に二十年前になるが、山路の手許に一枚のなぐり書きの葉がきがとどいた。山本茂実と発信者はなっていた。中味は〝私の書いた「松本連隊の最後」という本を買ってくれと云うのであった。山路には山本茂実とはあの時の軍曹であったろうか、中尉であったろうかと記憶を呼び起しながら〝あなたはあの時の軍曹であったか、中尉であったか、何大隊に属していましたか〟と返事を出したら〝私は作家の山本です〟と云う応えをもらって〝コンチクショウ〟と云う気分で、その本は買わなかったことがあった。かれにはその前後に〝ああ野麦峠〟という女工哀史めいたものが多少世評を受けていた様であった。買わなかったから勿論読んでいないのだが、生き残って帰って来た大隊長や中隊長に聞き書きした〝松本連隊の最後〟など、土屋正雄の陣中日誌に比べれば、その正確さにおいて、迫真性において、少なくとも山路にとっては問題にならぬと思えてならない。土屋正雄の〝鎮魂馬場平追慕集成〟には、巻末に〝トラック島と陸軍の派兵〟と云う記事と、〝第三大隊第七中隊戦歴表〟という別稿がある。貴重極りない史料である。山路も此処にトラック島でのかれの戦争・戦場を書くに当って、この土屋の残してくれた史料を頼りにする所が多くなるであろう。エンダビー沖での山路の敗戦経験について、土屋は次の様に要約している。所々括弧して註が入れられているが、その註は、淡々と歴史的事実を述べている土屋の筆に対して、山路が主観を入れて書き加えたものである。

軍隊へ加えられ、戦場へ引き出されると云うことは、四五十年前の日本の青年にとっては、国家の要請によって運命的に避けられないものと素直に受入れられていた。社会学とか国家原論などいかめしい名称をつけられたがクモンの書物にも、徴兵、納税、義務教育の三者を国民の義務と規定していた。しかし、その義務教育も受けられずに文盲のままで大人になるものも結構山路が若い頃にはいた。納税にしても今日の様に派手な脱税はなかったが、ささやかな誤魔化しは日常のことであったであろ

う。徴兵についても明治にさかのぼれば、養子に行って一家の跡とりの地位にあればまぬかれることが出来たし、金四百円で徴兵をのがれることも出来た。山路は、この国の要請に対して、消極的ながら抵抗をつづけてたことを、五十年後の今日、何か心の疵の痛みのように思い出されるのである。五年制の中学校を終えて、旧制高等学校へ進むことに臆病になってその時東京の祖父母の家に寄宿してN大学予科に籍をおいたこともそのあらわれであった。その間N大学予科の筋向いにあった研数学館と云う所に足を入れて碌にベンキョウをせず神田の本屋街をぶらつくことと、田舎者には気がきいて小ぎれいに思われた喫茶店に入りびたり、田舎の親からの送金は、屋台の酒にかえていた。

この時分のことで、尾を引いてかれの後年の生活にいささかながら影を残したことは、N大学予科の教室で大宮健太郎という教授センセにルイス・ブッシュの小説を教えられたことであった。かれはその頃未だ日本国にはこと新しいアメリカ英語というものを売り物にして、口から唾を盛んに飛ばし乍ら英語を読んだ。更に後年、山路が教員の世界に迷いこんである私立中学校、高等学校の英語の教員になって、大宮健太郎が矢張りその学校の英語の教員をやっていて、就任のあいさつを英語でやったと云う話を耳にした。私立学校は、目玉商品として売り出しの大宮健太郎をやとっていたのだ。かれはその時分ラジオの英語講座を受持ってもいた。このことは、十二年後、日本敗戦。アメリカ軍春島上陸の折に、山路にアメリカ国兵士と接する気安さをあたえてくれている。

N大学予科にも、しかし山路は授業料を酒にかえていたので、その年の十一月には旧制高等学校へ正式に受験する気を起して田舎へ帰った。田舎の町では、親は開業医をしていたので、かれに患者に予定した病院棟の二階を割り当て、母屋の空気から離れて静かにベンキョウに勤しむようにとの配慮があったのであろうが、山路はその部屋で、主に女のことに耽り、詩やうたを雑誌に投稿したりして文学への入口あたりをうろうろしていたようである。旧制高校の入学のことについては、母屋にいる中学四年生の弟に問題を聞いたりしていた。それでもその次の年の春、日本の旧制高校の中で一番競争率の低いH高校文科甲類と云うところにあっさり入学出来た。弟は、中学四年終了で地元のM高校理科乙類と云うところに入った。これは両親共に子供に希みをかける気を持たせる出来事ではあった。

日本国と支那国とのあらそい事は、山路のこの様な一身上の小さな変化にかかわりなく、段々深みに入って行った。昭和一桁代から二桁代へとかかってゆく頃であった。N大学予科にいた頃、N大を根じろにしていた左翼学生から、それとなく世の中の仕組みについて左に傾いた影響をうけていた山路には、H高校の同僚生徒は何や

ら子供じみてうっとり、その言動には、生意気さが目立っていたのであろう。〃入目せる小使の翁は若き日を幸徳秋水と謀りしときく〃〃遠くより十九の我をかなしめる翁のまなこ忘れえずかも〃などとかれの手帖のはじに落がきされている。

赤い思想行動の持主は昭和の一桁代にこの国から一掃され、引きしめは段々学生層にも及んで来ていたのである。〃赤い〃と言う山路についての噂は、学校当局にも疑いを生じさせたらしく、かれは当時の校長某（名前は忘れた）から譴責と云う一種の処分をうけた。

山路にはこの〃赤い〃は、本当にその様な思想に捕われ、それにふさわしい行動がなかっただけに堪え切れずに、酒を呑んだ。そしてそのように噂をまいた友人を殴ったり、巷の酒呑みたちと乱暴なおこないがつづいた。喧嘩は妙に強かった。前後を考えないためもあったろう。五万程の小さい町では、いつの間にか〃高等学校の山路だば、町全体がとっかからにゃマイネ〃とささやかれる様になった。この赤と白色テロが混合して、桃色事件をおこした。その顛末を山路は小説風にして自分の属している作家群卍に〃つまみ喰い〃という題で書いているから此処では省く、桃色事件は町の赤新聞が書き立てたので、学校側も、とうとう日本本州最北端の最高学府の名誉を考えて山路を一年の停学処分にした。これで又もかれは一年兵役から遠ざかったことになる。

大正の終り近くに、潮のようにおしよせた軍備縮少の嵐の中で、軍人らはのんびりと昇任を約束されずに、さまざまに生活の資本を求めて軍隊を去って行った。山路は考えるのであるが、この風をかわして軍事力を温存するために各種学校に軍事教練という科目が加えられ、軍事教官と云うものが配慮されることになる。この軍事教官は、生徒、学生に〃士官適〃〃下士官適〃と云う判定を下す仕組みになっていた。山路は、中学では士官適と云う判定であったが、高等学校、大学では、適合はもらえなかった筈だ。一兵卒以上にはなれないと云う判定である。

そのような山路が、どうして最下級ながら将校にさせられ、二門の速射砲と三十名の兵士をあずけられ輸送船上にあったのであろうか。日本国は、その頃までに中国戦争、比島、安南、ビルマ、南太平洋諸島で大量の下級将校を失っていた。何を言ってもたたかいの場で勝敗の最後をきめるものは、白兵戦であり、白兵戦で、先頭をきることを命運づけられていたものは下級将校であった。先頭に、壕や穴から飛び出して走る者がなければ、続くものは無い。山路は、そのような先頭に走る者の一人として選ばれたのであった。

輸送船の上から眺める海は、おだやかで、二月の寒風

の中を夜霧にまぎれて横浜沖を出港したことは忘れられていた。ある日突然と云う感じで、夏のあたたかい海に入った。

その日、土屋正雄の筆によると二月十七日三時頃となっている。その前日、トラック島は、アメリカ国海空軍の急襲をうけて、潰滅に等しい打撃をうけていた。そこらを土屋は次の様に書いている。

〃二月十六日、早朝、第一戦備（敵上陸公算大）発令され、戦闘態勢をとる。敵機動隊転進により午後解除。〃

〃二月十七日、第一次トラック島附近）の戦闘に参加（十八日まで）。〇五〇〇頃、突如敵艦載機のグラマン来襲し、夕方までに延六百機に銃撃され応戦、あと徹夜で陣地強化に従事。この日緒戦で友軍機壊滅、艦船次々に撃沈。陸上施設終日爆発炎上、惨禍甚大。〃

〃二月十八日、明ければ再び大空襲、正午頃までに延四百機のグラマンに銃撃され、我等は敵上陸にそなえ必死の陣地構築、夕方吾方の救援機飛来、敵機動部隊を撃退と発表。（後略）

この三日に亘るトラック島急襲のアメリカ国空・海軍によって、山路らの乗せられていた辰羽丸、暁天丸、海輸送船二隻は、エンダビー島沖で撃沈されたのだ。土屋の記録によれば午後三時頃となっているが、山路もその日、昼食を終えて甲板にのぼり、海風に吹かれながらひと休みという時であった。未だ船底で昼の食事をつづけている兵士や軍医の一団があった。山路も二門の船尾に対潜水艦攻撃用に据えられた連射砲の間に寝そべる姿勢であった。兵士たちは知らなかったが、山路ら小隊の長以上はその前日船橋の中央部の甲板に集合を命ぜられ、次のような調子の訓令とでも云われるものを受けていた。

〃当船団は、いよいよ目的地に近づきつつある。吾等の行く先は、南洋トラック島である。昨日この島々は、米英の攻撃を受け、可成りの損害を蒙った模様である。これより敵の攻撃をうける公算は大である。各自は対潜、対空の警戒を厳にし、万一敵の攻撃に際しては、これを迎撃、潰滅せんことを期せよ〃。

まことに、軍隊調に威勢のいい話であるが、この訓令のあとで、辰羽丸に乗っていた陸軍部隊の総指揮官林田大佐は、軍旗と一緒に辰羽丸に横づけされた大発に乗りうつり、護衛の駆逐艦に移ったことを、遇然山路は目撃したのである。山本茂美の〃松本連隊の最後〃には軍旗は林田大佐と横浜沖を出るときに一緒に駆逐艦に乗ったとなっている。此処にも聞きがき小説の表を飾る弱点が出ている。山路はテンノーの象徴である軍旗と一緒に逃げ出してゆく最高指揮官を羨しいなと思ったことを今日でもありありと思い出すことがわ来る。軍旗と云うものは下級将校の山路の目には初めてお目にかかる品物であった。支那国とのたたかいの中で戦火の中を潜ったのであろうか、中身の布地の部分は殆んどなく、外側の線だ

けがだらりとたれ下っていた。〃羨しいな〃と思ったのは、〃この船はやられるゾ〃と云う予感を裏に秘めていた。林田大佐と軍旗を移乗させた駆逐艦は、船団護衛の任務を捨てたかに見えて、全速力で、艦影は南の海の果てに消えて行った。

船尾に据えられた二門の速射砲の間に、兵員凡そ三十名は、南洋の陽を全身に浴びて、ともすると眠気にさえさそい込まれ気味で、そこには、命をかけた張りつめた空気はなかった。南太平洋の夏空には、日本と同じ夏雲が、海の果てにむくむくと山や谷をつくっていた。〃対潜対空の監視を厳にせよ〃昨日上級将校から言われた言葉は、そのまま兵員に伝えられ、かれ等は形のように空を見、海面を観ていたが、そこには戦闘を目前にした険しさは無かった。

突如海の果ての雲の山の中に数点の黒い飛行機らしいものを見つけた兵士の一人が叫んだ。

〃飛行機だゾ！日本の飛行機が迎えに来たゾ・・・〃

兵士たちは船側に並んで西の空を見た。叫び声に船底からも縄梯子でぞく続と兵員が甲板に駆け登って来た。戦いを知らぬ兵士は陽気に叫んだ。

〃バンザーイ、バンザイ・バン……〃

それは三声とは続かなかった。辰羽丸の西五千米ぐらいを並んで進んでいた輸送船めがけて、黒い点は黒い蝶になって舞いおり、舞い上った。輸送船の真中あたりから火の手があがるのが山路の目を射た。その黒い蝶の一羽が、たちまち山路の目に黒い鷹になって、辰羽丸の船尾から船側をかすめて、腹をみせて反転し舞い上った。同時に山路たち船尾にいた兵員は頭から海の瀧を全身に浴びた。船橋のあたりで、ドンドドッと重機関銃が鳴った。軽機関銃もタラララと鳴ったようであった。しかし黒い鷹は腹をひるがえして飛び去った。分隊長の軍曹は、連射砲の射手になって海軍めがけてやたらに砲弾を発射していた。だが、それは潜水艦や魚雷めがけてではなく、黒い鷹の急襲に対して戦闘行動をとらなければいられないのであった。この数秒間に、山路は昔、子供の頃日露海戦の絵などに、海中に立ち上る爆弾による波がしらが船のマストより高くかかれているのを絵空事と思って来たが、事実空中から落下する爆弾の立てる波がしらは、船の姿をかくす程高くあがるもんだナと思った。そしてかれは、敵の飛行機の数をかぞえていた。

〃全部で六機だ。六発爆弾をおとせば、ひと息つけるゾ〃

その時であった。山路は足のうらに辰羽丸の苦しげなぎしぎしツルツルビリビリと云う前進のために発する震動がないのを感じた。さっき、船尾に落下して山路たちに海水の瀧をあびせた爆弾は、辰羽丸のスクリューを砕いたのだ。右側、左側両方に併進して来た輸送船は、何れも火を吹いて傾いている。頼みにした護衛艦の駆逐艦

は姿を消していた。山路は、その様な戦闘の有様をしっかりと頭の中に刻み込んで置こうとしていた様だ。

その時、辰羽丸の頭上に、五六千米の高度で一機がしのびこむのが山路の目に入った。この高さでは機銃、機関砲の射程を越えている。連射砲の訓練をうけて来た山路には、敵機の高度、速度、行動の大凡を直感的に読みとることが出来た。

〝こりゃいかん！勝負にならん。スクリューやられて、こっちは只浮んでいるだけだ〟

と、その飛行機の腹からマッチの頭ぐらいの黒いものがこぼれた。山路は立って見ていた。その黒いものは、みるみる炭団ぐらいの大きさになり正に山路の頭上に落下する。

〝イカン！〟と思うのと、据えられた砲の間にガバと身を伏せるのと同時であった。

〝ごわん〟という轟音と同時に全身に火を浴びた。ばっと立って船尾へ走った。火の熱さから逃げたのだ。だがそこはもう海であった。濛々と黒煙がおそいかかり、山路を盲目にした。船底から這い上って来て次々と海へ飛びこむものの姿が見えた。船の真中に高々とあった船室はふっ飛んだらしく形もかげもなく、煙突が傾でゆがんで見えた。その煙突に張りついた人間の姿が二ツ三ツちらりと眼底をかすめた。山路はつづいて足の裏に傾斜が出来て立っておれなくなった。〝沈むんだナ〟〝オレは泳げない〟二ツの想念が頭の中を走った。黒煙の中に小隊の兵員の顔は見えない。

〝Y一等兵タマを持て、タマを持て〟

山路は当番兵に叫んだ。オレは小隊長なんだと云う考えも頭をかすめた。

〝速射砲隊、番号〟煙の中から一から十二、三まで山路の耳にきこえた。〝海へ入れ〟もう海に入った兵もいた。

〝タマを持ちました〟

黒煙の中からY一等兵の姿があらわれた。それはスックと現われたとも云う程の感じで少しもうろたえた所はなかった。かれの手には速射砲の徹甲弾が正式に砲身につめる姿勢で持たれていた。

〝その弾じゃない。木の玉だ〟〝もういい海へ逃げろ〟

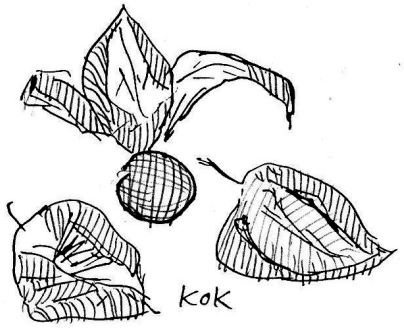
山路は泳げないので、砲を海中に浮かすために用意されていた木の玉を抱いて海へ入ろうと思ったのだ。救命具は身体につけてはいたけれど三十分以上は保つとは思われない。船はもう立っていられない傾き方で、船尾がはね上るように高くなっていた。土屋正雄の記録によると辰羽丸は爆弾を船の中央にうけて、三分で轟沈であったのだ。

山路の手には、右に軍刀、左手に私物を入れた鞄があった。鞄の中味は、かれが軍隊に入って二ヶ月目に突然死んだ父親が普段に愛用していた懐中時計と、南方へ行

くらしいからと云うので、呆け予防を考えたのであろう、当時旧制中学校四五年でやった幾何学の問題集と、萬葉集上下二巻と、その時まで遂に通読することが出来なかった〝古事記〟一巻が入っていた。これらのことから察すると、かれは目的地に着く前に、海の藻屑となるとは考えていなかったことになる。かれはその鞄を傾きかけた甲板に投げ捨てた。艦側の手摺りから身をのり出して海を見た。もう船中に残る者は殆んどなく、先を争って海中へ逃れた者たちは、沈没する船に引きこまれぬように出来るだけ船から遠ざかろうともがいている。その者たちの頭の大きさが山路の目には、デパートの屋上から街路をゆく人間の頭大に見えた。右手に持った軍刀をそのまま持って飛べば、落下する途中で抜き身になって海中にいる兵を刺すかも知れんと吐嗟に思った。刀を捨てることは武を捨て、戦うことを捨てることだという恐れが心中を走ったけれど、躊躇は瞬間を許さない。軍刀は先に海に投げ、山路は船の手すりを蹴った。

椅子にこしかける姿勢で、かれは落ちて行った。死を考える余裕はなかった。落ちてゆくからだがサァーッと音をたてた。何秒であったろうか、ずぶりと海水に達し、そのまま、ぐいぐいと水の中に深く引きこまれるのを、苦しいと感じた。

（つづく）



浪々好日（続）

井上二三男

地鎮祭と上棟の日には幸い雨が降らなかったが、梅雨に入り、早く屋根を葺きあげたい、建築士のその気持が須田にも伝わって、須田は、毎朝灰色の空を恨めしく仰いだ。屋根に瓦が載りはじめてからは、本降りにはならなかったが、七割方葺かれたところでやはり一雨あった。

これからの浪人生活を地元に溶け込んで行こうと考えている須田は、地元の公民館の油絵グループの会長をしている関係で、公民館の委員や役員に押し出されているが、それらの会議は、殆ど夜である。

六月十四日午後七時から会議であったが、夕刻、北東の空に沸き出た黒雲は忽ちに空を覆い、雷を呼び、大粒の雨はバチバチと地表をたたいた。須田はその雨の中を公民館に車を走らせた。会議直前には雨の束に雹が混じり、舗装された公民館の庭に氷の玉が流れた。そのような天候の中でも予定された人員は出席したが、会議が終えてからの話題は、この夜の物凄い雨に集中した。低い路上に集まった氷の塊に車が乗り上げて難渋したと言う者もいた。須田は、建築中の家はどうであろうかと気掛りであった。この雨は局地的であるらしいことに希望をつないだ。

翌朝、早々に建築現場へ行ってみると、ここには、さしたる雨の痕跡はなく、須田はホッとし、馬の背を分けると言われる局地的な雨の不思議をつくづく思った。

朝、食前に机に向かい、午前中は一日おきに医者で注射を受け、建築現場を回り、午後は、静養という生活のパターンである。

雨の多い夏で、気温は平年に及ばないようであるが、机、椅子、ソファ、本箱、衣装ロッカー、テレビなどに埋まった仮住いの六畳の間は日射しはなくても熱が篭って蒸暑く、須田にはかなりこたえた。

須田の借家は、路地と公道の角で、須田の机はその角の窓に面していて、この路地の利用者は須田の机の前の窓下を通らなければならない。

平日の朝の一時は、この窓の外の動きが慌ただしい。ゴミの収集日にはこの動きが倍増する。

主人公方の車はかなり早い時刻から飛び出てゆく。やがて子供の声の間を縫って細君達が自分の車のハンドルさばきも颯爽と走り去って行く。車を運転する若い細君の姿は、自信に満ちて美しい。

そして、午後子供の声がこの路地に戻るまで静かである。

日曜日には、細君達は助手席に座り、子供を抱え、或は後の席に子供を乗せ、主人公の運転で出掛けて行く。平和な、仲のよい若い夫婦の姿は須田の心まで幸せにする。

須田の家の前の家はかなりの庭があって、様々な草木を植えて楽しんでいる。色白で細身の細君は、どこかの看護婦さんとか。夕方帰ると、実によく小まめに立ち働いている。

高校生らしい息子をきびきびと指図する声が聞こえる。庭の手入れも専ら細君の仕事のようで、須田はその家の主人公が庭にいるのを見たことがない。

須田が仮住いに運んで来た幾鉢かのサボテンやゼラニュウムが美しい花を咲かせた。時期でもないのに君子蘭が花を持った。

夕方、須田が鉢に水をやっていると、声をかけられた。

「どうすればそんなに花が咲くんですか」

前の家の細君が遠慮がちに路地から声をかけているのであった。

「はあ、この君子蘭ですか。これは狂い咲きなんですよ。本当は、秋から初冬の寒さに会って、それからなんです」

「そうですか。葉は大きいし、花はきれいだし、いいですね。お手入れを良くされるからと思ってました」

須田は君子蘭が大株になり、増え過ぎて困っていたところでもあるので、一鉢を差し上げると細君は大喜びであった。

七月に入ると、放送大学の期末試験である。

須田は、以前から文学・文芸関係のことを学びたいと思っていた。日本人でありながら国文学の知識がないことを自分に大きく欠けるところだと考えていた。

「定年後には、どこぞの大学で国文学を専攻して、卒業後はどこか高等学校の非常勤講師にでもなれればなあ」

冗談めかしてそんなことを言ったりしていたが、半分は本気で、半分は希望であった。勿論、健康を害して第二の職場を辞した程であるから、そんな希望はまったく

の夢でしかなかった。そこで知ったのが放送大学のこと、学習センターも程近い。聞くところによれば、これは官製の通信教育大学として計画されたところ、電波法の関係で国が設立主体になれず、特別法による法人になった由である。修学生は、社会人が多く、英語に苦しんでいる者が多いとか。ともかく、正規の大学ではある訳で須田にとっては、棚の上のボタ餅である。手が届くかどうかは、英語力にある。そう考えた須田は、試みに英語のほか、二、三の科目を選んで入学手続きをしたのである。確かに英語は、困難であった。程度が高いというのではなく、テキストの英文は、今の高校生でも苦にしない程度かもしれない。しかし、社会に出てから四十年、頭脳の老化が進んだ須田にとっては難しいと言える。須田が学生のころ学んだのは「英語」であり、読解と文法が中心であった。今、須田が選んだ「英語」は「Living English speech」であり、聞き取り、書き取るのである。テレビでの講義を聞く前にテキストの英文を事前に見ないように、という程なのである。人の名前がなかなか思い出せないことがよくあるような還暦の須田には、記憶による学習は極めて能率が上がらないものであった。教室での情報交換がない須田はどのような試験が課されるのか分からないまま試験日、定刻に学習センターに登校した。英語の試験場に指定された教室には、もう大勢の男女が詰めていた。須田と並ぶ程度の老書生もボツボツ見える。須田は仲間に会えたように思った。こういう形で試験を受けたのは何十年前のことであろう。若い頃、さまざまな試験に挑戦して試験慣れしている筈の須田が、緊張しているのが自分で分かる。健康を害して安静の時間を多くしていて体力がないためであろうか、心臓の鼓動が激しい。受験には体力が必要だな、須田はそう思った。

試験開始。

問題のプリントと回答用紙が配られる。学生番号、科目のコードなど数字は桁を間違えればそれだけで大きなミスである。そそっかしいことでは人後に落ちないと自覚する須田は、懸命に平静を努めた。しかし、目は英文を追いながら、頭は一向にそれを解こうとしない。脳は石のように堅くなって、問題の意味を汲み上げない。老化とはこれだな、須田は今更のように思い知らされた。

時間は経過する、問題の数は多い。鉛筆は、のたくった文字を残す。

試験は老化との戦いであった。

試験が終わって、敗北の惨めさを抱えた須田は、ホワイエで同年配と思われる男に声をかけた。

「英語はどんな勉強をしているのですか」

「いやー、テキストを繰り返してやってるだけですよ。十回も受ければ何とかなるでしょう」

須田が

「私なぞは、若い人の五倍はしなければなりませんね」と言うのに、その男は大きく頷いた。

毎月の第二、第四月曜日の夜は、公民館の油絵のグループの学習日である。須田が会長になっているのは須田が油絵に優れているからではない。会長は回り持ちなのである。現職の時は、月二回の学習にもなかなか出られず、不義理をしていたので、この際は受けなくてはならなかったまでである。会員僅か二十人程のグループでも、一応の組織として、会費の徴収、欠席がちの者への電話の連絡やら、会報の発行などの雑用も結構あり、会員が減少するのをどのようにして防止するか、魅力ある学習にするにはどうしたらよいか、そんなことが須田の頭の片隅を常の住処にしているのである。学習日には、そのような雑用に追われ、会員の動向に気を配りして、自分のキャンバスに向かっても打ち込めない。恒例の秋のグループ展の会場の確保や案内状の印刷の手配などをしながら、自分の作品の完成が覚束ない。

須田の地区の公民館は、この市の基幹公民館の一つで、三百人収容のホール、講義室、造形創作室、会議室などのほか、図書室もある。

図書室は相当の広さで、市立図書館の分館になっている。読書コーナーにはゆったりとしたソファが置かれ、開架の書棚から自由に本を選べる。明るい雰囲気で須田は気にいっている。希望する本が書架にないときは、申し出ると本館から取り寄せてくれる。

須田は、読む書物は自分のものでないとどうも落ち着かないのだが、家の改築に当たって身辺整理も兼ねて百冊程の思想全集をここへ寄贈してから専門書或はどうしても手元に置いておきたい書物のほかは努めてこの図書室や県立の図書館を利用することにした。新築中の家の書斎には書架の場所も考えているが、収容には限りがある。新聞の書物の広告を見るとムズムズと欲しくなる気持を押さえて、図書室へ希望を出してみる。四、五日して図書室から「ご希望の本が入りました」という電話がある。須田が希望した書物の殆どがこうして借りられたのには須田もいささか驚いている。

児童の図書も多く、子供を連れた母親が、本を何冊も抱えて行く姿がほほえましい。本の受け渡しのカウンターがかなり混むこともある。カウンターで手際良く働く女性は、ボランティアの人らしく、公務員臭さのない姿に須田は、好感を持つ。須田は、図書館の書物の利用の投資効率には疑問を持っているのだが、ここではかなりの効果を上げているように見える。

建築工事は、順調に進み、内部の工事に入ると建築士

との打ち合わせが更に頻繁になり、朝、建築士の事務所が開くのを見計らって須田が電話を入れることが多くなった。妻は、それを定期便と呼んで

「ほかの建築屋さんだったら、なんて煩さい人だろうって厭がられるわ」

と言う。須田もそう思う。打ち合わせの内容も細かくなり、寸法も何センチかが問題になった。若い建築士は須田の注文をよく聞き、厭な顔を見せなかった。職人に言えば顔色を変えるかと思うようなことも建築士がうまくつないだ。須田が迷うところは建築士を信頼して任せた。須田には建築士が身内の者のように思えてきた。

三人の大工は建築士が腕が揃って良いものを選んだと言うだけあって、いい仕事をしているように見えた。自分でも最近家を建てた家具屋の社長が「お宅の職人さんはいい仕事をしているね」と誉めた。

新居への引越しは、九月二十八日と決めた。妻の学校の夏休みのうちにと計画したのである。

苦戦した英語は、最低ラインで合格した。

二学期は、更に選択科目を増やした。

九月二十六日から十月三日までそれらのレポート提出

二学期の期末試験は十一月である。

浪々なかなか多事である。

Gone are the days

山根三枝子

昭和十三年三月下旬の頃

春休みになった。卒業生達は相前後して郷里なり新生活をスタートさせる地へと散って行った。残された寮生達も大半は帰省してしまい遠隔地からの人達だけが居残っていて寮全体がひっそりしてきた。当時、寮はお正月休みと春休みの年に二回、東寮と西寮が交替で閉鎖されていた。それで朝子たちはその日のうちに東寮に簡単な一時しのぎのお引越しをするのであった。

朝食を済ませ、急いで自室に戻ろうとしていた朝子に小熊のおばさんが声をかけた。

「中野さーん、ちょっと、あしたね、あたし達、潮干狩に行くんだけどよかったら一緒にいきません？　うちのがトラックに乗せてってくれると言ってるんだけど……」と言った。

小熊のおばさんというのは当時四十才位の年令ではなかったかと思うのだが、若い女中さん二、三人と一緒にいつも台所にいて寮生達の食事作り其の他の仕事をしていた。彼女はしっかり者で見るからに気立ての良さそうな小ぶとり気味の女であった。当時、朝子は彼女が亭主持ちであるとか、ないとかそんなことなどは考えたこともなかったが、今にして思えば彼女は百姓か又はトラックの運転手でもやっている人の女房であったようだ。翌日からは西寮の女中さん達は全員が休暇となるわけなので遊びに出かけようということだったのであろう。

朝子には潮干狩の経験はなかった。たゞ小学生の頃の国語の教科書か何かの中のさし絵で潮干狩というものを見たことがあっただけだった。好奇心が旺盛で何にでも夢を描きがちな朝子にとって、それは彼女の心を浮きたたせてくれるような誘いであった。それにトラックに乗れるということや女中さん達と出かけるということにもの珍しい魅力を覚えたのである。

「えゝ、連れてって」と朝子は喜んで即座に返答するのであった。

翌朝、朝子はモンちゃんだったか誰だったか忘れたけ

れども寮生一人も誘って出かけた。一行は女中さんのおきのちゃんとよっちゃん、それに小熊さんの娘で小学生の子供も加わった。

校門の所まで迎えに来てくれたトラックの荷台に乗り込んだ。荷台には幌馬車のように覆いがかけてあった。野菜などの入った大きなかごで囲われている奥の方にはゴザが敷いてあり数人の人達が坐れるようにと坐布団までおいてあった。

「あのね、トラックには人間は乗っちゃあいけないことになってるの。こうして隠れるようにして乗るのよ。警察がうるさいからね。途中で市場の中に入って荷を下ろすけど、その時は声を立てないよう静かにしててね」と小熊のおばさんは言った。

途中、市場らしき所に二度ばかり停ったようだがあの時は何処を通って何処の海に行ったのであろうか。今となっては思い出せないが多分千葉方面であったようだ。海岸に着くまでは外の景色は全然見ないで行ったのだ……ただ、とある海岸に着き其所は湘南の海辺のようにきれいではなくてなんとなく鄙びた感じのする所であった。曇り気味の天候で春は名のみで冷たい風が吹いていた。空も海も浜辺も一様に灰色がかった色合をしていた。

小熊のおばさんは持参の熊手を貸してくれ、砂を掘って貝を見付ける方法をやって見せてくれた。初めてのことであったが朝子はけっこう蛤などを掘り出すことが出来た。小熊さん夫婦は浜辺に炭火を起こしていてくれ網の上に貝をのせて焼いてくれた。火が通ると蛤はパックリ口をあけ、ジワジワと水分をたぎらせていた。焼きたての蛤にはほんのり塩味もついていておいしかった。おきのちゃんが持参してくれたお握りと沢庵のはいった包みをひろげてすゝめてくれた。

浜辺にそんなに長い間いたわけでもないのに再びトラックに揺られながら国分寺に帰って来た時にはもう春の日はとっぷり暮れていた。途中でいねむりもしたような気もする。

朝子は潮干狩のすべてのことをあまり思い出せないし又そのことを多く語るつもりもない。朝子が語りたいのはむしろ国分寺の塾の門前にトラックが止まり「ほうら、着いたわよ」と言うおばさんの大声で目を覚まされトラックから飛び降りた時のことのほうだ。つまりその時の朝子の気分を含めてのあたり全体の雰囲気なのである。それは何故かはっきりと記憶に残っているものであり青春時代の或る日或る時の抽象化された一コマを表現するものなのである。

小熊のおばさんはそのまゝトラックで近所にある自宅に帰って行くのだし、ふだんは寮の女中室に寝泊りしている よっちゃん達もそれぞれ自宅に戻るわけであった。

朝子はモンちゃんと二人で我に返ったように地面に降り立って思わずフウッと大きな息をついた。あゝ今日一日も無事に終った。楽しい一日でよかった。静かに夜を迎えて安らかで満ち足りた思いで身も心も一杯になるのであった。そして空を見上げた。半世紀も昔の天空は今よりもずっとずっと澄んでいた。チカリチカリと光る星も今 現在のものより遙かに美しくてきつい光を放っていた。地上からの様々な灯光の乏しかった時代の暗い空、そして点在する無数の星々をとり巻くようにして雑木林の梢が黒々とした枝を張っていた。朝子とモンちゃんは一寸心細い思いがしてブルッと震えるように感じた。そして申し合わせたように寮の方に向ってひた走りに走って行くのであった。

故郷台北を遠く離れている孤独な朝子。真暗で淋しい武蔵野の林や畑のたゞ中。其所には確かに身を容れてくれる鉄筋コンクリートの立派な寮があった。そこでは食事其の他の生活全般の世話が何んの心配も無しに用意されていた。心を満たしてくれると言おうか、時間を充実させてくれる、そういったあらゆるものが備えられ与えられている生活の空間があった。無意識に信頼している数々の友人達、又何かにつけ責任を持ってくれる教師達も身近かにいた。しかしそれでもなお、この暗い夜空の示している大自然の中では、それ等のものは何んと心もとなくも些細な存在であったことか。それだのにその寮のさびしい（とあえて言いたいのだが）灯を目ざしてまるで避難所に逃げ込む動物のように走って行った二人の乙女あわれにもいとおしく思われるのである。

あの時の朝子は単つの存在であったように思える。不完全で多くの未知数のものを隠し持っていた。

あの日から半世紀という月日が流れた。夫ができ、子供が生れ、更に彼等にそれぞれ連れ合いが出来、そして又孫達が生れ、朝子はもはや単一の存在物ではなくなっていることを感じる。充実していると言えばそうかも知れないが又それらはしがらみと言えないこともない。そしてその長年月の間には何んと沢山の経験がそこにあったことか。現実のものとなって顕われ、そして過ぎ去って行ってしまった、この半世紀間の出来事すべてが未だ未知数であったあの時。春の宵の空に光る星にも似て、孤独で純粋でまた不可思議でもあった青春の時代。あの時代を心からなつかしむのである。

或日のこと朝子は十三年度の日記のすべてを通読してみた。そしてその昔に記した時は勿論のこと、ずっと経ってからでも考えたり思い出したりもしなかった事柄がこの日記の中にはあるんだということを発見した。大変忙しい学生生活の合間に書いたものであり、ごく簡単に省略して書いたものも沢山ある。何日分かを溜め書きしたことを断わっている個所もあるし、勿論書落しもある。

書き落したのに思い出の中に残っているものもある。誰か他人に読んで貰うためにそれ等をダラダラと書きつないでいくことには一寸疑問があるし又劣等意識も大いに覚えるのである。

しかし、そのポツリポツリとした又ダラダラした一見くだらないような事柄の連続の中から　はっきりと姿を浮かび上がらせて来る三つのテーマのあることを発見するのである。長年の時の経過が混沌とした事柄の集積物の色分けをなしとげてくれたのであろうか。

先づその一、というのは

十三年四月には国家総動員法が発令された。戦場に在る者も銃後に在る者も一丸となって戦争目的を果たすよう努力すべきことが法令化された。そのことが学生生活に織り込まれてきたことが表われている。戦時色がヒタヒタとしかし一段とはっきり塾の学生生活の中にはいりこんで来ていた。しかも学生達は、或いは教師達も含めてかも知れないが、先行きあのような敗戦の結果を迎えるというような事は想像することすら出来ずに生活していたということ。

その二、というのは

朝子のヴアイオリンを通しての蜂谷先生に対するあこがれ、愛、更にやはりヴアイオリンを熱愛していた下級生のSさんとの　あつい友情。

その三は

ドンというあだ名のボーイ・フレンドとの交わり、そしてわけの分からぬ不安と悩み。又結婚というものを真剣に考えねばならなかった日々。というように三つの事柄が語られていることに気づくのである。

これ等の三つのテーマを月日の順序を無視して一つづつの作品とした方が朝子にとって書き易いかと思ったし又読者にとっても理解し易いように思えた。「まんじ」の発行は三ケ月毎だし間隔の日数が多い。三つのテーマが交じり合って語られていくと或いは事柄の連続性を見失ってしまわないかという懸念がある。

しかし朝子は読者のことはあまり考えないことにした。たゞ、一つの記録として書くことが目的なのだということを自分に確認させ幼稚で馬鹿気たことも気にしないで月日の順序に書き進むことにした。

それで人によってはつまらぬものと思うことも想像出来るが我慢して判読下さることをお願いしたい。

そして再度お願いしたいことは津田塾（当時は津田英学塾、現在は津田塾大学となっている）はあくまでも厳然とした英語を主とした専問学校であったので、この日記はその本筋の学生生活の記録ではなくて、いわば道草の生活の記録であることを御理解いただきたい。それでなければ真面目に勉強にとりくんでいた優秀な人達に申訳ないので。

昭和十三年度にはいる。

四月二日

前の晩に下級生の相馬さんに七時に起こしてねと頼んでおいたのに六時頃に起こしに来た。ねむくてとても起きられず八時迄寝てしまった。大急ぎで朝食を食べたりして八時五二分のバスで高円寺の蜂谷先生宅に行く。何故だか知らないのだが何んとなく今日はみじめな日という予感があった。

ローデの協奏曲八番第一楽章の三頁目の所は十六分音符が連らなっている中にトリルが所々はいっていて難しい箇所であった。トリルを適当にごまかせばタイムが適確に合っていくのだが正直にトリルをいれようとするとテンポがどうしてもおくれ勝ちになる。何度かやり直されても未だモタついているので先生は俄然ヒスを起こしてしまった。おこって無理なことを言うのでますます弾けなくなる。止めてしまうと練習不足だとおこる。弓でパンパン譜面を叩いて調子を私に知らせようとする。あまり夢中で楽譜をたたくので弓から松やにのほこりがボーッと立つのが見えた。そのほこりを見た時、これは一寸ただならぬ事態になってしまったことを感じた。あまり激昂して来るので一体どうなることか、もう先生の所に習いに来るのもこれで最後かなとも思う。次にレッスンを受けるMさんやSさんのいる手前、一寸気まずいし恥かしい。先生は

「あんまり呑気すぎる!!　こんなのは性質からくるんだ」とキンキン声でどなる。私は自分の弱い所をつかれた思いだ。一寸昔だったら泣き出していたかも知れない。しかし涙は出て来なかった。何故ってその箇所は難しい所であり練習時間も足りなかったし今日はそんなにちゃんと弾けるつもりでは来ていなかったから。先生ははじめに

「こゝ一寸むずかしいし、今日は初めてなんだからゆっくりやってみましょう」と言っておきながら怒ってしまってからは無茶苦茶に早く弾くのでとてもついていけなかった。

私の練習態度もよくないと思う。自分を苦しめてどんな無理をしてでも出来ないことを出来るようにするということをやらない。自分で出来る範囲の練習しかやらない。しかし先生も確かに少し無理なことをおしつけるものだと思った。自分の不快な気持を我慢しておさえつけ喉元が苦しかったが涙が出るのを止めることが出来た時はホッとした。

練習が済んで先生の家を出る時に先生は何時になく、玄関まで送ってくれた。その時先生が慰めるような調子で何か喋ったが何んて言ったのか分からなかった。私はただ、先生の眼だけをジッと見ていた。その眼は今でもすぐに私の頭の中に浮かび出る。何んて形容したらいいんだろう。澄んだ瞳汚れなき眼光、希望に満ち溢れた目、

子供の如き同時に神に近いような精神を表わす眼だ。

兎角、茫然として路に出る。「呑気な性格」、自分の良からざる性格を指摘されることは何んと悲しいことか。それに自分の才能にだってふだんからその貧弱さのために少なからず幻滅を味わわされているのに。もっと自分に能力があって自分の性格がもっと物事に対して真剣に取りくむ性格だったら……と自分にはあまり責任のない筈の才能とか性格が結局は自分が責任を負わねばならぬという苦しさを思いつい涙があふれそうになる。

横丁から出て人通りの多い路に出る。泣いたような顔をして歩いているのはみっともない。喉の辺りでぢっとこらえてどんどん高円寺駅の方に歩いて行く。新宿までの切符を買って省線に乗る。前に坐った女学生がジッと私の顔を見ていた。ひょっとすると私の鼻が赤くなってるのかも知れないと思った。斜めの方向をむいて窓外を見ると外は一面、春の正午の光で満ちくていた。きたなく重なり合った家々の間から三分開きの桜が見える。ふと青空に浮かんだちぎれ雲を見た瞬間、又先刻の悲しさを思い出し涙があふれそうになる。でもせき止めた。

新宿で下車して駅外に出る。交通のはげしい通りを横切って青バスの停留所に行き銀座築地方面行きのバスに乗る。バスの中では外の景色を見て少し気分がまぎれる。日比谷で降りて日比谷劇場にはいった。丁度「オーケストラの少女」が終りに近づいた所でストコフスキーがピアノを弾いているあたりだった。スクリーン一杯の美しいデイアナ・ダービンの顔を見たり彼女の美しく楽し気な歌を聞いたりしているとそれ等に刺戟されて今までこらえていた涙がどっとあふれ出た。もう此所は暗いんだからどんなに泣いたってかまわない。美しい音楽とクローズアップのダービンの喜びに満ちた大きな顔はいよいよ私を泣かせた。暗闇の中で思う存分泣いて自分を慰めることにする。だって此所以外に一体何処でこんなに沢山の涙を流すことが出来ようか。

次のスリー・スマート・ガールズとニュースを見て又もう一度「オーケストラの少女」を見た。終り頃になると泣いたためと汚ない空気の中にいたためで頭が痛くなる。

三時過ぎ頃に映画館を出た。いく分ミゼラブルな気持は慰められて。一人で銀座の方に歩いて行く。友達もいないで一人ぼっちなのが淋しい。母親と一緒に楽し気に買物をしている同年令位の人を見ると　春先だというのにうかつにもモッサリした冬仕度という恰好で外出した自分の姿までがあわれになり、家が恋しくなって又涙がにじむのである。

少し買物をしてから帰途につく。国分寺駅に降りてから行きつけの散髪屋さんに行く。此所では散髪屋のおじさんはいやに陽気だ。近頃、此所に来る外国人の話をしたり、英会話の練習をすることが是非とも必要だとチョ

キチョキはさみを入れながら何度も繰返えした。しまいには私に色々な会話を教えさせ始めた。そして何度も温かい蒸しタオルで顔や首すぢを拭いてくれた。

「七時半のバスに間に合いますね」と言いながら背中に落ちた髪毛をはたいてくれた。

バスに乗る。満員なので悪臭がした。校門の前で降りる。路はまっくらだ。枯木林の枝を通して星が五つ六つまばたいているのが見える。急に怖くなって急ぎ足に寮にとび込む。八時近くになっていたが誰もいないひっそりした食堂のテーブルに未だ夕食が残されていたのでそれを食べた。

自室に戻ってベッドにもぐり込んで本を読んでいたらモン子がやって来た。モン子は何んだかとても憂鬱そうな様子だった。しかし更に私の方が憂鬱だった。モン子が

「今日、映画みてきたの？」と言った。私はイライラしていて見たというのが何んとなく理由もないのに癪だったので

「どうして？　見たって見なくたっていゝでしょ」と言った。こんな問答を一寸の間しているうちにモン子は黙ってしまった。私はベッドの中でじっと、ただ本をみつめていた。モン子は椅子にかけて何かの紙片にやたらと何かを書きなぐっているようだった。私はモン子の顔をチラリと盗み見た。モン子の眼も少し赤くて悲しそうな顔をしていた。急にモン子が

「あなた、私に対して何か怒ってるの？」と言った。

「いいえ、何も怒ってなんかいないわよ。何故そんなことときくの」と答えた。

「あなたが見たって見なくたっていゝと言ったのを私に対する何か皮肉かと思ったの」この時、私は何故だか知らないがモン子の憂うつさが嬉しくなってしまった。

「そんなことあるもんですか」と明るい調子で言ってモン子の顔をジッと見た。私は又ベッドにもぐり、モン子はしばらくじっと椅子に坐っていた。そして

「もう帰るね、さよなら」と云って室を出て行った。友達に部屋を出られる瞬間はフッと淋しさが胸をよぎるものだ。

しばらく読書してスタンドの電灯を消し眠ろうとした。すぐには眠れない。そのうちに自己嫌悪感が湧いてきてふとんの中でもモゾモゾ動いたり寝返えりをうったりする。雑木林にあたるザーザーザという連続した風の音に、時折松の木を鳴らせるゴオッという風の音がまじって聞こえてくる。その音を聞いていると何時の間にかベートーベンのシンホニー第六の或る部分が頭の中一杯に鳴りひびきはじめた。

四月三日

八時過ぎ起床　朝食後、鏡子さんからの小包が食堂においてあったので嬉しかった。小林さんと相馬さんが私

の室に来て小包を開ける喜びを一緒に味わった。開けてみたらカステラだった。皆で食べた。

午後坪内逍遙の参考書を見ながらシェクスピアの「As you like it」を読み始めた。逍遙の学者としての偉さにすごく感心した。夕食までヴアイオリンの練習。夕食後は河瀬先生（姉の友人で先生の卵）が私の室まで遊びに来て八時頃までお喋りした。自分より二つ三つ年令の上の人と話すのはとても面白く楽しかった。河瀬先生の個性のユニークさにふれたからかも知れない。

四月四日

八時半起床

朝食後に「西洋音楽鑑賞」という本を読む。中々まとまっていて分かり易いよい本。昼食後に鏡子さんに小包の御礼状を書く。

寄宿舎の居残り生の者達が数人づつに分かれて塾長にティーの招待を受けていた。私達は三時過ぎにうかがった。苺のショートケーキと中村屋の支那まんをごちそうになった。きようはミス・ハツホンも姿を現わして下さり彼女の提案で rhyme game という遊びをした。それはヂェスチャーをして見せると同時に同韻の単語（eye-sky:girl-bird）を言って相手に当てさせるものであった。

塾に入学した時に白髪の輝く一きわ老令の先生が目についた。その先生がミス・ハツホンであった。彼女は津田梅子のよき半身として労苦をともになさり梅子先生の没後も長い生涯を塾に献げた。関東大震災で焼けた麹町の校舎を国分寺の小平村に建てるにあたり彼女は単身渡米して五十万ドルの復興資金の募集を成功させたということである。その前年の大正十一年に小平の土地が購入してあったことは幸せであった。（坪あたり四円で二万五千坪余が十万円であった由）

震災直後、横浜が未だ廃墟であった一二年の九月のことであった。乗船設備もない危っかしい細いはしごを登って避難船に乗りこんで募金の為一時帰国されて行く六十才もかなり越えたミス・ハツホンの姿は神々しくも見えたということである。

夕食後　誰からともなく急に伊豆に行ってみようという話になった。旅行希望者は佐々木昌子（大連）矢野（京城）それに台北出身の朝子やモン子達　数人であった。早速藤田先生の家に行って　外泊届が来ないうちに出かけてもよいかを尋ねた。（外泊は保証人からの届書が提出されなければ許されていなかった）　先生は塾長に相談した上で許可して下さり　なじみの相模屋旅館を紹介して下さった。　先生方も丁度　熱海に出かける予定であったので宿屋に私達が落付いているかを見に来て下さることを約束した。　又先生方の宿泊する家の電話

番号も教えて下さる。

寮に帰ってから親せきの山崎と戸栗にはがきを書き日記をしたためているとモン子が私の室に入って来た。ベッドにドカリと坐ってしばらくすると彼女は言った。

「あたし、どうしていいか分からないの。お友達がみんな信じられなくて……」とやりはじめた。お友達の中の誰かに、或いはひょっとすると友達のみんなから軽く視られているような気がして悩んでいるということらしかった。私はただフンフンと聞いているだけで何も言えなかった。だけど私は思った。『人間は結局　皆悪いんだ!!　友達を皆　許さなければ生きてはいかれない。寄宿生活に於てはね』　十二時過ぎに寝た。

四月五日

よく寝すごす私だから頼んでおいて六時前に起こして貰う。　ベッドの中から先ず窓越しに空を見るとよく晴れていた。旅行の用意をして朝食を済ませ、皆で七時十分のバスで国分寺駅へ。東京駅八時四十分発の列車にどうにか間に合った。汽車が動くにつれ、二時間もたゝぬうちに久しぶりに海が見られるんだと思うだけで嬉しくてわくわくする。沿線に満開の桜や桃の可愛らしい花が見えたりする度に皆歓声をあげた。熱海駅には十時半頃着きバスに乗って伊豆山の相模屋旅館に落付く。お昼には一寸間があったが、皆おなかがすいていたのでお握りを食べる。とってもおいしかった。

食後、近辺を歩き回って写真を撮ったりした。青くて広々とした春の海を背景にした桜や　緑色の濃くなっている麦畑　黄色の菜の花　又夏みかんを沢山ならせているお山など何んとも言われずのどかで心地よい眺めであった。

浜辺は丁度干潮だったので砂浜の上で遊んだ。宿に帰り、温泉にはいり、出てから縁先の安楽椅子に腰かけて潮風にあたりながらのんびりと海を眺める。四時半頃に宿の人の案内で伊豆山神社の方に出かけた。夏みかん畑に入ってみかんのついたまゝの枝を切って貰った。宿に帰ったら丁度塾長と藤田先生が訪ねて来て下さっていた。私達の部屋に一寸だけあがって来られ、ぐるりと見回わしてすぐに帰っていかれた。

夕食には寮では食べられないようなおいしいおさしみや照り焼などが出た。夕食後に先輩で姉の友人でもある奥田彰子さんに絵はがきの手紙を書いた。

夜には皆でナポレンをした。やり方がみんな上手になり、だまし方も上手で副将だとばかり思って点をつけてやってた人が後で聯合軍と分かりとてもくやしかった。何時もひとをだます戦術にたけていた私は今晩はたんまりだまされてしまった。

入浴して波の音をききながら皆一緒に眠った。

四月六日

八時頃皆一せいに目を覚ました。みんなで千人風呂に

行き、つかりながら海を眺めた。あがってから海を渡って来る風にあたりながら、あっさりした朝食をとった。十時ギリギリまで又トランプ遊びに熱中した。それから勘定をして貰い宿屋を出た。宿のおかみさんが親切で愛想がよいのが気持よかった。歩いて本道に出た。海岸沿いの道を湯河原までドライブした。湯河原で公園の中を散歩していたら高野貞子さんにバッタリ会った。別荘に来ているとのことであったが珍らしくもよく会えたものだ。

国府津駅で又下車して駅弁を買い海岸で食べた。砂浜が広々としていてよい海水浴場のようだ。食後、砂の上に皆ねころびお喋りをしたりウトウト昼ねをしたりした。波を見ることと波の音を聞くことは何んて気持のよいことなんだろう。

帰途についた。四時過ぎに横浜駅に着いたので皆と別れて叔母の戸栗家に行く。家族は皆留守で　かねさん一人が留守番をしていた。応接間でアルバムを引き出して見ていたら私の赤ん坊の時の写真があった。私がはじめて見る写真だったので面白くあとで頼んで貰うことにしようと思った。それから父の若々しい時の写真を見た時はしみじみなつかしい思いがした。今のように眼付きが柔和でなく鋭く光っていて、あごの辺りはやせていて、くそ真面目で強い意志を表わしているように見えた。

皆が帰って来てから夕食をした。夜になってからこのうちの叔父さんの弟とかいう董雄おじさんが訪ねて来た。写真を撮るのが上手だとかいうことで戸栗の娘達三人と私はマントルピースの前で一人づつ写して貰った。十一時頃寝た。

四月七日

うすら寒い日だったので一日中ほとんどおこたの中でキャサリン・マンスフィールドの短篇集を読んだ。

四月八日

いとこの君ちゃんと一緒にルミ（犬）を連れて裏山の方に散歩に出た。犬ってほんとにかわいいものだ。私がカラスの鳴声を真似したら一生懸命私を見つめて不思議そうな顔をしていたが遂に飛びつきそうになったので鳴きまねはやめた。よその犬と友情が成立するのも見ることが出来た。

帰宅したら叔父さんは風邪気味だといって床をとってやすんでいた。

十一時頃皆にさよならをして君ちゃんと一緒に伊勢崎町に出かけ日活の「忠臣蔵」を見る。面白くなかった。出てから「曙」で一緒に食事をした。母の妹である戸栗のおこうばさん（お幸おばさん）は私が寮に帰る時にはいつも映画とお食事をおごってくれた。玄関まで送ってきて

「ぢゃあ、朝子ちゃん、又いらっしゃいネ今度のお休みはいつ？」そして長女の君ちゃんにお金を手渡しなが

ら

「君子、じゃあ　これでね」と言っていくばくかのお金を手渡すのが常であった。

桜木町まで歩き東横で渋谷に出てから寮に帰る。一休みしてヴアイオリンの練習をしていたら弓がバサリッとばかりこわれて吃驚した。予定していた今夜の練習が出来ぬため当惑した。

部屋に帰ったらモン子がトランプを持ってやって来た。大原・矢野・田中米子さん達も来て又ナポレオンを始めた。私は疲れていて眠たくもあるしそれに明日のこともあるしで気になるのでいいかげんで止めたかった。しかしモン子がすっかりお調子にのっちゃって何度でもやりたがるので我慢してやりつづけ一時頃にやっと寝ることが出来た。

四月九日

蜂谷先生の所に出かける。あまり練習も出来てないので心配しながら行った。先生はすぐ「竹内楽器店」に電話して弓を取り寄せ、よいのを選んで下さった。

夜は東寮での最後の晩なので東寮の同学年の人達と一緒にチリ鍋会をした。明日は自分の住家の西寮に戻るのだ。

四月十日

朝食後、お引越しの用意をしてから西寮の自室の掃除のため帰ってみるともう矢野さんが玄関にがんばっていた。きょうは新入生の人達が入寮して来るので玄関番が必要なのだ。お引越しを済ませてからは一日中　大体玄関番をして、次々にやって来る新入生を部屋に案内したり学生ホールの中にある消費組合の売店に案内したりした。夜ヴアイオリンの練習。

四月十一日

朝、室を整頓していたら鏡子さんが福岡から帰って来た。新鮮な雰囲気を持ち込んで。

四月十二日

始業式、いよいよ最高学年だ。

四月十三日

はじめて授業が始まる。三年生の授業は面白そうだ。放課後すぐに蜂谷先生の所に行く。今朝は早起きして六時頃から学校に行き掲示板前の廊下で猛練習したかいが少しはあった。発表会が近いのでレッスン日以外にも練習に行くのだ。だから何時もは会ったことのない田中さんという奥様や立教高女の生徒だという可愛らしい少女にも会った。夜は八時半頃まで新学年に備えて、寮の委員長としてしなければならないいろいろな用事で時間がつぶれてアメちゃん共々くたびれてしまった。いよいよ勉強という段にはくたくたしてしまい気がかりな予習は明朝に回わすことにしてベッドにもぐりこむ。

四月十四日

昨夜は夜中に何度も目が覚めた。月が皓々と光ってま

ぶしい位だったことを朝目を覚ました時に、うすぼんやりと思い出した。

三年生になると放課後に希望者はタイプの授業を受けることが出来た。先生になって来た人はアメリカ二世の若い女性で、私達の知っているあの温室の花屋さんの娘であちらでタイピストとして働いていた人であるそうだ。日本語は未だ話せない。

学友会の体育部の備品として紅白のタスキを作ることになっていたので、夜アメちゃんや伊藤さん達に手伝って貰い、ビスケットをバリバリ食べながら縫った。

父に久しぶりで手紙を書いたが風がひどくてピューピュー音がして心細くこわかった。予習をしてから寝たが寝つきにくい位風の音がしていた。

四月十五日

新入生歓迎会（学友会主催）があった。半分位までしかいないで帰寮。夕食後、寮の委員会を開く。

四月十六日

蜂谷先生宅へ

四月二十日

午後の休講の時間に二時頃から椿さんモンちゃん達と自転車に乗って村山貯水池に出かけた。帰途、道をまちがえて所沢の方に行ってしまった。

四月二十三日

蜂谷先生宅へ

四月二十八日

三年になってから粕谷先生の授業では **The Ordeal of Richard Feverel**（**Gorge Meredith**（1826-1909））をすることになった。大変難しいようで、はじめのうちはとても丁寧にやった。いつものことだが作者の書きぶりに馴れてくると早く進むのだ。

放課後、音楽部がレコード鑑賞会を開いた。ハイドンの略歴の説明があった。サプライズ・シンホニーのレコードが間に合わなかったのでベートーベンの第七と第八シンホニーを聞いた。

暗くなってから運動場の芝生の上でヴアイオリンの基礎練習。真暗なのがこわくなったので寮に帰る。途中で下級生のIさんにつかまった。彼女はパーマの頭髪を高々とモッサリふくらませ、強い近視の小さい目で　人をきつく見る人だ。彼女はマーラーの音楽について盛んに話しかける。そして大好きだとも言った。私はマーラーに就いては何も知らなかったので少し恥ずかしかった。彼女は私のこと軽蔑したかも知れないと思った。でもいつまでも私について来て、とうとう部屋の中まで入って来たので軽蔑はしなかったのかも知れない。

矢野さん栗田さんとで学友会の運動部のこの一年間のアクティビイテイに関して色々と話し合った。

四月二十九日

朝食後、室の掃除をしてから新聞を読んだ。栗田さん

を誘い他の運動部の人達にも頼んで体操場の中の更衣室の掃除をした。ロッカーの中には色んな忘れ物が入れっぱなしですごく汚なかった。

十時から小講堂で天長節の式、式後、五十嵐力氏の「日本に生れた有難さ」という講演があった。

午後は時間があったので三年になってからのノート整理をした。

夕食は東寮と西寮の三年生が集まってスキヤキ・パーティー。おなかがふくらみすぎて痛くなる位沢山食べた。そのあと寮の中庭に坐って阿部さん・鏡子さん達とターザンの叫び声を真似るコンクールをやった。

室にもどり教育学のノートの整理をしていたら新入生の長瀧さんの室が火事だあっ!!　という。一番にかけつけてふとんを被せて火を消した。ボヤにしては一寸ひどかった。その晩は舎監と相談して、外泊で空いていた増川さんの室のベッドで長瀧さんがねられるようにしてあげた。新入寮生だのに、こんな事件を起したのでおいおいと泣いて泣いてほとほと困ってしまう位だった。

彼女は名簿をみると、とっくに死亡している。火の気なんて全然ない筈の生活だったのに何が原因だったのかと思うがカイロか何かだったのかも知れない。彼女の新品のきれいなお布団を大なしにしてしまったこと、あの時は何んとも思わなかったが、今では一寸だけでも謝まりたい気もするが。

火事騒ぎのあと、浅田、瀬戸口さん達とリク・に行き鏡子さんの兄上から借りてきたクロイッツエル・ソナタのレコードを聞いた。十時半就寝。

四月三十日

先生宅でのヴアイオリンのレッスンのあとで増川さんに頼んで楽器を持ち帰って貰い新宿に出た。矢野さんと待合わせてオリンピックで食事を済ませた。九段行のバスに乗り岩波書店前で降りた。靖国神社に沢山の人達がお参りしていたが一寸だけ中の方を覗いてみた。

四時位まで古本屋に片っぱしから入っていろいろな本を見て歩いた。一誠堂で楽譜（ヴィオッテイ作　ヴアイオリン二重奏、ピーターエディション）を買った。

夜、増川さんが来て

「東北旅行に行くの？　それとも行かないの？　早く決めてよ」とせまる。一寸迷っていることがあるので速答しかねた。

五月一日

朝食後、ブルーマーとブラウスにアイロンをかけた。体操大会に出席するため、アメちゃん達グループの数人達と連れだって千駄谷の神宮外苑に行く。入場式の時はものすごく埃がたって息も出来ない位。夏のように暑い日で陽なたに坐っているだけでも相当くたばった。男子

体操学校の生徒達のタンブリングは見事だった。私達女子の専門学校生の行進ダンスもとてもきれいだったらしい。帰寮して夕食をすませすぐ入浴して頭のてっぺんから足先までよく洗ってやっとスッキリ気持よくなった。鏡子さんと増川さんが私のため慰労会としてお茶によんでくれた。自室に帰り訳の予習と日記四日分記す。

芹沢さんが蜂谷先生からの言伝を次のようにしてくれた。「五月二十九日の発表会の折にはピアノの遠般賃や会場を借りる代金は弟子達が出すということ。又それは一人当り十五円になるが学生である私達は十円でよろしい」ということであった。この頃、度々家の方にお金を請求しているので又この代金を請求することは遠慮したいと思った。それで卒業前の記念の東北旅行だけど、それに参加しないことにして積立金十二円返して貰ってそれを当てることに決心した。旅行に行かないことは全然残念でもないし、又誰も理由をききもしない。

五月二日

朝目ざめると眠いのと疲労とでフラフラで起き上がりたくなかった。でも「リーディング」の先が読んでないのであわてて起きて予習をした。

放課後は、各学年の合併教室に行って黒板に次のように書いた。

（通学生で昼食を食べに寮に来る人達に告げる。どうか土足であがらぬよう上履に、はき替えて下さい）

きょうはタイプに出席した。

夕食後にたまった新聞を読んだ。モンちゃんにミツ豆をごちそうになった。

十時前にアメちゃんと舎監の所に行き寮の規則書で変更した所があるので見ていただきロシヤチョコレートをごちそうになった。

（未完）

噴火島の聖者

大和禎人

もしかするとこれが高取さんの元気な姿の見納めになるのではないかと私は思った。

宇高連絡船はいま岸壁を静かに離れようとしていて、船上から見る高取さんの姿がひどく小さなものに見えた。（今生の別れ）を予感させる寂しい影を見たように思う。

（矢っ張り立って居た。何だか大変小さく見えた。）

という漱石の「坊っちゃん」に出てくる清との別れの場面に似ていた。違うところは駅のホームでなくこちらは埠頭であるということだった。

他に人影がなく、この人だけがわたしたちを見送ってくれていた。内海の連絡航路のことで、乗客をすっかり呑み込むと荷役に働く人々の動きを除いて、一時の、人の賑わいが汐をひいたようになるのが日常的な光景だから、それに慣れたこの場の情景には普通なら感傷なぞとりたててありようもないはずであった。しかし、船首の転回とともに埠頭が視野から消えた時、なぜか高取さんの面影は追いすがってきて、言い知れぬ切なさを焼きつけ、いまに残すことになった。港内の一角に造船ドックがあり、ちょうどタンカーらしい大型船の進水が行われていて、クス玉の割られる光景が目に飛び込んできたのを覚えている。

離島の勤めを了えてはや二年ほども経ったこの人の近況はあまり知られていない。

（時の人）であった高取さんはこの宇野からは近い離崎の人で、家は畳表に使われる葦草の産地で知られる地方の農家である。別に困ることのない富裕のはずだったが、勤めを捨てきれず戦後農地法上の不在地主にならないために農事はもっぱら妻に託し、単身在京の生活を続けてきた。遊学中の息子たちとは一戸を構え結構気楽に暮していたのである。意を決しての青ヶ島赴任はそうした身軽さからはうってつけの事情であったにしても、思

い切ったことに相違なく、まして一躍（時の人）になろうなぞ当人にしても思いもかけぬ成り行きだった。

「おれもなぁ、とうとう決心したよ」

「え、なにをです」

「うむ、あしたになればわかるよ」

駅前での偶然の出会いに足を止めて、これは高取さんから切り出された会話だった。さすがにその（あした）については口を固くするようすに、あえて聞くことを憚られるような響きがあった。気のおけない明け透けにものをいう人が珍しいことであった。

（ところで、奥さん何ケ月になる、そうかぁ、それじゃあ、いまごろは太平洋でゴボウを洗うようだろう）

笑い飛ばし相対ではそんなことも平気で言える人だった。無垢の人間味であったかも知れない。閉口するようなこんな会話には応えようもないのだが、奇妙に記憶に残っている。

それというのも、この人はわたしの遅れていた結婚の事情についてなにかと親身な心配をしてくれ、結局は別に世話をしてくれた人の勧めで、いまの妻をもらうという経緯もあったりしたからであろう。明け透けを物語るほんの一例にはなるだろう。

ところで、その当のお人がこの日ばかりは深刻な顔色でいたのを覗き見て、とっさには理解ができないまま別れ、それなり高取さんの方は薄暮の中を駅の方へ心なしか力ない足どりで横断歩道を渡って行くのを見送ったのだった。

青ケ島や、絶海浩渺の間なる一頃の噴火島、爆然轟裂、火光焔々、天日を焼き、石を降らし、灰を散じ、島中の人畜殆ど斃れ尽く、僅に十数人の船を艤して災を八丈島に逃れたるあるのみ、而も此の十数人竟に其の噴火島たる古郷を遺却せず、火の熄むを待つこと十三年、乃ち八丈を出で欣々乎として其の多災なる古郷に帰りき。

（原文のまま）

これは明治のというより、日本のと言うべき志賀重昂さんの名著「日本風景論」に見られる有名な緒論の一節である。志賀さんは青ケ島の天明五年乙巳三月の大噴火のありさまをここに叙して、とくに島人のこの時の大災害にかかわらず、故郷忘れがたく十三年を経て再び帰島している事実を、自然と人とのかかわりを説いてこのような感動的な美文を残された。

ここで志賀さんは八丈へ逃れ得たものを十数人としておられるが、当時の在家は八十戸、人数は三百四十あまり、このうち百三十ばかりが島より逃げおくれて非業の死を遂げたとする記録がある。おそらくはこれが真相であろう。三宅島の浅沼悦太郎氏の編まれた「三宅島歴史

年表」には同年の項に二百二人八丈島へ避難、とあってほぼ符合する。

また別に、井伏鱒二さんは昭和九年二月下旬、「青ケ島大概記」という作品を書いて、このへんの史料にもとづく実話に近い災害の物語を発表している。青ケ島の名主次郎太夫を主人公として、全文を候文にした独白体の小説である。

井伏さんは青ケ島をまだ見ぬままこの作品を成したことを正直に自記しておられる。あるいは井伏さんのこの小説の構想は源流を前記の志賀さんの文章あたりにたどれるのではないかという気がする。

ところで、高取巧さんがその青ケ島へ赴任することになった。

駅前の出会いのあの翌日、朝刊各紙は都下公立小中高の校長異動を報じ、青ケ島小中学校長として氏の名前を掲げ、発令を報道していた。

（あっ）

と、わたしは思った。発令前の口外をタブーとして高取さんは律儀に守ったのだ。氏にそういう側面があったことは意外だった。とかく、本人からこうしたことは漏れがちのものだからだ。

さて、ここでマスコミはとくに十年間も空席だった離島の人事をトピックスとして扱い、紙面を割く新聞もあって、わが高取さんは（時の人）として思わぬクローズアップをうけることになった。氏の心事から言えばまったく予期しないことであり、ただ戸惑う成り行きであった。

（おれもなぁ、とうとう決心したよ）

と言いながら、口を固くして語らなかった秘事が明るみに曝されて見ると、たちまち氏を知る周辺を聳動させるに足るニュースとしてもっぱらの噂が飛び交った。

わたしはかつて八丈島までは足を印したことがあって、その南端から青ケ島をそれと望見したことがある。海上はるかな島影を不気味な印象で脳裏に刻んでいるのはさきに引用した志賀さんの文章や井伏さんの作品などからの先入感からであったろうか。

今日でこそ八丈までは空路の便もひらけ、〝鳥も通わぬ八丈島〟ではなくなっているが、青ケ島となると、さらに雲煙渺茫のかなた、絶海の孤島という事情は少しも変りがないのだ。

高取さんのこの話の往時は三の日、八の日に八丈への定期航路があったが、さらに青ケ島へとなると月一回しか船便がなかった。それも風速五メートルの風でもたちまち欠航したものだ。港らしい港がないからであった。しかもその月一回さえ国の補助で運航されている「命令航路」なのであった。

いずれにせよ絶海の孤島、それも不気味な噴火島たる

を失わないのであった。

いよいよ高取さんの離島赴任のための船出の日がきた。昭和三十六年四月、すでに下旬に入ったその日は快晴だった。「壮行」という形容のふさわしい赴任の旅路が目前にあり、汐路遥か絶海の青ケ島に連なる海はすでに夏の気配を漂わせ波を埠頭に寄せていた。任命当局との赴任打ち合わせやら船便を待つ都合もあり、かれこれの時間が流れ去ってこの日を迎えたのだった。

荷揚げを誘導するホイッスルがひとしきりあわただしく、騒然として波止場らしい活気を呈していたが、いまはそれも止んで乗船タラップもいつか巻き上げられていた。

「かれ、あと二年だからねぇ、我慢して行きなさい、そう言ってねぇ、……特別選考を頼みこんでねぇ、これが最後のチャンスでしたよ」

武田信玄をほうふつさせ美事で艶々しい頭ろの持主、柏木末志校長の述懐することばが耳に入った。

いまは船上にあり、デッキに立つ高取さんの身上にこの日の運命をもたらしたすべてを言い尽くすことばだったように思われる。

（あと二年だからねぇ）

という、これほど言いあてて、旅立とうとしているその人の心事をうがち、悲壮を彩ることばはないであろう。

所属の長として部下を活かす道をひらいたこのひととしては、言わずにはいられなかったことに違いないのだ。

ほとんど高取さん一人を見送るために、埠頭は異常な興奮にかられる人々に満ち、報道のカメラマンの脚立なぞ押し倒されかねないほどの膨れ上りようだった。教員ばかりでなく、PTAの父母も多く来あわせていた。

（きみなぁ、校長なんて最後の最後チョッピリやれば良いんだょ、ほんのチョッピリとなぁ）

ひどく実感がこもっていた。よほど以前の話だ。戦後、管理職の立場は他の職業では考えられない教職員組合の没義道の前に受難の時代が続いていたからだ。

船上にある高取さんは白の麻服、パナマ帽という身装で、いかにも南の島へ赴くひとにふさわしい夏姿だ。デッキの手摺りによって時々手をこちらへ向けて振っている。

教頭から校長に補任される条件は最低三年はその任にあることがもとめられ、登用試験の受験は五十七歳を限られている。経営者としての効果は少なくとも三年その任になければ期しがたいという考えかたであった。カド番という言い方のその資格の枠を高取さんはすでに越えていたのだ。かつて当のおひとの呟いていたチョッピリがこれから先、二年であることは離島という特殊事情による例外人事なのであった。窮地に活路をもとめて赴任しようとしているひとへの悲壮感が見送る人垣のどの胸

にもおのずから沸き上がっていた。

いよいよ淡路丸の発船である。出帆のドラが鳴らされた。離愁を誘う、これほどしたたかな響きはあるまい。なにやら胸をつき、鉄道なら覚えることのない哀感をさらに重ね合わせる。この際だからことさらそう思われたのだろうか。

その頃の東海汽船発着所はいまと違い、当時国電の浜松町駅から海岸通りを行くと左手にあり、埠頭は喫茶室などにならぶ待合室が汽船を見下ろす高いところにあった。そのままで桟橋に降りないほうが、デッキの高さに向い合えた。桟橋の方では群れの中からさまざまな色のテープがほとんど高取さん一人に集中して投げあげられていた。

淡路丸なぞ、聞き慣れぬ船名であったが、戦時徴用されたままこの航路では花形だった橘丸などを失い、辛じて数を揃える海運事情はまだ続いていたのだ。わたしには思い出の船である黒潮丸はいまもこの航路に就航しているはずだが、この日は違っていたのだ。「黒潮丸」なら伊豆航路を行き、黒瀬川と呼ばれる黒潮の瀬を乗り越える赴任にふさわしいのに、と思うと少しばかり残念に思われた。ボロボロに疲れ切った船が船籍の流浪絶え間ない時代であった。

この発船間際、高取さんに並んでいったんは客室に入りながら、あらためてデッキに三人ばかりの人影が現れ、高取さんと並び手を同じように振るのが見えた。

（さっきのあの連中だ）

三人のうちの一人は本間直之氏、かつてわたしとは同僚であったり、その後は教頭仲間でもあった。いまは都のほうの指導主事だ。同行の二人の一方はA指導課長としてその風貌姿勢に覚えのある人物だ。このひとたちは理事局に属し言わば役人畑のひとたちなのである。予期せず思わぬ同船にこの場の空気を察し、そ知らぬ体もならず顔を並べることになったもののようだ。

「高取さん、ほんとう良かった、あのひとの苦しい立場もこれでねぇ、良かった、良かった」

この本間氏もさきごろまでは高取さんとは同じ区の教頭仲間だった。出会がしらに、数語を交わしてからわたしはそのまま控室に上ってきたのだ。

「で、あなたがたはどちらへ」

「八丈支庁要請の夏期研修があってね」

「それじゃ、青ケ島へも、この際高取さんを送りとどけがてらということもあって……」

「いやぁ、とても、とても、そこまでは……、あのひととはまったく関係なしなんだ、それにしても大変な見送りだねぇ……」

そうだったのだ。このひとたちは指導行政の立場にあって、任免の衝にあたるお役人はまた別のポストなのだ。

（とても、とても）ということばが白じらとした響き

を与え、しょせんは同舟とはいえ呉越ならぬ（無縁のひとたち）なのだ。（良かった、良かった）と言うのも（口頭の禅）としか受け取れないものだ。真実味を欠いて聞えるのはこの場に溶け合わぬ、口舌を世すぎとする異質の世界のひとたちであったからだろう。

いくぶんかはテレ気味に、三人はそれでもなお手を振っていた。

「祝栄転青ケ島小中学校長高取巧先生」

そのひとの人徳を物語るこうした横断幕も若い先生たちの手で上甲板に掲げられていて、この場はあくまで高取さんの独壇上でなければならないはずだった。三人の手を振る姿はなんともそぐわぬ光景としか思えないのであった。

スクリューが波を蹴って、徐々に船首を南に換え、（蛍の光）のメロディーの中を淡路丸はまさに岸壁を離れようとしていた。

「バンザーイ」

という声が沸き起った。竹芝の埠頭にあまり例のないどよめきであった。

紙テープが風にそよぎ何本もすがるように船を追い、そしてやがて切れ、舞い上がった。

高取さんに追随し、取材したアサヒグラフの記者はスナップ写真とともに次のような記事を書いた。

新校長高取先生の第一歩、すべる突堤にしがみつき、ゆれる舟からとび上った。

三宝港は絶壁の下で港とは名ばかり、崖崩れの岩が時々転げ落ち、海上からは高い波のうねりが押し寄せる。島にある舟らしいものは二隻の艀と、数隻のカヌーがあるだけで、それもふだんは絶壁の上まで吊り上げておかねば、波にさらわれてしまう。舟を陸揚げするためのころばしと、繋ぎ杭が突堤から崖の中腹に梯子をかけたように見える。

定期の便船の入った日は学校は臨時休業になる。そして、島中の住民が突堤に群がってくる。

郵袋が下される。すぐに分けられて、その場で封が切られる。すぐに返事を書かないと、船はまたいつの日入ってくるかわからないからだ。郵便物にかぎらず、届けられた小包、新聞、雑誌、数少ない書籍。みな孤島の人々にとっては他の世界を結ぶ貴重なよすがなのであった。

岩場に腰を下ろし返事を書いていると、着ているものが湿気にジットリ濡れてしまうのだった。

島にはクルマが一台もない。新校長の荷物も中学生がひく牛の背で運ばれた。

アサヒグラフの記者はさらにこう紹介している。

小中学生あわせて九十三人は思ったより多い。もちろん複式学級で小中を合わせる学校であることでは伊豆の七島中他にも例があり、決して珍しくはないが校長不在

十年に及んでいたのはとりわけ東京から三百六十キロの絶海に浮かぶけし粒のような孤島、僻地の中の僻地という事情によるのであった。学校があってもその校長の空席であることは島にとって久しい不満であった。

昭和二十七年にほぼこの一島の年予算に匹敵する二百五十万円を投じて建設された学校は島一番を誇る建物であった。島人の素朴な熱い教育に対する期待と願いが伺われる。また、その校庭は島内唯一の広場でもあって、運動会ともなれば全島約百世帯、三百数人の島人が楽しみにして集まる場所にもなっていた。そうした学校に校長が長く不在であったことは島民にとり、たとえるならダルマの目に墨を入れない痛恨事なのであった。東京都民でありながら都政の至らなさを恨みにしていたのだ。

ともあれ、新校長高取巧先生は島人渇仰の着任を果たした。

高取さんを迎えて牛をひき荷物を運んでくれた生徒は浮田ミサ子だった。

「校長せんせいはやさしいひとだよ、ミサ子あたまをなぜてもらっちゃったの」

新しい校長先生に頭を最初に撫でてもらったこの子はそれを一生忘れないだろう。浮田姓は八丈流人であった大名宇喜多秀家一族の流れを汲むものかも知れない、高取さんは乏しい知識の中でそんなことを考えながら、この子に荷物をまかせ、あとについて急傾斜を登った。

ミサ子はニコニコした良い子であったが、身装は貧しく島の生活がどんなものか、上陸第一歩の高取さんの胸にいたく響くものがあった。

〈新聞もこないし、ラジオも電気も……なにもない〉

〈人間も牛めも、豚めも……カンモ（サツマイモ）を食って生きている……〉

これは「くろしおの子ら」という島の子らの文集に収められている作文である。先任のT教諭がまとめた本である。Tは長く島にあり高取さんとは入れ替わりに本土に帰任している。校長職務を代行してきたひとだが、そのころ簇出の傾向にあった無着成恭の「山びこ学校」の亜流を免かれない本を出している。「山びこ」が「くろしお」に置き換えられ、題名の平仮名のニュアンスまで模倣臭い、山に対してこちらは海、孤島の子らの書いた作文集なのであった。

生活綴方と呼ばれるものの先駆となった「山びこ学校」は昭和二十六年、青銅社というところから出版され、全国的に大きな反響を呼んで、たちまち十数万部の売れ行きを見たという。山形県南村山郡の山元中学校の二年生四十三人の生活綴方を無着が集めたものである。戦後の東北の貧しさ、山村に生きる人々の姿と生活が、子供たちの目によって克明に描き出され、紹介されたものだった。青ケ島の子らは全校合わせても九十三人なのだから、

いっそう（瞳の数）は少なく、より稀少の価値をもったはずである。そして、Tがなにがしかの収入をそれによって得たというものだ。

だが、その「くろしおの子ら」は島人の感情を逆撫でするものとして厳しい非難を招いたのであった。

（先生は島を売りモノにしないで欲しい）

島人から真っ先にそう言われた。所詮島外の人間であったT、そのTに変って高取さんはこの島に来た。やはり島外の人間に変りない。

（Tさんは印税を学校の図書館にでも寄付すれば良かったものを）

と思える。

（わたしはTさんに代って、この島の聖者になろう、Tさんのおよそ十年が、わたしは二年だ）

だが、新任されてきた高取さんの教職余命がわずか二年であることは役場の幹部なら知っているとしても、大方の島人は知らないであろう。事実を偽るつもりはないが、Tに比べ、まったく違ったやましさを背負っていることに気づく。

（そうだ、聖者になろう、行い済まさねばなるまい）

うしろめたさを覆うために自らに言い聞かせたものである。

荒波に囲まれ、港がないため漁業はできない。農業は原始農業に近く、木炭と牛と、失業対策事業でわずかな現金収入があるだけ、村民税を払うのがやっとというのが大方の生活だった。

島の予算も大半を国や都の補助金に頼っているのが実状だった。公式の土地台帳さえない、言わば0番地の島である。

井戸を掘っても水は出ない。当然ながら天水を頼っている。飲料水はそんなわけだから、その溜め水の上澄みを汲み、フーッと息を吹きボーフラを沈めてから飲むのだった。

昭和三十二年にようやく選挙権の執行がはじまってからは、それでも少しずつ様子が変ってきた。

この選挙のときから超短波無線による電話が引かれ、東京はもちろん、全国各地とも通話ができるようになった。

夜は学校の先生がディーゼル発電機を回して役場と駐在に電灯をともす。自家発電の冷蔵設備も高取さんの赴任した夏から取付けた店があり、子供たちがはじめてアイスキャンデーを食べられるようになった。一軒きりのよろず屋でも保存食料やインスタント食品を店先に並べるようになった。

「タイショウどうかね、ちったぁ、馴れたかね」

タイショウ呼ばわりは島へ来てから、もちろんはじめてだった。相手は親近を示すつもりでそれを言ったらしい。駐在の浅沼だった。どこか社会党委員長の稲次郎氏に似ていた。浅沼刺殺事件はこの時から二年ほど前のショッキングな出来事だった。この浅沼氏も魁偉、ドラ声までがそっくりなのだった。浅沼姓はやはり土地の者だ。地方の駐在さんが名士あつかいされるように、例にもれずこの男も島の代表人物の一人に相違なかった。

「うむ、ありがとうよ、ちったぁね」

高取さんは敬意を表し口真似の鸚鵡返しに、自尊を傷つけぬ程度にそんな応酬をした。相手から近づいてきてものを言ってくれた、そのことだけでも、いまの高取さんにとってはうれしいことだった。

「そうかぁ、よかったな、ま、しっかりとな」

無雑だが、この男が寄せてくれた好意はうけとらねばならないものだった。

教職者の（聖職意識）は戦後の組合運動の中で否定されてきたポイントの一つである。いまや、まったく抹殺された葬られた意識と言っても良いだろう。高取さんはどちらかと云えば、あえてそうした意識を意識として捉えることも、また考えたこともなかった一人だが、

（しっかり）

という使命感はたとえ二年という残任期間にしても、心得にして島へ赴任してきたはずだった。

最初の夏休みがきて高取さんは東京へ帰ってきた。

「なに、すぐ夏休みだから、また、会えるさ」

という言葉通り、

また、

「陳情やら、その他の出張で行き来することが多くなるらしい、たびたび会えるさ」

とも言っていたことだったが、当の高取さんにしてみれば決して容易ではない月日が流れていたはずに思われる。

「新校長の抱負まことに肚んであることにうたれました、どうか先生、離島振興のため停年を問題とせず全力投球を期待申し上げたい、島の厚生課長をお兼ねになるつもりをもたれ、今後二年と言わぬ健闘をお祈り申し上げたい」

氏は苦笑をもよおしたようであったが、辛うじて堪えたように見えた。残任期間を承知していながら、空々しい美辞である。

高取さんを迎え、直前の任地であったK区、そしてさらにその前任区であるI区、それぞれに赴任が慌ただしいものであったので、改めて帰京を歓迎し、激励する趣旨の会が催されたものだ。

右のような美辞を述べたひとは高取さんの出身校の後輩であり、I区では先輩の高取さんが屈辱的な一年を教頭として仕えたひとであった。しかも体良く一年後にはK区に放り出されたという因縁も絡んでいたのだ。空々

しさもこれほどになると、したたかな役者の証拠なのだ。

高取さんを青ケ島へ栄転の道をひらき送り出し、かの日、埠頭に姿を見せた入道頭の信玄校長の方がよほど実があり、賢明なのではないか。いま美辞を述べたひともあの日、見送りの場に来合わせていたものかどうか、さっぱり覚えがないが、信玄校長の柏木末志氏の印象だけは鮮明に記憶に刻まれている。

高取さんにとってこの日はどう云う意味の日だったのか、なんとも言いようのない場面に終始した。結局退屈を我慢させられたのは皮肉にも主賓の高取さんであったようだ。何人もがこもごも立ち上り、孤島への赴任を壮とする賛辞を述べたが、それはそれらのひとがいざわが身に置きかえたとき、同じ勇気や決断をもてるものか、すこぶる覚つかないにかかわらず（他人ごと）に気安く口をはさむ響きさえ感じられた。美辞に飾られたスピーチにうんざりしたのだった。

席上の高取さんは訥々として、離島青ケ島の現況がどんなものかを物語った。

島の子供たちのためにテレビを、三年後の東京オリンピックまでに。

著しく不足している教材、教具の充実。

学校図書館の充実と島民への開放。

児童生徒の夏休みに都内本土への交換留学。

未文化の島の生活向上はまず学校の子供たちから。

噴気孔を利用した熱帯植物の栽培。

百数十の人命を呑んだ典型的二重式火山への観光誘致。

船便をいまより多く、そのための港湾の人工開発。

思えば空挙に等しいものが、どれだけ実現へ近づけるものか、二年の任期では覚つかないことばかりだ。

高取さんの帰京を待ちうけていたものは学校関係の人々、同僚、知友だけとは限らなかった。テレビ局をふくめたマスコミの度外れた包囲、歓迎のインタビューのラッシュに出会っている。

「話題の人」はもはや「時のひと」になっていた。

（聖者になろう）ぐらいの願望ではすまされない重苦しさがその身に襲いかかっていた。

果たして高取さんはこれからの二年の島の生活の中でそうした課題を果たし得るものか、

（わたしは教祖にはなれない）

管理職の資質として多く教祖的要素をもとめられる。高取さんはきわめてそれに欠けている。空々しい教祖にはなりきれない。島人には申し訳ないが、あと二年をひたすら正直に勤めよう。

（このところわたしは少々上ずっているようだ、いや、これはわたしのせいではない）

と、これは高取さんの心の呟きであった。

宇野埠頭での再会と離愁のあの場面は高取さんが農に帰してから四年後のことである。

わが高取さんは村夫子そのものの身装で、四国へ渡ろうとする昔の仲間の前に姿を見せてくれた。退職に際して氏は一片の挨拶状すら出すことをしなかった。生来の筆不精のせいでもあったが、せめて退職のときぐらいはと思われないではない。そうした俗間のことにこだわらないという、この超俗の姿勢こそはあるいは離島二年の困苦に耐え、その土壌にいっそうのタフを培われたものであったかも知れない。そんな、高取さんだから少なくとも、あの（先生、島を売りモノにしないで欲しい）という島人を裏切ることはなかったろう。確かなことに思える。

わたしたちの旅行日程はあらかじめ知らせておいたにかかわらず、なんの応答もないまま、埠頭に久々の姿を見せてくれたのだった。

「坊っちゃん」の清のようにわたしたちを見送ってくれる姿が小さく見えたという感想はそれが氏との訣れにつながるものであったからであろう。

平成と時代の改まった今、青ケ島の人口は二百二人という、高取さんの在島の時代よりさらに過疎を進めているようである。

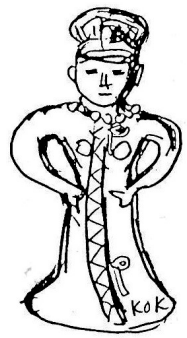
日本一の小さな村という新聞報道はあるいは誇張かとも思われるフシのものだが、ともかくこの孤島一村の中で有権者百七十二人による十四年ぶりの村長選挙がつい昨今の九月二十四日に行われ、八票差で現村長が敗れるという事態が起った。青ケ島独立の決意を鮮明にしたものともいうべき出来事が生々しく、しかも大きく新聞の紙面を占めた。

選挙の行方の鍵をにぎったのは学校の教師二十人の浮動票というところも面白く、「村の政治は村人で」というイデーの対立候補が、昨年九月、月給三十五万円、住宅付の条件で全国から公募し、結局大島署次長の警察官が応じて空席を埋めたという人事の排除を公約にするというものであった。

選挙結果はその公募助役を辞任に追い込み、また、これも空席久しかった総務課長に都の派遣職員をあてていた方も成り行き上、都が復帰させるという決着で、他にも吏員二人、それに保母の一人が辞めて島を去るという。課長の場合は島民に鎌を振るって追いかけられ、また桟橋から海に突き落されそうになったり、その上自宅を襲われ暴行をうけ、身の危険を覚え不安を訴えていたというものだ。島の生活はあいかわらず公共事業に頼り、手っとり早い収入になるせいもあって村役場の役人にはなり手がない。三十三人の職員の内七人だけが島の出身だという。

杳としてその後の消息を誰知らぬ高取巧先生にもし生あるとしても、もはや米寿、これらの報道記事を読まれたとして、はたしてなにを思われたことであろうか。

（元・九・尽）



働き手

柴田富佐子

「ねえ、お母さん、春ちゃんたら、又明日一人で出掛けるって言うんですよ」

夕飯の後片付けを済ませた桂子が、ダイニングルームとの境になっている襖を開けて、喜代の部屋へ顔を出した。

「又、高尾山」

「いいえ、今度は秩父ですって。何とかいうお寺に泊って来るんですって」

「大丈夫よ。春夫に限って悪い事なんかしないから」

「あらやだ。そんな事じゃないんです。一人で行ったんじゃ、どこか具合悪くなったって、どう仕様もないじゃありませんか。あたし、それが心配で、心配で」

「子供じゃあるまいし、心配する程の事ないわよ」

「みのるでも連れて行けばいいのに」

「一人で行きたいんでしょう。たまの連休なんだから行かしてやってよ」

「どうして、いつも一人で行きたがるんでしょうね。一人でなんか行ったって、楽しくも何ともないでしょうに」

（楽しむために行くんじゃないもの、一人になりたくて行くんだもの）という言葉を喜代は飲み込んだ。

（桂子には何にも解っていない）

田丸屋酒店の朝は、桂子の「御飯ですよ」の声で動き出す。春夫とみのるが三階の部屋から下りて来て、喜代が襖を開けて顔を出せばすぐ食事が始まる。

桂子は実にこまめに動く。食事をしながらも、みのるに「忘れ物ない」「集金袋はちゃんと入れた」「ハンカチは」と声をかけ、喜代の食が進まないと「お母さん、どっか具合が悪いんじゃないんですか」「おかずが気に入らないんですか」と問いつめる。「一寸、胸がもたれて」と答えようものなら、すぐ立って薬箱から胃の薬を

持って来て、「食後にこれ飲んで下さい」とコップを添えて置いていく。

「あら、春ちゃん、もう八時よ。テレビばっかり見てるから遅くなっちゃったじゃないの早く店を開けないと、お客さんが来ちゃうわ」

春夫をせき立てて階下の店へ追いやる。その合間にも、自分の食事はちゃんと済ませ、汚れ物を流しへ運んで、

「じゃお母さん、あとお願いしますね」

身を翻して店へ馳け下りていく。と、すぐ階下から桂子の電話をかける声が響いて来る。

「いい、二時まで、遅くても二時までよ。贈答用の、箱の大きい方、そう、間違えないでね」

「悪いけどさ、三リットルの樽、二箱。よく冷えたの、五時頃までに、お願いね。頼んだわよ」

ゆっくり茶を飲んでもいられない気がして、喜代は洗い物を片付けにかかる。

電話が鳴る。

「はい、田丸屋です」

桂子の張りのある声がする。

春夫を手伝って店を開ける桂子の動きが、二階にいても喜代には見える。自転車を出し、冷蔵庫の中を整理し、棚の品物を補充する。

「春ちゃん、キリン二箱位入るわ。出しといて」

春夫が倉庫から運んで来たビールを冷蔵庫に納める。

その頃になって、春夫の弟の順二が車で通って来る。

「あらおはよう。御苦労さん」

順二が事務所で着替えてる間にも、

「順二さん、今日は秋吉亭、ビール三ケース、お酒五本、醤油三本、塩一袋、お酢二本……」

夜の中に留守番電話に入っている注文を伝票にして順二に渡す。

「春ちゃん、ニューキャスル、急ぎだって、お願い」

春夫は言われるままにオートバイに荷を積んで出掛けた。

よく気が廻って働いてくれるのは有難いが、あれでは春夫も順二も、桂子に追い使われているようで、喜代には面白くない。愛想はいいし、客あしらいはうまいし、骨惜しみしないで動き過ぎる桂子は、同業者の間でも、近所でも「働き者」として評判がいい。喜代の事も「お母さん、お母さん」と立ててくれるのが、抜け目なくちゃんと働くように仕向けている。しかし、人を働かせて自分は何もしないという訳ではないのだから、喜代も文句を言う筋合いはない。ただ、何となくうっとうしく、騒々しいのである。田丸屋酒店を一人で背負って立っているような振舞いが、コチンと来るのである。

配達から帰った春夫が一休みしようと事務所へ入って腰を下すと、すかさず

「ああそうだ、春ちゃん。今日、十日。ローズホテル

と寿司花の集金、忘れないでね。領収書ここへおいとくわ」

「うん解った。お茶一杯飲んでから」

「お母さん、春ちゃんお茶ですって。お願いします」

桂子は二階へ声をかけといて、

「順二さん、遅いわね。何かあったのかしら」

「車が混んでんだろう」

「でも、少し遅すぎない」

「そんなに苛々したって仕様がないでしょう。桂子さんもお茶をお上りなさいよ」

下りて来た喜代が桂子の前へ湯呑みを置いた。

「ええ、済みません」

喜代の方へ軽く頭を下げて湯呑みを手にしたと思う間もなく、

「はーい。いらっしゃい」

店へ入って来た客の相手に飛び出す。

「何て騒々しい人なんだろう」

呟くように言った喜代の言葉に、春夫は苦笑して茶を啜った。

長男という立場から、学生の頃から店の忙しい時は手伝ってくれたが、春夫はどちらかと言うと店で客の相手をするよりは、部屋で本を読んでる方が好きな子だった。卒業したら必ず店を継ぐからという約束で、父親の反対を押し切って大学へ行った。そんな春夫を心配した父親は

「春夫の嫁には、元気のいい商売の好きな女がいい」

と言い言いしていた。

風の抜けない店の中は、扇風機一台の風だけでは坐っているだけでも首筋に汗が流れて来る。三階建てのビルに改築したばかりで、クーラーは入っているが、良平はクーラーが嫌いで一人で店番をしている時は、表のガラス戸を開け放ち扇風機を廻している。ビール会社から送って来たばかりの団扇で衿元に風を入れながら店先へ出た。少しは風が来る。

右の方から歩いて来た白いワンピースを着た娘が、店の前で立止り、良平に軽く会釈した。つられて良平も頭を下げた。娘はゆっくり店へ入って来ると、日本酒の並んでいる棚の前に立った。

「何か」

良平が声をかけた。

「随分いろんな名前のお酒があるんですね」

娘は良平の視線を気にする風でもなく、ウイスキーの棚の前へ移動した。

「何か、おつかい物でも……」

声をかけた良平に笑顔を向けた娘は

「自分で出してもいいですか」

と冷蔵庫を指さした。

「どうぞ」

娘はサイダーの缶を一つ取出し、手近かなレジ台に代金を置いた。

「いいお店ですね」

娘は又良平に笑顔を向けて出て行った。

いつもの良平なら、ここで（何だい）と思う所だが、娘の残していった爽やかな印象が良平の気持ちをなごませた。しばらくして良平は思い当る事があって、慌てて喜代を呼んだ。

「こないだの、千葉から来た写真、早く見せてくれ」

喜代は簞笥の引出しから預っている写真の束を取出した。一枚一枚気忙しく見ていた良平は、最後の一枚を見て（矢張り、これだ）と叫んだ。

「え、何ですか」

寄って来た喜代に良平は手にした写真を振って見せた。

「この子だよ、この子が来たんだ」

その写真は、つい半月程前に千葉の知合いが持って来た一番新しい写真であった。

単身乗り込んで来る位の気骨のある娘なら、春夫にはうってつけだ、これがいい、この娘がいい。良平は喜代にも春夫にも、その娘の爽やかだった印象を繰返し話し、納得させた。それが桂子であった。後になって桂子は

「わたし酒屋さんて知らなかったから、どういうものか見たかったんです。一生守っていかなきゃならないお店なんだから、どんなお店か、お見合いする前に自分の目で確かめたかったんです」と言った。

娘を持たなかった良平は、桂子に「お父さん、お父さん」と言われると、自分でも照れる程に心が弾んだ。商売屋に育ったわけでもないのに、桂子は商いのコツをのみこむのが早かった。とに角、熱心であった。値段を書いたメモをいつも持っていて、暇を見ては暗記した。だから滅多に売れない品物などは、積極的に覚えようともしない春夫よりよく知っていて、半年もすると

「これいくらだっけ」と春夫の方が聞く有様であった。

「そんなに一日中働いていると、疲れが出るといけないから、少しは休んで下さい。私が代りますから」

喜代が店番を代ろうとしても、

「あら大丈夫です。わたし海育ちでしょう。子供の頃から海藻をたくさん食べて育ちましたから、丈夫なんです。少し位働いたって、くたびれないんです」

良平は外に出ている事の多い春夫よりも、桂子と接している時間の方が多い。問屋やメーカーの外交との付合い方、客の捌き方、売掛・買掛などの記帳、伝票の整理、陳列台の飾り方など、桂子は良平のやる事を見てるだけで覚えて行き、帳面が一つずつ良平から桂子の手に委ねられていった。棚の並べ方やウインドーの飾り方など、自分なりに工夫して桂子は良平よりも若い新鮮な感覚で

効果を挙げていた。
店へ出るのが余り好きでなく、他に手があれば奥に引込んでしまっていた喜代は、帳面をつけようなどとは思いもしなかったから、今だに手を触れた事はない。問屋の外交が来ても
「今、お父さんがいないから、解らないわ。居る時にしてね」で通して来た。
春夫はどちらかというと母親似であった。
帳面だけは良平に言われて受持っているのもあるが、外交との交渉は苦手であった。
気持ちがやさしすぎて、
「頼みますよ。お宅だけが頼りなんですから、何とかして下さいよ。一箱でいいんです」
などと喰い下られると、いらない品物、売れそうにない品物でも、ついつい引受けてしまい、
「又お前、そんな物受けちゃって、売れやしないよ。あの外交め、仕様のない奴だ。俺の留守をねらって来るんだから、お前甘められてんだよ」
と良平に怒られる。
「本当に春ちゃんは気が弱いんだから、泣きつかれると、嫌と言えないのよね」
桂子にまで言われる。
「いいよ、俺が何とか売って来るから」
得意先の飲食店へ頼み込んで、売って来なければならない苦労を想いやって、春夫は気が滅入ってしまう。
「いいわ、いいわ、あたしが何とかするから」桂子は店に来る客に巧く宣伝して、売り捌いてくれる事も再三だった。
その晩、喜代が嫁に来て以来一日も欠かさず続いて来た一合の晩酌を、良平は「何となく飲みたくない」と言って、早々と食事を済ませて床に入った。
「どっか具合が悪いんですか」
喜代や桂子が聞いても、
「いや、一寸体がだるいだけだ」
掛蒲団の衿を目の上まで引き上げて寝入ってしまった。
「新年会続きで、疲れたんだろう」
春夫もさして気にせずに三階へ引上げた。
一時を少し過ぎた頃、喜代が「お父さんの様子が変だから、すぐ来て」と馳け上って来た。床の上に上半身を起して良平の顔面は白く引きつっていた。痛みのためか、何を聞かれても良平の反応はなく、左胸の前に重ねられて両掌が小刻みに震えていた。救急車で運ばれた病院のCCU治療室で丸三日手当てを受けただけで、良平はあっけなく帰らぬ人となった。
急な死ではあったが、帳面の殆んどは桂子に引き継がれていたので、店としてはさして困る事はなかった。
「さあ、お父さんの分まで頑張らなきゃ」

桂子の声は以前にも増して、大きく絶え間なく店の中を飛び交うようになった。
春夫は地下鉄が好きになれない。いくら周囲が明るく照らされていても、長いエスカレーターでどんどん下りていくと、地の底に潜っていく感覚が強くなって、天井の上に拡がっているであろう街の重みが、空気を圧しているようで、息苦しさを感じて来る。
電車に坐って目を瞑ると、地の底を這い廻る鈍い響きが、春夫の体をやんわりと包みこんでくる。体を固くして春夫はその圧力に耐えなければならない。目的の駅に着き、溺れかけた人間が足をもがいて水面に顔を突き出そうとするように、春夫は全力で階段を馳け上り、外へ出る。大きく深呼吸をする。外の空気がこんなに美味いとは——その都度春夫は感激する。なるべく乗らないようにしているが、年に何度かは乗らなければならない事がある。
三階の自分の部屋から下りていく時、地下鉄の階段を下りる時の感覚と同じだ、と春夫は気がついた。店は電車であった。桂子の絶え間ない言葉は、車輪の騒音であった。その圧力に耐えられなくなると、春夫は用を作って外へ出た。電話で配達が入ると、待ってたように飛び出していく春夫を、桂子は
「春ちゃんたら、此頃急に熱心になって、頼むとすぐ行ってくれるんですよ」
と喜代に言った。
「そう、それはよかったわね」
と答えながらも、桂子に指示された配達をこなす事しか気の紛らし様のない春夫が、喜代には哀れであった。
そんな時、みのるが所属している少年野球チームの練習に付添って、春夫は荒川土手へ出掛けた。コーチではない春夫は、子供達がトレーニングの間、手持ち無沙汰で土手を歩き廻り、疲れて斜面に寝転んだ。柔かい陽差しを浴びて、両手を頭の下で組んで空を見ていると、体から力が抜け、思考力が抜け、ただのびやかな温かさだけが残った。子供達の喚声さえも耳に入って来なかった。体の隅々にこびりついていた疲れが、体のそこここから、少しずつ洗い出され、流れ出て、日向臭い枯れ草の根元に滲み込んでいく。永いこと、春夫は動かなかった。
「酒屋さんてのは、何でも重いからね、疲れるんでしょう。大丈夫ですか」
顔の上から声をかけられて起上った春夫は自分の体が余り軽いのに驚いた。陽に干された蒲団のように、春夫の体には温かい空気が充満し、枯草を踏みしめる足を上げると、そのまま浮上ってしまいそうな気がした。
体ばかりではない。いつも桂子に対するうつうつとした不満が、うっとうしく覆い被っている頭も、目の前の空のように、高く澄んで雲一つなかった。それは春夫が

初めて味合う爽快感であった。

春夫にはその時の感激が忘れられなかった。

毎週とはいえないが、日曜には出来るだけ一人で自然の中を歩き廻るようになった。桂子の騒々しさも、仕事の煩しさも、軽くなった頭と体なら耐えられた。歩き廻る場所はどこでもよかった。荒川土手に倦きると、江戸川土手、高尾山、鎌倉、そして秩父、ハイキングコースの案内書を秘かに読み漁り、行く先を決めると桂子の詰問を交して家を抜け出すのが、春夫の唯一の楽しみになっていた。

たまには自分やみのるも連れて行けと、桂子は言うが、春夫はこれだけは絶対に言いなりにならないと誓っていた。

暮を控えて贈答用のセット物が次々と入荷し、ただでさえ広いとは言えない店内の空間には、人が歩き抜けられるだけの余裕を残して、そっちにコーヒーセット、こっちにウイスキーセットと積込まれている。それでも納りきれないセット物の箱が、階段の片側に積まれている。

「階段が狭くなってるから、気をつけてね」

だれかが下りてくる度に、桂子は下から声をかけていた。

所が、その桂子が、二階から下りかけて足を滑らせ、ビニタイル張りの床に落ちてしまった。右の足首を強く打って、桂子は起上れなかった。運よく配達から帰って来た春夫に抱き上げられ、店のライトバンで近くの外科へ運ばれた。踵の骨にひびが入っていて、ギブスをはめた桂子は、当分入院という事になった。暮のかきいれ時に、一番の働き手に入院されて春夫は困った。いくら外売りの比率が高い店ではあっても、のし紙書き、包装と手のかかる客が多い贈答期は別で、喜代一人に任せてはおけなかった。仕方なく順二と打合せて、どちらか一人は店に残るようにした。毎日御用聞きに廻っていた得意先には訳を話して、電話での註文取りに切換えてもらった。順二が配達に出ている間、春夫は喜代と二人で店番をした。桂子が来るまではよくあった事だったが、桂子が来てからは喜代は店より二階で家事をする事が多くなっていた。桂子がいない影響を一番受けたのは喜代だった。桂子に代って食事の支度、洗濯、みのるの世話、それに店番と休む間もなく動き廻っている。

「そんなに働いて大丈夫かい、今度は母さんが倒れたら大変だよ」

「大丈夫、一寸前まではずっとやってたんだもの」

「若い時とは違うだろう」

「そう永い事じゃないし、何とかやっていけるわよ」

「無理しないで、頼むよ」

午後の配達が済む三時頃は、店が一番暇な時である。事務室で喜代のいれてくれた茶を啜りながら、春夫はつい口に出して言ってしまった。

「随分、静かだね」

「本当に静かだ」

共通の秘密をもつ者同志のニヤリとした笑いが、二人の顔に同じように浮んだ。

「明日の日曜は、どっかへ行くの」

「いや、家にいる。何だかくたびれちゃった」

「行く必要もないもんね」

二人は又互いに通じ合う笑いを洩した。

「知ってたの、母さん、俺なんにも言わないのに」

「言わなくたって、わかるさ」

「さすがおふくろだ」

「でも、大事な働き手だからね、我慢しなきゃ」

「うん、解ってる。解ってるって」

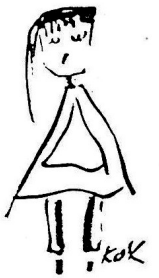
銜えていた煙草を揉み消して、春夫は客の声がする店先へ出て行った。

社告

「まんじ」季刊発行のための内規

作家群同人

～～～



支店長の妻たち（一）

三戸岡道夫

どんな世界にも、変った人間が一人や二人、必ずいるものである。

中野団地に住む押切英子もそうした一人といえようか。綽名をサッチャー夫人と呼ばれていた。

中野団地といっても、普通の団地ではない。正式な名前は明光銀行中野家族寮といって、明光銀行の社宅団地、それを人々は中野団地と呼んでいた。中央線中野駅から、西へ歩いてすこしの所にある。

瀟洒な三階建てのマンションが三棟、ちょっとした坂の途中に建っていて、まわりは閑静な住宅街である。が、新宿は眼と鼻の先であり、窓から新宿超高層のビル群が、至近の距離に見えた。

中野団地は、支店長社宅である。

だから、入っているのは支店長をはじめとして、古参の副支店長、それに本部の副部長、次長クラスという、いわば明光銀行の上級管理職の人間が中心で、一般の行員は入ることが出来ない。

中野団地よりもう一つ上に位する、役員、部長クラスの社宅マンションは、別に目黒の方にあった。だから中野団地の支店長夫人たちは、その目黒の方へ移り住むのが、夢なのであった。

団地には管理人がいた。三棟のマンションの管理、敷地内の清掃、警備、団地への入居者、退居者の手続、その他さまざまな雑務を処理していたが、しかし、管理人という立場では、ここに住む二十七人の誇り高き支店長の妻たちをコントロールすることなど到底できなかった。それで寮長というものを夫人たちの中から決めていた。いわゆる団地全体の取りまとめ役である。

今の寮長は今西福子といって、明光銀行虎の門支店の支店長、今西圭太郎の妻である。今西支店長は支店長の中でも右翼に位するからであった。加えて、今西家はもうここに八年も住んでいる。中野団地の最古参でもある。

そうした関係から、福子は寮長に選ばれているのであったが、だから福子の意識の底には、わたしは他の奥さん連中とは違うのよ、という意識が動いているのは否定できなかった。

寮長といっても、普通の管理事務は管理人で処理してしまうから、毎日きまった仕事があるわけではない。時々、銀行から送られてくる通知を伝達したり、管理人だけでは徹底しない事柄を、重ねて言い渡したり、また管理人がいない時に配達される荷物を受けとるとか、その程度のことであったが、そんなことより時間をとられるのは、始終誰かが苦情を訴えにきたり、相談に来たり、または旅行のお土産を届けにきたついでに、長々と喋りこんでいったりする、いわば人の出入りが絶えないことであった。だが、元来、人好き、世話好きの福子には、そんな人づきあいは苦にならない。結構寮長としての評判はいい方であった。

今朝も夫を銀行へ送り出し、台所の後片付けがやっと終ったかと思うと、玄関のチャイムが鳴って

「ねえ、奥さま、サッチャー夫人のやり方、どう思います」

入ってきたのは、新橋支店の副支店長加納健の妻の、裕子であった。そのただならぬ気配いに福子は

「まあ、奥さま、どうなさったの。とにかくお上りなさって。まだ、朝の掃除もすんでなくて、ちらかっておりますので、ダイニングの方でごめんなさい」

と、椅子をすすめて

「ちょうど、おいしいクッキー、いただいたのがありますの。紅茶をおいれしましょうね」

福子は手早く用意しながら

「サッチャー夫人がどうしましたの」

サッチャー夫人の本名は、押切英子。渋谷支店の支店長、押切哲夫の妻である。気の強い女であった。それで、強い女、鉄の女、というイメージから、誰呼ぶともなくサッチャー夫人という綽名で、人々からは敬遠されていた。

「それが、ひどいんですのよ」

裕子はちょっと思いつめた表情で、

「わたしのところ、まだ子供が小さいでしょ。一番下のが小学校六年生。それが、またいたずらで、言うことを聞かないものだから、困るんですけれど。昨日、学校の帰り、友達をつれてきて、団地の中庭でボール投げをして遊んでいましたのよ。ボールをね、遠くからマンションの壁にぶっつけて、遊んでいた。それがサッチャー夫人に見つかったんですのよ」

中庭で、キャッ、キャッという声がして、なにか、ポン、ポンと、マンションの壁に当る音が聞えて、やかましい。押切英子がベランダから庭を見下すと、子供がマンションに向って、ボール投げをしていた。

「駄目よ、あなたたち。ベランダにボールが飛びこんだら、どうするの。すぐ、やめなさい」
だが、遊びに夢中の子供たちは、やめようとはしない。その時、運悪く、ボールが押切英子の足許に飛びこんでしまったのである。だが、子供たちは無邪気で
「おばさん、ボール返して」
押切英子の柳眉がみるみる逆立ち
「なぜ、すぐやめないの」
ボールをわし摑みにすると、中庭に降りてきた。つかつかと子供たちに近寄ると
「どこの家の子供なの。ああ、加納さんとこのいたずらっ子ね。なぜ、言うことをきかないの」
右手でTシャツの襟を、首根っこを吊し上げるように持ちあげると
「ほかの子供は、社宅の子供じゃないわね」
「ぼくたち、学校の運動場じゃないのよ。さあ、お母さんに言いつけてあげるから」
そう言うと、まるで猫の子を吊し上げるような恰好で子供たちを加納家の入口まで連れていき、犯罪人のように突き出すと
「マンションにむかってボール投げ。よく、お子さんを監督してくれなくては困りますわね。それに、よその子供が社宅の中に入るの禁止されていること、奥さん、ご存知なんでしょう」
サッチャー夫人はボールを子供たちに返さずに、加納裕子の手に直接投げつけるように渡すと、お邪魔しましたとも言わずに、帰って行ってしまったというのである。
「ねえ、奥さま」
裕子は出されたクッキーの味をほめるのも忘れて
「子供のことですから、ボール投げぐらいはしますわよ。団地内で危い遊びはやらないこと、よその人間は入れないこと、いちおうの原則はありますが、子供のことですから、そう原理原則通りにはいきませんわよ。少しぐらいは大眼に見てもいいじゃありませんかしら。それを、こんなやり方をするなんて」
「サッチャー夫人らしいわね。普通だったら、相手は子供ですもの、ベランダで注意して終りなのに。そこが、変人たるゆえんなのよ」
「だから、サッチャー夫人なんて言われるんですね」
「気が強い上に、相手のことをまったく考えないのね。その上、変な潔癖性があるから、よけい困るのよ。相手の子供にうるさいのは、自分の子供はしっかり躾けてあるとでも言うのかしら」
「そう言えば、サッチャー夫人の子供さん、遊んでいるのって、見たことありませんわねえ」
「ええ、もう高校へ行っているから、団地の庭で遊ぶなんて年頃でもないけれど、丁度うちの子供と同じ年なのよ。それで、昔はうちへ遊びに来たこともあったけど。そう、そう、今でも覚えているわ。驚いたことがあったわ。いつだったか、リンゴるむいて出してあげたのよ。そしたら、食べないの。変だと思って、おあがりなさいと言ったら、何と返事したと思います？」
「（よそで、ご馳走になってはいけないと、お母さんに言われている）とか」
「それが、大ちがいなのよ。（おばさん、おトイレに行って、よく洗わない手でむいたリンゴ、ぼく、食べられません）だって…」
「まあ」
「わたし、本当にびっくりしちゃって、顔を見ちゃったわ。そうした子供さんなのよ」
「まさに、この親にして、この子ありね」
しばらくの間、二人はクッキーを食べながら、サッチャー夫人の噂話に花を咲かせていたが、福子はふと思い出したように
「そう言えば、今週の金曜日、（しない会）があるのよ。奥さまもよかったら、お出になりません？」
誘いをかけた。
「えっ、しない会、なんのことですの、その、しない会って？」
「（しない会）だけでは、わからないわね。正確に言えば、（押切支店長を役員にしない会）って言うの」
「押切支店長っていえば、サッチャー夫人のご主人じゃないですか」
「そうよ」
「役員にしない会…」
「それを略して、（しない会）と言ってるの」
「まあ、面白そう」
「サッチャー夫人が憎らしいから、ご主人も役員にしないようにと、会を結成しているの。毎月、一回、お昼に集るの。今度の金曜日が、今月の例会日。あなた、紹介してあげるから、是非いらっしゃいよ。入れてあげるわ」
「ええ、ありがとう。わたし、そういう会に入るの、大好きなんです。お願いします」
裕子は急に高校生時代に返ったような声で、生き生きと顔を上気させた。

明光銀行の支店長の出世コースは、支店長から母店長、本部の部長、そして役員へと昇っていくのが普通の順番である。
母店というのは、明光銀行の支店を十ヵ店ぐらいずつ地域毎に区切って、一つのグループに編成しており、それを統括する支店を母店と呼んでいる。いわば地域の代表店であり、一般の支店よりも規模が大きく、格が一段上にある。

だから、支店長になると、誰もが次に狙うのが母店長。福子の夫の今西圭太郎も、サッチャー夫人の夫の押切哲夫も、いずれもこの母店長であった。

母店長になれば、次に狙うのは当然役員である。が、役員になるには、本部の部長にならなければならない。もちろん本部の部長になったとしても、百パーセント役員になれるわけではない。しかし、過去の実績を見ると、役員のほとんどは本部の部長であったから、部長が役員への最も確実な登龍門であることは、まちがいなかった。

だから、押切哲夫が母店長の次に部長を狙い、そして役員を狙っているのは、まちがいない。坊主憎けりゃ袈裟まで憎い、ではないが、妻が憎けりゃ旦那まで憎い、というわけで、いつの間にか出来上ったのが、（しない会）。

しかし、会とはいっても、しょせん女性の集りであるから、とくに何をするというわけでもなく、月に一度福子の家でホームパーティを開いて、サッチャー夫人の悪口を言いあうのをたのしみにしている、たあいのない親睦団体にすぎないのであったが、それを受けるサッチャー夫人の方にしてみれば、相当の精神的プレッシャーであることは、事実のようであった。

（しない会）の当日、福子のところへ集ったのは、八名であった。先日、声をかけた加納裕子ももちろん顔を見せている。

（しない会）のメンバーは、多かれ少なかれ、サッチャー夫人の被害者で、そのほとんどがこの団地の夫人であるが、外からの参加者も一人いた。きっと、どこかで手痛い傷を受けた人であろう。

一同がテーブルを囲んで席に着くと、ワインが配られ、福子が

「では、いつものように、全員で乾杯いたしましょう」

グラスを片手に、口を揃えて

「わたくしたちは、押切支店長を役員にしないことに、一致団結協力することを誓って、乾杯！」

パチ、パチと、いっせいに拍手。

「わたしたちが今頃こんなことをしているなんて、サッチャー夫人が知ったら、びっくり仰天して、卒倒するでしょうね、ほ、ほ、ほ、ほ……」

「でも、あの、サッチャー夫人のちゃんちゃんこが、卒倒するか、どうか」

「一度、卒倒するの、見てみたいわね」

サッチャー夫人のちゃんちゃんこ、を知らぬ者は、団地の中で誰もいない。

押切英子はいつも、しぶい燕脂色のベストを着て、団地の中を歩いていた。イギリスに行ったとき、買ってきたとかの自慢のもので、たしかに品物は上等で、デザインも上品であるので、気取って歩く気持もわからないではないが、しかし、彼女に反感を持つ人々は、

「なによ、あんなもの、ただの、ちゃんちゃんこ、じゃないの」

と一蹴。爾来、サッチャー夫人のちゃんちゃんこ、といえば、団地では誰知らぬ者はない、有名事になってしまっていた。

その時、福子が

「そう、そう、ご紹介するのがおくれてしまって、申し訳ありません」

と、加納裕子の方に一同の視線を集めて

「加納さんが今日からお入りになりました。ご主人は新橋支店の副支店長さん。有望な副支店長でいらっしゃいますから、支店長へはゴールイン寸前の方です」

大勢の前で、支店長へゴールイン寸前などと言われて、裕子は、すでに支店長夫人の仲間に入ってしまったような軽い興奮にかられた。

「よろしくお願いいたします」

「加納さんはねえ、坊ちゃんが先日中庭でボール投げをしていたところを、サッチャーのちゃんちゃんこ、に刺されたのよ」

と福子が裕子にかわって、ボール投げの顛末をかいつまんで話すと

「まあ、ひどい」

「子供のボール投げぐらい、そう、ガミガミ言わなくてもいいのにねえ」

「サッチャー夫人って、子供の躾にとくにうるさいのかしら。わたしもこの団地へ引越してきた時に気がついたのだけれど、庭で遊んでいる子供がまったくいないのよね。静かな団地で、びっくりしたの。最初は、支店長団地って違うなあ、支店長団地だから団地の庭で遊ぶような小さい子供はいないのかな、なんて思ったのだけれど、でも、よく見ると、小学生や中学生も結構いるの。それがサッチャー夫人がうるさいものだから、団地の中庭で遊べなかったのね」

「いつだったか、わたしの隣の草場さんの子供さんが遊んでいたら、通りがかったサッチャー夫人から、（塾へも行かないで遊んでばかりいて、馬鹿になるわよ）なんて言われて、カンカンに怒っていたことがあったわ」

「子供のこともそうだけど、ゴミの出し方が悪いとか、自転車の置き方が乱雑だとか、口数が多いのね。まるで団地の監視員みたいに眼をギョロギョロさせて、何かいちゃもんつける事はないかって、探して歩いているみたいね」

「うちなんて、もっと大変だわよ。ちょうどサッチャー夫人の家の真下でしょう。ちょっと、テレビの音が大きくても、すぐ電話がかかってくるの。また、その電話のかけ方がすごいのよ。最初からいきなり、（テレビの音が大きい）、それで、ガチャ、ですもの。常識を疑うわ

ね」

「蒲団をベランダの手すりに干しただけでも、文句を言ってくるのね。団地の美観を損うってね。彼女のちゃんちゃんこ、の方が、もっと美観を損うと思うわ」

「ほんと、ほんと」

「ほ、ほ、ほ、ほ…」

一同ははじけるように笑い、いつまで喋っていても悪口の種はつきない。

「でも、最後は何でも寮長さんのところへ尻を持ってこられるから、寮長さんも大変だわね」

福子の方に話が向いてきた。

「いいえ、わたしなんかもう慣れましたから、適当にやっておりますわ。いちいち、まともに応待していたのでは、身体がもちませんもの。でも、その都度、（寮長の方でちゃんと取り締ってくれ）なんて、しつこく言ってくるから困るわね。だから、わたし一度、（そんなに取り締りたいなら、自分で寮長をおやりになったらどうですか）って、言ってやったことがあるの。人事部へ推薦しますわよって。そうしたら、自分では、まとめ役、世話役をやろうという気なんて、まったくないのよね。勝手な人だわ」

「何もしないで、文句ばっかり言っているのが一番楽ですもの」

「でも、サッチャー夫人が寮長なんかになったら、わたし絶対いやだわ。団地全体が地獄になっちゃうわ」

「あの人、世話役なんて出来る人じゃないわよ。人格最低だもの」

話は次にサッチャー夫人の旦那の方にも飛び火して

「サッチャー夫人もひどいけど、あのご主人の方もひどいわねえ。他人のことをつべこべ言うなら、あの、朝のお迎えの車、なんとかしてほしいわね」

「そう、そう、あれはひどいわ。うちの主人もそう言ってるわ」

明光銀行では出勤に、重役以外は車での送迎を禁止していた。だから団地の支店長たちは、誰もが、毎朝、中野駅まで歩いて電車に乗って通勤している。

ところが、押切支店長だけは銀行の車をこっそり団地まで迎えに来させて、車で通勤しているのであった。最初のうちは、団地の入口から遠い所に車を待たせて遠慮がちに乗っていたのが、次第に図々しくなって、最近では堂々と団地の門の脇に車が停っている。そしてテクシーの支店長たちを横目に、すました顔で乗っていくのである。

「おれは明光銀行のエリートって感じね。サッチャー夫人とお似合いだわ。団地の支店長なんて問題にしていない、なんて顔してるじゃない」

「お高くとまっているのよ」

「おれは必ず役員になる。だから、車も役員待遇でいいんだとか言って、乗りまわしているんですってね」

「うぬぼれているわ」

「人事部へ投書でもしてやりたいわねえ」

「ほんと」

「でも、サッチャー夫人のご主人、人事部出身なんでしょう。支店長に出る前は、たしか人事部の人事課長をしていたでしょう。人事部出身の人って、必ず人事部に戻るっていうから、こわいわよ」

「そう、人事部は人事一家を形成しているわね。歴代の人事部長をみると、全部人事部に籍があった人ばかりですものね」

「だから、サッチャー旦那も次の人事で絶対人事部長を狙っているわよ。もしも、人事部長になったら、大変よ。誰を昇進させるか、誰を転勤させるか、人事部長の意のままだから、サッチャー夫人には今からさからわない方がいいと、ペコペコしている支店長の奥さんもいるみたいね」

「だから、サッチャー夫人のところへは、お中元、お歳暮、ダントツね。役員並みだって言うじゃない。いつか管理人のおじさんが驚いていたわ。押切さんのところへだけ、どうしてこんなにお中元が多いんですかって」

「わかってないのね、あの、おじさん」

「サッチャー旦那は武士田専務のお気に入りなんでしょう」

「そう、専務の腰巾着よ。だから、おれは役員待遇だなんて威張っていられるのよ」

やっと、おしゃべりが峠を越した頃、福子は

「ねえ、今日は七夕さまなのよ」

「そう、そう、すっかり忘れていたわ」

「だから準備してあるの。山岸さんが竹笹持ってきてくれてありますのよ」

見ると、部屋の隅に小ぶりな笹竹が立てかけてある。

「だからなのね。わたし、さっきから、何だろうって、なんて見ていたのだけれど」

「まあ、のんきねえ。それじゃ、七夕さまの願いごと、ご利益がありませんわよ」

（しない会）は、毎月、なにがしかの趣好をこらすことになっていたが、七月は七夕さまを作ることになっていた。

「さあ、短冊も、筆も用意してありますから」

福子の誘導に乗って、全員の前に、赤、黄、水色、金、銀の短冊が配られた。最初に全員が書かなければならない、統一テーマがある。それは

（押切支店長を役員にするな）

という文言で、まず福子が先陣を切ってそれを書くと、

「まあ、お上手。これなら願いがかないますわね」

「じゃ、わたしたちも書きましょうか」

こうして九枚の（押切支店長を役員にするな）の短冊

が出来上ると、あとはめいめいの勝手で、
（早く、母店長になれますように）
（きっと役員になれますように）
（早く部長になれますように）
（地方転勤がありませんように）
赤裸々な願いの短冊が次々に出来あがって、笹の葉に吊されていった。
出来上った七夕は、ベランダの柵にゆわえられて、色とりどりの短冊が風にゆれるのを眺めながら

笹の葉さらさら　軒ばにゆれる
お星さまキラキラ　金　銀　砂子

一同は少女の頃に帰って合唱し、夫の出世を七夕星に祈ったのである。

つづく

社告

同人参加へのお誘い

「作家群」はひろく同志の参加を歓迎します。
「まんじ」は同人共有の（ひろば）として発行されます。
同人費は月額わずか二、〇〇〇円也の拠出をしております。
雑誌の発行は拠出の同人費を経費の一部にあて、作品を掲載した同人が別に作品分量に応じ経費を負担しています。
年齢、職業を超えた同志の集団です。
あなたの参加を心からお待ちしております。

維持会員を募る

本誌の経営を援助しよう、せめて購読料相当の支弁してあげようとお考えの方からぜっかくのお申出があり、誌友として維持会員になって頂いております。
維持会員の会費は月額五〇〇円也として、三ケ月分をまとめ前納して頂いております。現在季刊の「まんじ」を発行時にお送りし、月報「まんじだより」や合評会へのご案内をさしあげております。
＊同人費、維持会費の納入は会合の折に直接納入されるか、郵便振替口座へのお振込みをお願いいたします。

連載（小説）

近藤富蔵の生涯（五）

序章　羽倉簡堂七島巡察

二、八丈女護島

金子正義

（二）

五月十九日（七・一〇）　漸く雨があがった。朝早くから巡察を待ち佗びていた島取締役高橋長左衛門が、三根村名主の小宮山善右門等と簡堂を出迎えに来た。
簡堂一行は先ず、陣屋から十五町程離れた三根村の矢崎に在る高橋長左衛門屋敷に寄った。
玉石垣を廻らせた屋敷の作業敷地に三根村割当の流人達が呼び集められていた。神湊港の使役や船人足に出ている者を除いた三十人程の流人達であった。
簡堂は島役所で流人帳に目を通して、近藤富蔵が三根村割当となっていると知ったので、縁先の物見窓から流人達をそれとなく見廻したが分からなかった。
簡堂は昔、富蔵の父近藤重蔵に教えを受けていた。今度因しくも伊豆代官として七島巡察となったので、八丈配流の富蔵が生存ならば是非会い度いものと、江戸出立のときから窃に期待していたのだった。
奥で待つ間に、小宮山善右衛門に訊くと、数日来の長雨で末吉村の石坂や鎮守の石垣が崩れ、その修復に当る流人達の差配を富蔵が依頼されて、末吉村の旧家長戸路屋敷に泊り込みで行っているとのことだった。
長戸路家では屋敷北裏の三原山山麓桑ヶ洞の湧水を八町余り竹樋で引いて、屋敷の呑水や用水にし、その余りを末吉村の田畑の灌漑にしていた。その筧も長雨で壊れたのでその修覆もしているとのことだった。
富蔵は仲々器用で、島に来て始めてやる手仕事も直ぐ熟し、玉石垣などは仲々見事に築くので島では調法がられていた。亦、長戸路家当主の十兵衛直喜とは和歌、俳句の仲間として知遇を受け良く出入しているとのことだった。勿も近頃は村々の旧家に依頼されて家伝の古文書の解読や系図の作成・古仏の修繕まで引き受けて、泊り

込みで作業をして、何がしかの謝礼を得て口腹ぎの足しにしているとのことだった。

簡堂は、富蔵が文政十年四月八丈流人となってから、十有余年の星霜を経てどのように変ったか、是非見たいものだと思った。

流人戒めは、従行の北村亮三郎が流人御定書や島掟を読み聞かせた後、簡堂が温情を篭めて「日頃の生活を慎み仕事に励んで御赦免の日を待つように」と訓戒した。

砂地に坐って神妙に聞いている流人達は殆ど痩せ果てているが、面構えは無事泰平の江戸、京都の巷では見られない異様さであった。国地に居たときは一角の武士や僧侶であったのであろうが、武家の流人が頭を剃っていたり、破戒僧が髪を蓄えたりしていた。無宿人墨女流人のお竹は、男のように額髪を剃り上げて小さな髻を豆のように結んでいた。長年の流謫で痩せ衰えても意地は屈せず、と異形を生きる支えにしているようで哀れであった。

名主善右衛門によれば、お竹は押借流罪の強か女であったが、近頃病んで荒れなくなったと云う、三根村には女流人は他に二人の元遊女が年を違えて同じように火付の大罪で流されている。既に十七年を経たお豊は、始め三根村宮の平部落五人組預かりであったが、天保五年の大飢饉で餓死に瀕してから素行乱れ、今は組頭源右衛門が預っているが、今日は天癸（ツキヤク）でもう一人の女流人ふさと山の月水小屋に竜っていると云う。

八丈島では月水を忌み、貴賤ともその節は家に居ず、村離れか山中の小屋がけに起居しているのである。

ふさは文政十一年十五の若さで流されてきた、余り若いので暫くは名主預かりとなっていたが、矢崎原の五人組預かりとなって村の農耕や蚕養などの下働きをして十年真面目に過ごし今は村外れの離れ小舎で相応に暮している。

簡堂は、面を上げた流人達を見ると、痩せ衰えてはいるが他の島の流人よりは顔色もよいが痘痕面が多かった。

流人達が、江戸の街でよく見受けるように十人に二人ぐらいの割で痘痕面であるのに、何んとしたことか、島人には見受けないのである。それは簡堂が八丈に渡ってから気付いたことであったが、島人は男は潮焼けで赤銅色をしているが、女は色白で目元も神妙で美しく、男女共に顔に痘痕を見受けなかった。本土では貴賤を問わず襲いかかる恐るべき疫病神の疱瘡も洋上遥かの八丈には伝染しないのか、ホウソウの守神為朝大明神の本拠であるからか、と不思議に思った。

天平の昔、遣唐使船が伝えた痘瘡が大流行して藤原房前達の権門の公卿が次々に死亡し、百官病み休んで都の政庁は麻痺状態となって、ついに天平九年（七三七）六月廃朝の有様であった。以後、天災・飢饉と同じようにその怖ろしさを忘れた頃に猛威を奮って大流行してきた。

江戸時代となっても痘瘡は避け難い流行病であった。本土ばかりでなく島嶼に渡れば一層猖獗を極めた、三宅島などは寛正元年（一四六三）に死者六百七十二人も出た。だが八丈島は冒されなかった。為朝が海上でアシタバを打ち振ってホウソウを追い払ったと伝えられている。爾来八丈では為朝大明神を守り神として来た。

簡堂が島に上って島人の家々の戸口に「為朝様御宿」の紙片が貼ってあるのを微笑ましく見たが、江戸でも痘瘡の流行時には八丈小島の為朝大明神が出張御開張するのを知っていた。寺社奉行記録にも、宝暦二年（一七五二）江戸湯島天神で八丈小島為朝明神御開朝、天明五年（一七八五）江戸両国回向院で御開帳、文化十一年（一八一五）深川八幡で御開帳とあった。

簡堂は八丈島人に痘痕面のないことは為朝大明神のお陰、と言うであろうと、休息の茶を喫し乍ら高橋長左衛門に訊くと、

長左衛門は為朝大明神には触れず、

「寛政七年に三根村の船頭が国地で痘痕に感染して帰り、忽ち島中に流行して三根村では五百人程が死ぬ程でしたが、今は島人も流人も痘痕は出ません。勿も島人はこの病気を恐れて発病すると介抱せずに山林に捨て置くので、多くは死んで仕舞うからで御座います」

と答えた。簡堂には愕きであった。伝説の神社や加持祈禱でなく山中に捨てるとは何んとしたことであろうか。

江戸庶民はホウソウの守神の為朝のお札を載きもするが最後迄手当の限りを尽す。近頃は長崎の阿蘭陀医師は痘瘡除けの種痘をすると云う。江戸でも密かに赤蝦夷の秘術として種痘を施している医師もいて、痘瘡に罹らぬ時代になろうとしているのに、発病すれば厄病神として山に捨てるとは何んと残酷なことであろうか、何んとかこの悪習を止めさせたいもの、と案じ乍ら名主屋敷を出た。

簡堂の嘆いた天保九年より九年後、弘化四年西国に痘瘡大流行し、佐賀藩主鍋島斉正は長崎の蘭医に痘苗の輸入を依頼し、翌年嘉永元年（一八四八）蘭医モーニッケは長崎で公然と種痘を行ない始めた。

翌嘉永二年八月鍋島斉正は阿蘭陀種痘を藩内に実施し、十一月には長州藩も領内に実施した。安政元年以降は開国と共に忽ち拡がり、安政四年神田に伊東玄朴、戸塚静海等の蘭方医が種痘館を建てた。幕府も翌年安政五年、蘭方種痘所を開くに至ったのである。

蘭方とは別に密かに赤蝦夷（露国）の秘術として種痘していたのは、通称小針屋五郎治、本名中川五郎治であった。五郎治は明和五年（一七六八）下北半島川内村生れの南部藩下級武士で、後年択捉島守備の南部藩兵となり、沙那会所番人小頭となっていた。文化四年（一八〇七）の露艦隊の択捉島来寇の時拉致されてシベリアに送られ、流浪五年の間に露人医師の助手をして種痘を習得、

文化九年通商を求める露船によって送還されたのである。

帰国後、江戸に送られて取調べを受けた記録『五郎治申上荒増』（函館図書館蔵）に依れば、五郎治は、シベリアのヤコウツカ、ヲホウツカにて医師の手伝いをしている間に植疱瘡を習った、と申し上げている。

亦、五郎治の持ち帰った痘瘡の本は、文化九年二月帰国の途中イルクーツクよりヤクーツクに至る道中露人の商人宅にあった露国本多数の中から牛痘法本二冊を求めたと申し述べている。

五郎治の持ち帰った本は一八〇三年ペテルブルグで発行された『オスペンナヤ・クニーガ』（痘瘡の本）であった。五郎治が此れを露人商の多くの書物の中から選択して買ったことからしても、並々ならぬ語学力を身につけたものと思われた。

尚、五郎治が持ち帰った露文医書は、国後で捕えられたゴローニンの取調べ通詞をした、幕府天文方露語通訳の馬場佐十郎が翻訳して、『遁花秘訳』として文政三年稿を完成・嘉永三年（一八五〇）三河の人利光仙庵が『遁花秘訳』を『魯西亜牛痘全書』上下二冊として出版した。

篤学の儒者蘭堂である、八丈での罹患の者を山中に捨てるを痛憤した九年後、感慨深く此の本を読んだであろう。

亦、元治元年（一八六四）八丈に痘瘡発病し大流行となるところ、十一月廿四日長崎の蒸気船が中之郷藍ヶ江に漂着し、乗船の蘭医緒方精斉他二名の医師が、痘瘡の手当と流行防止のイレボウソウ（種痘）をして数千の人命が助かった。簡堂病没後二年のことである。

だが、天保九年の此の時期、簡堂は沈鬱な想いで山駕籠に揺られ乍ら、十町程離れた東畑の村の共同機織場へ向ったのであった。

村外れの共同機織場は、大きな椎の木や椿の防風林に囲まれていた。五、六軒の茅葦板壁の織屋で、どの家も大きく窓を開き、出入口の軒下には沙を敷き、波目板は竹を奇麗に打ち並べてあった。一番奥まった建物は年貢物の織場で、軒に注連縄を引き廻してあって、八丈紬を大切にする並々ならぬ島人の純粋さが感ぜられた。

どの織屋も窓辺に機織台を据えて村の織女が機織に余念が無く、織物に注ぐ目鼻が清々しい。

奥には糸わくや紬車などがあって、めならべ（若い女）が糸車を回していた。いずれも花模様の長裾の絣を着て赤い襷を肩かけにしている。長髪を前髷の無い島田に結っていて、黒々と美しいのは毎朝椿油で梳るからであろう。誰が訪れても作業中は平常の侭とされているが、簡堂一行に少しも気を移さず、機織の音だけがしていた。

高橋長左衛門の説明に依れば、八丈紬は島の貢納織物なので、此れを織る女は、織女の二十才以上四十才位の

内より織巧みな女を選び、特に斯のように村の織場の宿で織立てる。出入には織女の衣服も相改め忌服は勿論、天癸のときは村外れの月水小屋に寝泊りさせて外にも出さない。此れは機織の紅潮を忌むからであって八丈紬ばかりでなく、国地の著名な織場は同じように機織の清浄を厳守している。北越の塩沢、六日町を中心とする魚沼郡一帯の越後紬も、鎌倉時代から越布として尊貴の人の用いる縮を織る機屋は、新筵を敷き四方に注連縄をひき渡して中央に機台を置いて織女以外の人を入れず、織女は特に別火で食を摂り、衣服を改め塩垢離をとり、身を清めて、織布に紅潮は勿論、一点の煤塵も無いように織り上げる、と云う程の厳しさであった。

機織は幼時より長年の鍛練を経て紬、帯、綾織と数多く手懸けた。最も巧みな女を上納織女とするので、貢納織女の居る家は壱ヶ村に五、六軒にすぎない、とのことであった。八丈五ヶ村約三十人程の織女で貢納紬の機織に当っている訳であった。

年貢は時代に依って多少の変化はあるが『柳営秘鑑』の享保年中には、八丈嶋御年貢紬六百二十端、とある。

それは、縄入に依って「八丈嶌御年貢　高　反別　取米」が

高　千五百六拾石五斗
此反別　三百二十五町九反八畝歩
内　六拾七反二畝歩　田方
二百六拾五町二反六畝歩　畑方

と検地され、六公四民の御年貢納方御定に従い六百二十石の年貢を紬六百二十反を以って貢納したのであった。

尚、八丈島は土地荒蕪潮害等に依って米穀不足につき御用米を被下置るので、その値段に応じて、此れも紬を以って支払うのである。亦、飢饉の救済食糧についても同様で、文化八年には前年よりの飢饉に被下置れた御用米百六拾石についての代として「米弐石壱斗五升二付、合糸織壱反宛之割合を以御代上納仕候……」とあるように八十反の上納となるのである、従ってこの年には貢納、上納合せて七百反の紬が八丈織女の双肩にかかった訳であった。

八丈三十人の貢納織女一人当り二十三反余り、であるが、一反を織り上げるのに腕のよい織女でも十日を要するので、一年の三分の二は織室に篭りきりであった。

織賃は出来だかで、丹後一反につき島桝で麦三升（京桝一斗五合）紬で島桝二升（京桝七升）であった。

八丈紬は壱反一両に見積まれ、米に見積ると江戸の島会所では一石一両であっても、貢納外の端物の商人船との取引は紬一反が京桝四斗二升の米一俵である、それも順調に船が入った年のことである、凶年、飢饉のときはいくら金や紬を積んでも米麦は手に入らないのである。

天保のこの時代江戸の日傭の賃銀は多少の変化はあっても一日銭二百文（銀二匁）米ならば二升であった。

織女の賃銀はそれに比すると少ないようでも、米麦の値を三と二の比率に見積り一日の賃銀を米で換算すると、丹後で一日米四・二合、紬で二・八合となる。殻物の少ない八丈島では相当の収入となるのである。

簡堂は、八丈は古来より女護島と伝えられ、島の女が他島と違い色白で容儀優美である訳が分った。一年の大半を織屋に篭って日に焼けず、神経と手先を繊細に働かせていれば醜女もそれなりに美しくなり、世代を重ねるうちに八丈の島娘も、自然京風な物腰の麗女となるのであろうと思った。

随行の長谷川寿山も、今度の七島巡察で多くの絵を描いたが、特に八丈の女を他島と対象的に優美に描いた訳でもないのに、その背丈高すぎず矮からず、茜色に染めた単を扱き帯で下腰に結び、容姿豊かな振舞いに描き、潮やけしない型よき貌は鼻筋隆く髪は長く蓄えて肩より腰にも垂れて、機織、立仕事のときは櫛巻きに束ねて後に前髪の無い島田の型に結っている姿を描いていた。

簡堂は任を果して江戸に帰ってから松崎慊堂に、寿山の絵を見せ乍ら八丈の風物人情等を語った。

流石に慊堂は、簡堂の話より八丈の風物をよく感じとり、単に女護島としての好奇心の対象として受けとめず、八丈の女を、その容姿よりも勤勉貞淑な面を取りあげて称え、慊堂日暦に

「男子は怯弱にして、女子は清秀。耕稼、漁猟、食炊の諸労事はみな男子のなすところ、女子はただ織紅のみ。伉儷（夫婦の情）はなはだ敦く、夫出でて不在一年余に及ぶとも、婦人は確貞にて、私姦する者なし」

と書いている。

快い共同機織場の視察の後では数日の雨の為に滞った日程を取り戻すかのような強行軍であった。簡堂は長左衛門が用意した山駕篭に坐わり、時には牛の背を借りて底土浜より神湊、更に神止山に登り帰途宗福寺に寄って夕刻陣屋に戻った、北西より東南に浮ぶ八丈の西の八丈富士、東の三原山の間の平担部を横に往還した訳であった。

底土浜では製塩所に行き塩焼釜を見たり、海浜に十丈余の断崖となって切り立つ絶壁の刑場を眺見した。

八丈島では貢物の織物の穢れるのを嫌うように、断罪の罪人の血を忌み、死刑に処する罪人は堅く軀を縛って聳り立つ断崖から投げ落すのであった。付近の火成岩や岩壁は風浪に洗われ潮塩に焼けて奇怪な色形となって、地獄谷の凄さであった。

神湊港を見て造船所に寄って昼食を摂り、午後、船大工が船の竜骨を組み遣てるのを見てから神止山に向った。

神止山は高さ二百八十丈余りの伊豆七島第一の高山、八丈富士の伸びやかな緑の裾野の東に盛り上った裾山で八丈島の樹木を守り、風浪を鎮める神の山と伝えられて

きたが、文化年中より耕地を求めて樹木を倒して山麓を拓くようになり、神の瞋りに触れて海難、暴風雨が多くなった。島民は漸く此れを虞れて神止山に斧鎌を入れないように神に誓って石碑を建てようと、その撰文を天保三年支配代官になった羽倉外記簡堂に願った。簡堂は翌年四月これを撰して送ったのであった。

簡堂は山襞が重なり聳え立つ神止山の比格的緩やかな西側の山懐から登って山頂に立つ「西山ト神居記」の自撰の碑に対面した。神湊の石を台石にし、頂部の尖った八丈富士の自然石に碑文はよく刻まれていた。

辺土の島によく彫る石工がいるものよ、と簡堂はその出来栄えに満足して山を下りて帰途につき、陣屋に入る前に大里の宗福寺に立寄った。

伊豆七島のあちこちに為朝伝説が多いが、八丈島の島人は八丈が為朝の終焉の地と信じていて、宗福寺に伝えられる伝説には保元の昔、鎮西八郎為朝が島の娘を娶ってもうけた子為宗の子孫が、代々八丈の君長となり、髪を剃っていたので島人は入道の宮と言って尊んでいた、永享年中（一四二九～四一）入道宮雲加は、武蔵国神奈川の領主奥山宗麟と交わりを結ぼうとして使を派し、島との交易を始めたが、後、宗麟は兵船を出して島を襲った。雲加の子若宮は従郎の大夫等と迎え討って戦死したが、雲加は恐れて降伏し陣屋を廃して寺となし、端翁宗的と号しその子孫が代々住職となった。天保の当住は未だ若い十七世励順であった。

励順は恭しく簡堂を迎え、茶を点てて歓待し、寺宝等を閲覧に供したが、為朝の遺品、遺墨と称されるものは簡堂には偽物と見た。だが、本堂の仏像を始め天井絵、欄間には流人絵師工匠による見事なものがあった。

花鳥彫の欄間、天衆楽部の天井絵は、江戸木挽町の看板画師久保長十郎が、延享二年（一七四五）五月に流され来て、当時の宗福寺に欄間、天井絵の欠けたるを見て惜しみ、十三世詮柳和尚に請われて八年の歳月をかけて完成した。久保長十郎は宝暦五年（一七五五）十一月将軍家重の慶事によって赦されて帰った。

亦八丈島の神社仏閣に多くの神像、仏像を作った。運慶の孫弟子と云う菊池法橋民部は、元禄十一年（一六九八）絵師英一蝶と共に遠島となり、一蝶は三宅へ民部は八丈に流された、民部は宝永六年（一七〇九）再び一蝶と同じく綱吉の死、家宣への将軍交代で赦され帰国するまでの十一年間、浮田秀家の肖像や宗福寺の住職の御影やら、長楽寺の本尊観音像、或いは天満宮の神体と云うように夥しい作品を残したが、宗福寺にも一尺五寸の釈迦如来坐像を残してあった。

励順住職によれば、胎内の木札には「運慶末流　大仏師民部」とあり、脇に「手伝八丈島なか」とあると云うこれは浅沼貞右衛門の娘なかで、水汲女として民部の妻となり四人の男女を儲け、赦免されて家族共々に江戸

に帰ったと云う。

励順住職は浮田秀家の書であると、変色した短冊を開いた。十代応誉霊感住職と秀家は心おきない友人となっていた、歌は、

「三菩提の種や植けむ此の寺に御法の秋ぞ久しかるべき」

と読めた。字画は明らかで潤いのある見事な書法であった。宗福寺が西隣の長楽寺と共に血統相続であることを称えたものであろう、赦されることなど微塵も願望しなかった秀家の悠然たる容子を歌に偲んでいると、励順住職は

「流され人は、誰もが赦される日を待ち望んで居ります、不思議なことに、あれなる蘇鉄に花が咲きますと御赦免状の船が入りますと伝えられ、花の時期には流され人が毎日覗きに来て哀れです」

と庭の裏の墓地に大きく繁り拡がる蘇鉄を指した。

伝えに依れば延享四年（一七四七）江戸麹町竜源寺の僧慈運が讒言により流され、冤罪の晴れることを待つこと七年宝暦四年（一七五四）四月十六日断食によって死んだ、その魂魄が宗福寺の松の木にのぼり頂きから江戸をめざして飛び去った。其の後慈運の墓に植えた二本の蘇鉄に花が咲くと流人御赦免の知らせがあると言われるようになった、と云う。

儒学者でもある簡堂は、孔子の敬鬼神而遠之、韓非子の恃鬼神者慢於法。と思うので単なる流人の望郷の恣意による妄想であろうと思った。

五月二十日（七・一一）梅雨雲が罩った朝だったので、前日の疲れが出た簡堂は一刻程遅く起きた。朝食を摂って間も無く大きな地震があった。本土に居るときは地震などは意に介しない簡堂であったが、海洋の火山島の地震には思わず腰を上げた。

庭垣の揺れる槙の枝越に海を見渡したが、海鳴も無く波頭が白く海浜に見えるだけだった。近頃天変地異多くなり地震も文政十一年越後に天保元年に京都とあった。今度は伊豆かと動揺した簡堂であったが、何事も無くホッとすると、急に蒸し暑くなって汗が吹き出した。

暫くして本岐道平が伺候したので一日休養を摂り明日より坂上三ヶ村の巡察をすると伝えた。八丈では大賀郷三根を西山の坂下二ヶ村と言い、末吉、樫立、中之郷を東山の坂上三ヶ村と云う。概して坂下二ヶ村は平担地もあって田畑もあるが、坂上は山地坂斜面の地で、土壌も岩砂まじりで農耕困難であった。従って桑を植えて蚕を育て、海に漁労して暮しをたてているのであった。

午後島役所に出ると、村の漁師が採れたばかりの一升桝程もある石槐（うに）や周囲五寸程の宝貝を届けた。早速、島役人や書記達が石槐を割って卵巣を皿に盛って勧めるので、口に入れてみると味は絶佳であった。夜の食膳にも江戸の雲丹と同じように料理されて出た。味は誠に絶妙であった。

夕食後大賀郷の名主菊池右馬助武豊が伺候した。

「三根の名主小宮山善右衛門が御代官様が、三根割りの近藤富蔵のことをお尋ねなされましたが、富蔵のことは手前武豊の大賀郷に始めは割当りまして、以来、色々面倒を見たりしているので、手前の方より御代官様に富蔵のことなど御話し申し上げるように、と善右衛門が申しますので参上仕りました」

と言う訳であった。簡堂も島役所の文書、記録や流人帳に目を通して、島に流されてからの富蔵の様子は概ね分ったが、明日より坂上三ヶ村の巡察に出て、未吉で富蔵に会って見たいと思っていたので、菊池名主の来訪を喜び、酒肴などを供して色々と様子を訊いた。話は仲々尽きず、武豊は夜更けて帰った。簡堂も亦、人の一生を思って感慨無量で仲々寝つけなかった。

続く

編集子のメモ

○山口健二は酸素ボンベを枕頭に置く病苦にかかわらず、今回の号も作品掲載皆勤記録の保持を依然として続けた。他同人に対し良きカンフル剤を提供し、奮起を促さずにはおかない気迫である。まさにサムライである。真底の（文士）はきみのごときひとを指して言うのであろう。しかも、前号に続く目次のトップはやはりこのひとを措いては他に見当らないように思え、叩頭する。

○七人七作のモチーフが四対三の割合で分かれるあたり、わが「まんじ」の体質は明らかにこの号に見るようである。そして、性の異る作者の作品それぞれの視点が対蹠的であるところもそれなりの興をひく。自然な姿であろうか。

○三戸岡道夫の書き下ろし長編「降格を命ず」が好評再版を重ね、図書館協会の選定図書になった。わが陣営の栄誉として誇っておきたい。さらに、この号からの新たな連載は第二弾となる予定である。期待を乞う。

○この号に限り事情あって、定期刊行を危うくするところを印刷所の加藤延久氏の献身休日を犠牲にされる奮闘によりことなきを得た。校了はなんと十月二十九日ギリギリであった。深甚の謝意を表したい。（お）

「まんじ」第三十四号

平成元年十一月一日発行（非売）

編集　大和禎人

発行　柴田富佐子

〒一〇一東京・千代田区三崎町一―一―一
升本ビル　升本内
「作家群」
（まんじ）編集部
☎〇三（二九一）六五五七　ますもと
郵便振替口座　東京二―一九〇八一五
加入者名「作家群編集部」

印刷　㈲加藤清耕社
千代田区神田神保町三―十一
☎（二六一）五七四三）